

Hearn, Lafcadio
Koizumi Yakumo zenshū

小泉八雲全集

第七冊

[illegible]

[illegible]

小泉八雲全集

第七巻

東京

第一書房



神戸時代の小泉八雲

靈の日本

影

日本雜錄

譯者

岡田哲藏

大谷正信

田部隆次

小泉八雲全集第七卷目次

靈の日本

影

珍らしい書物からの話

日本研究

幻想

日本雜錄

奇談

民間傳說拾遺

随筆ここかしこ

靈の日本

アリス・フォン・ベールンズ夫人へ

ありし日のおもひ出に

夜ばかり
見るものなりと
思ふなよ
ひるさへ夢の
浮世なりけり

日本の古歌

そして山の麓に來たのは日沒の時刻であつた。その場所には何等生命のしるしも、――水のあとも、植物のしるしも、飛ぶ鳥の影も、――なかつた、――ただ荒寥に荒寥を重ねるばかり。そして頂上は天に消えてゐた。

その時菩薩はその若い道づれに云つた、――「お前が見たいと云つた物は見せて上げる。しかしその幻觀の得られる場所は遠い、そして道は惡い。あとから續いてお出でなさい、恐れてはならない、お前に力が授けられます」

登つて行くに隨つて、たそがれが彼等の廻りに暗くなつた。そこにはきまつた道がない、以前に人の來た跡もない、そして道は足の下で轉がつたり動いたりする不秩序な破片の際

限のない山の上を通るのであつた。時々場所から外れた一塊が、うつろな反響をたてゝがらがらと落ちる事もある。――時々踏まれた物が空虚な貝殻のやうに破れる事もある。……星が現れて光が微動した。――そして暗黒が深くなつた。

案内しながら菩薩は云つた、『恐れてはならない、道は物すごいが危険は少しもない』星の下を彼等は登つた、――超人間力の助けによつて、早く早く登つた。高い霧の區域を彼等は通つた。そして彼等は登るに隨つてたえず廣くなつて行く白い海の潮のやうな、音のない雲の海を遙か足下に見た。

何時間も彼等は登つた、――そして見えない形が重い穩かな音をたてゝ彼等の足の下で碎けた、――そしてかすかな寒い火が碎ける每に光つて消えた。

それから一度この巡禮の靑年は、石でない何か滑らかな物に手を置いて、――そしてそれをあげた、――そしてかすかに頰のない嘲るやうな髑髏を見た。

『そんなにためらつてはいけない』導師の聲が勵ました、――『達すべき頂上は未だ未だ遠い』

暗黒の中を彼等は登つた、――そしてたえず彼等の足下に柔らかな變な破碎を感じた、そして冷たい火がかすかに出て消えるのを見た、――遂に夜の幕は灰色になつて、星が光を失ひ始めて、東が明るくなり出した。

それでも未だ彼等は登つた、――超人間力の助けによつて――早く早く、登つた。彼等の周圍には今、死の寂さ、――及び恐るべき沈默があつた。……黄金の焔は東に燃えた。

その時始めてこの巡禮の眼に、この絶壁はその赤裸々を示した、――そして彼は震へた、――それから戰慄して恐怖した。何故なれば、そこには土地がなかつた、――彼の下にも、彼の廻りにも、彼の上にも、――ただ髑髏及び髑髏の破片及び骨の塵の巨大な、そして測られない山――潮の海藻の中にあるごつごつした貝殼のひらめきのやうに、その堆積の中に散亂して居るぬけた齒のある、――山があるだけであつた。

『恐れるに及ばない』菩薩の聲が叫んだ、――『ただ心の強い人だけが、その幻觀を得られる場所へ行かれる』

彼等のうしろに世界は消えた。何もない、ただ下には雲、上には空、その間は髑髏の山、――眼の屆かないところまで上の方へ斜になつて居る。

それから太陽はこの登山者と共に登つた、そしてその光には熱がなかつた、ただ劍のやうに鋭い寒さがあつた。そして恐るべき高さの戰慄、それから恐るべき深さの恐怖、それから沈默の恐怖が次第に增加してこの巡禮に壓迫を加へて、彼の足を動かなくした。——そして不意に凡ての力が彼から去つて、彼は夢を見て居る睡眠者のやうに呻いた。

『さあ、急ぐ事にしよう』菩薩は叫んだ、『日は短い、頂上は未だ未だ遠い』

しかし巡禮は叫んだ、——

『恐ろしうございます、何とも申上げられない程恐ろしうございます、——そして力はなくなりました』

『力は歸つて來る』菩薩は答へた。……『今下と上と廻りを見て、何が見えるか、云つて御覽なさい』

『できません』巡禮は震へながらしがみつきながら叫んだ、——『私は下を見られません。前と廻りには人の髑髏の外には何もございません』

『しかし未だ』菩薩は輕く笑ひながら云つた、——『未だお前はこの山は何でできて居るのか、知らないだらう』

相手は震へながら、くりかへした、——

『恐ろしうございます、――何とも云へない程恐ろしうございます。……人間の髑髏の外何もございません』

『髑髏の山だ』菩薩は答へた。『しかし、よいかね、これは皆お前自身の物だ。銘々それぞれいつかお前の夢と迷ひと望みの巣であつた。一つとして外の人の髑髏はない。悉く、――除外なしに悉く、――數十億の前生に於て、お前の物であつた』

……………………………………………

振袖

近頃、私は古物商の多く住んで居る小さい町を通つて居る間に、一軒の店にかかつて居る派手な紫の振袖を見た。徳川時代に位の高い貴婦人が着たやうな着物であつた。私はそれについて居る五つの紋所を見るために足を停めた、同時に昔江戸の破滅の原因となつたと云はれる同じ着物のつぎの傳說を憶ひ出した。

殆んど二百五十年前、將軍の都の或富んだ商人の娘が、どこかの祭禮で、若しく美麗な若い侍を群集のうちに認めて、直ちに戀に落ちた。彼女に取つては不幸にも、彼女の從者によつてその侍の何人であるか、どこの人であらうかを知る事ができないうちに、彼は雜沓の間に見えなくなつた。しかし彼の印象ははつきりと、——着物の最も些細な點まで、——彼女の記憶に殘つた。その當時若い侍の着た晴着は若い女の着物と同じ程派手であつ

た、そしてこの立派な侍の上着は戀に惱んだ少女に取つては非常に綺麗に見えた。彼女は同じ紋をつけた同じ色と地の着物を着たら何かの折に彼の注意を惹く事もできようと想像した。

そこで彼女は當時の習慣によつて大層長い袖のこんな着物を作らせた、そしてそれを非常に大切にした、外出の度毎にそれを着た、そして家ではそれを部屋にかけて、彼女の知らない愛人の姿がその中に潜んで居る事を想像して見ようとした。どうかすると何時間でも、その前で――或は物思ひをしたり或は泣いたりして――すごす事もあつた。彼女は又この青年の愛を得るために神佛に祈つて――日蓮宗の題目『南無妙法蓮華經』をよく唱へた。

しかし彼女は再び青年を見なかつた、それで彼女は彼を慕うて煩つた、病氣になつて、死んで葬られた。葬られてから、そんなに彼女が大事にしてゐた振袖は檀那寺へ寄贈された。死んだ人の着物をこんな風に處分するのは古い習慣である。

住職はその着物を高く賣る事ができた。それは高價な絹で、その上に落ちた涙の痕は殘つてゐなかつた。それを買つたのは死んだ婦人と殆んど同年の少女であつた。彼女はただ一日だけそれを着た。それから病氣になつて、妙な素振をするやうになつた――綺麗な青

年が目について仕方がない、そのために自分は死ぬのだと叫び出した。それから暫くして彼女は死んだ。それから振袖は再び寺へ寄贈された、

又住職はそれを賣つた、それから又それが若い婦人の物となつて、その婦人は一度だけそれを着た。それから又彼女は病氣になつて、綺麗なまぼろしの事を口走つて、死んで、葬られた。それから着物は三度目に寺へ寄附された、そこで住職は驚いて訝つた。

それにも拘らず彼はもう一度その不吉な着物を賣つて見た。もう一度或少女がそれを求めて、もう一度それを着た、そしてそれを着た少女は煩つて死んだ。そして着物は四度目に寺へ寄附された。

そこで住職は何か惡い力がそのうちに籠つて居ると信じた。それで彼は小僧達に、寺の庭で火を焚いてその着物を燒く事を命じた。

そこで、彼等は火を焚いて、その中へ着物を投じた。ところがその絹が燃え出すと、突然その上に火焰の目映いやうな文字――『南無妙法蓮華經』の題目――が現れた、――そしてこれが一つ一つ、大きな火花のやうになつて寺の屋根へ飛んだ、そして寺は燒けた。

燃える寺からの燃殼がやがて近所の方々の屋根に落ちた、それですぐ町が全部燃えた。その時、海の風が起つてその破滅を遠くの町々へ吹き送つた。それて區から區へ、殆んど

江戸の全部が消滅した。そして明暦元年（一六五五）正月十八日に起つたこの火災は今でも東京では振袖火事として覺えられて居る。

「紀文大盡」と云ふ話の本によれば、振袖を作つた少女の名は「おさめ」であつた、そして彼女は麻布百姓町の酒屋、彦右衛門の娘であつた。綺麗であつたので、彼女は又麻布小町と呼ばれた。同じ書物によれば、その傳說の寺は、本鄕の本妙寺と云ふ日蓮宗の寺であつた。それから着物の紋は桔梗であつた。しかしこの話には、色々違つた說がある、私は「紀文大盡」は信じない、何故なれば、それには、その綺麗な侍は實は人間ではなく、上野、不忍池に長く住んでゐた龍の化身であると說いて居るからである。

香

一

暗闇から現はれ出てて、蓮が花瓶にあるのが見える。その花瓶の大部分は眼に見えぬ。が、それは唐金であること、幽かに見えるその兩の把手は龍の首であることは自分に解つて居る。その蓮だけが充分に照らされて居る。純白な花が三つ、そして金色と綠色との――上が金色で、上向きに縁(へり)を卷いて居るその裏面が綠色の――大きな葉が五枚附いて居る、人造の蓮である。それは斜にさしこんで居る日光の流を浴びて居る。その下とその先きの暗闇は或る寺の部屋の黄昏である。その光線が射し込む口は見えぬ。が、寺の鐘の輪郭の恰好をした、小さな窓だといふことは自分は氣附いて居る。

自分にその蓮が――自分が初めて佛教の聖殿を訪うた一つの記憶が――見える理由(わけ)は香(かう)

の匂がして來たからである。自分は香を嗅ぐと毎度この幻が判然と浮かぶ。そして通例その後で、日本での自分の最初の日の他の感情が、殆ど苦しいほど痛烈に次から次と迅速に復活する。

殆ど遍在である――この香の薫は。それは極東の幽かではあるが複合的なそして決して忘れることの出來ぬ香氣の一要素を爲して居るものである。寺院に劣らず住宅に――王侯のヤシキに劣らず百姓の家に――附き纏うて居る。尤も神道の神社には――香は、より年齢のたけた神々には嫌惡されて居るから――全く無い。然し佛教の住む處には到る處香がある。佛壇または位牌のある家では、どんな家でも或る時機に香を焚く。未開極る寂寥たる田舍でも、路傍の佛像――不動、地藏或は觀音の小さな石像――の前に香が燻ぶつて居るのを見るであらう。旅行の幾多の經驗は――眼の印象同樣に耳の奇異な印象は――自分の記憶にはその匂と關聯して居る。――氣味の悪るい古社へ通ずる森閑とした蔭深い壯大な並樹路、――雲表に朽ち崩るゝ寺院へ昇つて行く擦り耗らされた苔の蒸した石段、――祭禮の夜の歡喜の雜沓、――提燈の薄明りに音無く辿り行く白無垢着た葬式の行列、――寂寞たる遠き海岸の漁夫の小屋での、家の內の祈禱の呟、――立ち騰る青い煙の絲の眞があ

るだけの、物淋しい小さな墓石の眺め、――無量光佛阿彌陀に新樒を捧ぐる折に質朴な心が憶ひ出す、秘藏して居た禽獸の墓石、――總て香氣を聯想する。

だが自分が語る匂(にほひ)はただ廉い香(かう)の――一般に使用して居る香(かう)の――匂である。他にも幾種かの香(かう)があつて、質の等級範圍は驚くばかりである。普通の(尋常の鉛筆の心(しん)の太さて、少し長さの長い)線香の一束は二三錢で買へる。ところが、無經驗な人の眼には、色が少し異つて居るぐらゐにしか見えぬ質のもつと上等一束で、數圓もして、しかもその値段では廉いといふのもある。もつと高價な種類の香(かう)は――正眞の贅澤物は――菱形、封緘紙形、錠劑形をしてゐる。そしてそんな材料の小さな一包が、四磅或は五磅することがある。然し日本の香(かう)に關する商業上並びに工業上の問題は、著しく珍らしい題目の一部分となるには、興味最も乏しいものである。

二

實に珍らしくはあるが、其傳統と細目とが無限なので非常なものである。それを洩らさず述べるのに要する書卷の大いさを考へる事さへ自分には厭である。……そんな著作は本

當は先づ日本に於ける香料の最初の知識と用法の單簡な記事で始まるであらう。次に朝鮮から——紀元五百五十一年百濟の聖明王がこの島帝國へ經卷一集佛像一體並びに一寺に要する道具一式を送つた時——佛道の香が初めて輸入された記錄と傳說とを述べるであらう。それから十世紀の間に、延喜天暦の頃に、爲された香のあの分類について、——また十三世紀の末に支那に赴き、香に關する支那人の知識を用明天皇に傳へた參議キミタカの報告について——少しく言はなければならぬであらう。それから今猶ほ日本の許多の寺院に保存されて居る古代の香に就いて、また信長秀吉及び家康がその一部の贈與を受けた（明治十年奈良で一般の展覽に供された）有名な蘭奢待の破片に就いて、記載しなければなるまい。その次には日本で造つた合劑の香の——それには、あの贅澤な尊氏が案出した分類方に對して、また百三十種の香を集めて其うちの貴重なのに、今日に至る迄知られて居る例へば『花の雪』、『富士の煙』、『法華』といふやうな、名を拵へた足利義政が後に定めた名稱に對して、註釋を添へて——歷史の概要が來なければなるまい。その上また、幾多の貴紳の家庭に保存されて居る歷史的な香に附隨して居る傳統について幾つかの例を與へ、それと共に、幾百年の間代々傳へられて今なほその尊い發明者の名によりて、『日野大納言法』、『仙洞院法』等と呼ばれて居る香製造のその世襲的な調合法の幾つかの見本も與ふべ

きてあらう。その上また「蓮の香、夏のそよ風の臭ひ、秋風のかをりになぞらへ」造つたその奇異な香について調合法を示さなければなるまい。香遊樂の榮華時代の傳說も少しは——例へば、香木で御殿を建てて居たが、反叛の夜それに火を放つたところ、その燃ゆる煙國土を薰じて十二哩の遠きに及んだといふ陶尾張守の物語の如きを——引用しなければなるまい。…… 固よりの事、合劑の香の歷史への材料を編纂するだけでも無數の文書論說書卷——殊に『クンシフルキセウ』卽ち『薰集類抄』如き奇異な著作——の硏究を必要とするであらう。香道十派の敎、香製造に最も善き季節の指導、香を焚くに用ふべき『種々な火』（一種は「文の火」と呼ばれ、今一つは『武の火』と呼ばれて居る）に就いての指圖、それからまた季節と場合とに應じて香爐の灰を色々な美術的な模樣に押す法式、さういふ書卷も込めてである。……妖怪を追ひ拂ふ爲めに家の中に吊り下げてある香の袋（クスダマ）に對して、——また、惡魔につかれぬ護として以前は身に着けて居たより小さな香の袋に對して、——確に一章を與へなければなるまい。それから其の著作の頗る大なる部分は香の宗教上の用途と傳說——それだけで大きな題目であるが——それに捧げなければなるまい。その上にその細かしい儀式は數多くの圖の助を藉りなければ說明の出來ない、古の『香の集會』の奇妙な歷史も考察しなければなるまい。古昔香の材料を印度、支那、

安南、暹羅、柬埔寨、錫蘭、蘇門答剌、瓜哇、ボルネオ及び馬來群島の種々な島々――香についての珍奇な書に皆名の出て居る土地――からの輸入の題目に對して少くも一章は要るであらう。そして最後のところの一章は香の浪漫的文學を――香の儀式のことが記されて居る詩歌物語並びに戲曲、殊に身を香にたとへ、情をそれを食む炎になぞらへて居る、

移り香のうすくなり行く薫物の
くゆる思に消えぬべきかな

のやうな戀歌を――扱ふべきであらう。

……この題目の概要だけ考へてもぞつとする！ 自分は香の宗教上の、逸樂上の、また靈的な使用について、二三の記事以上のことは何も企てない。

三

貧しい人が到る處佛像の前で焚く香は『安息香』といふのである。これは甚だ廉價である。巡拜者が有名な寺院の入口の前に置いてある唐金の香爐で焚くその量は大したもので、路傍の佛像の前にその幾束をも見ることが能くある。それは信心な旅人が使用するもので、

旅人は途中の佛像一々の前に立ち止つて短い祈禱を唱へ、出來得れば二三束をその像の足下で燻ぶらすのである。が、富裕な寺では、そして宗教上の大儀式の間は、もつと高價な香を用ひる。佛教の禮式では全體で三通りの香料を使用する。種類の多いカウ即ち本當の香、この語は文字通りではただ「香ひのある物」との意である、と、――ヅカウ即ち香のある油と、――それからマッカウ即ち香かんばしい粉末である。カウは焚き、ヅカウは身を淨める油として僧侶の手に塗り、そしてマッカウは堂宇に撒くのである。この抹香といふのは佛典に屢々記載されて居る白檀の粉末と全然同じだといふことである。然し宗教上のお勤めに重要な關係を有つて居ると言ひ得るのはただ眞の香だけである。

香は「『僧史略』は述べて居る」信心之使なり。長者佛を食事に請ぜんと欲せし時、香を用ひたり。饗宴の前夜常に樓に登り、手に香爐を秉りて終夜立ちてありき。斯く爲す度毎に、佛は翌日正しく所要の時刻に來り至りぬ。

此文句は香は、燃ゆる供物であるから、信者の敬虔な願望を表象して居る、ことを明らかに示して居る。然しまた他の事をも表象して居り、佛教文學に幾多の顯著な比喩を供給して居る。そのうち、それは中々に興味あるものであるが、祈禱のうちに出來するのがあ

る。次記のは『法事讃』から引用したものであるが、その著しい一例である、——

願我身淨如香爐　願我心如智慧火
念念焚燒戒定香　供養十方三世佛

註　戒とは行爲及び思想に於て清淨の戒律を守ること。定とは（日本の佛教徒は之を禪定と呼んで居る）冥想の高尙な形式。

時々佛教の說教で、有德な努力で因果を破滅することを清淨な炎で香を焚くことになぞらへ——時々また、人間の一生を香の煙に喩へる。眞宗の僧侶明傳は、その『百通切紙』（『ヒャクツウキリカミ』）に於て、『クジッカデウ』卽ち『九十個條』といふ佛書から引用して、

香を燒く事は香のある間は火のもゆれば煙が立つなり。此の地水火風の借ものの口より息の出るはかの煙の如し。消はててひえ灰となるは我等野邊の薪となりはてて空き灰となるに譬へて見とのことなり矣。

と言うて居る。

又信者は悉くこの世の香の匂によつて想ひ出さなければならぬ筈の彼の香の極樂につい

ても語つて居る。

第三十二の妙香合成の願に、『皆以無量雜寶百千種香而共合成嚴飾奇妙超諸人天其香普熏十方世界菩薩聞者皆修佛行矣』と。此願によれば上代上根上智の人は異香を嗅ぐ人あり我等は下根下智の故に異香を嗅ぐことかなはず然れども本尊の前の香のにほひを嗅ぎ奉る時極樂の異香よと心得て佛恩の稱名相續すべきものなり。

四

然し日本に於ける香の使用は宗教上の儀式に限られては居ない。それどころか、より高價な種類の香は主として社交的娛樂の爲めに製造せられる。香を炷くことは十三世紀以來常に貴族の娛樂であつたのである。多分讀者は日本の茶の禮法とその佛教に關する珍らしい來歷とに就いて耳にせられた事があらう。また日本の骨董を蒐集する外國人はいづれも、そんな禮法が或る時代に到達した贅澤について――以前それに使用した美しい器具の質によつて充分に證明される贅澤について――幾分か知つて居られると自分は想ふ。が茶の禮法よりももつと細々したもつと金のかかる――その上もつと興味のある――香の禮法があ

つたものである、いな今猶ほあるのである。音樂、縫取り、作歌、及び古風な女子教育の他の部門のほかに、明治前の時代の若い淑女は三通りの殊に優雅な藝を習ふものと期待されて居た、——即ち、花を活ける術（イケバナ）禮法に叶つた茶立ての術（註）（チヤノユ或はチヤノヱ）並びに香會の作法（カウクワイ或はカウヱ）であつた。香會は足利將軍時代より前に創案されたもので、徳川治世の平和時代に大いに流行した。將軍職の沒落と共に流行（はや）らなくなつたが、近時やゝ復活した。が然し、再び古の意味で眞に流行るやうにはなりさうに無い、——一つはその會合は到底復活の出來ない、世に稀な、優雅な社交形式であつたからと、今一つはそれは金が掛かるからである。

註　女の子は今猶ほ花を活ける術と、幾分退屈ではあるが雅美なチヤノユの作法とを敎はる。佛敎の僧侶は後者の敎師として久しく名聲を博して居る。門弟が或る程度に上達すると、免狀即ち證明書が授かる。そんな儀式に使ふ茶は著しく佳い匂の粉末の茶で、その質最上のものは餘程の高價を呼ぶ。

カウクワイを自分は『インセンス・パアテイ』と譯して居るが、『パアテイ』といふ語を自分は『骨牌のパアテイ』『ホキストのパアテイ』『將棊（チエス）のパアテイ』といふやうな複合詞の時に有つ意味に用ひるのである。それはカウクワイはただ競技を——頗る珍らしい競

伎を――する目的て行はれる集會だからである。香の競伎は幾種もある。然しその何れに於ても勝負は懸かつてただ匂だけで種々異つた香を想ひ出して其名を擧げることが出來るか出來ないかに在る。カウクワイのうちでジッチユウカウ（「十炷香」）といふ種類のが一番面白いと、一般に承認されて居る。それでそれをどう演ずるいか自分は讀者に語らう。

此の遊戯の日本の名、否寧ろ支那の名の「十」といふ數字は十種類を指すのでは無くて、ただ包が十通りあることを示して居るのである。といふのは十炷香は、最も興味があるほかに、香の競伎中最も簡單なもので、ただ四種の香で行ふからである。一種はその會に招かれた客が供給しなければならぬ、そして三種はその娛樂を客に與ふる人が提供するのである。この後の三種の香を――通例百切レ入つて居る紙包に納めてあるが――四組に分けて、一組一組その質を示すやうに番號を附けるか又は印を附けるかした別々の紙に包む。だから一番といふ部類の香に包が四つ出來、二番の香に四つ、三番の香に四つと――全體て十二包出來る。然し客が持參した――いつも「客香」と呼ぶ――香は分けない。「客」といふ意味の支那文學の略字を記した一つの包に入れて置く。だからして先づ總計十三包あるのである。が三つを、次のやうにして、手初の試みに、――香道の言葉でいへば――

『試し』に使ふのである、

この競技者の數には制限の規則は無いけれども――パアティで行ふと假定しよう。その六人が一列に――席が狹ければ半圓に――座を取る。然し接近しては坐らぬ、それは直ぐに解る理由によつてである。すると主人が、若しくは香焚きの役を命ぜられた人が、一番と分類された香の一包を取り上げて、それを香爐で焚いて、その香爐を、『これが一番の香であります』と披露して上席を占めて居る客に渡す。その客は香會に要

註 日本のザシキ即ち客間で客の占める場處はその部屋の床から數へる。最も敬はれて居る人の場處は床の直ぐ前で、これが第一席で、後はそれから、通例左へ、數へるのである。

せらるゝ優雅な禮式に從つてその香爐を受け取り、匂を嗅ぎ、其器を自分の次の人に渡す、と其人はそれを同樣に受け取つて第三席の客へ渡す、とその人はそれを第四席の人に渡す。――順にさうする。その香爐が席を一廻りすると、それを香を焚く人へ返す。二番の香の一包、三番の香の一包、それも同樣に取り上げ、披露をして試す。が『客香』には試しを行はぬ。競技者は試した香の匂の差異を覺えて居なければならぬ、そして客香の薫りの質が違つて居るといふだけのことで、適當な時機に客香を言ひ當てることを期待されて居る

のである。

斯くして原の十三包が『試し』て十に減つてから、競技者は銘々小さな——通例金蒔繪の——十枚一組の——その一組一組別な裝飾がしてある——符を貰ふ。その符は裏だけに裝飾がしてあるので、その裝飾は大抵いつも何かの花模樣である。例へば或る一組は金で菊の飾がしてあり、今一組は燕子花の叢、今一つは梅の枝、といつた具合である。然しその符の表には番號又は印が附いて居て、一組のうちには、『一』といふ番號の符が三枚、『二』といふ番號の符が三枚、『三』といふ番號のが三枚、そして『客』といふ意味の文字のあるのが一枚ある。この組になつた符を配つてから、『符箱』と稱する箱を第一席の競技者の前に置く。これで本當の競技の準備が出來たのである。

香炷者は小さな衝立の後へ退り、香の平たい包を骨牌を切るやうに切つて、一番上に出た包を取り、その中に入つて居る香を香爐に入れ、それから座へ歸つて、その香爐を廻すのである。固よりの事、今度はどの種類の香を使つたかといふことは披露しはせぬ。香爐が手から手へと渡る時、競技者は銘々香を嗅つて、その嗅いだ香の印又は番號だと想ふ、印又は番號の附いて居る符を一枚符箱に入れる。例へば、若しその香を『客香』だと思へば、『客』といふ意味の字が書いてある自分の符を一枚箱の中へ入れ、二番の薫を嗅うた

と信ずれば、『二』と番號のある符を一枚その箱に入れるのである。一巡すむと、符箱と香爐と兩方香炷者へ戻す。香炷者はその六枚の符を箱から取り出して、皆が推量した香が入つて居た紙にそれを包む。その符が——競技者は銘々自分が有つて居る組符の上に描いてある特別な模樣を覺えて居ることだから——全體の記錄にもなれば個人の記錄にもなるのである。

殘りの九包の香も同樣に、上を下、下を上へと包を切つて上に出た偶然の順序に從つて、焚いて判斷をする。香を皆使つてしまふと、符をその包から取り出して、公然と紙に書き記し、當日の勝利者を披露する。自分はそんな記錄の飜譯を此處へ出す。此の競技の混雜總てを、殆ど一目で、說明する用を爲すであらう。

此の記錄に據ると、「若松」と呼ぶ模樣の裝飾のある符を用ひた競技者は二つしか誤をしなかつたが、「白百合」の組を手にして居た人は正しい推量に一度したきりであつた。が十度續けて正確な判斷をすればそれは全く手柄である。嗅覺神經は競技の終はらぬずつと前に幾らか痲痺しがちである。だから香合の途中、間を置いて時々、純粹の酢で口を漱ぐのが習慣である。斯くすると感受性が稍々恢復する。

香會記

その裏面の裝飾模樣に據りての當日使用の六組の符の名

「黃菊」「若竹」「紅牡丹」「白百合」「若松」「霞の櫻」

香の十包を用ひたる順序

符の番號にて記錄せる推量、言ひ當てたるは星印。

順序	香	「黃菊」	「若竹」	「紅牡丹」	「白百合」	「若松」	「霞の櫻」
一	三番	一	＊三	「客」	一	＊三	一
二	一番	三	＊一	＊一	三	＊一	三
三	「客」	一	二	二	一	＊「客」	＊「客」
四	二番	＊二	＊二	＊二	三	三	＊二
五	一番	「客」	＊一	三	二	＊一	＊一
六	三番	一	「客」	一	二	二	＊三
七	二番	＊二	三	三	一	＊二	一
八	一番	二	二	二	三	＊一	二
九	三番	＊三	一	＊三	「客」	＊三	＊三
十	二番	三	三	一	＊二	＊二	＊二
		三	四	三	一	八（勝者）	六

當日使用の香の名

一番……「タソガレ」（「誰ぞ彼は」即ち「黃昏」）
二番……バイクワ」（「梅花」）
三番……「ワカクサ」（「若草」）
四番……「客香」…ヤマヂノツユ」（「山路の露」）

前記記錄の日本の原文には競技者の姓名、その娛樂の年月日、それからその會を行うた場所の名が添へてあつた。或る家ではそんな記錄悉くを、殊にその爲めに造つた一冊の書に、書き込む習慣になつて居て、香會競技者に、過去の如何なる競技の歷史に屬する如何なる興味ある事實にも、早速參照が出來る索引を附けて居るのである。

讀者は使用された四種の香が甚だ可愛らしい名で呼ばれて居たことに、氣が附いたであらう。例へば、第一に記載されて居る香は、薄くらがりに對する詩人が使ふ名――『タソガレ』（文字通りに言へば『誰れが其處に居るのか』又は『誰れか』といふ意味）――で呼ばれて居る。此語は、香と關聯して、黃昏に待つて居る戀人に、眼の前に麗はしい人が來て居る事を想はせる、化粧用香料をにほはせる語である。恐らくは讀者はかういふ香の調製について稍〻好奇の念を覺えらるゝてあらう。自分は二種に對して日本の處方を與へることが出來る。然し揭げてある材料の全部は西洋でのこれこれの品と突き止めることが出來なかつた。

山路の露の作り方

ヂンカウ（沈香）……四匁（約半オンス）
チヤウジ（丁子）……四匁（半オンス）
クンロク（薫陸）……四匁（半オンス）
ハツカウ（學名アルテミシア・シコミヂアナ）……四匁（半オンス）
ジヤカウ（麝香）……一分（八分ノ一オンス）
カフカウ（？）……四匁（半オンス）

二十一錠に

梅花の作り方

ヂンカウ（沈香）……二十匁（約二オンス半）
チヤウジ（丁子）……十二匁（一オンス半）
カフカウ（？）……八匁三分ノ一（一オンス四十分ノ一）
ビヤクダン（白檀）……四匁（半オンス）
カンシヨウ（甘松）……二分（四分ノ一オンス）
クワクカウ（藿香）……一分二朱（十分ノ三オンス）

十五錠

クンロク（薫陸）……………………………三分三朱（二十二分ノ十五オンス）
シヤウモツカウ（？）……………………………二分（四分ノ一オンス）
ジヤカウ（麝香）……………………………三分二朱（十六分ノ七オンス）
リユウナウ（龍腦）……………………………三朱（八分ノ三オンス）

に

香會に使用する香は、その催の式に從つて、その價、小切れ――普通直徑一吋の四分ノ一より大ならざる小切れ――百個の包毎に、二弗半よりして三十弗に至る。時には一包三十弗以上にも値する香を用ひる。それにはその匂が『蘭の花に麝香の交じつた』のに喩へられて居るランジヤタイが入つて居る。然しランジヤタイよりも尚ほ一層貴重な――賣られはしない――香が、その調合てでは無くてその來歷で尊い香が、ある。それは幾世紀の昔、佛教の傳道者が支那或は印度から招來して、貴顯若しくは高位の方に獻上した香である。日本の古寺にはそんな舶來の香をその寶物のうちに有つて居るのが數多くある。そして極稀に此價値を超絕して居る材料の少しを――恰も歐洲で、頗る異常な場合に、幾百年の年數を經た葡萄酒を取り出して宴會の光榮を添へるやうに――香會に寄贈するのである。

香會は、茶の湯の禮の如くに、頗る複雜なそして古風な作法を守ることを强ひる。が此

の題目に興味を感ずる讀者は多くあるまいから、準備と警戒とに關する規則の一二を擧ぐるだけに止めよう。先づ第一に香會に招待された人はその會に出來得る限り臭ひ無しで列席するやうに要求されて居る。例へば、淑女は髮油を用ひてはならず、匂のある簞笥に收つてあつた衣物はどんな衣物も着てはならぬ。その上また、客はその競技の準備として時間長く浴みをしなければならず、その集會に行く前には極めて輕いそして臭の一番無い食物を食べなければならぬ。競技中部屋を去る事、或は戶窓を開く事、或は要も無い談話に耽る事は禁じられて居る。最後に自分は述べてよからうが、香を判斷する間に、競技者は呼吸を三息より少からず五息より多からずするものと期待されて居るのである。

今の此の經濟的時代に在つては、香會は、大名の時代に、王侯の如き寺院々主の時代に、また武人貴族の時代に執つたのとは當然のこと遙に質素な形式を執つて居る。競技に必要な器具の完全な一揃が今五十弗位で求められる。然しその材料は粗末極つたものである。古風な器具の揃は途方も無い高價なものであつた。幾千弗に値するのがあつた。香炷者の卓――硯筥、紙箱、符箱等――種々な臺――此等は極めて高價な金蒔繪のものであつた。――香餌その他の器具は巧妙な細工の、金のものであつた。――そして香爐は――貴重な金屬のものであらうと、唐金であらうと、或は陶器であらうと――いつも、知名な美術家

の意匠に成つた骨董品であつた。

五

佛教の儀式での香の本來の意義は主として表象的であつたが、佛教よりも古い種々な信仰が——恐らくは此の人種獨得のものもあらうし、多分支那若しくは朝鮮から出たものもあらうが、——夙に日本に於ける香の民衆的使用に影響を與へ始めたと想像すべき立派な理由がある。その匂が屍體と去つた許りの魂との惡鬼除けになると考へて、今もなほ香を屍體の前で焚く。そして百姓は鬼だとか病氣を司どる惡魔だとかを追ひ拂ふ爲めに香を焚く事が能くある。だが前には靈魂を追ひ出す爲めにも用ひたがそれを呼び出す爲めにも用ひたものである。それを種々な氣味のわるい儀式に用ひたことがほの見られる文句が、古い戲曲や稗史のうちに見出される。支那から輸入された一種特別の或る香は、人間の魂を呼び出す力を有つて居る、と言はれて居る。次記のやうな古昔の戀歌に引き合ひに出され居る魔力のある香がそれであつた。

亡き魂(たま)を返すためしもありときく
待つ夜に炷かんたきものもがな

『山海經』といふ支那の書物にこの香(かう)についての興味ある記述が載つて居る。ホワン・フワン・ヒヤン（日本の發音ではハンゴンカウ）卽ち『反魂香』て、東海(とうかい)のほとりの、ツオ・チヤウ卽ち『祖州』で製造されたものであつた。死んだ人の——或る典據に從へば、生きて居る人のでも——その魂を呼び出すには、その香(かう)を少し炷いて、その人の靈のことをじつと思ひつめて、或る定つた言葉を唱へさへすれば宜いのであつた。すると、その香(かう)の煙の中に自分が記憶して居るその顏と姿とが現はれるといふのである。

昔の幾多の日本並びに支那の書物に、この香(かう)に就いての有名な話が——漢時代の支那の皇帝武に就いての話が——記載されて居る。その皇帝が美しい寵姬の李夫人を亡はれた時、氣が狂はれはしまいかと心配された程に痛く悲み歎かれた。が李夫人を慕ひ思はるゝ心をそらさうとのあらゆる努力も甲斐が無かつた。或る日皇帝は死なれた夫人を呼びかへさん爲め、反魂香を求めるやう命ぜられた。顧問の人達は、それは徒に悲歎を增すばかりだからと述べて、その意を飜されんことを乞うた。がその助言には一顧も與へず、躬らその式

を行ひ――香を炷いて、李夫人の靈に心をとめて居られた。軈て、香から立ち昇る濃い青い煙の中に、女の姿がその輪郭を現はした。形が判然として來て、生きて居た折の色を呈し、徐々に明かるくなつた。そして皇帝の眼にその愛人の姿形が認められた。初にはその幻は幽かであつたが、直ぐに生きて居る人のやうに分明になり、刻一刻いよいよ麗しくなるやうに思はれた。皇帝はその幻影に向つてさゝやかれた、が何の答も得られなかつた。聲高に呼ばれても、その姿は何の合圖をしなかつた。そこで心を制しかねて、その香爐に近寄られた。が、煙に觸れられた刹那に、その幻像は震へて消え失せた。

日本の美術家は今なほ時折「ハンゴンカウ」の傳說に感興を覺える。つい去年、東京で、新しい掛物の展覽會で、年若い人妻が床前で跪いて居て、その魔力ある香の煙が死んだ夫の影となつて其處へ現はれて居る繪を自分は見た。

註　千八百九十八年の珍らしい東京發明品のうちに、「ハンゴンサウ」即ち「ハンゴンの草」といふ名の新種類の紙卷煙草があつた、――これはその煙が反魂香のやうな働をするといふことを思はせる名である。實際また、その煙草の煙の化學作用で、一本々々の吸ひ口に射し込む紙の上に、舞姬の寫眞の像が判然と現はれ出るのであつた。

死んだ者の姿を眼に見えるやうにする力は、ただ一種の香だけが有つて居るとされては居るが、どんな種類の香でもそれを焚けば、眼に見えぬ魂を無數に呼び出すものと思はれて居る。それはその煙を食ひに來るのである。『ジキカウキ』卽ち『食香鬼』と呼ばれて居て、日本の佛教の認めて居る餓鬼三十六界中の第十四界に屬するものである。それは古昔、利欲の念に驅られて、惡るい香を作るか賣るかした人間の亡靈で、因果の報で今は餓に苦しむ魂となり、その食物をただ香の煙に求めざるを得ぬ境涯に居るものである。

占の話

私は以前或占師を知つてゐたが、その人は自分の奉じて居る學問を本當に信じてゐた。彼は古い漢學の學生として、占を實地に行つて行かうなどとは思ひもよらなかつた時から、それを信ずるやうに習つたのであつた。若い時は或富んだ大名に仕へてゐたが、外の數千の侍と同じく明治維新の政治上及び社會上の變化のために絕體絕命の窮境に陷つた。彼が占師――町から町へと徒歩いて、その旅の儲けをもつて家へ歸るのは一年に一度、それ以上は中々歸られないと云ふ旅の占師――になつたのはその時であつた。占師としては彼は相應に成功した、――私は考へるに、そのわけは重に彼の非常に眞面目な事と、それから人の信用を呼びよせるやうな妙に物柔かな態度とによるのであつた。彼の占のやり方は古い學者風の物であつた、彼は英語の讀者に『易』として知られて居る書物と――支那の卦をどんな風にても作れるやうにならべる事のできる黑檀の木片の一組とを使用した、――

それから彼はいつても神々に熱心な祈りをして彼の占を始めた。

彼の說によれば、易學その物は、それに通じた大家の手にかかれば決してまちがひのない物であつた。彼はいくつか誤つた占をやつた事があると白狀して居る、しかし彼の云ふところではこんなまちがひは全く或文句や卦の解釋をまちがつたためであつた。彼のために云へば、私自身の場合では（私は彼に四度占つて貰つた）、彼の占はよく當つたので、私はその占が恐ろしくなつた程であつた。讀者は占を信じないでもよい――智力的にはそれを輕蔑してもよい、しかし遺傳的迷信の傾向が大概の人の心に潛んで居る、そして二三の妙な經驗がその迷信を動かして、占師の約束した幸運或は惡運に對して最も無理な希望や恐怖を抱く事になる。實際、私共の未來を見る事のできるのは不幸である。この二ヶ月以內に、讀者の身の上に、どうしてもそれを豫防する事のできないやうな何か不幸が必ず起るときまつて居る事が分つた結果を想像して見るがよい。

私が出雲で始めて遇つた時は、彼は既に老人であつた――たしかに六十歲以上であつたが、もつとずつと若く見えた。その後私は彼に大阪で、京都で、それから神戶で遇つた。度々私は冬の寒い間、私の家で暮らすやうに勸めて見た――實は、彼は非常に傳說などをよく知つて居るので、私の文章にこの上もない助けをしてくれる事ができるのであつた。

しかし一つは流浪の生活は彼に取つて第二の天性となつて居るのと、又一つはヂプシーの獨立のやうな、そんな野性を帶びた獨立を愛する念が彼にあるので、私はどうしても一度に二日以上彼をとめる事ができなかつた。

毎年きまつて東京へ來た。——いつも秋の末であつた。その時は數週間、彼は區から區へと市中を飛び廻つて、それから再び消えて行くのであつた。しかしこの飛び廻る旅行中に、彼は必ず私を訪問して、出雲の人々や場所の有難い消息と、——それから又どこか名高い巡禮の場所から、大概宗教上の意味のある、何か珍らしい小さいおみやげをもつて來てくれた。こんな場合には、私は彼と數時間談笑する事ができた。時にはその話題は彼の最近の旅行中に見聞した珍らしい事物であつた、時にはそれは古い傳說や信仰の方面に向いた、時にはそれは古に關する事であつた。私共が最後に遇つた時に、彼は正確な支那の易學を習ふ事ができなかつた事を後悔して、その易學の事を私に話した。彼は云つた。

『その學問に通じた人は誰でも、たとへばこの家のどの柱でもどの貫でも何時倒れるかその正確な時間を云ふ事ができるばかりでなく、なほ又その倒れる方角からその結果まで云ふ事ができます。私がお話を一つしたら、私の意味がよく分りませう。

『その話は名高い支那の占師で、日本では邵康節と云つて居る人の話だが、「梅花心易」と云ふ占の本に出て居る。未だ餘程若い時に邵康節は彼の學德のすぐれてゐたために高い地位を得た、しかし彼は學問研究に全力をつくすために、その地位を辭して、淋しいところへ行つた。數年の間、彼は山中の小屋に、冬になつても少しの火もなく、夏になつても一本の扇子もなく、獨居して、部屋の壁に――紙がないので――彼の思想を書いてゐた、――それから枕の代りに一枚の瓦を用ひてゐた。

『或日、夏の最も暑い季節に、彼は睡氣に襲はれて、瓦を枕にして横になつた。眠につくと共に、鼠が一匹彼の顏を横ぎつて走つたので、彼はびつくりして起きた。怒りの餘り瓦を取つて、鼠に向つて投げた、しかし鼠には當らないで、瓦は碎けた。邵康節は枕の破片を悲しさうに見て、自分の輕卒を自ら責めてゐた　その時突然碎けた瓦の新しい斷面に――表と裏の兩面の間に――何か漢字を認めた。甚だ變に思つて、彼はその破片を取つて丁寧に調べた。その割れ目に沿うた粘土の上に、未だ瓦の燒かれない時分に十七の文字が書いてあつた事を發見した、その文字はかう讀まれた、「卯の年の四月十七日、己の刻に、この瓦は、枕になつたあとで、鼠に投げられて碎ける」ところで、この豫言は卯の年の四月十七日己の刻に正しく的中したのであつた。非常に驚いて、邵康節は、もう一度その破

片を見て、その瓦師の名と判を發見した。直ちに彼はその小屋を出て、その瓦の破片をもつて、その瓦師をさがしにその近所の町へ急いだ。彼はその日のうちに瓦師を發見して、その破片を示し、その瓦について彼に尋ねた。瓦師は破片を丁寧に調べたあとて云つた、「この瓦は私の家で製造した物ですが、粘土にある文字は或老人――占師――がその瓦を燒く前に書かせて貰ひたいと云つて書いたのです」「どこにその人が居るか知つてゐますか」邵康節は尋ねた。瓦師は答へた、「以前はここから餘り遠くないところにゐました、その家へ御案內致しませう。しかし私はその人の名は存じません」

「その家に案內されて邵康節は、玄關に行つて、老人に面會を願つた。一人の青年學僕は丁寧に彼に入るやうに誘つた、そして大勢の青年の勉強して居る部屋へ案內した。邵康節が席につくと、青年達は皆彼に挨拶した。それから始めに彼に物を云つた青年はお辭儀をして云つた、「申上げるのも殘念ですが、先生は數日前に亡くなられました。しかし私達はあなたを待つてゐました、實は先生は、あなたが今日この家へ、丁度この時間にお出でになる事を豫言なさいました。お名前は邵康節とおつしやいませう。それで先生はあなたの役に立つ本を一冊お上げするやうに申されました。ここにありますから、――どうぞお受け下さい」

『邵康節は驚いた、と同時に喜んだ、實はその書物は最も珍らしい、そして最も貴い種類の寫本で、――古の學問の凡ての秘密を藏して居る物であつた、青年達に御禮を云つてから、そして彼等の先生に對する適當なる弔辭を述べてから、彼は自分の小屋に歸つて、直ちに、自分の運を占ふために、その中を調べてその書物の價値をためして見た。その書物は彼に、その住宅の南側、家のかどに近い或ところに、大きな幸運の潜んで居る事を暗示した。彼は指示された場所を掘つて、壺を一つ發見した、それには彼を甚だ富んだ人とする程の黃金が滿ちてゐた』

※　※　※

私の友人のこの老人は、淋しく世の中を送つたが、又淋しく世の中を去つた。この冬、山を越す時、吹雪に遇つて路を失つた。幾日か後に彼は小さい荷物を肩に（か）けたまま、松の木の根に眞直に立つてゐた、冥想して居るやうに、腕を組んで眼を閉ぢて――氷の像になつてゐた。多分嵐の通り過ぎるのを待つて居る間に、寒さのねむけに襲はれたのであらう、そして彼が眠つて居る間に雪の吹きよせが彼を蔽うたのであらう。この不思議な死を聞いて、私は『占師身の上知らず』と云ふ古い日本の諺を憶ひ出した。

蠶

一

古い日本の、否、寧ろ支那の、諺の中にある『蛾眉』といふ句の意味が自分には解らなかつた。それは『女の蛾眉は男の智慧を斷つ斧』といふのである。其處で自分は、蠶を飼うて居る新美(にひみ)といふ女人へ、說明を求めに行つた。

彼は顚狂な聲で『あなたは蠶の蛾を一度も御覽になつたことが無いのですか、蠶の蛾には非常に美くしい眉があります』と言つた。

『眉が』と自分は驚いて質問した。

『え〻』と新美は答へて『あなたは何と仰しやらうと、詩人はそれを眉と呼んでゐます。……一寸待つて下さい、御覽に入れませう』と言ふ。

彼は客間を去つた。そして軈て、蠶の蛾が一匹睡さうにそれに載つて居る、白い閾扇を手にして歸つて來た。

『私共はいつも五六匹は種を取る爲めに除けて置きます』と彼は言ふのであつた。――『これは今、繭から出たばかりです。固より飛べません。飛べるのは一匹も居ません。……さ、眉を見て御覽なさい』

自分は眺めた、そしてその頗る短いそして羽毛のやうな觸角が、本當に麗はしい一對の眉に見えるやうに、その天鵞絨のやうな頭の、寶玉を點に入れたやうな二つの眼の上に、弓と反りかへつて居るのを見た。

それから新美はその蠶を見せに自分を連れて行つた。

新美の近處には、桑の木が澤山あるので、蠶を飼うて居る家が多い。――世話したり物食はせたりは大抵は女や子供がするのである。蠶は、高さ三呎許りの輕い木製の臺の上に揚げてある、楕圓形の大きな盆に入れてあつた。幾百もの幼虫が一つの盆の中で一緒に物を食うて居るのを見、其桑の葉を噛みながら立てるサワサワと軟らかい紙のやうな音を聞くのは珍らしかつた。成熟期に近寄ると、殆ど絶え間無しに注意する要がある。間短く置いて或る老練家が經過を視に一々の盆を見舞つて、一番圓く肥えたのを拾ひ上げ、人差指

と拇指との間てそつと轉がして、どれが紡ぐ用意が出來て居るかを見定める。それを蔽のある箱の中へ落とすと、直ぐと己が身を白い毬毛(わたけ)に卷き包んで見えなくなつてしまふ。そのうち最上なもの五六匹だけ――子を産ませに選擇されたものだけ――その絹の睡眠から出ることを許される。それは美くしい翅を有つては居るが、それを使用することは出來ぬ。口はあるが、物を食ふことはせぬ。ただ番つて、卵を産んで、そして死ぬるだけてある。幾千年の久しき、その種族は充分に大切に世話され來たつて居るので、もはや自分で自分の身の世話が出來ないやうになつて居るのてある。

新美とその（蠶を飼うて居る）弟とが、飼育の方法を親切に說明して居る間に、主として自分の心を占めてゐたのは、今最後に述べたその事實が示す進化論的敎訓てあつた。二人は、種々な品種に就いて、また飼ふことの出來ない野生の一變種に就いて、いろいろ珍らしいことを自分に話した。――この野生のは、或る目的の爲めにその翅を使用することの出來る、元氣な蛾にならないうちに、見事な絹を紡ぐといふ。が、自分は、その問題に興味を感じて居る者のやうな振る舞ひをしなかつたかと氣づかふ。といふのは、聽いてゐようとしながらも、自分は冥想を始めたからてある。

二

先づ第一に、アナトール・フランス氏が述べて居る、或る愉快な空想を自分は考へて居るのであつた。若し自分が造物主であつたなら、青春をば人生の初に置かずに終に置いたであらうし、さも無くば、人間はいづれも、鱗翅類の發育の階梯に稍〻相當するやうな、發育の三階梯を有つやうに取り計らつたのであらう、とフランス氏は言ふ。自分は考へて居る間に、この空想は實質に於て、殆どあらゆる高級な宗教に共通な、或る頗る古い教理の微妙な變形に過ぎない、といふ念が不圖頭に浮かんだ。

西洋の信仰は、此世に於ける我々の生涯は貪欲な手繰りの無い幼虫狀態である事、また、死はそれからして我々が永久の光明へ翔り上る蛹睡眠である事を、殊に教へる。感性のあるその存在中は、外的身體はただ一種の幼虫として、そしてその後は蛹として、考ふべきであると我々に語る。——そして、幼虫としての我々の行狀次第で、死を免れぬ上包の下にあつて翅を發展する力を失ふか或は得るかする、と斷言する。それからまた、「靈魂の成蟲」が破れた繭から離れ出るのが見えぬ、といふ事實に心を勞するな、と我々に告げる。

我々人間は幼虫同様半盲目な視力しか有たないのだから、眼に見える證據が無いといふ事は、何も意味しはしない。我々の眼はただ半分進化して居るだけである。我々の網膜の感受性の限界の上(うへ)にも下(した)にも、色の全階段(スケール)が眼には見えずに存在して居るでは無いか。丁度それと同じに——當然の事、我々はそれを見ることは出來ぬけれども——「胡蝶的人間」は存在するのである

が、完全な天稟の狀態に於て、この人間の成蟲(イメーゴ)はどうなるであらうか。進化論的見地からこの問題は興味がある。ところがその明白な答を、この——飼はれてやつと數千年しか經つてゐない——蠶の身の上が自分に暗示した。我々が天上界で——言はば——幾百萬年も飼はれたとして其結果を考へて見るが宜い。自分は、それを希ふ人達に、あらゆる願望を意の儘に滿足することが出來るやうになつて居る境涯の究極の結果を言ふのである。

彼(か)の蠶どもは、その希ふ所總てを——それより隨分と餘計なぐらゐ——得て居る。その要求は、頗る單簡であるけれども、基本的には人類の必要とするものと全然同一である——食物、庇保物、暖かさ、安全、それから慰樂である。我々の際限無しの社會的奮鬪は主として此等のものを得んが爲めてである。我々の天上界の夢は、此等のものを少しも苦痛を費さずに得るといふ夢である。ところが、彼の蠶どもの境遇は、小さいながら、我々が想

像して居る天國を實現して居るものである。（そのうち大多數は、苦惱を味はひ第二次の死を受ける運命を豫め有つて居るといふ事實を自分は今考へては居ない。自分の題目は天界のことで、助からぬ魂のことては無いからてある。自分は選ばれた者に就いて――救濟と再生との豫定を有つて居る虫共に就いて――話して居るのてある）恐らくは彼等虫共は、極く弱い感覺しか感じ得ぬてあらう。確に彼等は祈禱はすることが出來ぬ。が、若し彼等が祈禱を爲し得るならば、食はせて世話して呉れて居る青年から既に受けて居る以上のことは、何も希ふことはあるまいと思ふ。彼の青年は彼等の加護（プロヰデンス）てあり――ただ漠然極つた有樣にその存在を氣附くことはあり得る神てはあるが、然し正しく彼等が要求するやうな神なのてある。ところが我々は、彼等と同樣に、彼等のよりも、もつと複雜な我々の要求に比例して、充分能く世話を受けたならば幸福てあらう、と愚かにも思はうとする。我々の祈禱の普通の形式は、同樣な注意をと念じて居る我々の願望を證明して居はせぬか。我我の『神聖な愛の必要』の主張は、蠶のやうに取扱つて欲しい――神々の助に依つて苦痛無しに生きたい――といふ無意識な告白ては無いのか。が然し、若し神々が我々が欲するやうに我々を取扱はれるとすれば、我々はやがてのこと、彼の偉大なる進化の大法は遙かに神々よりも上にあるといふ――所謂『退化（デゼネレーション）の證據』といふものて――新しい證據を我々

に提供することであらう。

その退化の第一階段は、我々は自己を支へることが全然出來無くなるといふことで現はれて來るであらう。――それから次には、我々のより高等な感覺器官を使用することが出來ぬやうになり始めるであらう。――後には、腦髓が萎縮して、消えかかつた、ピン尖程の物質になるであらう。――なほ後には、我々はただの無定形な囊に、ただの盲目な胃袋に、縮むであらう。これが、我々があんなに横着に希望して居る、彼の種類の神聖な愛を受け得た時の肉體的結果であらう。永遠の平和の裡に永遠の天福をといふ熱望は、死と暗黒との大王が與へる惡意ある鼓吹であると思つて宜い位である。奮闘と苦痛との所産として初めて――宇宙の諸大力と際限無しの戰闘の結果として初めて――感じたり考へたりする生物が存在するやうになつたので、またこれからも引き續き存在して行かれるのである。そして宇宙の大法は一歩も讓歩はしない。どんな器官でも苦痛を知ることが無いやうになれば――どんな機能でも苦痛といふ刺戟の下に使用せられることが無くなれば――存在することも無くなるに相違ない。苦痛とその努力とを中止して見よ、生は元へ縮み還つて、初めには原形質的な形無しの物になり、その後、塵土に歸してしまふに相違無い。

佛教——これは、その獨得な崇高な行き方で、一個の進化論なのであるが、その佛教——では、その天界をば、苦痛に依つて向上する發展の、より高い段階であると合理的に宣べ、且つ、極樂に在つてすら、努力の休止は墮落を生ずる、ことを敎へる。同じく有理に、超人間世界に在つて苦痛を受け得る力は、常に快樂を受け得る力に比例して增加する、と述べる。（我々は、より高い進化は、苦痛の感受性の增加を、その中に含むことを知つて居るから——科學的見地からして、この敎には非難すべきところは殆ど無い）『正法念處經』に、欲界では、死の苦痛は、あらゆる地獄の苦痛もその苦痛の十六分の一にしか相當しない、ほどに大である、と書いてある。

註。この陳述は、肉慾的快樂の天界に就いて言うて居るだけで、彌陀の淨土極樂について言うて居るのでも無く、靈的に再生して入る彼の天界について言うて居るのでも無い。が、最も高いまた最も非物質的な境涯に——形あること無き天界に——あつてすらも、努力と努力の苦痛との中止は、より低い境涯へ再生するといふ罰を受けることになる。

上述の比較は不必要なほどに强い。が、天界に關する佛敎の敎は、實質に於て、著しく論理的である。感覺ある生活の、想像し得らるゝどんな狀態に在つても、苦痛の——精神

的或は肉體的苦痛の――禁止は、必然的にまた快樂の禁止といふことになるであらう。――そして確に、精神的であらうが物質的であらうが、一切の進歩は、懸かつて苦痛に出會うて之を征服する力如何に在るのである。我々の娑婆の本能が我々をして希望せしめるやうな『靈極樂』では、勞役の必要を免れてその欲求悉くを意の儘に滿足せしめ得る天使(セラフ)は、終にはその翅を失つて幼虫の狀態へ逆戻りすることであらう。……

三

自分はこの空想の大意を新美に話した。彼は佛教の書物を能く讀む青年であつたのである。

彼は言つた、「あゝ、あなたが說明して吳れと仰しやつた諺、「女の蛾眉は男の智慧を斷つ斧」で、佛教の奇妙な話を憶ひ出しました。佛教の教理に據ると、この諺は下界の生活に就いて言つても眞でありますが、天界の生活にも眞であるやうに思はれます。……その話といふは斯うであります。――

「釋迦が此の世に住まつて居られた時、その弟子の一人の、難陀といふが、或る女の美しさに惑はされました。そして釋迦はその迷の結果を身に蒙らぬやうしてやらうとお思ひになりました。そこで釋迦は難陀を、山の中の、猿の居る荒れた處へ連れて行つて、非常に醜い雌猿を見せて、「どつちが美しいか、難陀よ、――お前が愛して居るあの女か、この雌猿か」とお尋ねになりました。難陀は聲を揚げて「あゝ師よ、愛らしい女と醜い猿と比べものになりますか」と言ひました。「お前はやがてその比較を自分ですべき理由を訖度見出すだらう」と佛はお答になりました。――それから、すぐと通力に依つて、難陀を連れて、欲界六天の第二天の三十三天へ御昇りになりました。其處には寶石の宮殿で、多勢の天女が、音樂と舞踊とで何か御祝をやつて居るのが、難陀の目に見えました。その天女のうちで、一番美くしくないものでも、その美しさは、下界の一番麗はしい女の美しさよりか譬へやうも無いほど勝さつて居りました。難陀は「あゝ師よ、これは何といふ不思議な御祝でせうか」と叫びました。「あのうちの誰れかに聞いて見よ」と釋迦はお答になりました。そこで難陀はその天女の一人に尋ねますと、それが答へて申しますに、「この御祝は、私共の處へ參つた善い知らせを祝うてのことであります。今、下界に、釋迦の弟子の中に、難陀といふ優れた青年が居りますが、それがその神聖な生活の功德によつて、

間も無く天界へ再生して、私共の婿になられます。私共は歡び喜んでその方を待つて居ります」この返答を聞いて難陀の胸は喜に充ちました。その時佛は難陀に、「難陀よ、あの少女達のうち誰れか、お前が今愛して居る女と、美しさの同じなのが居るか」とお尋になりました。「どうして、あなた」と難陀は「その女が、出て見ました雌猿より美しさが優つて居ると丁度同じ度合に、その女はまた、この少女達のうちで一番醜いのよりも劣つて居ります」と答へました。

『それから佛は直ぐと難陀と一緒に地獄の底へ降りて行つて、幾百萬といふ男や女が、大釜で生きながら煮られたり、鬼の爲めに他のいろんな恐ろしい目に遭はされたりして居る、拷問部屋へ連れてお行きになりました。その時見ると、難陀は、金の溶かしたのが一ぱい入つて居る大きな容物の前に立つて居るのでありました。――その中には誰れもまだ入つてゐないものですから、難陀は恐れまた怪みました。用無しの鬼が、欠伸して、その横に坐つて居りました「師よ」と難陀は「誰れの爲めにこの容物は用意してあるので御座いませう」と佛に尋ねました。「あの鬼に尋ねて見よ」と釋迦はお答へになりました。難陀は言はれたやう致しました。するとその鬼が難陀に申しました、「難陀といふ男が――今釋迦の弟子の一人だが――それが前生の善行の爲めに、或る天界へ生まれかはらうと

して居る。然し、其處で氣儘に暮らしてから、今度は此地獄へ生まれかはる事になつて居る。その男の居場所はこの鍋の中だ。おれはその男を待つて居るところだ」』

註　自分はこの說話を聞いた儘大要を揭げる。が、自分は、出處になつて居る原經句とこれを比較することが出來ずに居る。新美は、漢譯が二種——一つは『本行經』（？）一つは『增一阿含經』（エコツタラガマス）——あると言ふ。ヘンリ・クラーク・ワレン氏の『反譯で見る佛教』（此種のものの中では、自分がこれ迄見た一番興味ある又價値ある單行本である）には、この傳說の巴利語譯があるが、上記のとは餘程異つて居る。ワレン氏の著書に據ると、その難陀は貴公子で、釋迦牟尼の異母弟である。

譯者註　原著者が擧げたやうな諺があるのか譯者には疑はしい。蛾眉は美女の意に用ふるものであるが、『美女は生を斷つ斧』といふ諺はあるやうである。智慧では無く、生を斷つ、といふ句では、『呂氏春秋』に『靡曼皓齒、伐生之斧』といふ句がある。

惡因緣

東京の劇壇に於て、決して衰へる事のない人氣のある物の一つは、名高い菊五郞一座の『牡丹燈籠』の芝居てある。舞臺を十八世紀の眞中に取つたこの物すごい芝居は、もとは支那の話から思ひついた物だが、圓朝と云ふ小說家が口語體の日本語で書いて、地方色も全然日本風にした傳奇體の話を、劇にした物てある。私はその芝居を見に行つた、そして菊五郞は恐怖の喜びの一種變つた物を私に感じさせた。

『この話の物すごいところを英語の讀者に示しては如何てす』――と東洋哲學の迷路を通つて適當に私を案內してくれる友人は尋ねた。『西洋の人が殆んど知らない超自然の或普通の觀念を說明する役に立ちませう。私、飜譯してお助けしても宜しい』

私は喜んでその思ひつきを受け入れた、そして私共は圓朝の話の餘程異常な方の部分をつぎのやうに摘要した。ところどころ、もとの物語を縮める必要があつた、そして會話の

ところだけはもとの文章をそのままに譯するやうにした、――そのうちには、心理學的の興味の特別な性質を偶然もつて居る物がある。

＊　＊　＊

――これは牡丹燈籠の物語のうちの幽靈の話である。――

一

江戸牛込に飯島平左衛門と云ふ旗本がゐたが、一人娘のお露はその名の示す朝露（あさつゆ）のやうに綺麗であつた。飯島は娘が十七ばかりの頃に後妻を娶つた、それでお露が繼母と一緒では幸福に暮らせない事を知つて、娘のために柳島に綺麗な別莊を造つて、お米と云ふこの上もなく良い女中をつけて、そこに住まはせた。

お露はその新しい家で樂しく暮らしてゐたが、或日の事、かかりつけの醫者山本志丈が根津に住んでゐた萩原新三郎と云ふ若い侍を連れて見舞に來た。新三郎は非常に立派な青年で、甚だ上品であつた、そして二人は一見して戀に落ちた。その短い訪問の終らないう

ちに、彼等は――老いた醫者に聞かれないやうに工夫して――永久に變らない誓をする事がてきた。それから別れる時、お露はその青年にささやいた、――『忘れないで下さい。もしこれでお目にかかれないと、私きつと死にます』

新三郎はその言葉を決して忘れなかつた。そしてお露に會ふ事ばかり考へてゐた。しかし一人てお露を訪問する事は禮が許さない、彼は醫者が再びその別莊へ連れて行く約束をしたから、その醫者と同行する又の機會を待つより外はなかつた、不幸にして老人はこの約束を果さなかつた。彼はお露が突然この青年に對して愛を感じた事をさとつた、それて萬一の事があつたら、彼女の父が自分を責任者と考へるだらうと恐れた。飯島平左衛門は人の首をよく斬るので評判てあつた。志丈が新三郎を飯島の別莊へ紹介した事の結果を考へれば考へる程、彼は恐ろしくなつて來た。それでわざと彼の若い友人を訪れる事を避けた。

幾月か過ぎた、新三郎が來てくれない本當の理由を少しもさとらないお露は、自分の愛が蔑視されたと思ひ込んだ。それから衰へて死んだ。すぐにあとて、忠實な女中のお米も女主人の亡くなつた事を悲しんで死んだ、それて二人は新幡隨院の墓地へ相ならんて葬ら

れた、――この寺は名高い菊人形の見せ物が年々開かれる團子坂の近傍に今もある。

二

新三郎は何事が起つたか少しも知らなかつた、しかし彼は失望と心配で長い間病氣になつた。彼は次第に回復して來たが、未だ餘程衰弱してゐた、そこへ突然山本志丈から訪問を受けた。老人は長く無沙汰をした事に對して色々尤もらしい言分をした。新三郎は彼に云つた。――

『春の始めからずつと病氣をして居りまして、――今でも未だ何にも喰べられません。……ちつとも來て下さらなかつたのは少しひどいですな。もう一度飯島さんのお宅へ御一緒に行く約束だつたと思ひます、それから先日丁寧にもてなされましたから、御禮に何か贈物をしたいのですが。勿論自分では行かれません』

志丈は嚴かに答へた、――

『實に惜しい事でしたが、あの若い婦人は亡くなられました』

『亡くなつた！』新三郎は眞靑になつてくりかへした、『亡くなつたとおつしやるので

すか」

醫者は暫らく氣を落着けるやうに默つてゐた、それから面倒な事を餘り眞面目に取らない事にきめた人のやうな輕い早い調子て、續いて云つた、――

「あなたを紹介したのは私の大失策でした、あの人はすぐあなたが好きになつたらしいのです。あなたはあの小さい部屋て一緒にゐた時、――何かその愛情に油を注ぐやうな事を云つたんぢやありませんか。とにかく、あの人はあなたが好きになつて來た事が分つたので、私心配になりました、――父親が聞いて、私ばかりを惡者にするだらうと思つたからてす。そこて――すつかり白狀いたしますが、――あなたをお訪ねしない方がよいときめまして、わざと長い間參らなかつたやうなわけてした。ところが、つい二三日前、偶然飯島家を訪ねて、お孃さんの亡くなつた事と女中のお米さんの亡くなつた事を聞いて、非常にびつくりしましたよ。それから、色々考へて見ますと、そのお孃さんはあなたを戀ひ慕つて死んだに相違ない事が分りました。……〔笑つて〕あゝ、あなたは全く罪作りだね。〔笑ひつ〕女が戀慕して死ぬなんて云ふ程好男子に生れて來るのは罪ですな。全くだね。〔笑ひつ〕……〔眞面目に〕まあ、死んだ者は仕方がない。今更云つて見てもどうにもならない、――今となつてはあのお孃さんのために念佛ても唱へるより外はない。……さやうなら」

それから老人は急いて行つた、——彼自ら知らないうちにてきた責任を感じて居るその苦しい事件について、これ以上の話を避けやうとして。

註　この會話は或は西洋の讀者に變に思はれるかも知れないが、これは寫實である。この場面全體には全く日本風の特色がある。

三

お露の死を聞いてから、新三郎は悲哀のためにぼんやりとなつた。しかし、はつきり考へる事ができるやうになるとすぐに、彼は女の名を位牌に書き込んで、家の佛壇の中に置いて、その前に供物を捧げて念佛を唱へた。それからあと毎日供物を捧げて、念佛をくりかへした、そしてお露の記憶は彼の心から決して去らなかつた。

盆前に、彼の單調な孤獨を破るやうな事は何も起らなかつた、——死人の大祭であるその盆は七月十三日に始まるのであつた。それから彼は家を綺麗に飾つて、その祭の準備をした、——歸つて來る魂の案內になる燈籠をかけて、精靈棚に精靈の食物を置いた。そして盆の第一夜に、日沒の後、彼はお露の位牌の前に小さい燈明をつけて、それから燈籠に

火をともした。
その夜は晴れて大きな月があつた、——そして風がなくて、大層あつかつた。新三郎は縁側へ出て涼んでゐた。輕い夏の着物を一枚着ただけで、彼はそこで考へながら、夢を見ながら、悲しみながら坐つてゐた、——時々團扇て扇いたり、時々蚊やりの煙りをつくつたりしながら。あたりは靜かてあつた。この邊は淋しいところて、人通りは殆んどなかつた。聞える物はただ近傍の流れのおだやかな音と、蟲の音だけてあつた。
ところが、この靜けさが、——カラン、コロン——と鳴る女の駒下駄の音て破られた、——それから急にこの音は段々近くなつて庭を圍んで居る生垣のところまで來た。それから新三郎は好奇心に驅られてつま立てをして生垣の上から覘かうとした、すると女が二人通るのが見えた。牡丹の飾りのある綺麗な燈籠をもつた女は女中らしかつた、——もう一人は十七歳ばかりの華奢な少女て、秋草の模樣の刺繍のある振袖を着てゐた。殆んど同時に二人の女はふり向いて新三郎を見た、——そして彼はお露と女中のお米の二人を認めて、全く驚いた。
彼等はすぐに足を止めた、そして少女は叫んだ、——
『まあ、不思議。……萩原さんだ』

同時に新三郎は女中に云つた、――

『あゝ、お米さん。君はお米さんだね。――よく覺えてゐますよ』

『萩原さん』お米はこの上もない驚きの調子で叫んだ。『とても本當とは信じられなかつたでせう。……ね、私達は、あなたがお亡くなりになつたと聞いてゐましたから』

『こりや驚いた』新三郎は叫んだ。『ところで、私は又あなた方お二人とも亡くなられたと聞いてゐました』

『まあひどい話ですね』お米は答へた。『どうしてそんな緣起の惡い事を云ふのでせうね。……誰てすか、そんな事を云つたのは』

『どうぞお入り下さい』新三郎は云つた、――『こゝでもつとよくお話し致しませう。庭の門が開いてゐます』

そこで彼等は入つて、挨拶をとりかはした、それから新三郎は二人を樂に坐らせてから云つた、――

『長い間お訪ねもしないで大層失禮しましたがお赦し下さい。實は一月程前にあのお醫者の志丈が私にお二人の亡くなられた事を云つたのです』

『それおやあなたにそんな事を云つたのはあの人てすか』お米は叫んだ。『隨分ひどい

ですね。ところで、あなたが亡くなつたと云つて聞かせたのもやはり志丈です。つまりあなたを騙さうと思つたのでせう、――それはあなたがそんなに人を信用して何でもお任せなさる方だから、騙すのは何でもないのでせう。きつとお嬢様はあなたがお好きな事を何かの言葉でお洩らしになつたのが自然と、お父様の耳に入つたのでせう、さうすると、あの繼母のお國がお醫者に手を廻して、私達が死んだとあなたに聞かせて、別れさせるやうに工夫したのでせう。とにかく、お嬢さんがあなたの亡くなられた事を聞いてすぐ髪を切つて尼になりたいとおつしやいました。しかし私は髪を切る事だけは止めて、しまひにただ心の尼になるやうにと勸める事ができました。そのあとでお父様は或若い人にみあはせやうとなさいましたが、お嬢様はお聞きになりません。それで色々ごたごた致しましたが、――重にそれはお國から起つた事ですが、――たうとう私達は別莊から出まして、谷中の三崎(さんさき)で小さい家を見つけました。そこで今、少し内職をして――どうかかうか暮らしてゐます。……お嬢様はあなたのために念佛ばかり唱へていらつしやいます。今日は盆の初日ですからお寺參りに行きました、それで歸るところです――こんなにおそく――こんなに不思議にお遇ひする事になりました』

『あゝ不思議だね』新三郎は叫んだ。『こりや本當か知らん――それとも夢でなからう

か。私もこゝではたえずお孃さんの名を書いた位牌の前に念佛を唱へてゐました。御覧なさい』そこで彼は精靈棚にあるお露の位牌を二人に見せた。

『御親切に覺えてゐて下さつて、どんなに嬉しいか分りません』お米は微笑しながら答へた。……『あの、お孃樣の方では』――彼女はお露の方へ向いて續けた、その間お露は袖で半ば顏をかくしながらつゝましく默つてゐた、――『お孃樣の方では、あなたのためなら七生の間お父樣に勘當されても、たとへ殺されても構はないと本當に云つていらつしやるのです。……さあ、今夜こゝに置いて下さいませんか』

新三郎は嬉しさの餘りに顏が靑くなつた。彼は感極まつて震へ聲て答へた、――

『どうぞ、ゐて下さい、しかし大きな聲をしないやうに願ひます――實はすぐそばに白翁堂勇齋と云ふ人相見て、人の顏を見て占をする男が住んでゐます。少し物好きな男ですから、餘り知らせたくないのです』

二人の婦人はその晚、若い武士の家に泊つて、夜明け少し前に歸つた。そしてその晚から七晚引續いて每晚、――天氣がよくても惡くても、――いつでも同じ時刻に來た。新三郎はその少女に益々愛着を感じた、そして二人は鐵の帶よりも强い迷ひのくさりて、互につながれてゐた。

四

さて、新三郎の家の隣りの小さな家に住んで居る伴蔵(ともぞう)と云ふ男がゐた。伴蔵とその妻おみねは召使として新三郎に二人とも使はれてゐた。二人とも若い主人に忠實に使へてゐた、新三郎のためにこの二人は比較的安樂に暮らす事ができた。

或晩、餘程おそく、伴蔵は主人の部屋で女の聲のするのを聞いて不安に感じた。彼は新三郎が甚だ温順で親切だから、誰か狡猾ないたづら女に騙されて居るのかも知れないと心配した、——こんな場合には先づ困るのは使用人である。それで彼はよく見張りをしようと決心した、それでその翌晩彼は新三郎の住家へつま立てをして忍び寄つて、雨戸のすき間から覗いた、寢室の行燈の明りで、彼に蚊帳の中に主人と、知らない女が一緒に話をして居るのを認める事ができた。始めは女をはつきり見る事ができなかつた。彼女の背中が彼の方に向いてゐた、——彼はただ彼女が大層華奢である事、——それから着物や髮の風から判斷して、——大層若いらしい事だけを見た。耳をすき間にあてると、話はよく分つた。女は云つた、——

『それでもし父が私を勘當したら、あなたは私を引取つて下さいますか』

新三郎は答へた、――

『引取りますとも――いや、かへつてその方が有難い。しかしあなたは一人娘で可愛がられてゐますから勘當などの心配はありません。心配な事は私共はいつか別れなければならないと云ふ殘酷な目に遇ふ事です』

女はおだやかに答へた、――

『決して、決して、外の人を夫にもつ事は考へて見るだけの事もできません。たとへ私達の祕密が洩れて、父が私のした事を怒つて殺すやうな事があつても、やはり――死んでからも――あなたの事を考へずには居られません。それからあなただつて私がゐないでは長く生きて居られないでせうと私信じてゐます。……』それから彼に寄りそうて、唇を彼の頸にもつて行つてキスした、それから彼もそのキスを返した。

伴藏は聞いてゐながら驚いた、――この女の言葉は卑しい女の言葉でなくて、身分ある人の言葉であつたからである。それから彼はその女の顏をどうにかして一目見ようと決心した。そして家の廻りをあちこち歩いて、あらゆるすき間割れ目を覗いて見た。そしてた

うとう見る事ができた、――しかし同時に彼は氷を辭せられたやうに身震ひをして、頭の毛が逆立つた。

その理由は、その顏はずつと以前に死んだ女の顏、――愛撫して居る指は肉のない骨ばかりの指、――腰から下のからだは何もなくて、非常にうすくあとを曳いた影になつて消えて居る物であつたからであつた。愛して居る男の迷つた眼が若さ、愛らしさ、美しさを見て居るところには、覗いた人の眼にはただ恐怖と、そして死の空虛が見えるばかりであつた。同時に外の女の姿、そしてもつと物すごいのが、部屋の中から立ち上つた、そして覗いて居る男を見ようとするやうに、こちらへ、すばやく進んで來た。それから非常な恐怖のうちに、彼は白翁堂勇齋のうちへ飛んで行つて、狂氣のやうに戶をたたいて、彼を起す事ができた。

五

人相見白翁堂勇齋は大層老人であつた、若い時に多く旅行をして色々の物を見たり聞いたりして居るから容易には驚かない。しかしこのびつくりして居る伴藏の話は彼を驚かし

又現れさせた。彼は古い支那の書物で、生者と、死者の間の戀愛について讀んだ事はあるが、不可能の事として決してそれを信じなかつた。ところが、彼は今伴藏の話は僞りではない事、萩原の家には何か餘程變な事が實際行はれて居る事がたしかである事をさとつた。もし事實が伴藏の考へて居るやうな物であつたら、この若い武士は到底助からない事になる。

『もしその女が幽靈なら』——勇齋はその驚いた下男に云つた、——『もし女が幽靈なら、旦那はぢきに死ぬにきまつて居る、——だから助けようと思へば、何か非常手段を講ぜねばならない。そしてもし女が幽靈なら、死相が男の顏に現れる。何故と云ふに、死人の魂は陰氣で、生きて居る人の魂は陽氣、一方は積極、一方は消極である。幽靈の花嫁をもつて居る人は生きて居られない。その人の血のうちに百年生きる生命の力が存在してゐても、その力はすぐになくなるに相違ない。……それでも私は萩原様を助けるためにできるだけの事をしよう。そこで當分この事について誰にも何も云つてはいけない、——君の家内にも。夜の明け次第私は旦那に會ひに行く』

六

翌朝勇齋に問はれた時、新三郎は始めのうちどんな女もその家を訪ねて來た者はないと云はうとした、しかしこんな下手なやり方は駄目と思つたのと、それからこの老人の目的に利己的なところは全然ない事を認めたので、彼は最後に實際起つた事を認めて、この事を秘密にして置きたいと思ふ理由を述べる事にした。飯島のお孃さんについては、できるだけ早く彼の妻にしようと計畫中であると彼は云つた。

『そんな氣ちがひじみた事』餘りの事に驚いて勇齋は癇癪を起して叫んだ。『毎晩ここへ來る人達は、あれは死人です。あなたは何か恐ろしい迷にかかつてゐます。……あなたが長い間お孃樣が死んだと思つて、念佛を唱へて位牌の前に供物をしたのは何よりの證據です。……死人の唇があなたに觸れたのです、――死人の手があなたを撫でたのです。……丁度今もあなたの顏には死相が現れて居るが――あなたは信じない。……さあ、御願だから、――聞いて下さい、――もし助かりたければ。さうでないとあなたは二十日以内に死にます。その人達は――あなたに下谷區の谷中の三崎に住んで居ると云つたのですね。

あなたはいつかそこへ見舞に行つた事があるのですか。勿論ないでせうね。それぢや今日行つて、――大急ぎで――その谷中の三崎へ行つて、家をさがして御覧なさい。……」

烈しい勢で熱心にこの助言を云つてから、白翁堂勇齋は突然歸つた。

新三郎は、成程とは思はないが、びつくりして、少し考へてからこの人相見の助言に隨ふ事に決心した。谷中の三崎へ着いた頃は未だ朝のうち早かつた、そしてお露の家をさがし始めた。彼は町から横町まで隅から隅へ悉くさがして、門札を悉く讀んだ、それから機會のある毎に尋ねて見た。しかしお米の云つたやうな小さい家に似た物は少しも見當らなかつた、それから彼が尋ねた人のうちで、二人の婦人の住んで居る家を知つて居る者は一人もなかつた。最後にもうこれ以上さがしても無駄と分つたので、彼は近路を通つて家へ歸る事にしたが、その路は偶然新幡隨院のお寺の境内を通り拔けてゐた。

突然彼の注意は、寺の後ろに相並んで立つて居る二つの新しい墓に引かれた。一つは普通の墓で、身分の賤しい人のために建てられたやうな物であつた、今一つは大きな立派な物であつた、そしてその前に多分盆の時分に置いたままになつて居る綺麗な牡丹燈籠がかかつてゐた。新三郎はお米がもつて來た牡丹燈籠はこれと全く同一である事を思ひ出して、

その暗合を幾に思つた。彼は又墓を見た、しかし墓には何の說明もない。どちらにも俗名はない、ただ戒名ばかり。それから彼は寺に入つて尋ねようと決心した。彼の質問に對して、執事の僧の答へたところでは、大きい墓はこの頃牛込の旗本飯島平左衞門の娘のために建てられた物、そのとなりの小さい方はその婦人の葬式のあとですぐ悲みのために死んだ女中のお米の物であつた。

直ちに新三郎の記憶に、お米の言葉が、もう一つの、そして氣味の悪い意味をもつてかへつて來た、――『私達は出ましして、谷中の三崎で小さい家を見つけました。そこで今少し內職をして――どうかかうか暮らしてゐます……』なる程ここに非常に小さい家がある、――そして谷中の三崎に。しかし少し內職をしてとは何だらう。

恐ろしくなつて、武士は大急ぎで勇齋の家に歸つて、相談と助けを願つた。しかし勇齋はこんな場合に何の助けもできないと云つた。彼はただ新幡隨院の高僧良石和尙のところへ、直ちに法の力をもつて助けて貰ふやうに賴んだ手紙をもたせて、新三郎をやるより外はなかつた。

七

高僧良石和尙は博學な聖い人であつた。靈の眼で如何なる悲みの秘密をもさぐり、その源となつて居る惡因緣の性質を知る事ができた。彼は新三郞の話を冷靜に聞いてから云つた、——

「あなたが前の世で犯した過ちのために、今大層大きな危險があなたの身の上にふりかかつて居る。死人とあなたとの惡因緣は非常に强いのだが、そのわけを云つても、あなたには中々分りにくいだらう。それでただこれだけ云つて置かう、——あの死人は憎みのためにあなたに害を加へようとは思つてゐない、あなたに對して何の怨みももつてゐない、かへつてあなたに對して、非常に烈しい熱情をもつて居る。多分この少女は今の世のずつと前の世から、——三世も四世も前の世から、あなたを戀ひ慕つてゐたのであらう、それて生れ變る度每に姿や境遇が變つても、あなたのあとを追ひかけて來る事は止まないのだ。それだから、その女の力から逃れる事は中々むづかしい。……しかし今、この力のあるお守りを貸して上げる。それは海音如來と云ふ佛の黃金のお姿だが、——その佛の御法の教

は海の音のやうに全世界中に響くところから來て居る。それでこの小さいお姿は殊に死靈除けになる。これをあなたは袋に入れて帶の下に、からだにつけてお出でなさい。……その上、愚僧はやがてこの迷つて居る魂の成佛するやうに施餓鬼を勤めます。……それからここに「雨寶陀羅尼經」と云ふ貴いお經がある、これをあなたは必ず毎晩誦まねばならない。……その上このお札の一包みを上げるから、――家へはひれるところはどんなに小さくても、皆それぞれ一枚づつ貼りなさい。さうすればその聖い經文の功德で死人は入られない。しかし――どんな事があつても――お經を誦む事を止めてはなりません』

新三郎はこの高僧に感謝した、それからそのお守りとお經とお札の一包みを携へて、日沒前に家に歸らうと急いだ。

八

勇齋の忠告と助力によつて、新三郎は家のすき間に日沒前に悉くお札を貼る事ができた。それから人相見は、この青年を一人殘して、家に歸つた。

日が暮れたが、暖かく又晴れてゐた。新三郎は戸を固く閉ざて、腰に貴いお守りをつけて、蚊帳に入つた、そして行燈のあかりで『雨寶陀羅經』を誦み始めた。長い間彼はその意味を少しも理解しないで、その文句だけを誦んでゐた、――それから彼は少し眠らうと試みた。しかし彼の心は未だその日の不思議な事件のために餘りに興奮しすぎてゐた。夜中が過ぎた、それでも少しも眠られない。たうとう八つ時を知らせる傳通院の大きな鐘のボーンと鳴るのを聞いた。

それが止んだ、そして新三郎は突然例の方向から近づいて來る下駄の音、――しかし今度はもつと徐ろなカラン、コロン、カラン、コロン――を聞いた。突然冷汗が彼の額に流れた。急いでお經を開いて震へる手で彼はそれを聲高く又誦み出した。足音が段々近くなつた、――生垣に近づいた、――止まつた。その時不思議にも新三郎は蚊帳の中にぢつとして居られなくなつた、彼の恐怖心よりも更に強い物が彼をふり向かせた、それから『雨寶陀羅尼經』を續いて誦む事を止めて、愚かにも彼は雨戸に近づいて、すき間から夜の中を覗いた。家の前にお露が立つて、お米が牡丹燈籠をもつて居るのが見えた、そして二人とも入口の上に貼つてあるお札を眺めてゐた。今までこれ程――生前と雖もこれ程――お露が美しく見えた事はなかつた、そして新三郎は殆んど抵抗のできない力で彼女の方へ自

分の心が引かれるのを感じた。しかし死の恐怖と不可解の恐怖が彼を押へた、そして彼の心のうちの戀愛と恐怖の爭のために、彼は焦熱地獄の苦しみを體に受けて居る人のやうになつた。

やがて彼はかう云つて居る女中の聲を聞いた、――

『お孃樣、はひれません。萩原樣は心變りをなさつたに違ひありません。昨夜なさつた約束をお破りになつたのですもの、そして私達を入れないやうに戸を閉ぢてあります。……今夜ははひられません。もう心變りをした人の事など考へない事に決心なさる方が賢いのですよ。あなたに會ひたくない事は確かです。だからそんな不親切な人のために苦勞しない方がましてすよ』

しかし女は泣きながら、答へた、――

『あゝ、あんなに堅い約束をとりかはしたあとでこんな事があらうとは思はなかつた。……男の心と秋の空とよく聞いてゐたけれど、――それでも萩原樣の心が、こんなに私達を本當に入れて下さらない程むごいわけはない。……お米、どうしてはひる方法はないかね。……さうでないと、どうしても歸る事はいやだから』

こんな風に、長い袖で顏を隱しながら、續いて賴んだ、――甚だ綺麗に、甚だ哀れに見

えたが、新三郎には死の恐怖が強かつた。
お米は最後に答へた、――
―お嬢樣、そんなむごいやうな男の事を、どうしてそんなに氣にかけなさるのです。…
…まあ、家のうしろからでもはひる事ができないか、行つて見ませう。一緒にお出でなさい―
それからお露の手を引いて、家のうしろの方へ行つた、そこで二人は燈が吹き消される時光が消えるやうに、突然消えた。

九

毎晩毎晩丑の刻に幽靈が來た、毎晩新三郎はお露のしのび泣きを聞いた。しかし彼は自分では救はれたと信じたが、――實は彼の召使達の不忠實によつて彼の運命がすでに決定して居る事は少しも想像しなかつた。
伴藏は勇齋に、これまでの事は決して誰にも云はない約束をしてゐた。しかし伴藏は幽

靈のために安眠する事を長くは許されなかつた。毎晩お米は彼の家に入つて、彼を起して、主人の家のうしろの甚だ小さい窓の上にあるお札を除く事を彼に頼んだ。そこで伴藏は恐怖の餘り、翌朝までにお札を除く事をその度毎に約束した、しかし夜が明けると、それを除く決心がつかなかつた、――新三郎のためにならないと信じたからであつた。たうとう或あらしの夜、お米は叱責の叫びをもつて彼の眠りをさまし、枕もとに立つて云つた『用心しろ、どうして私達をからかつて居るのか。もし明日の晩までにあのお札を取り去らないと、どんなにお前を憎んで居るか思ひ知らせてやる』それから話して居るうちに非常に恐ろしい顔をして見せたので、伴藏は殆んど恐怖のために死にさうになつた。

伴藏の妻のおみねは、これまでそんな事は少しも知らなかつた、彼女の夫にも、これは惡夢のやうに思はれたのであつた。今夜に限つて、彼女は不意に目をさまして、誰だか女の聲が伴藏と話して居るのを聞いた。殆んど同時にその話が止んだ、そしておみねがあたりを見ると、行燈のあかりで、――恐怖のために身震ひをして血の氣のない――夫だけが見えた。知らない女はゐない、戸が堅く閉ぢて居る、誰もはひる事は不可能に見えた。それでも妻の嫉妬心は燃え上つた、彼女は伴藏を罵り責め始めたので、伴藏は祕密を打明けて、今自分の立つて居る恐ろしい板挾みの地位を説明せねばならなくなつた。

そこでおみねの怒りは驚きと不安に變つた、しかし彼女は怜悧な女であつた、それで直ちに主人を犧牲にして夫を救ふ方法を思ひついた。彼女は伴藏に――死人と妥協する事を勸めて――狡猾な助言を與へた。

彼等は翌晩又丑の刻に來た、彼等の來る音、――カラン、コロン、カラン、コロン――を聞いておみねは隱れた。しかし伴藏は暗がりて彼等に會ひに出かけて行つた、そして妻に云はれた事を云ふだけの勇氣があつた、――

『はい、お叱りを受けるだけの事はございます、――決して御立腹になるやうな事を致したくはございません。お札を取らないわけは、實は家内と私は萩原樣の助けてやうやく暮らしてゐるやうな次第で、萩原樣に何か災難でもあると私共も不幸になるのでございます。しかし黄金百兩もございましたら、誰からも助けて貰ふ事は要りませんから、御望み通り致しませう。それで百兩頂けたら、私共も生活に困るやうな心配をしないで、お札を取る事ができます』

これだけ云つたら、お米とお露はしばらく默つて顏を見合せてゐた。それからお米は云つた。

『お孃樣、この人には何も恨みをいだく理由はないのだから、この人に面倒をかけるのはよくないと私申しましたでせう。しかし萩原樣は心變りをしてゐますから、もうかれこれ思うても仕方がありません。お孃樣、もう御一度御願ですから、あんな人の事をあきらめて下さい』

しかしお露は泣きながら、答へた、——

『お米、どんな事があつても、どうしても、思ひ切る事はできません。……お札を取つて貰ふために、百兩手に入れる事はできるでせう、……お米、お願だから、もう一度——たつた一度でいゝから、萩原樣にお目にかからせて頂戴』それから袖で顏をかくしながら、彼女はこんな風に口說き續けた。

『まあ、どうしてこんな事を私にせよとおつしやるのですか』お米は答へた。『私お金をもたない事をよく御存じぢやありませんか。しかし私がこれ程申上げても、こんな氣まぐれを是非なさらうと云ふのなら、仕方がないから、どうにかしてその金をさがし出して、明晩ここへもつて來ねばなりますまい。……』それから、その不忠實な伴藏に向つて、云つた、——『伴藏、もう一つ云ふ事がある、萩原樣は今からだに海音如來のお守りをつけてゐますが、それがあるうちは近づけません。お札を取つて、それからどうにかして、あ

のお守りを取つて貰ひたい』

伴藏は力なく返事した、――

『百両頂けたら、それもやれませう』

『さあ、お孃樣』お米は云つた、『明晩まで、――待つて下さいね』

『あゝ、お米』お露はすすり泣いた、――『萩原樣に會はないで、又今晩も歸るのかね。あゝ、ひどい』

それから、女の幽靈は、女中の幽靈に伴はれて去つた。

一〇

又つぎの日が來て、又つぎの夜になつた、それでその夜死者は來た。しかし今度は萩原の家の外に歎きの聲は聞えなかつた。不忠實な下僕は丑の刻にその報酬を見つけて、お札を取除けて置いたからであつた。その上、主人の風呂に入つて居る間に、黃金のお守りを袋から盜んで銅の像を一つ代りに入れて置く事ができた、そして彼は海音如來を淋しい野原に埋めて置いた。それでこの訪問者は何等故障に遇はなかつた。袖で顏をかくしながら、

蒸氣のなびくやうに、お札をはぎ取つてある小さい窓から入つた。しかし家の中でこれから何か起つたか、倖藏は決して知らなかつた。

彼が主人の家に近づいて、雨戸をたたかうとしたのは、日が高く上つてからであつた。長年の間に、返事のなかつたのは今度が始めてであつた、それでその沈默が恐ろしかつた。くりかへし、彼は呼んだ、しかし返事はなかつた。それからおみねの手傳を得て、家に入つて、寢室へひとりで行つて、そこで呼んだが駄目であつた。彼は光線を入れるために、雨戸をがらがらとあけた、しかし家の中には何の音もしなかつた。たうとう彼は蚊帳の隅をあげて見た。しかし彼がそこを一目見るや否や、恐怖の叫びをあげて、家から逃げ出した。

新三郎は死んでゐた——恐ろしく死んでゐた、——そして彼の顏はこの上もない苦惱で死んだ人の顏であつた、——それから彼の側に女の骸骨が横はつてゐた。そしてその腕の骨、手の骨は彼の頸の廻りにしつかりからみついてゐた。

二

占師白翁堂勇齋は不忠實な伴藏の賴みによつて、死骸を見に行つた。老人はそれを見て驚き恐れたが、注意してあたりを見廻した。彼はすぐに家のうしろの小さい窓からお札が取除いてある事を認めた、それから新三郎の體をしらべて黄金のお守りがその頸から取られて、その代りに不動の銅像を入れてある事を發見した。彼は伴藏を疑うた、しかし事件は餘りに重大なので、これ以上の行動を取る前に、僧良石と相談する事を安全と考へた。それで、これまでの事實を丁寧に調べた上で、彼は老人の足でできるだけ早く新幡隨院のお寺へ行つた。

良石はこの老人の訪問の目的を聞かないうちに、彼を奥の一室へ誘うた。

『あなたはいつでもここへ御出でなさい』良石は云つた。『どうぞお樂にお坐りなさい。……さて、萩原樣も亡くなつてお氣の毒です』

勇齋は驚いて叫んだ、――

『さうです、亡くなりました、――しかしどうして御存じですか』
僧は答へた、――
『萩原様は悪い業の結果のために苦しんだのです、それからあの下男は悪人です。萩原様に起つた事は避けられません、――あの運命はずつと前の世からきまつた事です。もうこの事について、心を悩まさない方が宜しい』
勇齋は云つた、――
『行の清い僧は百年さきの事までも分る力が得られると承はつてゐましたが、そんな力の證據を目前に見たのはこれが始めてでございます。……しかし、未だ心配な事が一つございますが――』
良石はさへぎつた、『あの聖いお守り、海音如来の盗まれた事でせう。あの姿は野原に埋めてあります、来年八月中には、見つけられて私のところへ歸つて参ります。それだから心配には及ばない』
益々驚いて、老人の人相見は云つて見た、――
『私は陰陽道や占を研究して、人の運を云ひあてて生活を營んで居りますが、あなたがどうしてこんな事を御存じか分りかねます』

良石は厳かに答へた、――

『どうして知つて居るか、どうでも宜しい。それよりも萩原様の葬式についてお話したい。萩原家には勿論、きまつた墓地がある。しかしそこへ葬るのはよくない。飯島のお嬢様お露の側に葬らねばならない、その因縁は非常に深いのだから。それから、あなたは色色の恩義を受けて居るから、費用を出して墓を建ててお遣りなさい』

それで新三郎は谷中三崎、新幡随院の墓地でお露の側に葬られる事になつた。

――これで牡丹燈籠の物語の幽霊の話が終る。

*
* *

私の友人は私にこの話は興味があつたかどうかと尋ねた、それで私は答へて、――この作者の研究の地方色(ローカルカラー)がもつとはつきり分るやうに、――新幡随院の墓地へ行つて見たいと云つた。

『すぐ一緒に参りませう』彼は云つた。『しかし、その人物について、あなたはどうお考へてすか』

『西洋風に考へると、新三郎は輕蔑すべきやつてす』私は答へた。『私は心のうちて、私共の物語歌の本當の愛人と比べて見てゐた。その人達は實はクリスト教信者だから、人間に生を享けるのはたつた一回しかない事を信じてゐたにも拘らず、非常に喜んて、死んだ戀女と一緒に墓へ行きました。しかし新三郎は――うしろにも、前にも百萬の生命のある事を信じて居る佛敎徒てあつた。しかも彼は幽界から彼のところへ歸つて來た女のために、この一つの浮世をさへ捨てる事をしない程利己的てあつた。利己的よりも、更に一層臆病てあつた。生れも育ちも武士だと云ふのに、幽靈が恐ろしさに坊さんに助けて貰はらうとした。どの點から云つてもつまらない男てす、あんな者をお露が殺したのは、たしかに當然てす』

『日本の見方から云つても、やはり』私の友人は答へた。『新三郎は余程輕蔑しむべき男てす。しかし作者がこんな弱い性格を使はなければ、有効に運んて行かれないやうな事件を發展させるのにこんな人物が役に立つて居るのてす。私の考では、この物語のうちて唯一人好きな人物はお米てすね、昔風の忠實な親切な女中の型で、――賢くて、怜悧て、色々の才智があつて、――死ぬまで忠實どころか、死んてからさきまで忠實なのてすから。……とにかく新幡隨院へ參りませう』

私共は、お寺は面白くなく、墓地は恐ろしく荒れはてて居る事を發見した。昔、墓であつた場所は芋畠になつてゐた。その間に墓石が色々の角度で傾いて居る。墓の面の文字はこけて讀めない、臺石ばかり殘つて居るのもある、水鉢はこはれ、佛像の首のないのや手のないのがある。近頃の雨は黑い土にしみ込んで、――ところどころ汚水の溜りができてゐて、その廻りには無數の小さい蛙が跳んでゐた。芋畠を除いて――一切の物が何年間も打棄ててあつたらしい。門をすぐ入つたところにある小さい家で、一人の女が何か食事の準備をしてゐた。それで私の同行者は牡丹燈籠にある墓の事を知つて居るかと彼女に聞いて見た。

「あゝ、お露とお米の墓でせう」彼女は微笑しながら、答へた、――「それは寺のうしろの第一の通りの終りに近いところで、――地藏樣のとなりにあります」

このやうな種類の思ひがけない事に、日本では外にもよく出遇ふ。

私共は雨水の溜りと新芋の綠のうね、――その根は必ず大勢のお露やお米の髓を食んでゐたに相違ない、――その間を拾ひながら進んだ、――そして私共はたうとう苔蒸した二つの墓についたが、その墓の面は殆んど消えてゐた。大きい方の墓の側に、鼻のかけた地藏があつた。

『文字は中々讀めません』私の友人は云つた――『しかしお待ちなさい』……彼は袂から白い紙を一枚取出して、その誌銘の上に置いて、粘土の一片をもつて紙をこすり始めた。さうするうちに、黑ずんで來た表面に、文字が白く現れて來た。

『寶暦六年〔一七五六年〕――三月十一日――子歲、兄、火……これは吉兵衞と云ふ根津のどこかの宿屋の主人の墓らしい。もう一つの方に何が書いてあるか見ませう』

又新しい紙を一枚取つて、戒名の文句をやがて取つた。そして讀んだ、――

『圓明院法曜藏貞謙志法尼』……誰か尼さんの墓ですね』

『何だ、ばかばかしい』私は叫んだ。『あの女は本當に私共を馬鹿にして居る』

『それは』私の友人は抗言した、『あなたの方が惡い。あなたは氣分を味ひたくて、ここへ來たのだから、あの女は精々お氣に入るやうに努めたわけです。あなたもこの怪談を本當だとは思つてゐないでせうね』

佛足石

一

大英國博物館所藏日本及び支那繪畫のアンダスンの目錄に、「日本にては佛陀の像が、アムラヴアティ遺跡並びに他の多くの印度の藝術遺物に見るが如くに、足卽ち脚のみにては決して表はされ居らざることは注目すべきことなり」といふ異常な記述があるのを見て、自分は近頃一驚を喫した。實際の處さういふ表象は日本には稀でも無いのである。石造紀念碑にも見出される計りで無く、宗教的繪畫――殊に寺院で懸ける或る種のカケモノ――にも見出される。そんなカケモノは通例は足跡を――夥多の象徴並びに文字と共に――大規模に見せて居る。彫刻されて居るのは、これほどに普通では無いかも知れぬ。が、東京だけにも、自分が見たブッソクセキ卽ち「佛足石」は澤山にある――自分が見て居ないものが多分數々あらう。兩國橋近くの回向院に一つ、小石川の傳通院に一つ、淺草の傳法院

に一つ、それから芝の増上寺に美くしい實例が一つある。此等はいづれもただの一個の切石を切つたのでは無くて、幾つかの小石をセメントで結合して不規則な傳統的恰好にして、その上へ根府川石の重い扁石を載せ、その磨いた表面に、深さ一吋の十分の一ばかりに線でその模様が彫つてあるのである。自分の判斷では、その基石の平均の高さは二呎四吋ぐらゐであて、その一番長い直徑が三呎ぐらゐと思ふ。その足跡のぐるりに（上記の實例の多くのものには）ボダイジユ（「ボディ・ドルマ」）即ち佛教傳説の菩提樹の葉と蕾との小さな總が十二彫つてある。いづれのものにも足跡の模様は大抵同一である。が、その紀念碑は質に於てまた仕上に於て異つて居る。増上寺の――その側面に淺い浮彫で佛體が彫つてあるの――は、四つのうちで一番價の多い價の高いものである。回向院にある見本は甚だ拙くて質素である。

日本で出來た最初の佛足石は奈良の東大寺に建てられた物であつた。その模様は支那にある、印度の原のを忠實に模したのだといふ、假寄つた紀念碑に倣つたのであつた。この印度の原のものに關して、次記の傳説が或る古い佛書に載つて居る。――

註　その支那字の表現を日本人はセイ・キキ・キと發音する。「セイ・キキ」（西域）とは印度の日本古

名であつた。だから此の長題は『印度についての書』と譯してよからう。此書は西洋の學者にはシ・ユ・キとして知られて居る書かと想ふ。

摩揭陀國の精舍中に大石あり。如來履む所雙跡猶存す。其長さ尺有八寸、廣さ六寸に餘れり。兩跡共に輪相あり。十指皆花文を帶ぶ。光明時に照す。昔時、如來將に滅んとす。拘尸那に赴き、南の方を顧みて石上にして阿難に告ぐ。『吾今最後に此足跡を留めん。此國の王にしてこの足跡を毀たんとするも決して全く毀たるゝことあらざるべし』げに今日に至るも毀たれざりき。嘗て佛法を惡みし王ありて、その石の頂を削りて、足跡を除かんとせしも、削り已れば文彩故の如かりき。

註 『尺有八寸』日本の尺寸は英國の呎吋より餘程長い。

佛陀足跡の表象の德に就いては、時々『觀佛三昧經』から經語が引用されて居る。自分が譯して貰つたのは斯うてある。

その時釋迦『シヤキヤムニ』はその足を擧げぬ。……佛その足を擧ぐる時いづれも足下に千輻輪の相を視ることを得たり。……かくて釋迦は言ひぬ、『我が足の裏の千輻輪相を見んものは千劫

極重惡罪を除かるべし。世を去つて後その跡を見ん者も千劫極重惡業を免るべし』

日本佛教の他の種々な經語も、誰れても佛足跡を見る者は『罪業の紲を免れて解脫の道に入らん』と斷言して居る。

日本のの臺石の一つに彫つてある模樣の外形は、佛足跡の印度の彫刻を能く知つて居る



東京小石川傳通院の佛足跡

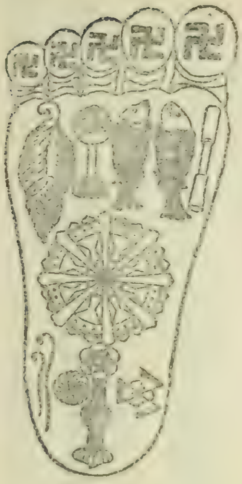
註　奈良にある紀念碑には東京のの臺石にある模樣とは餘程異つた形に足跡が現はれてある。

人達にも、幾分の興味があるに相違無い。兩方の足跡を示し居る右の圖は、傳通院にある跡のを取つたもので、これはその傳說的な大いさを充分に有つて居る。表象は七つしか無いことが見られるであらう。日本では之を「シチサウ」卽ち「七相」

釋迦足下千輻輪相圖



（「[illegible]」より）



卍字のある佛足跡

（「佛教百科全書」）

と呼んで居る。此等について自分は――淨土宗で用ひる書物の――『諸囘向寶鑑』で少しく知ることを得た。此の書には足跡の粗末な木版が載つて居る　それでその一つを、足の指に附いて居る表象の妙な形に注意を呼ぶ目的で、此處に轉載する。これはマンジ卽ち卍の變形だといふが、自分は之を疑ふ。佛足石の石刷では之に對應する象(かたち)は摩掲陀國の石の傳說に記載されて居る『花文』模樣を示して居る。だが書中の版畫の表象は火を思はせる。實際その外形は佛敎裝飾の因襲的な火炎模樣に如何にも能く似て居るから、足跡の傳統的な光明を原々示すつもりであつたらう、と自分は考へざるを得ぬ。其上に、『法界次第』といふ書物に、此の想像に助を貸す文句がある。――

佛の足の裏は平らで、化粧箱の底のやうである。……その上に千輻の輪の視を寫して居る條(すぢ)がある。……足の指は細く、圓く、長く、眞直で、やゝ光を放つて居る。

『諸囘向寶鑑』が與へて居る七ヶ條の說明は滿足とは言はれぬ。が、日本の通俗佛敎に關して興味が無いでもない　その表象は次のやうな順序で考察されて居る。

一、萬字(スワスチカ)　一々の足指のこの象(かたち)はマンジ（卍）の變形だといふ。そしていつも斯うなつて居るかどうかは自分は疑ふが、足跡を現はして居る或る大きな掛物では、此表象

は確に卍字であつて、火炎でも花形でも無かつたことを自分は見た。日本の註解者は卍字は『永久の幸福』の徽號だと解く。

註　文字通では『萬の字』の徽號。

二、魚（ギヨ）　魚はあらゆる束縛からの自由を意味する。恰も水中に在つて魚の容易に如何なる方向にも動くが如く、佛の境涯にあつては圓滿解脫の者は何等の束縛障礙のあることを知らぬ。

三、金剛杵（『コンガウシヨ』）梵語で『ヴジラ』）『現世の一切の煩惱を打破する』神聖な力を意味すると說明されて居る。

四、螺（日本語『ホラ』）　法を說くことの表號。『眞俗佛事編』といふ書には佛陀の聲の徽號としてある。『大悲經』では大乘教理の說法と力との印としてある。『大日經』には斯う言つてある、――

螺を吹く音を聞きて諸天悉く歡喜の念に滿ち、法を聽かんとて集まり來る

五、花瓶（日本語『ハナガメ』）　ムロの――文字通りには『無漏』と譯してよからう、

生死を絶した最上智の境遇を意味する神祕な語の——表號。

六、千輻輪（梵語『チヤクラ』）日本ではセンフクリンといふ此表象は、種々な引證文て珍な說明がされて居る。『法華文句』は

車輪の效は或る物を破碎するにある。そして佛陀の敎法の效は一切の迷妄過失疑惑及び迷信を破碎するにある。かるが故に敎法を說くことをば『法輪を轉ず』と云ふ

と言つて居る。『正理論』は

恰も世間の輪に轂輻ある如くに八支聖道彼に似たり

と言つて居る。

七、梵王冠佛陀の踵の下に——佛陀は諸神諸佛に優るといふ表象に——ブラアマ（梵天王）の寶冠（ホウクワン）があるのである。

然し自分は、このどんな佛足石にも彫つてあるものは、その表象の說明の上記の不完全な企より、もつと意味のあるものだといふことが分かるだらうと思ふ。傳通院の紀念碑の

上に彫つてあるものは典型的である。基石の異つた側面に、――頂上に近く、規則に從つて或る一定の方位に向かはせて――胎藏界の五如來の徵號たる梵字が五つと、經語と記念の文句とが彫つてある。筆者は自分が翻譯して貰つたのでは次記の如くである。

放光般若經云爾時世尊放足下千輻輪相光明乃至其見光明者畢志堅固發無上正眞道意。

觀佛三昧經云見佛跡者除却千劫極重惡業。

佛說無量壽經云

佛所遊履　國邑丘聚　靡不蒙化　天下和順

日月清明　風雨以時　災厲不起　國豐民安

丘戈無用　崇德興仁　務修禮讓

〔右記は記念の文〕

明治十八年五月圓山邨合衆等造立佛足石一基安置傳通院大殿有是結盡未來際令大菩提種子增

進修道也

當山第六十六世

沙門泰成謹記

小笠宮領高敬書

二

この彫られた足跡を――巨人の如く見えるが、然しこれがその表象として殘つて居る其人格を思へば遙かに小さな足跡を――想ふ時、不思議な事實が腦裡に集つて來る。二千四百年の古昔に、生の苦と神祕とに對する孤獨の瞑想よりして、一印度巡禮者の心が、人間がこれまで敢はつた最上の眞理を齎し、しかも科學無き時代に於て生の不可思議なる渾一と、物心二つの無限の虚妄と、宇宙の生死と、に關する我が現在の進化論的哲理の最上至極の知識とを先んじて述べたのであつた。彼は、純理によつて――しかも我々の時代の前には彼れ獨りが――何處よりか、何處へか、また何故か、の問に價値ある答を見出した。そしてこの答を以てして、其祖先の信條とは別な一種より高尚な信仰をつくつた。彼は述べて而してその塵土に還つた。そして國人は、彼が敎へた慈悲心の故を以てして、その死んだ足の跡を崇拜した。其後亞歷山の名が、また羅馬の力が、また回々敎の大が、盛んとなつてそして衰へた。――幾多の國民は起こつてそして消えた。――幾多の市府は生じてそしてなくなつた。――羅馬の文明よりも巨大なる別な文明の子孫が、地球を征服を以て

取り圍み、遠き彼方の幾多の帝國を創立し、終にその巡禮者が誕生した國を支配するやうになつた。そして、二十四世紀間の智慧に豊富な此等の者共は、彼が使命の美しさに感嘆し、彼が言ひまた行つた總てをば、彼が生きて居て教を說いた時代には生まれても居なかつた多くの國語で新しく書き記させるに至つた。今も猶ほ彼の足跡は東洋に燃えて居る。今も猶ほ大なる西洋は、驚き愕いて、無上解脫の光明を求めんとその足跡の光を追うて居る。古昔、國王彌蘭(ミリンダ)が——初にはただ、希臘人の巧妙な法に倣つて、問ふ爲めにであつたが、後には、主(しゆ)のより高尚なる法を尊敬の念を以て受納しに——ナガセナの家に道を辿つたのは正に斯くの如くてあつたらう。

吠

彼女は狐のやうに痩せて、そして甚だ老年である、——それは夜になると私の門の番をする白い牝犬の事である。彼女は近所の大概の青年男女が未だ小さい時に一緒に遊んだ。私が現在の家に移つた日に、その家を彼女が番して居るのを見た。彼女はこれまでの借家人の幾人かのために、續いて家の番を務めて居る事を聞いた、——別に理由はない、ただ彼女はこの家のうしろの炭納屋に生れたと云ふだけの事である。彼女は待遇の如何に拘らず、時計のやうに正確にその借家人に奉仕した。報酬としての食物の問題は、ひどく彼女を惱ます事はなかつた、實は、その町の大概の家では彼女を養ふために毎日それぞれの事をしてゐたからであつた。

彼女はおとなしくて靜かである、——少くとも晝は靜かである、そして彼女は痩せて醜く、尖つた耳、餘程氣味の惡い眼をして居るにも拘らず、誰でも彼女を好いて居る。子供

等は背中に乘る、そして好きなやうに彼女をいぢめる、知らない人なら氣味惡がらせると云ふ事だが、子供に對しては決して怒らない。彼女の我慢强いおとなしさの報いとして、彼女はこの町の人々の好意を得て居る。一度彼女は公けに撲殺されかかつた事があつた。その時鍛冶屋の妻が驅けつけて、そのかかりの巡査と談判して、首尾よく助けてやつた。『誰かの名前をつけて置きなさい』巡査は云つた、『さうすれば安全です。誰の犬ですか』その問題は中々むつかしくて答へられなかつた。この犬は誰の物でもあり、又誰の物でもない――どこでも歡迎されるが、どこにも持主はない。『しかしどこに居るのです』困つた巡査は問うた『あの西洋人のうちにゐます』鍛冶屋の妻は云つた。『それならその西洋人の名を犬につけて置くさ』巡査は敎へた。

そこで私は大きな日本文で私の名を犬の背中に書かせた。しかし近所の人々は一つの名では充分安心ができなかつた。そこで瘤寺の僧は左の方へ寺の名を見事な漢字で書いた、それから鍛冶屋は右の方へ彼の店の名を書いた、そして八百屋は彼女の胸に、――八百或はそれ以上の色々違つた物を賣る事になつて居るので呼ばれて居る言葉の――『八百』と云ふ文字を書いた。それて今では彼女は甚だ妙な樣子の犬になつた、しかしその文字で彼女は充分に保護されて居る。

彼女にただ一つ缺點がある、彼女は夜吠える。吠える事は彼女に取つて氣の毒にも僅かしかない樂しみのうちの一つてある。始めのうち、その習慣を止めさせやうとして嚇かして見た、しかし彼女は本氣にしないやうだから、私は結局そのままにして置いた。彼女を打つ事は餘りひどかつたらうから。

しかし私はその吠を惜む。いつでも驚される時の恐怖の始めに來る不安のやうな、一種おぼろげな不安を私に與へる。それが私を恐れさせる、——何となしに、迷信的に恐れさせる。恐らく私の書いて居る事が讀者に可笑しくも思はれよう、しかしもし讀者がその吠を一度聞いたら私の云ふ事を可笑しいとは思はないだらう。彼女は普通の町の犬のやうには吠えない。彼女はもつと遙かに狼に近いどこか北方のもつと野蠻な種族から來て居る、そして甚だ特別な種類の野性を帯びて居る。そしてその吠は又奇態である。歐洲のどんな犬の吠えやうとも比べられない程物すごい、そして私はそれが比べられない程古いと想像する。それは數百年の馴養によつて全然修正されてゐない彼女の種族の元來の原始的な叫びを代表して居るのかも知れない。

それは惡い夢の呻きのやうな窒息するやうな呻きから始まつて、——風の哀音のやうな

長い長い哀音に上つて、――震へながら低くなつて盗笑になる、――再び哀音、前よりも遙かに高い烈しい哀音になる、――突然物すごい笑のやうな物になつて破裂する、――それから最後に小さい子供の泣き聲のやうな哀哭になつて細くなる。このうちで氣味の惡いところは重に――全部ではないが――哀音の調子の憐むべき苦しさと對照になつて居る笑ふやうな調子の物すごい嘲弄に存する、その不釣合なところは狂氣を思はせる。それで私はこの動物の魂に、それに相應な不釣合の存する事を想像する。私は彼女が私を愛して居る事を知つて居る、――一刻の猶豫もなく私のためにその哀れな生命を捨てる事も知つて居る。私が死ぬやうな事があつたら、彼女が悲しむ事も信じて居る。しかしその事について外の犬のやうな、――たとへば、垂れた耳の犬のやうな、――考へ方はしないだらう。彼女は餘りに甚しく自然に近いから、考へ方も違ふ。どこか淋しいところで、私の死體だけと一緒に居るやうな事があつたら、彼女は先づ始めに自分の友人のために盛んに歎くだらう、しかし、この義務が終つたら、今度はこの上もなく最も簡單な方法で、――それを喰ふ事で、――彼女のその長い狼の齒でその骨を嚙み碎いて、――彼の悲哀を和らげに取りかかるだらう。それから、何等良心に疚しいところもなく、彼女は坐つて、月に向つて彼女の祖先から遺傳した葬ひの叫びをあげるだらう。

その叫びは私に奇態な恐怖と同様に、奇態な好奇心を起させる、――そのわけは、そのうちにいつても同じ連續の順序でくりかへし起つて來て、特別の形の動物の言葉、――特別の觀念、――を表はして居るに相違ない、或異常な母音の集まりがあるからである。全體は一つの歌、――人間のではないから、人間には想像ができない情緒と思想の歌である。しかし外の犬にはその意味が分る、そして數哩の夜を距てて返事をする、――時として、それが餘り遠くから來るので、私は極度に耳をすまして始めてそのかすかな返事が分る事がある。言葉は――（もしそれを言葉と云へるなら）――甚だ少い、しかし、その情緒的效果から判斷すれば、それには澤山の意味があるに相違ない。必ずや、それは數萬年の古い物、――鈍い人間の感覺には分らない香ひや、蒸發や、流入と流出に關する物、――それから又、衝動、大きな月の光で犬の靈魂の中に動く名のない衝動、――を意味するのである。

私共が犬の感覺、――犬の情緒と觀念を知る事ができたら、私共はその情緒觀念の性格と、その動物の吠によつて起る特殊の不安の性格との間の不思議な關係を發見するだらう。しかし犬の感性と人間のそれとは全く違つて居るから、私共は決して本當に知る事はない。

ただ私共は、極めてぼんやりと、私共の心に起る不安の意味を推量する事ができる。その長い叫びのうちの或調子、――そしてその調子のうちの最も物すごい物は、――奇妙に苦痛と恐怖を訴へる人間の聲の音調に似て居る。それから、その叫びの音その物が、非常に離れた或時代に、人間の想像に於て、特別な恐怖の印象と聯想されてゐた事を信ずべき理由がある。殆んど凡ての國々で（日本も含んで）犬の吠えるのは、人間には見えない物、そして恐ろしい物、――特に神々や幽靈、――が見えるからだとなつて居るのは、著しい事實である、――そしてこの迷信的信仰の一致は、その叫びによつて起される不安の分子は超自然の恐怖である事を暗示する。今日私共は見えない物を自覺的に恐れる事は止めた、――私共自らが超自然的であつて、――この感覺の生命を有する肉體と雖も、古い想像の如何なる幽靈よりも遙かに靈的である事を知つて居る。しかし私共の心にやはり原始的恐怖の朧げな遺傳が眠つて居る、そして反響のやうに、夜吠えるその音のために眼をさます。

人間の眼に見えない物を何ても、犬の感性が時として知覺する事があるが、私共の幽靈觀とは少しも似て居るわけはない。驚起哀泣の不可思議な原因は大概見えない、見える物から來るのではなからう。犬は特別の視力を有して居ると想像するだけの解剖學的の理由はない。し

かし犬の嗅覺器官は、人間の鼻よりも遙かにすぐれた能力のある事は明らかである。犬が超人間的知覺を有すると云ふ古い世界的信仰は事實によつて正當とされて居る信仰であつた、しかし、知覺は眼によるのでない。犬の吠が事實——昔、想像されたやうに——幽靈の恐怖の叫びであつたとすれば、その意味は必ず——『見える』でなく——『臭ふ』であらう。人間には見る事のできない物の形が、犬に見えると云ふ想像を正しいとする證據は何も存在しない。

私の屋敷に居る白い動物の夜の遠吠を聞くと、彼女が何か實際恐ろしい物、——何か私共が道徳的意識から遠ざけようとするが無駄である物、卽ち人生の食人鬼のやうな法則——を精神的に見て居るのではないかと訝らせる。否、彼女の叫びは單に犬の叫びではなく、人生の法則その物の聲、——無理解にも詩人によつて、愛のこもつた、慈悲に富んだ、神々しいと云はれて居るその自然の言葉その物であるやうに思はれる時がある。何か知られないやうな究極の方法で、或は神々しいかも知れないが、——しかしたしかに慈悲深くはない、さらに又一層愛のこもつた物でもない。ただ共食によつて生物は生存して居る。詩人の眼から見れば、愛、希望、記憶、向上の念のある私共の世界は美しく見えるかも知れない、しかし、人生はたえざる虐殺によつて養はれて居ると云ふ事實、——最もやさしい

愛情も、最も氣高い熱情も、最も清い理想も、肉を喰ひ血を飲む事によつて養はれねばならないと云ふ事實には何の美しいところもない。凡ての生命は自分を支へるために生命を貪食せねばならない。讀者は自分で神のやうだと考へたければ、考へても宜しい、——しかし諸君はその法則に從はねばならない。或は好みによつては、菜食論者になつてもよい、それにも拘らず、諸君は感情と欲望を有する物を食はねばならない。水を飲んでも生物を呑まないわけには行かない。名前はいやだが、私共は要するに共食をする者である、——一切の生物は根本的に一つであるからである、そして私共は植物、魚、爬蟲類、鳥、哺乳動物、或は人間のうち、どの肉を食ふにしても、結局同一である、どんな動物でも、埋められてから或は燒かれてから、食はれる、——それも一度や二度ではない、——否、百度や千度や一萬度ではない。私共が動いて居る地、私共が生じて來た土を考へて見よ、——それから出て、そこへかへつて、私共の食物となる物を養ふために、朽ちて隱れて來たその消えた數十億の人類の事を考へて見よ。たえず私共は私共の種族の屍、——私共の昔のわが身の實質——を喰べる。

しかし所謂無生物でも共食である。實質は實質を喰べる。水の一小滴のうちでも、原子は原子を喰べる。そのやうに廣大なる空間では天體は互に相食む。星は世界をつくつて、

それを食ふ、行星は彼等自らの月を消化する。一切の物は、決して終らないで、ただくりかへすばかりの貪食である。そしてこんな事を考へて居る人に取つては、この宇宙は親の愛によつて造られ支配される神々しい物であると云ふ話は、死人の魂は神々によつて喰はれると云ふポリネシヤの話よりも有難味が少い。

この法則はひどいやうに思はれるのは、私共はこの惡魔のやうな自然に反對する思想情操を發達して來たからである、——丁度有意的運動が重力の盲目的な力に反對するやうである。しかしこんな思想や感情をもつて居る事が、その最後の問題の暗黑な事を少しも減じないで、かへつて私共の地位の物すごさを増すばかりである。

とにかく東洋の信仰は西洋の信仰よりも、その問題を一層よく解決する。佛教徒に取つては宇宙は少しも神聖でない——全く反對である。それは業である、——それは誤りの思想と行爲の創造した物である、——それは何等神意によつて支配されてゐない、——それは物すごき物、魘される物である。同時に又迷である。恐ろしい夢のうちの形や苦痛が、夢見る人に取つて事實らしく見えると同じ道理で、それがただ事實に見えるのである。この世に於ける私共の生命は眠りの狀態である。しかし私共は全く眠る事はない。私共の暗黑のうちに光はある、——愛と憐みと同情と仁愛と云ふかすかな極光に似た目醒めがある、

これは私情を離れた誠の物である、――これは永久の神聖な物である、――これは四つの無限大の感情で、その夕燒のうちに、日光の中の霧のやうに、凡ての形や迷が皆消えるのである。しかし、その感情に目醒める場合を除いて、私共は全く夢を見る者である、――暗黒のうちで助けられないで呻いて、――影の恐怖のために苦しめられて居る。私共の悉くは夢を見て居る、全く醒めて居る者は一人もない、そして世の中の賢者として通つて居る多くの人々は、夜になると吠える私の犬よりも、この事實を知つて居る事は少い程である。

私の犬が物を云ふ事ができたら、どんな哲學者でも返事のできないやうな質問をするだらうと私は思ふ。彼女は生存の苦痛によつて苦しめられて居ると私は信ずる。勿論私はその謎が私共に現れるやうに彼女に現れると云ふ意味で云つてはゐない、――私共自身のやうな精神上の過程で、何かの抽象的結論に達する事ができると云ふ意味でもない。彼女に取つて外界は『香ひの連續』である。彼女は香ひで考へ、比較し、記憶し、推理する。香ひによつて、彼女は性格の評價をする、凡て彼女の判斷は香ひに基づいて居る。私共が少しも嗅ぐ事のできない數千の物を嗅いで、私共には見當もつかないやうな風に、それを會

得して居るに相違ない。彼女の知れる如何なる物も、全然想像のできない種類の精神上の作用によつて學ばれたのである。しかし彼女は食ふ事の經驗或は食はれる事の本能的恐怖と香ひの關係によつて大概の物について考へて居る事を可なりたしかに信じてもよい。たしかに彼女は私共の踏む地球について、私共が知つて居る方がよいと思ふ事以上の知識をもつて居る。そして恐らく、もし話す事ができたら、彼女は空氣と水の最も珍らしい話を私共に物語るだらう。こんなに恐るべく透徹した感性力を幸にも、或は不幸にももつて居るので、彼女の外界の實在に關する見解は非常に沈痛な物であるに相違ない。こんな世界の上に輝く月を見て彼女が吠えるのは殆んど不思議ではない。

それでも彼女は、佛教の意味から云へば、私共の多數よりももつと醒めて居る。彼女は粗末ながら道德法をもつて居る――それは忠實、服從、柔順、感謝、それから母性愛、それから色々の行爲の小さい規則を敎へて居る、――そしてこの簡單なる道德法を彼女はいつでも守つて居る。僧侶から見れば、彼女は人間の知るべき事を知らないから、彼女の境遇は心の暗黑の境遇と云はれる、しかし彼女の光明に隨つて、彼女は來世にはもつとよい境遇に生れ變つて來る價値のある事を充分して來た。彼女を知つて居る人々は皆さう考へる。彼女が死ぬ時には、人々は葬式をして彼女の魂のために經を讀んでくれよう。瘤寺（こぶでら）の

僧は境内のどこかに墓をつくつて、その上に「如是畜生發菩提心」と云ふ文句を書いた小さい卒塔婆をたててくれるであらう。

小さな詩

一

幾世紀のあひだ詩歌が感情的發言の一般の風習になつて居る國民のうちに在つては、その誰れもが抱いて居る人生の理想を高尚なものと、當然に我々は想像する。そんな國民の上流社會が、他の國民の上流社會と比べて、どんなに詰まらぬものであらうとも、その下流社會は、我々西洋の下流社會よりも、道德の點に於て且つ他の點に於て、進んで居ることは殆ど疑ふべくも無い。ところが日本國民は、實際にそんな社會現象を我々に見せて居るのである。

詩歌は日本に於ては空氣の如くに普遍である。誰れも彼れもそれが判かる。誰れも彼れもそれを讀む。殆ど誰れも彼れも――階級と境遇の如何に拘らず――それを作る。又それは斯く共心的大氣に遍在な計りでは無い。それは到る處に耳にきこえ、また眼に見える！

耳に聽く詩はといふと、仕事のある處には何處にも歌の聲がする。野畠の勞役や街路の勞働は、吟誦する詩句の節奏に合はせて行ふ。それて、歌が蟬の生命の表現であるといふのと殆ど同じ意味に於て、唄が此の國民の生命の表現であるやうに思へるのである。……眼に見る詩はといふと、裝飾の一形式として――支那文字か日本文字かて――書いたり彫つたりしてあるのが到る處に見られる。幾千幾萬の住宅に、部屋を分かち押入を塞いて居る横辷りの仕切(しきり)が、その表面に支那字か日本字かの裝飾的な文句を有つて居ることを觀らるゝてあらう。ところがその文句は歌なのである。上流社會の家屋には、大抵はいくつものガク、卽ち、見る爲めに吊るしてある牌(タブレツト)がある。一々みな、あらゆる意匠に、文字美しく書かれて居る詩句が載つて居るのである。が、歌は殆どどんな種類の家具にも――例を擧ぐれば、火鉢に、鐵鍋に、花瓶に、木盆に、漆器に、陶器に、上等な箸に、しかも小楊枝！にすら、――見出すことが出來る。店看板、壁板、戶襖、扇子には歌が型て出して居る。手拭、反物、帳(カアテン)、ハンケチ、絹の裏地、婦人の縮緬の下着には歌が染色されてある。狀紙、封筒、財布、鏡入れ、旅行用手提には歌が捺したり縫つたりしてある。琺瑯質の器物には歌が象眼されて居り、銅の器物には歌が刻んてあり、金屬(かね)の煙管には歌が彫つてあり、煙草入には歌が縫取にしてある。歌の文句がその裝飾になつて居る品物の十が一を數

へ上げようとするも、望んで得べからざる事であらう。多分我が讀者諸君は、歌を作つてその歌を花の咲いて居る木に吊るすのが風習の社交的會合のことを、――また、その節には色紙の細片に書いて細竹に結び附けた歌を路傍にすら――丁度それ程の小さな旗のやうに風に靡つて居るのを――見ることが出來る、或る星神の爲めのタナバタ祭のことを、知つて居られる。……恐らくは諸君は、其處に木も花も無い日本の小村へ行かれることはあらうが、其處に眼に見える詩歌が一つも無い小村へは決して行かるゝことは無からう。眞の茶は、金出しても何出しても、一パイも得ることの出來ぬ程の貧しい部落へ迷ひこまることが――自分もしたやうに――あらう。が、其處に歌を作ることの出來る者が一人も居ない部落を諸君が發見し得られようとは自分は信ぜぬ。

二

近い頃、詩句を――多くはその性質の敍情的な或は描寫的な短い歌を――寫し集めたものを見通して居るうちに、その中から選んだものが、日本人が抱いて居る、世に餘り知られて居ない、美的表現の二三の說を說明すると同時に、兼ねてまた、日本人が有つて居る、

感情の或る特性を説明する役に立ちはしまいか、といふ考が不圖自分に浮かんだので、――そこで早速この隨筆を試みることにした。自分の爲めに、時と處とを異にして、異つた人々が蒐めて呉れたその歌は、主として、特殊の場合に書かれたもので、それにまた西洋の詩形のうちのどんなものよりかも（また實際短いではあるがさうで無くとも）もつと隙間無しの形式に鑄込んだ種類のものであつた。我が讀者諸君のうちで作詩の此の様式に關して奇妙な事實が二つあることを知つて居らるゝ方は多分少からうと思ふ。その二つの事實は、自分が蒐集した歌の來歴と文句とで――自分の翻譯では、形容の或は感情の、原作の效果を再現することは望めないけれども――例證されて居るのである。

第一の奇妙な事實は、極の昔時からして、短い歌を作るといふ事は日本では唯だの文藝としてよりも、道德上の義務としての方が餘計なぐらゐに、實行され來たつて居るといふ事實である。昔時の倫理の教は幾分斯ういつたやうなものであつた。即ち、「お前は非常に腹が立つて居るのか。不親切な事は何も口に出さずに、歌を作れ。お前の最愛の人が亡くなつたのか。無益な悲歎に從はずに、歌を作つて心を和らげるやうにせよ。お前は、あんなにも多くの事を仕終へずに殘して死なうとして居るといふので心を惱ませて居るのか。心を雄々しくして、死ぬることを詠んだ歌を作れ。どんな不法やどんな不幸がお前の心を

攪き亂しても、出來るだけ早くお前の憤慨なりお前の愁傷なりを棄てて、道徳の訓練として、眞面目なそして高雅な歌をいくつか作れ」だからして、昔時は、あらゆる種類の心痛は、それぞれ歌に遭遇した。死別、別離、災難は、哀哭を喚ばずして詩歌を喚んだ。貞操を失はんよりは死をと欲した淑女は、己が喉を刺す前に歌を作つた。己が手で死ねと申し渡されたサムラヒは、ハラキリをする前に歌を書いた。この明治の浪漫的ならざる世に於てすら、自殺を決心した若人は、この世を去る前に歌を作るが習慣になつて居る。また不運な時に歌を詠むといふことは、今なほ立派に行はれて居る。自分は、困窮或は苦痛の最も堪へ難い境遇の下に在つて――否、死の床の上に在つてすら――歌が書かれたのを屢々見聞した。その歌は、假令や何等異常なる才能を示しはしなかつたにしても、少くとも苦痛の下に在つての自制の異常な實證を提供したものであつた。……確に倫理的實習として歌を作るといふこの事實は、日本の作詩作歌の法則に就いてこれまで書かれた一切の論說よりも一層大なる興味あるものである。

今一つの奇妙な事實は、ただ審美學說の一事實に過ぎぬ。今我々が考察して居るやうな種類の詩歌についての普通な藝術原理は、日本の繪畫說明の普通な原理と全然同一である。

短い詩を作る人は、選み擇んだ數語を使用して、丁度畫工が筆を三筆四筆使つて爲し遂げようとすることをしよう――或る面影を或は或る氣分を喚起しよう――或る感じを或は或る情緒を復活させようと力めるのである。ところが此目的を完成する事は――詩人にもまた畫工にも――係かつて全く暗示する力量に、しかも暗示だけする力量に在る。春の朝の蒼い霧を透して、或は秋の午後の壯んな金色の光の下に、見た或る風景の記憶を復活させる考で描いたスケッチに、部分々々の精緻な描寫を試みようとすれば、日本畫工は非難を蒙ることとであらう。其藝術の傳統に不實である許りでは無い。その爲めに必然的に自己の目的を打ち壞すことであらう。それと同じて、非常に短い詩に言辭の完備を企てたならば詩人は非難を蒙ることであらう。其目的は、想像力に滿足を與へはせずして、ただ想像力を刺激するだけでなければならぬのである。だから、詩人がその思想全部を述べて居る詩に對して――總てを述べて居るといふ意味での、『いつてしまつて居る』即ち『みな無くなつて居る』といふ積りの――『イッタキリ』といふ言葉を、輕蔑的に使用する。言はずにある或る物が與へる身をのゝきを、讀者の心に殘すやうな作品に、賞讃は取り除けて置いてあるのである。寺の鐘のただの一撞のやうに、最良の短詩は、聞く人の心へ、永く繼續する幽玄な後音を、いくつもうんうん波打たせるものでなければならぬのである。

三

が、日本の短い詩は日本の繪に似て居ると言へるといふその理由の爲めに、之を十分に理解するには、その詩が反映して居る生活を親しく知らなければならぬ。そしてそんな詩のうち情緒的な部類のものには殊に然りて、——その文字通りの飜譯は、大多數の場合、西洋人の心には殆ど何物をも意味しないことてあらう。例を擧ぐれば、日本人の理解力には頗る哀れに感ぜられる小さな詩が一つある。

テフテフニ　キヨネンシシタルツマコヒシ　（？）

飜譯すれば『蝶が二つ！去年自分のいとしの妻が死んだ』とただそれだけの意味に思へるてあらう。蝶が幸福な結婚に關して有つて居る日本の可憐な象徴を知つて居り、結婚の贈物には大きな紙の蝶を一對（ヲテフ、メテフ）附けて送る古昔の習慣を知つて居なければ、この詩は屹度平凡以下のものと思はれることてあらう。また、一大學々生の近作て、立派な判者が賞めて居る

フルサトニフボアリ　ムシノコヱゴヱ　　柴袍郎

といふを取つて見る。『自分の故郷に父母が居る――蟲の聲々」といふのである。この詩人は、この詩では田舍少年である。知らぬ野原で秋蟲の盛んな合奏を聽いて居る。その音が遠き家郷とその双親との記憶を彼に復活するのである。……が此處に一つ、――文字通りに譯しては或は前のよりも一層曖昧なものになるけれども――前の標本のどれよりかも比較にならぬ程心を動かすのがある。――

ミニシミルカゼヤ　シヤウジニユビノアト　（？）

『嗚呼、身を貫くやうな風である！障子にある小さな指が造つた、あの穴からのは！』……これは何を意味するか。死んだ子を悼んで居る母の悲みを意味して居るのである。シヤウジといふのは、日本の家では窓の用（よう）もし戸の用もし、明かりは十分に透すが、擦り硝子のやうに外から内が見えぬやうに隱し、そして風は入らさぬ、白紙貼りの輕い隔て物（スクリン）の名てある。その軟らかい紙へ指を突込んで破るのを子供は面白がる。すれば風がその穴から吹き込む。この場合、風は實に寒く――その母の心の底へ――吹き込むのである。死ん

だその子の指が造つた小さな穴から吹き込むからである。

こんな詩の含蓄の意味を文字通りの飜譯に保たせることの不可能はこれて明瞭であらう。て、この方面で自分が企てることは、總てみな必然的にイッタキリにならねばならぬ。言うて無いことを言ひ現はさなければならぬからである。そして日本詩人が十七綴音乃至二十一綴音で言ひ得ることを、英語ではその倍以上の語數を要することもあらう。が、その事實は或は次記の感情表現の小原子に一層の面白味を加へることであらう。

母の懐出

冬の夜や遠くきこゆる唧唔の聲　（？）

春の記憶

うつり香を軒端の梅にとどめ置きて
　きこえにし妹はいづちいにけん　豊川

別な信仰の空想

墓訪へば杉に鳩鳴く暮の秋　（？）

風そよと墓石へ桐の一葉かな　（？）

ぬかづけば墓から蝶の舞ひあがる　（？）

夜の墓地にて

墓にそゝぐ水やむかしの月の影　（？）

長き不在ののち

廢園に月の昔を懐ふかな　（？）

海上の月

海に入つて生れかはらばや朧月　（？）

別れて後

方角も知らぬ海なり春の月　（？）

幸福な貧乏

破れ窓もうれし梅が香風のまに　（？）

秋の思

萩枯れて松蟲何を夢むらん（？）

秋行くと告ぐるにや鐘遠くより（？）

ふるさとの木の蔭懐ふ秋の月（？）

悲みの折蟬をきいて

世の中は蟬の抜殻何を泣く（？）

蟬の抜殻に

歌に身を枯らす思ひかや蟬の殻（？）

知の力の壯大

濁れるも澄めるもともに容るゝこそ
　千尋の海の心なりけれ（？）

〔これは大學生の作。それ獨得の新しみがある〕

怒濤岩を嚙む我を神かと朧の夜　虚　子

『神か』といふのは『死んだのか自分は？自分は此荒凉たる中にただ魂として在るのか』といふのである。死んだ者はカミ卽ち神になつて、好んで幽靜な處に住むと考へられて居るのである。

四

上に飜譯したもの共は繪畫的以上てある。情緒或は感情を幾分か仄めかして居るからである。が、さうで無い、ただ繪畫的な詩は幾千となくある。その眞の目的を知らぬ讀者には、それは全くの無味なものに思はれることてあらう。金玉の妙句が、ただ『水鳥の翼に夕日麗らかに』とか『我が庭の花咲きにけり蝶の飛ぶ』とかいふ意味のものと知り給ふと、裝飾的な詩に對する諸君の最初の興味は萎んでしまふてあらう。てもこんな詩も、それ獨得の頗る眞實な價値があるのてあり、日本人の美的感情と經驗とに親密な關係があるので

ある。唐紙や扇や盃の繪のやうに、自然が與へた印象を呼び返して、旅行や巡禮の樂しかつた出來事を復活して、美しかつた日の記憶を喚起して、それ等はいづれも快感を與へるのである。それでこの平明な事實が十分に了解されると、近代の日本詩人が——大學教育を受けて居るに拘らず——古代の詩風に頑固に執着するのが頗る尤もなことと思はれることであらう。

寂寞

古寺や鐘もの言はず櫻散る　酒竹

寺に一夜を過ごしての朝

山寺の紙帳明け行く瀧の音　悠々

冬景

雪の村鷄啼いて明け白し　繞石

自分のこの詩の無駄口は、別な句集から——或る意味では同じく繪畫的であるが、主と

して巧妙といふ點で著しい——卽吟の二珍品を掲げて終はることとしよう。最初のは古い句で、有名な女詩人千代の作と稱せられて居るものである。千代は、四角と三角と圓とを讀み込んだ十七綴音の詩を作れと促されて、卽座に

蚊帳の手を一つはづして月見かな

と應じたといふことである。四隅とも紮て吊るしてある蚊帳の上部は四角である。一と隅外づせば四角が三角になる。そして月は圓てある。

今一つの珍品は、十七綴音の一句で、極端な貧窮を——恐らくはその流浪學生のすばらしい困苦を——描かうとした近い頃の卽吟である。これに修正を加へることが出來るかどうか、自分は頗る疑はしく思ふものである。

盜んだる案山子の笠に雨急なり　　虛子

佛教に緣のある日本の諺

道德的經驗の一般的特性といふものは、どんな種類の社會的變化にも殆ど影響を受けずに其儘て居るものであるが、その一般的特性を現はすものとして、或る國民の俚諺的な言葉は、思想家にはいつも一種特別な心理的興味のあるものに相違無い。此種の民間傳說には、口にまた筆に傳へられ來たつた日本文學は、例を示すのに大きな書物一冊を要する程に豐富である。ただの一隨筆の範圍內では、全體としての此問題を至當に處理することは出來ぬ。然し或る部類の俚諺及び俚諺的な言葉に對しては、幾らかの事が、三四頁內にても爲し得られる。そして、その教を暗に指して居るか、或はその教に由來して居るか、兎も角佛教に關した言葉は、自分には特に研究の價値あるが如く思はれる一部類を成して居る。だから、日本の一友の助を藉りて——選擇が可能の場合には、より普通なより一層人口に膾炙して居るものを擇んで、そして參照に便ならしめん爲め原文をアルファベット順

に置いて——次に記載する一聯の實例を選んで飜譯した。固よりの事、この選擇は十分に代表的とはいへないが、民衆の思想並びに言葉への、佛教の或る感化を説明するには足りるであらう。

一、惡事身に止まる

註　惡るい行爲或は惡るい思想は如何なるものでもその結果は——因果の續く限りは——それを犯した人の生に必らずいつまでも作用する。

二、頭剃るより心を剃れ

註　佛教の男女の僧侶は頭をすつかり剃つて居る。此の諺は宗教の人となるよりも心を正しうする方が——徒な哀惜と欲望とを制する方が——宜いといふ意味である。日常の談話では「頭を剃る」といふ句は僧になることを意味する。

三、會ふは別れのはじめ

註　哀惜と欲望とはこの無常の世界にあつては等しく徒爾である。一切の歡喜は、苦痛がそれにあるに決

つて居る一經驗の始であるからである。此諺は經語――シヤカシヤ　ヒツメツ　エシヤ　ヂヤウリ（「盛者必滅會者定離」）――に直接基づいて居る。

四、萬事は夢

註　一切は原句の文字通りでは「萬の事」

五、凡夫も悟れば佛なり

註　境涯の相違はただ全く最高なる智慧の相違である。

六、煩惱苦惱

註　あらゆる肉體的欲望は悲哀を齎す。

七、佛法と藥屋の雨出て聽け

註　これはシユツケ（僧）――文字通りでは「己が家を出た人」――の境遇を指して居る。此諺は佛敎のより高尚な眞理は、いつまでも愚痴欲望の世界に住んで居るものには、得られぬといふことを暗示して居

る。

八、佛性緣より起こる

註　因果にも惡いのもあれば善いのもある。我々が享樂するどんな幸福も、我々に來る如何なる不幸もがさうのやうに、同じく前生の行爲と思想との結果である。善い思想、善い行爲は、悉く我々の心裡の佛性を開展せしむるに貢獻する。も一つの諺（第十）――エンナキ　シュジヤウハ　ドシガタシ――はこの意味を更に進んで說いて居る。

九、猿猴（ゑんこう）が月を取らんとするが如し

註　佛陀自らが語られたといふ譬話を指して居る。幾匹かの猿が一樹の下に井戸を見出して、その水に映つて居る月影を本當の月だと思つた。その輝いて居る幻を捉へようと決心した。一匹の猿がその井戸に垂れて居る木の枝に尾で吊り下がり、今一匹が最初のにつながり、今一匹が、第二のに、今一匹が第三のへと、順次つながつて、この長い體の鎖が殆ど水面に達した。突然その枝が餘りの重さに折れて、猿は皆溺死したといふ。

一〇、縁無き衆生は度しがたし

註　縁無し卽ち因果關係無し、といふのは、功過ともに全く無いこと。

一一、不淨說法する法師は平茸（ひらたけ）に生まる

一二、餓鬼も人數（にんず）

註　文字通りでは「餓鬼でも一群集（卽ち一人口）である」この通俗な諺はいろいろに使ふ。普通には、一群を爲して居る個人個人はどんなに貧しく或は賤しくとも集つては相當の力を現はす、といふ意味に用ひる。戯談にはこの諺は時には一群の大儀さうな顏したみじめな人達に用ひ——時には示威をやらうと欲して居る弱い男兒の一と集りに用ひ——時には倒れさうな一隊の兵士に用ひる。下等階級の人達の間では不具な人間又は貪欲な人間を『ガキ』と呼ぶは珍らしからぬ。

一三、餓鬼の眼に水見えず

註　前世に犯した罪の報として殊に渇に苦しむ餓鬼は水を見ることが出來ぬと典據のある或る人々は述べて居る。此諺は愚鈍で又は性が惡るくて道德上の眞理を悟ることが出來ぬ人のことを說べるのに用ひる。

一四、後生（こしやう）は大事

註　普通の人は「ゴシヤウダイジ」といふ妙な言ひ現はしを「非常に重要な」といふのと同意義に用ひる。

一五、群盲（ぐんまう）の大象を撫（な）するが如し

註　無智無學であつて佛敎の敎理を批評する人達のことをいふ。象の軀を摸つてその大いさを判斷しようとした一群の盲人についての、「六度經」のうちにある有名な喩話に基づく。脚を摸つた者は象は木のやうだと言ひ、鼻を摸つた者は象は蛇のやうだと言ひ、腹を摸つた者は象は壁のやうだと言ひ、尾を握つた者は象は綱のやうだと言つたといふ。

一六、外面如菩薩　內心如夜叉

註　ヤシヤ（梵語「ヤクシヤ」）は人を食ふ鬼。

一七、花は根に還る

註　此諺は最も屢ゝ死に關して用ひられるが、一切の形態はそが發生した無有に歸還するといふ意。かま

た因果律に關しても用ひられる。

一八、響の聲に應ずるが如し

註　因果の教を指す。この譬喩の美は、反響の音色すら聲の音色を繰り返すことを心に思うて初めて玩味が出來よう。

一九、人を助けるが出家の役

二〇、火は消ゆれども燈心は消えず

註　情欲は一時征服することが出來てもその根源はその儘で居る。同じ意味の諺がある。即ち、ボンナウノイヌハ　オヘドモ　サラズ「煩惱の犬は逐うてもまた歸り來ずには居らぬ」

二一、佛も元は凡夫

二二、佛になるも沙彌を經る

二三、佛の顔も三度

註　これは「佛の顔も三度撫でれば腹を立つ」といふ長い諺を短くしたのである。

二四、佛たのんで地獄へ行く

註　『鬼の念佛』といふ通俗な諺も似よつた意味のもの。

二五、佛造つて魂入れず

註　言ひ換ふれば、佛像を造つてそれに精神を入れぬこと。此諺は或る事業を企ててその事業の最も本質的緊要な部分を仕終へずに殘す人の行爲に關して用ひる。これには「カイゲン」即ち「開眼」といふ妙な式への暗示も含まれて居る。このカイゲンといふは一種の聖化で、その聖化の式の爲めに新たに造つた佛像が、その佛性を眞に現はして活きて來る、と想像されて居るのである。

二六、一樹の蔭　一河の流　多少の緣

註　一樹の蔭に或る人と共に休むとか、或る人と同じ流の水を飲むとか、いふやうな些細な出來事でも、

或る前生の因果關係で起こるのである。

二七、一盲　衆盲を引く

註　「大智度論」といふ佛書からのもの、譯者はリス・デヸッドの「佛書」（東洋聖典）一七三頁にこれに似寄つた諺があり、――脚註に記載されて居て、それに或る印度の註釋者が說明を與へて居る頗る珍らしい譬語もある、ことを發見されるであらう。

二八、因果な子

註　不幸な或は不具な子に關して下等社會で用ひる普通な言葉。此の場合「イングワ」といふ語は殊に應報の意に用ひてある。通例惡るい方の因果に用ひる。善い方の因果とその結果との事を言ふ時にはクワハウといふ言葉を用ひる。不幸な子供を「因果な子」だといふ一方に、甚だ幸運な人をば「クワハウモノ」――言ひ換へれば、クワハウの一例――だと呼ぶ。

二九、因果は車の輪

註　因果を車の輪に喩へることは佛教を學ぶ人の能く知つて居ることである。此諺の意味は「法句經」の

詩句の「中心念惡、即言即行、罪苦自追、車轢于轍」と全然同じである。

三〇、因緣(いんねん)が深い

註　戀人同志の愛着、若しくは二人の間の親密な關係の不幸な結果のことを言ふ時普通用ひる言葉。

三一、生命(いのち)は風前(ふうぜん)のともしび

註　或は「風に曝(さら)されたる灯の炎の如く」佛教文學で能く用ひる言葉は「死の風」

三二、一寸(すん)の蟲にも五分の魂

註　文字通りでは「五分の魂を有つ」五分は日本の一寸の半分。佛教では殺生を禁じて居て、感覺のあるもの悉くを生命ある物（ウジヤウ）の部類に入れる。が此諺は——「魂」（タマシヒ）といふ語を用ひて居るので知れるやうに——佛教哲理よりも寧ろ民衆信仰を反映して居る。どんな生物も、小さく或は賤しくとも、慈悲を受くべきであるといふことを意味して居る。

三三、鰯の頭(あたま)も信心から

註　イワシはサアディンに餘程能く似た甚だ小さな魚。此諺は、完全な信仰と純潔な意志とを以て祈禱を爲すならば、崇拜の對象が何であらうと、その重きを爲さぬといふ意味である。

三四、自業自得（じごふじとく）

註　通俗な佛敎の文句でこれほど屢々用ひる文句は少い。「ジゴフ」は自己の行爲或は思想の意味、「ジトク」は――佛敎的にこの語を使用する時は殆ど何時も不幸の意味で――自己に齎すといふ意味。「うん、そりや自業自得だ」といふ風に、人が牢屋へ連れて行かれるのを見て世間の人は言ふ、「自己の罪の結果を刈り入れて居るのである」といふ意味で。

三五、地獄でほとけ

註　不幸の折に善い友に會ふ喜を指して。上記のは省略で、この諺の全部は「ヂゴクデホトケニアフタヤウダ」

三六、地獄極樂は心にあり

註　高等な佛敎と全く一致する諺。

三七、地獄も住家(すみか)

註　地獄に住まざるを得ぬ者共でもその境地に適應するやうになるに相違無いとの意味。人はいつもその境遇に出來るだけ善處しなければならぬ。これと似寄つた意義の諺に、「スメバミヤコ」即ち「何處であらうと自分の家のある處が即ち首府〔即ち、帝都〕である」といふのがある。

三八、地獄にも知る人

三九、影の形(かたち)に隨ふが如し

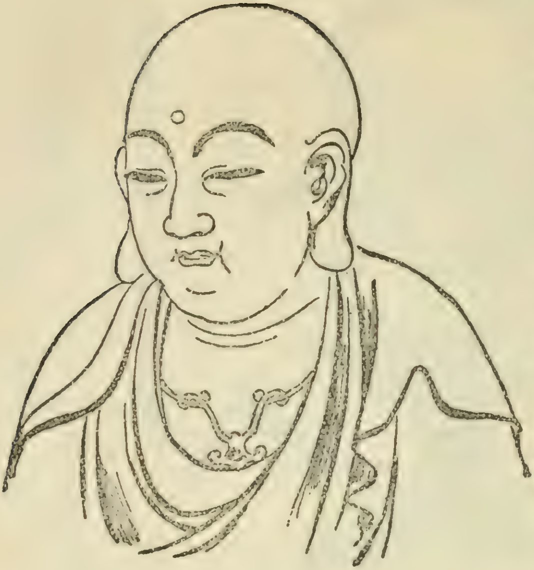
註　因果の敎を指す。『法句經』第二十有二章參照。

四〇、金(かね)は阿彌陀より光る

註　阿彌陀は梵語のアミタバ即ち無量光佛。寺院にあるその像は頭から足まで通例金で鍍金されて居る。富の力について他にも多くの皮肉な諺がある。例へば、「ヂゴクノサタモカネシダイ」即ち「地獄での審判すら金に左右せられる」といふがある。

四一、借る時の地藏顏　濟す時の閻魔顏

註　エンマはヤマ——佛教では地獄の主で死者の審判者——の支那及び日本での名。この諺は附圖を見れば一番能く判かる、この二つの神が普通にはどういふ顏に現はされて居るかが解らうから。

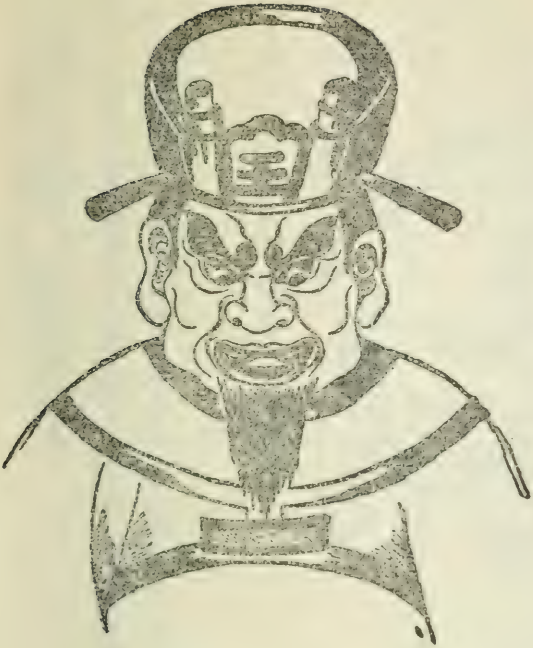


地藏

四二、聞いて極樂　見て地獄

註　噂は當てにはならぬ。

四三、好事（かうじ）門を出てず　惡事千里を走る



閻魔大王

四四、心の駒に手綱ゆるすな

四五、心の鬼が身を責める

註　情或は『心』これは我々はただ己れ自らの罪の結果に苦しむだけのことであるといふのである。佛教の地獄での人間を拷問する鬼は被拷問者に向つて言ふ、『己を責めるな！己はただお前自らの行爲と思想とが創造したものだ。お前が斯うさせる己を造つたのだ！』（三六番の諺參照）

四六、心の師とはなれ、心を師とはせざれ

四七、この世は假の宿

註　『此世界はただ旅人の宿屋である』と譯しても殆ど同様に正しい譯であらう。『ヤド』は文字通りでは宿所、隱れ場、宿屋といふ意味である。そしてその語は日本の旅人が旅行中に立ち止まる路傍の休み茶屋にも屢々適用する。『カリ』は一時の、暫時の、すぐ經つて行く、といふ意味で、あの普通な佛教的な言葉『コノヨハ　カリノヨ』即ち『此世界は直ぐに經つて行く世である』に用ひてあると同様。佛教信者には地獄極樂も亦、涅槃への旅の途中の止り場にしか思はれぬのである。

四八、氷を鏤め　水に描く

註　ただの一時の目的の爲めに利己的な努力を爲すは無駄であるといふことゝろ。

四九、ころころと啼くは山田のほとゝぎす父にてやあらん母にてやあらん

註　歌になつて居る此諺は『往生要集』に記載されて居るもので、次記の註解が添へてある。『野なる獸、山林なる鳥、前生に於て己が父もしくは母たりしものなるやも圖られず』と。ホトトギスは一種のククツ。

五〇、子は三界の首枷

註　いふこゝろは、兩親のその子に對する愛は——啻に此世に於てのみで無く、そのあらゆる來世を通じて——恰もクビカセ即ち日本の首枷がそを置かれて居る人の擧動を妨げるが如くに、その靈の發達を妨げるかも知れぬ。親の愛情は、この世の愛着のうち最も强烈なものであるから、之に捉へられる人をして子孫に利益を與へんとの希望によつて殊に惡事を犯さしめがちである。サンガイといふ言葉は此處では——涅槃の下に位する生の境涯たる——欲界色界無色界を意味して居る。然し此の語は時に過去現在未來を意味するに用ひられる。

五一、口は禍の門(かど)

註　これは、禍の主因は不謹愼な言葉であるとの意味。カドといふ語はいつも住宅への主な入口を意味する。

五二、果報は寢て待て

註　クワハウといふ語は、全くの佛語で、前生に於ける善行の結果としての幸運を意味するのであるが、日常の會話にあつては、如何なる種類でもの幸運を意味するやうになつて來て居る。此諺は『待つて居る茶釜は煮たたぬ』といふ英國の諺の意味に似た意味に屢〻用ひられて居る。嚴密な佛教的な意味では『善行の報を餘りに渇望するな』であらう。

五三、蒔かぬ種は生えぬ

註　種を蒔くに非らずば收穫を期待するな。熱心な努力が無くては如何なる報酬も得られぬ。

五四、待てば甘露の日和

註　カンロとは天界の甘き露。一切の善事は待つて居る人に來る。

五五、冥土の道に王は無し

註　文字通りでは「メイドへの道には」メイドとは地獄を意味する日本語で、一切の死者が旅して行かねばならぬ冥い下界である。

五六、盲蛇に怖ぢず

註　無智なる者及び不德なる者は、因果の法を悟らぬことだから、其惡行が必らず招來する結果を恐れぬ。

五七、盈つれば缺ける

註　月が大きくなつて滿月となるや否や缺け始める。丁度そのやうに繁榮の絶頂は運の衰微の始めである。

五八、門前の小僧習はぬ經を讀む

註　コゾウは「店の小僧」「使ひ小僧」「年季奉公人」を意味するやうに、また「寺の小僧」を意味する。然し此處では寺の門の近くか前かに在る商店に使はれて居る子供を指して居る。寺で讀む經を絶えず耳に

するので、その小僧がその經語を自づと諳んずる。これと似寄つた諺に、「クワンガクイン　ノ　スズメ　ハ　モウギウ　チ　サヘヅル」即ち「勸學院（昔の學問所）の雀は蒙求を囀る」といふがある。「蒙求」といふは古昔若い學生が敎はつた支那の書物である。此どちらもの諺の敎は、今一つの諺で立派に言ひ表はされて居る。それは「ナラフ　ヨリ　ハ　ナレロ」即ち「（或る技を）習ふよりか寧ろそれに慣れよ」言ひ換へれば「絶えずそれに接觸して居れよ」である。觀察と實習は研究よりも好いぐらゐである。

五九、無常の風は時を擇ばず

註　死と變化とは人の期待にその道を一致させはせぬ。

六〇、猫も佛性あり

註　猫とマムシ（毒蛇）だけが佛が死んだのに泣かなかつたといふ傳說あるに拘らず。

六一、寢た間が極樂

註　ただ睡眠の間だけ時に我々は此世の悲苦を知らずに居ることが出來る。

六二、二十五菩薩もそれぞれの役

六三、人見て法說け

註　佛教の教理を教へるには教はる人の智慧にいつも適合せしめてでなくてはならぬ。これと同種類の今一つの諺がある。『キニヨリテホフヲトケ』即ち『(教はる人の)機根に應じて法を說け』である。

六四、人身受け難し　佛法遇ひ難し

註　通俗の佛教では、人界に生まれること、殊に佛教を信奉する國人のうちに生まれるといふことは、非常に大いなる特典であると教へる。人間の生涯はどんなに慘めでも、少くとも尊い眞理を少しく知ることが出來る境涯である。然るに生の他の低い狀態にある者は、比較的に靈の進步は出來得ないのである。

六五、鬼も十八

註　オニ即ち佛教の鬼については幾多の妙な言葉や諺がある。例へば、『オニノメニモナミダ』即ち『鬼の眼にすら淚』とか、『オニノクソクラン』即ち『鬼の霍亂(非常に強壯な人の意外の病氣の事をいふ)』とかいふやうな。オニといふ惡鬼の一類は閻と佛教の地獄のもので、拷問者や獄吏の役を勤めて居るもの

である。これは魔、夜叉、鬼神併びに他の部類の悪靈と混同してはならぬ。佛教藝術では牛や馬の頭をした、異常な力を具へて居るものと現はしてある。牛頭の鬼を「ゴヅ」と呼び、馬頭の鬼を「メヅ」と呼んで居る。

六六、鬼も見慣れたるがよし

六七、鬼に金棒

註 大いなる力は強きもののみに與ふべしとの意。

六八、鬼の女房に鬼神（きじん）

註 邪慳な男は邪慳な女を妻にするといふ意。

六九、女の毛には大象も繋がる

七〇、女は三界に家無し

七一、親の因果が子に報ふ

註　跛や不具な子供を有つた親に云ふ。然しこの諺に現はされて居る通俗の觀念は、全然高等な佛敎の敎に一致して居るものでは無い。

七二、落花枝に還らず

註　してしまつたことはしかへすことが出來ぬ。過去を立ち還らせることは出來ぬ。この諺はもつと長い經語「ラックソ　エダニカヘラズ、ハキヤウ　フタタビテラサズ」即ち「落花枝に還らず、破鏡再び照らさず」の省略である。

七三、樂は苦の種苦は樂の種

七四、六道は眼の前

註　言ふこゝろは、來世は此世での行爲如何に因つて定まる。だから此次に生まれ出る場處を自分で勝手に選ぶことが出來るのである。

一七五、三界無安

七六、三界に垣無し　六道にほとり無し

註　三界即ち欲界、色界、無色界と、六道即ち地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天上道とのうちに一切の生が包含せられて居る。このさきにはただ涅槃あるのみである。「垣無し」「隣無し」とは、その界を越えて逃れ行くべき界は無い、或る二つの境涯の間の中道は無いといふこと。我々は因果次第でこのどれかのうちへ再生するのである。（七四參照）

七七、懺悔には三年の罪も滅ぶ

七八、三人寄れば苦界（くがい）

註　クガイ（文字通りでは「苦（にが）い世界」）は屢々醜業婦の生涯に對して用ふる語。

七九、三人寄れば文殊の智慧

註　文殊菩薩（梵語ではマンジュスリ、ボディサットヷ）は日本佛教では特に智慧の神になつて居る。この諺は三人の頭は一人の頭より善いといふことを意味して居る。同じ意味の諺に「ヒザトモダンガフ」即ち「自分の膝とでも談合せよ」言ひ換ふれば「如何なる忠言も、その原（もと）はどんなに賤しくとも、輕んずるな」といふがある。

八〇、釋迦に說法

八一、沙彌から長老

八二　死んだればこそ生きたれ

註　自分は此の珍らしい諺を聞く每にハクスリの有名な論文「生の物質的根柢に就いて」のうちの一文を想ひ出す。かう言つて居る、「生きて居る原形質は終には死んでその鑛物質の無生の成分に還元せられるばかりでは無く、いつも死につゝあるので、この逆說は奇妙に聞こえるかも知れぬが、死ななければ生きられなかつたのである」

八三、知らぬが佛　見ぬが極樂

八四、正法(しやうぼふ)に奇特無し

註　何物も永久な取り返しのつかぬ大法の結果としてのほか生じ得ぬものである。

八五、小智慧は菩提のさまたげ

註　ボダイといふは梵語のボディと同語で、無上の開悟――佛の身になれる知識――を意味するが、日本の佛教では無上の祝福卽ち佛の境涯そのものの意味に屢ゝ用ひる。

八六、生死(しやうじ)の苦界ほとり無し

八七、袖の振り合はせも他生の緣

八八、寸善尺魔

註　マ（梵語ではマアラカアヰカス）は人間を誘うて惡事を行はしめる一種特別な一類の靈に與へて居る

名である。然し日本の民間傳說では、その演ずる役は西洋の民衆迷信で、ゴブリンやフエアリが占めて居る役に能く似て居る。

八九、樂みは悲みのもと

九〇、飛んで火に入る夏の蟲

註　殊に肉慾的放逸の結果について云ふ。

九一、土佛（つちぼとけ）の水あそび

註　すなはち、『土でつくつた佛が水あそびをするやうに危險な』子供は土で佛像をつくつて遊ぶことが能くあるが、固よりのこと水に入れゝば形なしに崩れる。

九二、月に叢雲　花に風

註　月の美は叢雲の爲め暗くされ、木は花を咲かすと、その花は直ぐ風に散らされる。美はしきものは總て果敢ない。

九三、露のいのち

九四、憂き(う)は心にあり

九五、瓜の蔓に茄子は生(な)らぬ

九六、嘘も方便

註　方便といふのは改信せしめる上の殊勝な方便である。『法華經』第三卷にあるあの有名な譬言を見ればかゝる方便は殊に是認せられる。

九七、我が家(や)の佛尊し

註　人に誰れしも自分の家の佛壇にあるホトケを――佛として祀られて居る死者の靈を――一番崇め尊む、といふ意味。ホトケといふ語に皮肉な戯れがあるので、この語は單に死んだ人といふ意味にもなり、一箇の佛といふ意味にもなるのである。恐らく此諺の精神は今一つの諺を添へるともつと能く説明が出來よう。

「ニゲタサカナニ　チイサイハナイ、シンダコニ　ワルイコハナイ」即ち『逃げた魚に小さいのは無く、死んだ子に惡るい子は無い』を合はせ考へるがよい。

九八、雪の果は涅槃

註　この珍らしい諺は自分の蒐集中ネハン（涅槃）といふ語を含んで居る唯一のもので、主としてその爲めこゝへ挿入したのである。普通の人は涅槃といふ言葉は滅多用ひず、この言葉が關係して居る甚深な教理については殆ど少しも知つて居ないのである。上記の諺は、推察され得る如くに、通俗な言葉では無い。地平線までずつと雪が覆うて居て、その雪圏の向うは唯々空漠たる天空あるのみの風景を藝術的に詩的に述べたものである。

九九、善には善の報い　惡には惡の報い

註　一寸見には平凡な諺のやうに見えるがそれほどでも無い。此世に於て我々が受ける親切は悉く前生に於て他人に與へた親切の報であり、我々が蒙る禍は悉く前生に於て我々が犯した不正事の反映であるといふ、佛教の信仰を特に指して居るからである。

一〇〇、前世(ぜんせ)の約束ごと

註　これは頗る普通な諺で、別離の不幸に對し、突然の不運に對し、突然の死去に對したりして、能く述べるものである。殊にシンヂユウ即ち戀人同志の自殺に關して用ひる。そんな自殺は或る前生に於て殘忍であつた結果か、或はまた前生に於て夫婦にならうとの相互の約束を破つた結果か、だと普通考へられて居る。

暗示

印度へ行く途中、彼が東京に暫時滯在して居る間に、私は幸にも會ふ事ができた、——そして私共は一緒に長い散歩をして、東洋の宗教の話をしたが、その方の知識を彼は私よりも遙かに多くもつてゐた。私は地方的信仰に關して彼に云ふ事を何でも、彼は——印度、ビルマ、セイロンの現在の或祭祀法に不思議に一致した點をあげて、——最も驚くべき風に批評を下す。それから彼は會話を全然思ひがけない方向に向けた。

『私は男女の相對的割合が一定して居る事を考へて、佛說ではどんな說明を下すのだらうと訝かつて居る』彼は云つた。『私には、因果の普通の狀態では、人間の再生は必ず規則正しい交替で進むやうに思はれるから』

『男は女に生れ、女は男に生れかはると云ふわけてすね』私は尋ねた。

『さうです』彼は答へた、『欲望は創造的であるから、そして男女の欲望はそれぞれ相手の方へ向いて居るから』

『しかし男で女に再生したいと思ふ者が幾人あるだらう』私は云つた。

『多分殆んどないだらう』彼は答へた。『しかし欲望は創造的であると云ふ說は、個人の渴望がそれ自身を滿足させるやうな物を創造すると云ふ事を意味しない、――全く反對である。本當の敎は、凡ての利己的な願の結果は、罰の性質を有する事、それから願が創造する物は――少くとも高い知識の人に取つては――願ふ事が愚であるにきまつて居る事を敎える』

『それは君の云はれる事は正しい』私は云つた、『しかし私は未だ君の說が分らない』

『ところで』彼は續けた、『もし人間の再生の肉體的條件が、肉體的條件に關する意志の因果によつて全く決定されるとすれば、それなら性は、性に關する意志によつて決定されよう。ところでどちらの性の意志もその相手に向いて居る。生命を除けば、何よりも男は女を望み、女は男を望んで居る。その上、銘々の個人は何等の個人關係とも離れて、たえず所謂或生れながらの女性或は男性の理想の力を感じて居る、それを君は「數へきれぬ過去の生涯に於ける數へきれぬ愛着の靈的反射」と呼んで居る　それでこの理想によつて

表はされた飽く事を知らない慾望は、それ自身で來世の男性の或は女性の身體を創造するに充分であらう』

『しかし大概の女は』私は云つた、『男に生れ變る事を好むだらう、それてその願の成就は少しも罰の性質にはならない』

『ならない事はなからう』彼は答へた。『新しい生涯の幸と不幸は、ただ性だけては定まらない、それは當然多くの條件が結合してきまるわけである』

『君の說は面白い』私は云つた、――『しかしどれ程承認された說と一致するやうになるか、私には分らない。……それから高い法則を知つて行つて、あらゆる性の弱點に超越して居られる人はどうなるだらう』

『そんな人は』彼は答へた、『男にも女にも生れ變らない、――もしその自己征服の結果を妨げたり弱めたりする程に強い先在の因果がなかつたら』

『天體のどこかの一つに生れ變るのですか』私は尋ねた、――『靈的誕生によつて？』

『それは必要ではない』彼は答へた。『そんな人は、やはり――この世界のやうな――慾望の世界に生れ變つてもよい、――しかしただ男としててはなく、又ただ女としててはなく』

『それでは、どんな形にてですか』私は尋ねた。

『完全なる人間の形にてです』彼は答へた。『男も女も半分の人間に過ぎない、——何故なれば、私共の現在の不完全なる狀態では、どちらの性も一方を苦しめてのみ進化する事ができるのである。どの男の精神肉體の組織のうちにも、發達しない女の分子があり、どの女の組織にも發達しない男の分子がある。しかし完全な人間は完全な男子でもあり又完全な女子でもある人で、兩方の最高の能力をもつてゐて、どちらの弱點もない人であらう。私共自身の人類よりも、高い或人類は、——外の世界で、——こんな風に進化して居るだらう』

『しかし、御存じの通り』私は云つた、『佛教の經文、たとへば法華經、それから毘奈耶（律藏）に於て、——禁じて居るのは……』

『その文句は』彼は遮ぎつた、『あれは不完全な者——男子以下女子以下の者——の事を云つて居るのです、あれは私が想像してゐた狀態の事を云つて居るわけはない。……しかし私は說教をして居るのではない、——ただ敢て說を立てて見て居るのです』

『君の說をいつか書いて見てもいゝですか』私は尋ねた。

『いゝとも』彼は答へた、——『もし考へて見る價値があると君が信じたら』

それからずつと後になつて、記憶から、できるだけ明瞭に、この通り書きつけた。

因果話

大名の奥方の病が重くなつて危篤にせまつてゐた、そして奥方は自分でも危篤にせまつて居る事を承知してゐた。文政十年の秋の始めから床を離れる事はできなかつた。今は文政十二年——西洋の數へ方では一八二九年——の四月であつた、櫻の花が開いてゐた 彼女は庭の櫻の花と陽氣な春の事を考へた。彼女は子供の事を考へた。彼女は夫の色々の側室の事——殊に十九歳の雪子の事を考へた。

大名は云つた、「わが妻、この三年の長い間の御身の病氣、さぞ苦しかつたであらう。御身を直すために、——夜晝御身の側で看護をなし、御身のために祈り、又御身のために斷食までもして——あらん限りをつくして居る。しかしその心づくしのかひもなく、最も良い醫師達の配劑のかひもなく、御身の命脈も今甚だ心細くなつて居る。御身が佛の云はれたこの三界の火宅を去つて行かれる事は御身よりも自分等の方がどれ程悲しいか分らな

い。自分は御身の後生の冥福を祈るために、どんな佛事をも——費用を惜まず——行ひます、又自分等は御身の魂の中有に迷はず、直ちに極樂淨土に赴いて佛果を得るやうにたえず祈ります」

彼はその間彼女を撫でさすりながら、この上もなくやさしく云つた。その時、眼を閉ぢたまゝで、彼女は蟲のやうな細い聲で、彼に答へた、——

「御親切なお言葉——有難うございます——本當に有難うございます。……はい、全く仰せの通り、私三年の長い間病氣でした、そしてこの上もない御世話と御親切に預かりました……この最期に臨んで何の迷をいたしませう。……今となつて浮世の事に心を殘すのもまちがひかも分りませんが、——私一つ、たつた一つ、御願がございます。……ここへあの雪子を呼んで下さい、——御承知の通り私雪子を妹のやうに可愛がつて居ります。私あとあとの事色々話して置きたうございます」

雪子は大名の命によつてそこへ現れた、それから彼からの合圖に從つて、床の側に跪いた。奥方は眼を開いて、雪子を見て、云つた、——

「あゝ雪子か。……よく來てくれたね。……私は大きな聲が出ないから、よく聞えるや

うに——もう少し近くへ進んでおくれ。……雪子、私もう死にます。そなたはこれから、あの殿様を萬事につけて御大切に御世話を申上げて、——私の亡きあとには私の代りになつて貰ひたい。……そしていつまでも御寵愛を受けて、——さうです、私の百倍も御寵愛を受けて、——やがて昇進して奥方におなりなさいよ。……そしていつでも殿様を大事にして他人に寵を奪はれないやうになさいよ。……雪子さん、これが御身に云ひたかつた事です。……分りましたか』

『あゝこれは又物體ない御言葉。御存じのやうな私風情の貧しい賤しい生れの者が、——奥方にならうなどとはとんでもない事でございます』雪子は抗言した。

『いや、いや、今遠慮や他人行儀を云つて居る時ではない、お互に本當の事だけを云ひませう』奥方はかすれた聲で答へた。『私が死んだら、そなたは必ずよい地位に昇進するであらう、そして今又たしかに云うて置くが、私はそなたが奥方になるやうにと願つて居ります、——さうです私が成佛する事よりもこの事をもつと願つて居ります。……あゝ、忘れようとしてゐた、——雪子、私の願を一つ聞入れておくれ。そなたの知つての通り、庭に一昨年、大和の吉野山から取寄せた八重櫻があります。それが今滿開であると聞いて居る、——それで私その花を見たい。もうぢきに私は死ぬが、——死ぬ前にその花を見た

い。私を庭へ、――雪子、すぐに、――その花の見えるやうに連れて行つて貰ひたい。……さあ、背中に、雪子、――おぶつておくれ。……』

かう云つて居るうちに、彼女の聲は段々はつきり強くなつて來た、――丁度その願の强さのために新しい力が出て來たやうであつた、それから不意に彼女は泣き出した。雪子はどうしてよいか分らないから、動かないで跪いてゐた、しかし大名は承諾の意味の合圖をした。

彼は云つた、『これはこの世の最後の願だ。彼女はいつでも櫻の花が好きであつた、それでその吉野の花をさぞ見たいだらうと察する。さあ雪子、望みの通りに致してやれよ』

子供にとりつかせるために、乳母が背中を向けるやうに、雪子は奥方に彼女の肩を向けて云つた、――

『用意を致して居りますから、どう致してよいか御指圖を遊ばして下さい』

『あゝ、こちらへ』――瀕死の女は答へて、殆ど超人間的努力で立上つて雪子の肩にしがみついた。しかし雪子が立つた時、彼女は頸筋から、着物の下へ、彼の細い手をすばやく差し込んで、この少女の乳房をつかんで、物すごい笑を高く上げた。

『思ひが叶つた』彼女が叫んだ――『私は櫻の花に心が殘つた、――庭の櫻の花ではない。……私の願の叶ふまでは死にきれなかつた。今それが叶つた、――あゝ嬉しい』

それからさう云つたまゝ、蹲つて居る少女に倒れかかつて、息は絶えた。

侍者達は直ちに雪子の肩から、その死體を取つて床の上に置かうとした。ところが――不思議にも――この見たところ何でもない事ができなかつた。その冷い手が少女の乳房に何か說明のできないやうな風に固着してゐた、――その生きた肉となつてしまつたやうに見えた。雪子は恐怖と苦痛のために知覺を失つた。

醫者は呼ばれた。彼等にはどうなつたのか合點が行かなかつた。普通の手段では、死んだ人の手は彼女の犧牲の肉體から離す事ができなかつた、――離さうとすると血が出る程に固着してゐた。これは指がつかんで居るからではなかつた、それは掌の肉が乳房の肉と說明のできないやうに結合してゐたからであつた。

その當時、江戶の最も熟練なる醫者は外國人――オランダの外科醫――であつた。その人を呼ぶ事にきまつた。丁寧に調べたあとで、彼はこんな患者の例は知らないと云つた、

それから雪子を直ちに救ふためには、死體から兩手を切斷するより外に方法はないと云つた。乳房から手を離さうとする事は危險であると斷言した。その忠告は用ひられて、兩手は手首から切斷された。しかし手は乳房に固着したまゝになつた、やがてそこで黑くなつてしなびた、――長く死んだ人の手のやうに。

しかしこれは恐ろしさのただ始まりであつた。

しなびて血のないやうに見えてゐながら、その手は死んでゐなかつた。時々――そつと、大きな灰色の蜘蛛のやうに――動き出す。そしてそれから毎晩――いつでも丑の刻から――つかんで、締めて、責め始める。寅の刻になつてやうやくその苦痛が止む。

雪子は剃髮して巡禮の尼になつて、脫雪と名を改めた。彼女は彼の亡くなつた奧方の戒名、――妙香院殿知山凉風大姉、――のある位牌を造らせて、毎日その前に赦しを願つて、その嫉妬の心の止むやうに回向した。しかしこんな苦痛の源となつて居る因果は中々に消滅はしなかつた。每晩丑の刻になると、その手はきまつて彼女に責苦を與へた、――彼女が下野の國河內郡田中村の野口傳五左衞門と云ふ人の家に泊つた時、最後にこの話を聞いた人達の證言によれば、――それがもう十七年以上にもなる。それが弘化三年（一八四六

年）であった。この尼のその後の話は分らない。

天狗の話

後冷泉天皇の時、京都に近い比叡山の西塔寺に善い僧がゐた。或夏の日にこの善い僧が都を訪れて歸る途中、北の大路で幾人かのこどもが鳶を虐めて居るのを見た。そのこども等は羂（わな）で捕へたその鳥を棒で打つてゐた。僧は同情して叫んだ、――「可愛さうに、――どうしてそんなに虐めるのだ」――一人のこどもは答へた、――「殺して羽を取るのです」僧は慈悲心を起して、携へてゐた扇と交換に、その鳶を自分に渡す事を說いた、それからその鳥を放つてやつた。鳥はひどく怪我もしてゐなかつたので、飛び去る事ができた。

この功德を行うた事を嬉しく思うて、僧はその途を續けた。餘り遠く行かないうちに、彼は路傍の竹藪から異樣の法師が歩み出て、自分の方へ急いで來るのを見た。法師は恭しく、彼に挨拶して云つた、――『御憐憫によつて命を助かりました、それで今相當に感謝

の意を表はしたうございます」から云はれて驚いた僧は答へた、――『實は前に、御見受け申した覺えはない、どなたでせうか聞かせて下さい』『こんな姿ではお分りにならないのも道理』法師は答へた、『私は北の大路で、あの惡童等に虐められてゐた鳶でございます。おかげて命は助かりました、この世で命より貴い物はございません。それでどうかして御親切を今返したうございます。もし何かあなたが、見たい、知りたい、得たいと御望みになる物がございましたら、――つまり私にできる事なら何なりとも、――どうか云つて下さい、實は私は小さい程度で、六つの神通力をもつて居りますから、御望みの願は大概かなへられます』この言葉を聞いて、僧は天狗と話して居る事を知つた、それで明らさまに答へた、――『私はもう長い間この世の事には頓着しなくなつて居る、もう七十だから、――名聞も娯樂も私には用はない。ただ後生の事だけが氣にかかるが、それも誰にも助けて貰へない事柄だから、かれこれ考へても無駄であらう。實は、願つて居る事をただ一つしか考へられない。私は釋迦如來の時分に印度にゐて、聖い耆闍崛山の大集會に列しなかつた事を一生の恨みと思つて居る。朝晩の勤行の時に、この恨みを思ひ出さない日は一日もない。あゝ、もし菩薩のやうに、時間空間を超越して、その不可思議な會合を見る事ができたら、どんなに嬉しからう』――『さあ』天狗は叫んだ、『その信心深いあなた

の顔を滿足させる事はたやすくできませう。私は靈鷲山の會合をよく記憶してゐます、それであのままに、そこにあつた事を何でも、あなたの前に現れるやうにする事ができます。こんな嬉しい事を表はすのはこの上もない喜ばしい事です。……さあ一緒にこちらへ來て下さい』

それから僧は坂の上の松林の間へ導かれた、――『さあ』天狗は云つた、『暫らく眼を閉ぢて待つてゐて下さい。佛が法の道をお説きになる聲が聞えるまで眼を開かないで下さい。それから御覽になれます。しかしあなたが佛の樣子が見えても、決して有難さに心を動かされてはなりません、――お辭儀をしたり、祈つたり、或は「如何にも」とか、或は「有難うございます」と云ふやうなそんな歎聲を發してはなりません。決して聲を出してはなりません。何か有難いやうな少しのしるしでも表はしたら、何か餘程不幸な事が私に起りさうですから』僧は喜んでこの求めに從ふ事を約束した。そして天狗はその催ものを用意するかのやうに急ぎ去つた。

日は傾いて消えた、そして暗黒が來た、老僧は眼を閉ぢて樹の下に忍耐して待つてゐた。たうとう、不意に聲が上の方から、――大きな鈴の鳴るやうな深い澄んだ不思議な聲、――

―法の道を說き給ふ釋迦牟尼佛の聲が響いた。それから皆は眼を開けると非常に輝いて、一切の物が變つて居る事に氣がついた、場所は聖い印度の靈鷲山てあつた、そして時は妙法蓮華經を說き給ふ時てあつた。今は廻りに松の樹はなかつた、ただ七重寶珠の果實と葉をもつた不思議な輝いた樹があつた、――そして大地は天から降る曼陀羅華、曼珠沙華の花て蔽はれてゐた、――そして夜は香ばしい、花やかな、美しい大音聲て滿たされた。そして世界の上に輝く月のやうに、中空に輝ける世尊が、獅子の座に坐してゐ給ふのを僧は見た、右には普賢、左には文珠、――それからその前には、――星の洪水のやうに、數へられぬ程一面に、菩薩摩訶薩の群衆が、雲霞のやうな『諸天、夜叉、龍、阿修羅、人、非人』の大衆を率ゐて集まつた。舍利弗も見えた、迦葉、阿難陀、その外如來の弟子達も悉く見えた、――諸天の王達も、――火の柱のやうな四方の王達も、――大龍王達も、――乾達婆も迦樓羅も、――日と月と風の神達も、――それから梵天の空に輝ける無數の光も見えた。それからこれ等の數へきれない榮光の集團よりも遙か向うに、――時のはてまでも貫くやうに大聖釋迦牟尼佛の額から出て居る一條の光明によつて照されて、百八十萬の東の方の佛の國とそこに住んで居る物、――それから六道の生存狀態の一々にある物、――――それから涅槃に入つて、寂滅した諸佛の姿までも見えた。これ等、及び諸神、及び夜叉

悉く、獅子の座の前に低頭して居るのを彼は見た、それから無數の群集が、――世尊の前に、海のうなりのやうに、――法華經を唱へて居るのを聞いた。その時彼は約束を忘れて、――愚かにも、自分は正しく佛の前に居ると想像して、――感謝隨喜の涙を流して禮拜のためにうつ伏して、大きな聲で「有難い佛樣……」と叫び出した。……

直ちに地震のやうな打撃と共にこの洪大な觀ものは消えた、そして僧は山腹の草の上に跪いて暗黑のうちにただ一人ゐた。それから僧は、このまぼろしの消えた事と、思慮が足りないで約束を破つた事とのために、名狀のできない悲しさに襲はれた。悲しさうに足を歸り路に向けると、再び不思議な山法師が現れて、彼に苦痛と非難の調子で云つた、――「あなたが私に約束なさつた事をお守りにならないで、無分別にもあなたの感情を洩らされたので、敎法の守護役である護法天童が突然天から私共のところへ舞ひ下つて、非常に怒りを發して、「どうして汝等はこんなに信心深い人を欺かうとするのか」と云つて、私共を打ちさいなみました。それて、私が雇ひ集めた法師等も恐れて逃げました。私も、翼が一つ折れたので、――今飛ぶ事ができなくなりました」かう云つて天狗は永久に消え失せた。

燒津にて

一

燒津といふこの古い漁師町は、輝かしい日の光を受けると、或る特殊な妙味を有つた間（かん）色（しよく）になる。その——小さな入江に沿うて彎曲して——占めて居る荒れた灰色の海岸のその灰色を、丁度蜥蜴のやうに、この町は帶びるのである。この町は、大きな丸石で堅めた異常な壘壁によつて荒海に傷められぬやうに庇はれて居る。この壘壁は、海に面した方は、臺地（テレス）の段々の恰好に造られてゐて、それを構成して居る丸石は、深く地中に突き立ててある幾列もの棒杙の間に、編んだ竹籠細工のやうなもので、崩れ落ちぬやうされて居て、その棒杙がその段々を別々に支へて居るのである。この築造物の巓から陸の方を眺めると、——寺の庭の在り場を示す松の木立が此處其處にある、灰色瓦の屋根と雨風に曝されて灰

色になつた家々の木村とが、一面に細長く延びて居る——燒津町全體がずらりと眸裏に收まる。海の方は、數浬の水面を越えて、巨大な紫水晶の塊のやう、地平線へくつきりと群れ集うて居る鋸の齒なす紺青の連峰が見え——其先きに、左手に、あらゆるものの上に巍然として屹立して居る壯麗な富士の靈峰が見えて——實に壯大な眺望である。防波壁と海との間には砂は少しも無い、——石の、主として圓い漂石の、灰色な傾斜面があるだけである。それが大波と一緒に轉がるのであるから、風の強い日に岸打つ浪の横を通らうとするのは、厭(いや)な仕事である。一度石の浪に打たれると——自分は幾度もやられたが——其の經驗は直ぐには忘れられぬ。

或る時刻に、幾列もの妙な恰好の船が——此地方に特有な形の漁船が——ごつごつな此の傾斜面の大部分を占める。それは——一艘四五十人は乘ることの出來る——非常に大きな船である。それは變な高い船首(みよし)を有つてゐて、それへ佛教或は神道の護符(マモリ或はシュゴ)が普通貼り附けてある。神道の護符(シュゴ)の普通の形式のは、この目的の爲め、富士の女神の神社から供給されるものである。其の文句は斯うなつて居る。——フジサン、チヤウジヤウ、センゲングウ、ダイギヨ、マンゾク。——それは、漁業好運の場合には、富士の頂上にその神社のある神樣の爲めに非常な苦行をなすことを此船の持主は誓

ふ、といふ意味てある。

日本のうちて海岸のある國にはどの國にも――同じ國の漁村ても村が異ればその村々にすらも――その國或は村に特有な船と漁具との形式がある。實際、互に五六哩しか離れて居ない村て、數千哩距つて住まつて居る人種の發明かと思へる程に、型の異つた網や船を各々製造して居ることを時々認める。この驚くべき多種多樣は、或る度までは、地方的傳統を重んずる念に――數百年の久しきが間祖先の教示と慣習とを改めずに保存する殊勝な保守主義に――基づいて居るのかも知れぬ。が然し、處を異にして住んで居る仲間のものが、種類の異つた漁獲を營んて居るといふ事實に依つて、一層能く說明されるのてある。だから何處ても或る一箇處て造る網なり船なりの形は、能く檢べて見ると、大抵は或る特殊の經驗によつての發明だといふ事が判かる。燒津の此の大きな船は此の事實の例證てある。燒津の漁業は、日本帝國のあらゆる部分へ乾したカツヲ（英語のボニト）を供給するのてあるが、その漁業の特殊の要求に應ずるやうにその船は工夫したもので、非常な荒海を乘り切ることの出來るやゝ造らなければならなかつたのてある。それを海へ出したり海から引き上げたりするのは骨の折れる仕事てある。が、村中が手傳ふ。傾斜地へ平たい木

の枠を一線に置いて、瞬く間に、一種の斜路の即席製造をする。そしてその枠の上へ、底の扁平なその船を、長い綱で曳きずり上げたり下ろしたりする。ただの一艘をさういふ風に動かすのに、百人或は百人以上のものが――男、女、子供が、陰氣な妙な歌に合はせて、一緒に曳つぱつて――働いて居るのが見られる。颱風がやつて來る時は、その船をずつと後ろへ、街路の處まで、上げる。そんな仕事を手傳ふのは中々面白い。手傳ふ者が他國ものであれば、漁師はその勞に酬ゆるにその海の不思議な產物を以てするであらう。驚く許りに長い足をした蟹だとか、途方も無く大きく腹を膨らます風船魚だとか、手に觸はつて見なければ自然の物とは殆ど信じられぬやうな異常な恰好をした色んな他の動物だとか。

船首に神聖な文句を貼り附けて居るこの大きな船が、此濱での一番奇異な物といふのでは無い。竹を裂いて造つた餌籠がもつと異常なぐらゐである。高さ六呎、まはり十八呎、その圓頂閣の恰好した頂に小さな穴が一つある籠である。乾かす爲めに防波壁に沿うて列べてあると、少し遠くから見ると、何かの住み家か小家かと間違へられさうである。それから、鋤のやうな恰好をして、金屬が打ち附けてある木製の大きな錨がある。爪の四つある鐵の錨がある。杭を打ち込むのに使ふ素敵に大きな槌がある。何の爲めに使ふのか想像

も出來ない、まだまだ珍らしい、他の色んな道具がある。見るもの悉くが何とも言へず古めかしく奇妙であるといふ事が、眼に見えて居る物が現實かどうかを疑はせる、彼の無氣味な遠隔といふ感じを——時間に於ても空間に於ても己は遙か遠く離れて居るといふ無氣味な感じを——起こす。それに燒津の生活がまた確に數世紀前の生活である。そこの人達がまた舊日本の人達で、子供のやうに——善良な子供のやうに——淡白で親切で、過ぎると思ふ程正直で、後の世のことは思ひもせず、古昔からの因襲と古昔からの神々とに忠實てある。

二

自分は偶〻盆の卽ち死者の祭日の三日間燒津に居た。だから三日目の最後の日の、美しいお訣れの儀式を見たいものと思つた。日本の多くの地方では、精靈にその航海用の極めて小さな舟を——帆船や漁船の小さな模型のもの、その一艘一艘に食物と水と焚いた香との御供物の入つて居るのを——その精靈舟を夜送り出す時は、小さな提燈か燈籠を添へて——提供する。ところが燒津では燈籠だけ流すので、暗くなつたらそれを水へ下ろすと自

分に話した。他の地方では夜中がその普通の時刻だから、燒津でも亦それがお訣れの時刻だと自分は想つた。そしてそれを見物に間に合ふやう眼を覺ます積りて、夕食後輕率にも自分は一とまどろみに耽つた。ところが自分が再び濱邊へ行つた十時までに、一切濟んで、誰れも彼れも家へ歸つてしまつてゐた。海を見ると、遠くに螢火の長い群のやうなものが——列を爲して海へ漂ひ出る燈籠が——見えた。が、もう餘程遠くへ流れ出てゐて、色のついた火の點々としか見えなかつた。自分は大いに失望した。また二度とは歸つて來ないかも知れぬ好機會をなまけて取り逃がしたやうな氣がした、——こんな古い盆の慣習は急速に失せつゝあるから。と思ふその次の瞬間に、思ひ切つて泳いで行けば十分その明かりの處へ行ける、といふ念が浮かんだ。燈籠はゆるやかに動いて居るのであつた。自分は衣物を濱へ脱いで飛び込んだ。海は穩かで、美しく燐光を放つてゐた。手足の一と漕ぎ毎に黄色な火の流れが燃えた。自分は迅く泳いだ、そして思つたよりも早くその燈籠艦隊の最後のものに追ひついた。自分はこの小さな船出の邪魔をするのは、卽ちその靜かな進路を横へ外らすのは、不親切なことだらうと思つた。だから自分はそのうちの一つに近く身を置いて、その委曲を研究するに甘んじた。

構造は頗る單簡であつた。その底は眞四角な、縱横十吋位の、厚い板片であつた。その

四隅に高さ十六吋許りのか細い棒が立つて居て、この眞つ直ぐに立つた四本が、十文字に組んだ板片で上の處で結び附けられて居て、紙貼りの四方を支へて居るのであつた。そして、長い釘がその底の中心を通して上へ突き立ててあつて、その釘の尖(さき)に、點した蠟燭が挿し留めてあつた。上の方は明けつ放してある。四方は五色が――青、黄、赤、白、黒と――現はしてあつた。此五色は、形而上的に五佛と同一の佛教の五大を――空、風、火、水、地を――それぞれ象徴して居るのである。その紙壁の一方は赤、一方は青、一方は黄て、四番目の壁の右半分が黒く、左半分が、色無しして、白を表はして居るのであつた。この透かし明かりのどれにも戒名は書いて無かつた。內側にはちらちら光つて居る蠟燭があるだけであつた。

自分は夜を通して漂ひ行く、しかも漂ひ行くにつれて風と波との衝動のもとに次第に遠く離ればなれに散らばつて行く、この明かるい脆い恰好したものをぢつと見て居つた。その各〻が、色のをのゝきをさせて、物に怯ぢて居る或る生物のやうに――そのまた外(そと)の暗黒の中へそれを運んで行く盲目の流れに戰慄して居る生物のやうに――思はれた。……我我自らも、より深い且つよりほのぐらい海へ船下ろしされて、避く可からざる分解へと漂

ひ行くにつれて、始終互々に次第に遠く遠く、離れ行く燈籠の如き身では無いのか。闇も無く銘々の思想の光は燃え盡きる。するとその憐れな肉體や、曾ては美しい色であつたもののの殘つて居る總ては、永久に色無き『空』へ溶けこまねばならぬのである。……

斯く考へるその刹那にすら、自分は眞實此處に一人きりで居るのか知らと疑ひ始め——自分の横で波に揺られて居る物のうちに、光りの唯だのをのゝき以上の或る物が居はせぬか知ら、消え行くその炎を惱まし、それを看て居る者を看て居る或る者が居はせぬか知ら、と考へ始めた。微かな冷たいをのゝきが自分の身體中をすうつと通つた——恐らくは水の深みから昇り來る或る冷たさであつたらう——或は恐らくは或る靈的な空想が潜行しただけのことであつたらう。と、此海岸地方の古い迷信が——『精靈』が旅をする折は危險だといふ古い漠とした警戒が——自分の心へ浮かんで來た。夜間斯うして此海へ出て居る自分の身へ——『死者』の光明を妨害して居る、或は妨害して居るやうに思へる自分の身へ——何か禍が落ちて來でもすれば、自分は今後の或る無氣味な物語の主題となることであらう、と想つた。……そこで自分は佛式の訣れの文言を囁いた——その光りに。——そして急いで岸を指して泳いだ。

足が石へ再び觸はると、前の方に白い影が二つ見えたので自分はびつくりした。が、水は冷たいかと尋ねるやさしい聲が自分を安心させた。それはその妻と一緒に自分を探しに來た、自分の宿の老主人の、魚賣りの乙吉の聲であつた。

『氣持ちのいい程冷たいだけだ』自分は二人と一緒に歸宅しようと着物をひつかけながら答へた。

『あゝ、盆の晩に海へ出るのは宜う御座いません』と乙吉の妻は言ふ。

『遠方へは行かなかつたよ。ただ燈籠が見て見たかつたのだ』と自分は答へる。

乙吉はかう抗辯するのであつた。『河童だつて時々水で死にます。此村の者で、乘つて居た船が破れてから、非道い天氣の日に、七里泳いで戻つた者がありました。だがあとで水へはまつて死にました』

「カツパモオボレシヌ」とは普通の諺である。カツパといふは水に、殊に川に、住む怪物である。

七里と云へば十八哩少し足らずである。此村で今どき若い者でその位泳げる者が居るかと自分は訊ねた。

老人は答へて曰ふに『多分ありませう。强い泳ぎ手は多勢居ります。此處の者は皆んな

泳ぎます、——小さな子供でも。だが漁師がそんな長い間泳ぐのは、生命を助からうとする時だけであります』

『また戀をする時に』と、その妻が言ひ添へた。『羽島娘(はじま)のやうに』

『誰れがだつて』と自分は問うた。

『さる漁師の娘であります』と乙吉は言ふ。『七里離れた網代(あじろ)に戀人が居りました。それで、夜その男の處へ泳いで行つては、朝泳いで歸りました。男はその女の道しるべに明かりを燃やして置くのでありました。ところが或る闇の夜にその明かりを不精して燃やしませんでした——それとも風で消えたのでしたか。その娘は道に迷つて死んでしまひました。…… これは伊豆で名高い話であります』

——『それでは、極東では、可哀想に、泳ぐのはヘロである。そして、斯んな事情の下に在つて、レアンダー〔譯者註一〕に對する西洋の評價は何であつたであらうか』斯う自分は心で思つた。

三

いつも盆時分には海が荒れる。だからその翌朝浪が段々高まるのを見ても自分は驚きはしなかつた。一日中高まつた。午後の中頃までには波は非常なものとなつた。て、自分は防波壁の上に坐つて、日暮までそれを見て居つた。

それは長い、ゆるやかな――巨大なそして恐ろしい――うねりであつた。時折、それが砕けるつい前に、聳え立つ大浪が、丁度、慄へる硝子の音のやうなチリンといふ音を立ててその縁の長さ全體に罅を入れる。それから自分の足の下の壁を震はす程の轟を以て落ちて平らになる。……自分は、その軍隊を海の如くに――剣戟の波の上に波を以てし――萬雷に次ぐに萬雷を以てして――襲撃させた今は亡き露西亜の偉大な將軍[譯者註二]のことを考へた。……まだ殆ど風といふ程の風は無かつた。が、何處かほかで天氣が荒れて居つたに相違無い。て、岸打つ大浪はずんずん高まりつゝあつた。自分はその浪の運動に心を奪はれた。斯んな運動は筆舌の及ばぬ許りにどんなに複雑なものであり――しかも、永遠にどんなに新しいものであることか！その運動の五分間すら誰れが完全に記述することが出來よう。

正しく同じに碎ける二つの波を見た人間は未だ嘗て一人も無い。

そしてまた恐らくどんな人間でも、捲き返す海の大波を眼に見、その雷なす音を耳にして、眞面目な氣持ちにならぬ者は未だ嘗つて無いであらう。動物――牛や馬――でも、海の前では默想的になることを自分は氣附いて居る。彼等はその洪大な物の姿と音とが此世の他の凡てを忘れしめたかのやうに、おつと立つて、一と所を見つめて、そして耳をすまして居るのである。

此處の海岸に或る民間俚諺がある。それは「海には魂があり耳がある」といふのである。そしてその意味は斯う説明される。海を恐いと思ふ時、その恐いといふ念を口に出してはならぬ。恐いといふ事を言ふと、浪は突然高くなる。……さて此の想像は自分には徹頭徹尾自然のやうに思はれる。海へ入つて居るか、船で海へ出て居るかする時、海は生きては居ない――海は意識のある、そして我々に敵意のある力を有つては居ない――とは充分に信ずる事が自分には出來かねる、と自白せざるを得ぬ。理性は、その當座は、此の空想に對して何の役にも立たぬ。海といふものはただ水が集まつて成つて居るに過ぎぬと、斯う考へることが出來るやうになるには、その非常に大きな浪が、小さな浪が鈍く這うて居る

としか見えぬやうな、どつか高い處に自分は居なければならぬのである。

然し此原始的な空想は晝の明かるい時よりか夜の暗闇の時の方がもつと强い位に起こり得るのである。燐光の夜、汐の光りが潜んだり閃いたりするのが、如何に生きて居るやうに見えることか！その冷たい炎の色合が微妙に移り變はるのが、如何に爬虫的であるか！斯んな夜の海にもぐりこんで、その靑黑い暗がりの中で兩眼を開いて、そして眼の運動に伴なふ明かりの無氣味な迸出を心留めて見て見よ。水を透して見る光つた點が一々みな、眼を開いたり閉ぢたり！するやうである。そんな瞬間には、何か奇怪な有情に包まれて居るやうな――そのどの部分もが同じやうに觸官を有ち視官を有ち意志を有つて居る、或る生きた物質のうちに、無限無窮の軟らかい冷たい『靈』のうちに、吊り下げられて居るやうな――氣が誰れしも實際するのである。

四

その晩自分は長い間床で眼を覺まして居て、その偉大な汐の雷と轟き碎ける音に耳を澄まして居た。その分明にきこえる衝擊の音よりも深く、またより近い浪の突擊の音よりも

深く、はるか遠い大波のベェスの音がきこえるのであつた。それは自分の家がそれに震へる程の、絶え間無い底知れずの響き聲で、――想像には、無限の騎兵隊の馬蹄の響のやうに、無數の砲車の集中する響のやうに、日の出からして世界程の幅の大軍隊が突進するやうに、きこえる音であつた。

すると自分は、子供の折に、海の聲を聽いた時の漠たる恐怖の念について考へて居つた。――そして、後年、世界の種々な地方での種々な海岸で、磯打つ浪の音がいつもその子供らしい感情を復活したことを憶ひ出した。確に此の感情は、幾千萬世紀も自分よりか古いもので――祖先の無數の恐怖の遺傳された總額なのである。が、やがてのこと、海を恐がる念は、その聲が覺ます種々雜多な畏怖心のただ一要素を現はすに過ぎない、といふ確信が自分に起こつて來た。といふのは、この駿河海岸の荒汐を聽いて居ると、人間に知られて居る恐怖のありとあらゆる音を聞き分けることが出來たからである。すさまじい戰鬪の音――いつまでもの一齊射撃の音――際限無しの進撃の音のみならず、その上に、野獸の咆り吼ゆる聲、火のパチパチシユウシユウいふ音、地震のゴォゴォいふ音、破壞のドシンガチャンといふ音、それからそんな音に插んでて、號叫と抑壓されたわめきとのやうな連續した叫喚、卽ち水に溺れて死んだ者の聲だと云はれて居る聲とが、きき分けられるので

あつた。憤怒と絶望との想像し得らるゝ限りのあらゆる反響を結合しての——怖ろしい極みの大擾亂なのである！

そして自分は斯う思つた。——海の聲が我々を眞面目ならしめるのは不思議てあらうか。靈經驗の遙か偉大な海に動いて居る、いつからとも知れぬ恐怖のあらゆる波が、海の種々な發言に相和して、之に應答せざるを得ぬのである。深淵(譯者注三)相呼號すてある。眼見得る『底無し』が、それよりも年長な實在たる眼見得べからざる『底無し』に——その流轉が我々の靈魂を造り成したその眼見得べからざる『底無し』に——呼ばはるのである。であるからして、死者の言葉が海の怒號であるといふ古昔からの信仰には、確に少からざる眞理があるのである。眞實、過去の死者の恐怖と苦痛とが、海の怒號が喚起するあの漠とした深い畏怖の念で、我々に物言うて居るのである。

然し海の聲よりももつと深く、しかももつと妙な具合に、我々の心を動かす音が——時時我々を眞面目にならせる、しかも頗る眞面目にならせる音が——ある。音樂の音である。大音樂は、我々心裡の過去の神祕を想像も及ばぬ許り深く攪亂する、心靈的一暴風である。大音樂は——その異つた樂器と聲との各ゝが、各ゝ異つた幾萬億の生誕前の記憶に訴

別に訴へる所の――一種絶大な魔法である、とも或は言へよう。青春と哀憐とのあらゆる精靈を呼び起こす音色がある。死んだ熱情のあらゆる幻の苦痛を喚起する音色がある。莊嚴と威力と光榮との死んで居る感情總てを――滅（めつ）してしまつて居るあらゆる大歡喜を――忘られて居るあらゆる慈悲寛容を――復活する音色があるのである。まことや音樂の力は、自分の生命は百年に足らぬ前に始まつたのだ！と愚かにも夢想して居る人間には、不可解に思へることとであらう。然しながら、『我』の本體は太陽よりも古いものであると知つて居る人にはどんな人にも、この神祕は判明するのである。その人は、音樂は一種の魔法だといふことを知るのである。その人は、旋律（メロディ）のありとあらゆる漣に對して、諧調（ハアモニイ）のありとあらゆる巨浪に對して、千古の快樂と苦痛との無限の或る渦卷が、『生死の大海』から、その心裡で應答するのであると悟るのである。

快樂と苦痛、此二者は大音樂には常に混合して居る。だからこそ音樂は海洋の聲、或は他のどんな聲も爲し得ないほど、深く深く我々に感動を與へ得るのである。が然し、音樂のより大なる發言に在つては、低音調を成して居るものは常にこの悲哀である――『靈の海』の波の囁き聲である。……音樂といふ念が人間なるものの頭腦に開展し來り得る迄に經驗されたに相違ない所の悲喜の總額が、如何に巨大なものであるか、思ふも不可思議な

位である！

何處かで斯ういふ事が言はれて居る。人生は神々の音樂である、――人生の啜り泣きと笑ひ聲、人生の歌と叫びと祈禱、人生の喜悅と絕望との絕叫、此等は不死、不滅の者の耳にはいつも完全な諧調となつて立ち昇る、と。……だからして神々は苦痛の音色を鎭めようと欲し給はなかつたのである。鎭めれば音樂を打ち壞す事になるであらう！苦悶の音色が籠もつて居ない音の組み合はせは、神聖な耳には聞くに堪へぬ不協音となる事であらう。

そして或る點に於ては我々自らも神々の如くである。無數の過去生涯の苦痛と喜悅とが總括されて居ればこそ、遺傳的記憶によつて、音樂の消魂的快樂が感ぜられるからである。死んだ幾代（だい）のあらゆる嬉さ悲さが、諧調と旋律との無數の形式を採つて我々の心へ宿りに歸つて來るのである。正（まさ）しくそれと同樣に、――我々が太陽を眺め得なくなる幾萬年の後に――我々自らの生涯の嬉さ悲さが、より微妙な音樂と共に、我々ならぬ他の人々の心情へ移りはいつて、其處で或る不可思議な刹那の間、逸樂的苦痛の或る深いそして絕妙な戰慄を起こさせることであらう

譯者註一　レアンダーはアビドスの青年で、レスボスの塔に住んで居る孃女のヘロに會ひに、夜毎ヘレスポントの海峡を渡つた。處が、或る嵐の夜、塔の明かりが消えて、道を失して溺死した。翌朝その屍體を見たヘロは海に投じて死んだ。この物語はヴージルもオヸッドも語つて居るが、シルレルの物語唄(バラッド)とグリルパルツエルの戯曲とで最も能く近代の人に知られて居る。

譯者註二　偉大な將軍といふはミカイル・スコベレフ（一八四四—一八八二）を指す。

譯者註三　『詩篇』第四十二篇の七に「なんぢの大濤のひゞきによりて淵々よびこたへ、なんぢの波なんぢの猛浪ことごとくわが上をこえゆけり」とあり。

影

捧呈

ミッチエル・マックドーナルド主計監（米國海軍）へ

マックドーナルド様

ここに私は「珍らしい日本の話をもう少し」と云ふ御註文に應ずるやうに試みました。作者の親愛の又一つの記念として、どうぞ、この書物を受けて下さい。

ラフカディオ・ヘルン

（小泉八雲）

日本、東京、　一九〇〇年一月一日

珍らしい書物からの話

心の爐の中に、昔、彼は不思議な石の燃ゆるのを見た……

エミール・ヴェルハーレン

和解

昔、京都に、若い武士があつた、主家の沒落のために貧しくなつたので、遠國の守になつて下る人に仕へる事になつた。都を去る時、この武士は妻を離別した、――善良にして綺麗な女であつた、――實は立身のために別の緣組をしようと思つたのであつた。それから或家柄の娘と結婚して、自分の任地へ連れて行つた。

しかしこの武士が、愛情の價値を充分理解しないでそれ程無造作に捨て去つたのは、無分別な靑年時代で、苦しい貧乏を經驗して居る時であつた。彼の第二の結婚は幸福ではなかつた。彼の新しい妻は冷酷で我儘であつた、そして彼は京都時代の事を考へて名殘惜しさにたへなかつた。それから彼はやはり第一の妻を愛して居る事――第二の妻を愛する事のできる以上に彼女を愛して居る事を發見した、そして自分が如何に義理知らずであるかを感じて來た。彼の後悔は次第に悔恨となつて、彼に心の平和を與へなかつた。彼がつれなくした女の記憶――彼女の物靜かな言葉、彼女の微笑、彼女のやさしい

美はしい振舞、彼女の非難の打ちどころない忍耐、――それがたえず彼を惱ました。時々彼は彼女があの困窮の時分に夜晝働いて彼を助けた時のやうに、彼女が機を織つて居るのを夢に見た、もつと度々見たのは、彼女が哀れな破れた袖で涙をかくしながら、彼が彼女を捨てて來たあの淋しい小さい部屋にただ獨りで坐つて居る姿であつた。公務の間にも、彼の心は彼女の方へさまようて行つた、それから彼は彼女がどうして暮らして居るだらう、何をして居るだらうと考へて見た。再縁にしてゐないだらう、それからどうしても自分を赦さないと云ふ事もなからうと何となしに思つた。それから彼はひそかにできるだけ早く京都に歸つて彼女をさがして見よう、――そして彼女に赦しを願つて、つれ戻して、償ひのために何でもできるだけの事をしようと決心した。しかし歳月は過ぎた。

たうとう守の任期も滿ちたので、この武士の役目も一先づ終つた。「さあこれから自分の愛する者のところへ歸る」彼は自分で誓つた。「あれを離別した事は何と云ふ殘酷な――何と云ふ馬鹿な事であつたらう」彼は第二の妻（子供はなかつた）をその親許へ歸して、京都へ急いだ、それから、旅裝束を取り換へる暇も惜んで――直ちに昔の妻をさがしに出かけた。

彼女の昔、住んでゐた町に着いた時は、夜は深くなつてゐた、——九月十日の夜であつた、——そして都は墓地のやうに靜かであつた。しかし明月が一切の物をあかるくした、そして造作なく家が見つかつた。住む人がないやうであつた、屋根には高草が生えてゐた。彼は雨戸をたたいたが、誰も答へる者はなかつた。それから、戸は內から締りはしてない事が分つたので、彼は押しあけて入つた。入口の間には疊も何もなかつた、寒い風が板の間の隙から吹いて來た、月の光は床の間の壁の粗い割目から洩れて來た。外の部屋は皆同じやうに荒れ果ててゐた。この家はどう見ても住む人はないやうであつた。それでも武士はその家のずつと奧にあるもう一つの部屋、——彼の妻のいつも休息所であつた甚だ小さい部屋へ行つて見ようと決心した。その境になつて居るふすまに近づくと、彼はその中にあかりの見えたので驚いた。彼はふすまを開いて驚きの叫びを上げた、卽ち彼はそこに彼女が——行燈のあかりのわきで針仕事をして居るのを見たのであつた。彼女の眼は同時に彼の眼と合つた、そして嬉しさうな微笑をもつて、彼女は彼に挨拶した、——ただこれだけ聞いた、——『いつ京都へお歸りになつて？こんな暗いところを通つてどうして道が分りましたか』こんなに歲月はたつたが少しも彼女は變つてゐなかつた。やはり彼に取つて最もなつかしい彼女の記憶の通り、美しく又若く見えた、——しかし、どの記憶よりもな

つかしい彼女の音樂のやうな聲が、嬉しさの驚きて震ひを帶びて彼の耳に達した。
それから喜んで彼は彼女のわきに坐つて、彼女に一切の事、——どんなに深く彼の我儘を後悔して居るか、——彼女がゐないで彼はどんなに不幸であつたか、——どんなにたえず彼女と別れた事を殘念に思つたか、——どんなに長い間償ひをしようと思つて色々工夫してゐたか——を話した、——その間彼女を撫でさすつて、くりかへしくりかへし彼女の容赦を願つた。彼女はそれに答へて、彼が心で願つた通り、愛のこもつたやさしさで、——そんなに自分を責める事を止めるやうに賴んだ。彼女のためにそんなに苦むのはいけないと彼女は云つた、彼女はいつでも彼の妻となる資格はないと感じて居ると云つた。それでも彼が彼女と別れたのは、ただ貧乏のためである事を知つてゐた、彼が彼女と一緒にゐた間は、彼はいつでも親切であつた、それから彼女は彼の幸福を祈る事を決して忘れた事はない、もし償ひをすると云はれるやうな理由が假りにあるとしても、かうして來て貰つた事が何よりの償ひになるのであつた、——たとへほんの暫らくでもかうして又會はれる事が何よりも嬉しいと彼女は云つた。彼は喜びの笑をもつて云つた、『ほんの暫らく！——いや七生の間と云つて貰ひたい。お前の方でいやでなければ、いつまでも——いつまでも——いつまでも、一緒にゐようと思つて歸つて來たのだ。どんな事があつても、もう

別れない。今では金もある、友達もある、貧乏を恐れるに及ばない。明日荷物がここへ來る、家來達もここへ來てお前の世話をしてくれる、そしたらこの家を綺麗にしよう。……今夜は』彼は云ひわけのやうにつけ加へた、『着物も着換へないで、――實はただお前に會つて、この事を云ひたいばかりに――こんなにおそく來た』彼女はかう云はれて大層喜んだやうであつた、そして今度は彼女の方で、彼が去つてから京都にあつた事を色々話した、――ただ自分の悲しかつた事は避けて、それについて語る事はやさしく拒んだ。二人は夜ずつとおそくまで話し込んだ、それから彼女は、南に面した暖い部屋、――それは以前彼等の新婚の部屋であつた部屋へ彼を案内した。『この家には誰も世話をする人はないのかね』彼女が彼のために床をのべるのを見て、彼は尋ねた。『いゝえ』彼女は快活に笑ひながら答へた、『女中など置くわけに參りません、――それで全く一人で暮らしてゐます』『明日から女中を澤山置いて上げる』彼は云つた、――『よい女中、――それから何でもお前の要る物』彼等は休むために横になつたが、――眠るためではなかつた、彼等は眠られない程お互に澤山話す事があり餘つてゐた、――それで彼等は過去現在將來の事を語つた、遂にあかつきの白むやうになつた、それから我知らず武士は眼を閉ぢて眠つた。

眼が覺めた時、日光は雨戸のすき間から流れ込んでゐた、非常に驚いた事は、彼は茨ちかかつて居る床板の上に敷物もなく寢てゐた事であつた。……彼はただ夢を見たのであらうか。いや、彼女はそこにゐた、彼女は眠つてゐた。……彼は彼女の上に屈んだ、――そして見た、――そして叫んだ、――そのわけは、その眠つて居る人に顏がなかつたからであつた。……彼の前に、經かたびらだけに包まれた女の屍、――骨と長い黑い絡んだ髮の外、殆んど何も殘つてゐない程乾枯びた屍が横になつてゐた。

* * *

次第に、――彼があかるいところに、ぞつとして胸が惡くなるやうな氣もちて立つて居るうちに、――氷のやう恐怖がたへ難き絶望、烈しい苦痛となつたので、彼は自分を嘲弄して居る疑惑の影をつかまうとした。その近所を知らない風を裝うて、彼は妻の住んでゐた家へ行く道を尋ねて見た。

尋ねられた人は云つた、『その家には誰もゐません。何年か前に都を去つた或武士の妻の家でした。その武士が出かける前に、外の女を娶るために、その女を離別しました、女は六層惱んで病氣になりました。女は京都に親戚もなく、世話する人もなかつたやうです、それでその年の秋、――九月の十日に亡くなりました。……』

普賢菩薩の物語

昔、播磨の國に、性空上人と云ふ甚だ信心深い博學な僧が住んでゐた。長い間彼は妙法蓮華經の普賢菩薩の章について毎日默想した、そして現身の普賢菩薩を、又聖い經[原注]文に述べてある姿そのままを、拜する事のいつか得られるやうに、毎朝毎晩いつも祈つてゐた。或晩讀經の間に睡氣を催ふした、曲彔(きよくろく)にもたれながら眠つた。そして夢を見た、そして夢のうちに聲があつて、普賢菩薩を見るためには、神崎の町に住む『遊女の長者』として知られた或遊女の家に行くべき事を彼に告げた。さめると直ちに、彼は神崎へ行く決心をした、――そしてできるだけ急いで、彼は翌日の夕方、町に着いた。

彼が遊女の家に入ると、そこにはすでに大勢の人の集まつて居るのを見た――大概はこの女の美しいと云ふ評判を聞いて、神崎へ引きよせられた人達であつた。彼等は宴會をしてゐた、そして遊女は小さい鼓を打つてゐたが、彼女はそれを甚だ巧みに使つて、歌を歌つてゐた、その言葉はかうであつた、――

周防むろづみの中なるみたら井に
風は吹かねど
さゝら波立つ

その聲の美しいので、驚いて喜ばない者はなかつた。離れて席を取つてゐた僧がそれを聽いて感心して居ると、女は突然彼女の眼を彼の方へ向けて彼を見まもつた。同時に彼は彼女の姿が六牙の白象に乘つた普賢菩薩の姿に變つて、眉間から光明を放つて宇宙のはてまでも貫くやうに思はれた。そしてやはり彼女は歌つた――しかしその歌は今變つてゐた、そしてその文句は僧の耳にはこんな風に響いた、――

實相無漏の大海に
五塵六欲の風は吹かねど
隨緣眞如の浪の立たぬ時なし

聖い光明のために眩まされて、僧は眼を閉ぢてゐた、しかし目蓋を通して彼はやはり明らかに菩薩の姿を見る事ができた。再び彼が眼を開くと、その姿が見えなかつた、彼はた

だ鼓をもつた少女を見て、むろづみの水に關する歌を聞くだけであつた。しかし彼が眼を閉ぢる毎に六牙の象に乘つた普賢菩薩を見て、實相無漏の大海の神祕な歌を聞く事ができた。そこに居る外の人々は、遊女を見るだけであつた、彼等はその幻は見なかつた。

それから歌ひ妓は突然その宴席から消えた、——誰もいつ、どうしてか知らなかつた。その時から酒宴は止んだ、そして哀愁が歡樂に代つた。その少女をさがして待つたが無駄であつたので、人々は悲しんで解散した。最後に、僧はその夜の情緒に惑亂されて歸途についた。しかし彼が一歩門を出ると、遊女が彼の前に現れて云つた、——『今夜御覽になつた事は、未だ誰にも口外してはなりません』これだけ云つてから、彼女は消え去つた、——芳しい香が空中に殘つた。

*
* *

以上の物語を書いた僧は、それにつぎのやうな註釋を加へて居る。——遊女の境遇は男の慾を滿足させるやうな賤しい哀れな物である。それだから、どうしてこんな女が菩薩の化身と思ふ事ができよう。しかし私共は佛菩薩はこの世に於て無數の違つた形となつて現れる事を忘れてはならない、人を正しい道へ導いて迷の危險から救ふためには、如何に下

等な賤しむべき形をもその聖い慈悲の目的のために選ぶ事を忘れてはならない。

原註　この偈の頌は多分「妙法蓮華經」の『普賢菩薩勸發品』と云ふ章にある約束によつて起されたのであらう。『その時に、普賢菩薩　佛に白して言さく「もしこの人この經を讀誦せば、我その時に六牙の白象王に乘つて、大菩薩衆と共に、その所に到つて、自ら身を現じて、供養し守護してその心を安慰せん、また法華經を供養せんがための故なり、この人もし坐してこの經を思惟せば、その時に我また白象に乘つてその人の前に現ぜん、その人もし法華經に於て一句一偈をも忘失する所あらば、我まさにこれを敎つてともに讀誦しかへつて通利せしむべし」……』――しかしこの約束は『後の五百歲濁惡世の中に於て』の事である。

古い日本の作者、白梅園鷺水は云ふ、——

『支那と日本の書物に——古代現代兩方の——澤山の話がある、それは繪が餘りに綺麗なので、見る人に神祕的な力を及ぼす話である。そしてこんな綺麗な繪に關して、——名高い畫家の描いた花鳥の繪でも、人物の繪でも、——さらに云はれて居る事は、そこに描かれた動物や人物は、その紙や絹から離れて色々の事をする、——それでその繪は、その繪の意志で、實際生きて出ると云ふのである。昔から誰にでも知られて居るこの種類の話を、今ここにくりかへす事はしない。しかし現代に於ても、菱川吉兵衞師宣の描いた繪——「菱川の繪姿」——の評判はこの國では博く知られて居る』

彼はそれから進んでその所謂繪姿の一つに關するつぎの話を述べる、——

京都に篤敬と云ふ名の若い學生がゐた。彼は室町と云ふ町に住みなれてゐた。或夕方、

人を訪れて歸る途中、古道具屋の店さきに賣物に出てゐた古い衝立に目がとまつた。それはただ紙の衝立てであつたが、その上に描いてあつた若い女の全身像が、若い人の心を捉へたのであつた。賣價は安かつた、篤敬は衝立を買うて、家へもつて歸つた。

自分獨りの淋しい部屋に置いて、その衝立を眺めて居ると、その繪よりも一層綺麗に見えるやうであつた。たしかにそれは本當の似顔、――十六七歳の少女の肖像であつた、繪の中の髪、眼、睫、口のどの小さい點までも、賞讃に餘る程丁寧に眞に迫るやうに描いてあつた。まなじりは『愛を求むる芙蓉の花のやう』であつた、唇は『丹花の微笑のやう』であつた、若い顔全體は何とも云へない程美はしかつた。そこに描いてある元の少女がそれ程に美しかつたら、見る程の人は何人も心を奪はれたであらう。そして篤敬は彼女はこのやうに美しかつたに相違ないと信じた、――卽ち、その姿は、話しかける人だれにでも、今にも返答する用意をして居るやうに、――生きて居るやうに見えたのであつた。

繪を眺めて居ると、次第に彼はその魅力によつて魅せられるのを覺えた。『實際この世の中にこんな美しい人が居るのだらうか』彼は獨りでつぶやいた、『暫らくの間でも（日本の作者は「露の間」と云つて居る）自分の腕でこの女を抱く事ができたら、喜んで自分

の生命――いや、千年の生命――をも捧げたいのだが』結局、彼はその繪を戀するやうになつた、――卽ちその繪が表はして居る人でなければ、どの女をも決して愛する事はできないと感ずる程にその繪を戀した。しかしその人は未だ生きて居るとしても、もはやその繪には似てゐないだらう、恐らく彼女は彼が生れるずつと以前に葬られたかも知れない。

しかし、毎日この望みのない熱情が彼に生長して來た。飮食も睡眠もできなくなつた、これまで興味をもつてゐた學問研究にも心を向ける事ができなかつた。彼は、何時間でも繪の前に坐つて、――外の事は一切なげやつて、或は忘れて、――その繪に話しかけてゐた。そしてたうとう病氣になつた――自分でも死ぬだらうと思ふ程の病氣になつた。

さて篤敬の友人の間に、古い繪や若い人の心について多くの不思議な事を知つて居る一人の尊敬すべき老人の學者がゐた。この老人の學者が、篤敬の病氣を聞いて、彼を訪問した、そして衝立を見て、その事の起りをさとつた。それから篤敬は問はれるままに、一切の事を白狀して、そして公言した、――『こんな女を見つけられなかつたら、私は死にます』

老人は云つた、——

『その繪は菱川吉兵衞が描いた物だ、——寫生だ。その描かれた人物はもうこの世にゐない。しかし菱川吉兵衞はその女の姿ばかりでなく、心も描いた、それからその女の魂が繪の中に生きて居ると云はれる。それで君はその女を自分の物にする事ができると、私は思ふ』

篤敬は床から半分起き上つて、相手の顔を見つめた。

『君はその女に名をつけねばならない』老人は續けた、——『そして毎日その繪の前に坐つて、一心不亂にその女の事を思うて、君がつけた名で靜かにその女を呼ぶのだ、返事をするまで……』

『返事をする！』息をしないで驚いて、その愛人は叫んだ。

『さうとも』助言者は答へた、『女は必ず返事します。しかし君は、女が返事したら、私がこれから云ふ物を贈るやうに用意してゐなければならない。……』

『私は女に生命(いのち)をやります』篤敬は叫んだ。

『いや』老人は云つた、——『君は百軒の違つた酒店で買つた酒を一杯女にさし出さねばならない。さうすると、女はその酒を受けるために衝立から歩いて出ます。それから先

きは、どうすればよいか、多分女は自分で君に云つてくれるだらう』

さう云つて老人は去つた。その助言は篤敬を絶望から救つた。直ちに彼は繪の前に坐つて、女の名を呼んで――（どんな名だか、日本の作者がそれを告げる事を忘れて居る）――甚だやさしく、度々くりかへした。その日は返事はなかつた、その翌日も、又その翌々日も。しかし篤敬は信仰も忍耐も失はなかつた、それから幾日も經たあとで、或夕方突然、それが、その名に答へた、――

『はい』

それから早く、早く、百軒の遠つた酒店から買つた酒を少し、小さい盃に注いで、恭しく彼女に捧げた。そこで女は衝立から出て、部屋の疊の上を歩いて、篤敬の手から盃を取るために跪いて、――やさしい微笑と共に問うた、――

『どうして、そんなに私を愛して下さるの』

日本の作者は云ふ、『彼女は繪より遙かにもつと綺麗であつた、――爪のさきまでも綺麗、――心も氣分も又綺麗、――この世の誰よりも綺麗であつた』篤敬は彼女の問に對して何と返事したか書いてない、それは想像に任せるのである。

『しかし、あなたは私をおきさにお倦きになるのぢやありませんか』彼女は問うた。

『生きて居る間は決して』彼は抗言した。

『それからあとは――』彼女は主張した、――即ち日本の花嫁はただ一生の間の愛だけでは滿足しないから。

『お互に誓ひませう』彼は懇願した、『七生の間離らないやうに』

『あなたが何か不親切な事をなさると』彼女は云つた、『私衝立に歸ります』

彼等はお互に誓つた。私は篤敬は忠實な人であつたと思ふ、――花嫁は衝立へ歸らなかつたからである。衝立の上に彼女のゐた場所は空地になつたままであつた。

日本の作者は叫ぶ、――

『この世にこんな事の起るのは、なんと稀有な事であらう』

身體は氷のやうに冷かつた、心臟は長い間打たなくなつて居る、しかしその外には死の徵しは何もない。誰もその女を葬る事を云ひ出しもしない。彼女は離別された事を悲んで怒つて死んだのであつた。彼女を葬むる事は無駄であつたらう、――その理由はその死にかけて居る人の復讐の決して死ぬ事のない最後の願は、どんな墓をも寸斷し、どんな重い墓石をも破碎したであらうから。彼女が臥してゐた家の近くに住んで居る人々は、彼等の家から逃げ出した。彼等は彼女を離別した男の歸つて來るのを、彼女がただ待つて居る事を知つてゐた。

彼女の死んだ時に彼は旅に出てゐた。彼が歸つて來て、その話を聞いた時に、恐怖に打たれた。『日の暮れないうちに助けて貰はなければ』彼は考へた、『女は私を八つ裂きにするだらう』それは未だやうやく辰の刻であつた、しかし一刻も油斷してはならない事を知つてゐた。

彼は直ちに或陰陽師のところへ行つて助力を願つた。陰陽師は死んだ女の話を聞いて、その死體を見た。彼は懇願者に云つた、――『一大危險があなたの身の上に迫つてゐます。私はあなたを助けるやうにやつて見るつもりだが、私の云ふ事を何でもするやうに約束して貰ひたい。あなたの助かる方法はただ一つしかない。恐ろしいやり方です。しかしあなたがそれを試みる勇氣がないと、女はあなたを八つ裂きにします。勇氣があれば、夕方日の暮れないうちに、又來て下さい』男は震へた、しかし彼は何でも要求される事をする約束をした。

夕方、陰陽師は死體の置いてある家へ彼と一緒に行つた。陰陽師は雨戸をあけて、その男に入るやうに云つた。速かに暗くなりかけてゐた。『いやです』男は頭から足まで震はせながら、息を切らして云つた、――『女を見る事もいやです』『見るどころではなく、もつとやるべき事があります』陰陽師は云つた、――『あなたは從ふ約束でした。お入りなさい』彼は無理にその震へる男を家に入れて、死骸のわきへ彼をつれて行つた。

死んだ女が伏俯しに寢てゐた。『さあ、あなたは跨がりなさい』陰陽師は云つた、『馬

に乗るやうに、しつかり脊中に坐りなさい。……さあ、――さうしなければならない』男は陰陽師が支へねばならない程震へた――ひどく震へたが、それでも從つた。『さあ、女の髮を手にもちなさい』陰陽師は命じた、――『半分は右手に、半分はたり手に。……さう。……手綱のやうにしつかり摑んで。手にそれを卷いて――兩手とも――しつかり。さうするのです。よく聽きなさい。明日の朝までさうしてゐなければならない。夜になると恐ろしい事がある――色々ある。しかしどんな事があつても、髮をはなしてはならない。はなせば、――たとへ一秒でも、――女はあなたを八つ裂きにしてしまひます』

陰陽師はそれから何か不思議な文句をその死骸の耳にささやいて、それからその乘手に云つた、――『さあ、私は自分のために、ここを去つてあなたを一人にして行く。そのままにして居るのです。……何よりも女の髮をはなさない事を忘れないで』それから彼は戶を閉めて――出て行つた。

何時間も、その男は黑い恐怖を抱いて屍の上に乘つた、――そして夜の靜けさは彼の廻りに段々深くなつて、遂に彼はそれを破るために叫んだ。直ちにその死體は彼を投げ落すために、下から跳び上つた。そして死んだ女は大聲で叫んだ、『あゝ重い。しかしあいつ

を今ここへ連れて來る』
それからすつくと立ち上つて、雨戸のところへ飛んで行つて、それを明け放つて、夜の中へ飛び出した、――いつでもその男の重みを脊負ひながら。しかし男は、眼を閉ぢて、手に彼女の長い髮を――固く、固く、――巻いてゐた、――呻く事もできない程の恐怖心を抱いてゐたが。どこまで行つたのか、彼は知らなかつた。彼は何物も見なかつた、彼はただ暗黑の中で彼女のはだしの音、――ピチヤ、ピチヤ、――及び、走りながらヒーヒー息をする聲しか聞えなかつた。

たうとう踵をかへして、家に走り込んで、始めと同じやうに床の上に倒れた。鷄の鳴き始めるまで男の下に喘ぎ呻いてゐた。それから靜かになつた。

しかし男は齒の根も合はないで、陰陽師が夜明に來るまで彼女の上に坐つてゐた。『それて髮をはなさなかつたね』――陰陽師は非常に喜んで云つた。『それはよい。……さあ、もう立つても宜しい』彼は再び屍の耳にささやいた、それから男に云つた、――『恐ろしい一夜であつたに相違ない、しかし外に救ふ方法はなかつた。これからさき、女の復讐からはもう安心しても宜しい』

この話の結末は道徳的に滿足な物と私は考へない。この屍に乘つた男は發狂したとも、彼の髮は白くなつたとも書いてない、私共はただ『男泣く泣く陰陽師を拜しけり』と告げられて居る。その話に附いて居る註解も失望すべき物である。日本の作者は云ふ、『その人（屍に乘つた人）の孫今にあり、その陰陽師の孫も、大宿直（おほとくのゐ）と云ふ所（多分おほとのゐ村と云ふのであらう」に今にありとなん語り傳へたるとかや』

* * *

この村の名は今日の日本のどんな地名錄にも見當らない。しかし多くの町と村の名はこの話が書かれて以來變つて居る。

辨天の同情

京都に名高い大通寺と云ふ寺があつた。淸和天皇の第五の皇子貞純親王が僧として、その一生の大部分をそこで送らせ給ふた、それから多くの名高い人々の墓がその境內に見出される。

しかし現在の建物は昔の寺ではない。もとの寺は千年もたつてから、大破に及んだので、元祿十四年（西暦一七〇一年）に全部改築される事になつた。

その改築の祝ひに大佛事が行はれた、その佛事に參詣した數千の人々のうちに學者で詩人の花垣梅秀と云ふ若い人がゐた。彼は新しく造られた庭園など廻りあるいて、何でも喜んで見て居るうちに、以前屢々飮んだ事のある泉に到着した。彼はその時、泉の廻りの土地は掘りかへされて、四角な池になつて居る事、それから池の一端に木の札を立てて『誕生水』と書いてある事を見て驚いた。それから又小さいが甚だ立派な辨天の社が池の側に建ててある事を見た。彼がこの新しい社を眺めて居るうちに、不意に一陣の風が彼の足も

とに一枚の短册を吹き寄せた、その上にはつぎの歌が書いてあつた、――

しるしあれと
いはひぞそむる玉箒
とる手ばかりの
ちぎりなれども

この歌――名高い俊成卿の作つた初戀の歌――は彼に取つては珍らしくはなかつた、しかしそれは女の手で、しかもそんなに巧みに短册に書いてあつたので、彼は殆んど夢かとばかり驚いたのであつた。文字の形にある或物、――何とも云へない優美、――はこどもとおとなの間の若い時を暗示してゐた、それから墨の清い立派な色は書いた人の心の清さと善良な事を表はして居るやうであつた。

梅秀は丁寧に短册を疊んで、家にもつて歸つた。見れば見る程、始めよりも一層立派に見えた。書道に關する彼の知識から判斷すれば、この歌は、甚だ若い、甚だ賢い、そして多分甚だ心の素直な少女の書いた物に相違なかつた。しかしこの判斷は、彼の心に甚だ綺麗な人の面影を作るに充分であつた、そして彼は見ぬ戀にあこがれる事になつた。それか

ら、彼の第一の決心は、その歌の筆者をさがしてできる事ならその人を妻に娶る事であつた。……しかしどうしてその女を見出す事ができよう。その女は何者だらう。どこに居るのだらう。彼女をさがす事のできる望みはただ神佛の加護によるより外はなかつた。

しかし、神佛も喜んで加護を垂れ給ふ事が、そのうちに彼の心に浮んで來た。この短册は彼が辨天様の堂の前に立つて居る間に、彼のところへ來たのであつた、そして戀人同志が幸福なる結合を得ようとしていつも參詣するのはこの神様であつた。さう考へたので、この神様にお助けを願ふ事にした。彼は直ちに、寺の境内の誕生水の辨天の堂へ參詣して、眞心をこめて、こんなお祈をした、――『辨天様、お願です、――この短册を書いた若い人はどこに居るか、見出せるやうにお助けを願ひます、――たとへ僅かの間でも、――彼女に會ふただ一度の機會でも私に與へて下さい』それから、この祈をしたあとで、彼は辨天様に七日參りを始めた、同時に終夜參籠して禮拜のうちに、第七夜を過さうと誓つた。

さて第七夜に、――彼の夜明しをした時、――靜かさの最も深い時に、彼は寺の總門に聲があつて案内を呼んで居るのを聞いた。內部から別の聲が答へた、門は開いた、そして梅秀は立派な風采の老人が徐々たる步調で近づいて來るのを見た。この老いて尊い人は水

干に指貫を着て、雪のやうな頭に烏帽子を冠つてゐた。辨天の堂について、彼はその前に跪いて何か命令を待つて居るやうであつた。それから宮の外側の扉が開いた、そのうしろの内部の神殿を隠してゐた簾は半ば卷き上つた、それから一人の稚兒――昔風に長い髮を束ねた綺麗な男の子――が現れた。彼はそこに立つて澄み渡つた大きな聲で老人に云つた、

――

『ここに、その現在の境遇に不相應な、そして外の方法では達せられさうにない、を祈つて居る者がある。しかしその若者は不便に思ふから、何とかしてやる方法はないか、それて御身は召されたのである。宿世の緣もあるやうなら宜しく兩方を引合せて貰ひたい』

この命令を受けて、老人は恭しく稚兒に敬禮してから、立ち上つて、左の長い袖の袂から赤い紐を取り出した。この紐の一端で梅秀の體を縛るやうに卷いた。他端を御灯の火に燃した、その紐が燃えて居る間に、彼は暗がりから誰かを呼ぶやうに、三度手で招いた。

直ちに寺の方向に來る足音が聞えて來た、そしてすぐに一人の少女が現れた、――美しい十六七歲の少女であつた。彼女はしとやかに、しかし甚だはにかんで、――扇で口のあたりを隠しながら近づいた、そして彼女は梅秀の側に坐つた。それから稚兒は梅秀に向つて云つた、――

――この頃御身は甚だ心を痛めて、及ばぬ戀に身を苦しめてゐた。そのやうな不幸をそのままに見捨て置く事もできないので、月下の翁を招いて短冊のぬしに引合せる事にした。その人は今御身の側に來て居る」――

かう云つて稚兒は簾のうしろに退いた。それから老人は來た時と同じやうに歸つた、そして少女もそのあとに續いた。同時に梅秀は曉を知らせる寺の大梵鐘を聞いた。彼は誕生水の辨天堂の前に感謝のために平伏した、それから――樂しい夢からさめた心地で、――彼がそれ程會ひたいと熱心に祈つた美しい人を見る事ができたのを喜びながら、――又再び會ふ事ができないのではないかと考へて心配もしながら、歸途についた。

しかし門から往來へ出るや否や、彼は自分と同じ方向に獨りで行く少女を見た。そして曉のほの暗きうちにも、彼は直ちに辨天堂で引合はされた人である事を認めた。彼女に追ひつかうとして歩を早めた時、彼女はふり向いて、しとやかなお辭儀をして彼に挨拶した。その時彼は始めて彼女に話しかけてみた、そこで彼女は彼に返事をしたが、その聲の美はしさて彼の心は喜びて滿たされた。未だ靜かな往來を彼等は樂しさうに話しながら歩いて、遂に梅秀が住宅まで來た。そこで彼は止つて――少女に自分の望みと恐れとを語つた。微笑しながら、彼女は尋ねた、――『私あなたの妻になるために呼びよせられた事を御存じ

ないのですか」それから彼女は彼と一緒に入つた。

彼の妻になつてから、彼女はやさしい智慧と情けて、思ひの外に彼を喜ばせてくれた。その上、彼は自分の想像以上に、彼女の遥かに教養のある事を發見した。それ程手蹟の立派である以外に、美しい繪を描く事ができた、生花、刺繍、音樂の諸藝に通じてゐた、織る事も縫ふ事もできた、それから家事に關する一切の事を知つてゐた。

この若い二人が會つたのは秋の初めてあつた、そして彼等は冬の季節の始まるまで仲睦まじく暮らしてゐた。この三月の間、彼等の平和を亂す何物もなかつた。このやさしい妻に對する梅秀の愛は、時と共にただ強くなるばかりであつた。しかも、不思議にも、彼は彼女の經歷を知らなかつた、――彼女の家族についても少しも知らなかつた。こんな事については彼女は決して云はなかつた、そして神佛から授かつたから、彼女に問ふのは不適當であると想像した。しかし、月下の翁もその外の者も――彼が恐れてゐたやうに――彼女を取り返しには來なかつた。何人も彼女に關して問合す事もしなかつた。それから隣人達は、どう云ふわけか分らないが、彼女の存在を全然知らないかのやうにしてゐた。

梅秀は凡てこんな事を不思議に思つた。しかしもつと不思議な經驗は彼を待つてゐた。或冬の朝、彼は京都のやゝ邊鄙な場所を通つて居る時、大聲で自分の名を呼ぶ人を聞いた。見ると或人の家の門から一人の下男が彼に向つて手招きをしてゐた。梅秀はその男を知らない、それに京都のこの邊で知人は一人もないから、彼に取つてはそんな突然の招きは驚き以上であつた。しかし下男は、進んで來て、最上の敬意を表して彼に挨拶して、云つた、『主人はあなたにお目にかかりたいと申して居ります、どうぞ暫らくお入り下さい』少しためらつたあとで、梅秀は案內されるままにその家へ入つた。家の主人らしい立派な身なりの威嚴のある人が、玄關へ出て彼を歡迎して、それから客間へ案內した。初對面の挨拶が交換されたあとで、主人は彼をこんなに突然招いた事の無禮の云ひわけをして、云つた、——

『こんな風にお呼び申したのは實に無禮に思はれるに相違ありませんが、實は辨天樣からのお告げによる事と固く信じてこんな事をいたしました次第で、多分御容赦下さる事と存じます。これからお話いたしませう。

『私、娘を一人もつて居りますが、十七ばかりになります、手も相應に書きます、その外の事も一通りいたします、人並の女でございます。どうか良い緣をもとめて幸福にして

やりたいと思つて辨天様にお祈を致しました、それから京都の辨天堂へ悉く娘の書いた短冊を奉納いたしました。それから幾晩かあとで、辨天様が夢に現れてお告げがありました、「祈は聞いたから、お前の娘の夫になる人に娘をもう引合せて置いた。冬になればその人は來る」紹介が濟んだと云ふこの證言が分らなかつたから、私は少し疑ひました、私はこの夢は意味のない普通の夢に過ぎないのだらうと思ひました。しかし昨夜又私は夢に辨天様を見ました、そしてそのお告げに「明日、さきに云つて置いた若い人がこの町へ來る、その時うちへ招じ入れて娘の婿になつてくれるやうに云ふ方がよい。良い靑年だから、後には今よりはずつと高い位に上るやうになる」とありました。それから辨天様はお名前、年齡、生れ所をお聞かせになつて、容貌や着物を詳しく云つて下さいましたので、私が申しきかせた指圖で、下男は造作なくあなたが分りました」

この說明は、梅秀を納得させないで當惑させるばかりであつた、彼はただその家の主人が彼に敬意を表する事を云つた事に對する形式的返禮の言葉しか云へなかつた。しかし主人が娘に紹介するつもりで別室へ彼を誘つた時、彼の當惑は極度に達した。それでも彼はその紹介を程よく謝絕する事はできなかつた。彼はこんな異常な場合に自分にはすでに妻

がある事、——正しく辨天様から授かつた妻、彼が別れる事などは考へて見る事もできない妻のある事を云ひ出すわけには行かなかつた。そこで默つてびくびくしながら、その示された部屋へ主人のあとからついて行つた。

その家の娘に紹介された時、その娘と云ふのは實は彼がすでに妻として居るその人と同じ人である事を發見した時の彼の驚きは、どんなであつたらう。

同じ、——しかし同じではない。

月下翁によつて紹介された彼女はただ愛人の魂であつた。

今、父の家で結婚する事になつた彼女は體であつた。

辨天はその信者のためにこの奇蹟を行つたのであつた。

*
* *

もとの話は色々の事を説明をしないままにして、突然終つて居る。その結末は餘程感心しない。本當の乙女が自分の靈の結婚生活の間にどんな精神上の經驗をしたかについて、

讀者は多少知りたい。それからその靈がどうなつたか、――それは續いて獨立の存在をしたかどうか、或はそれが夫の歸りを辛抱して待つてゐたかどうか、或はそれが本當の花嫁のところへ訪問に來たかどうかを讀者は知りたい。そして書物にはこれ等の事については何も云つてない。しかし日本の友人はこの奇蹟をこんな風に說明する、――

『魂の花嫁は實際短册からできたのであつた。それで本當の少女は辨天堂での會合については少しも知らないと云ふ事はあり得べき事である。短册の上にその美しい文字を書いた時に、彼女の魂の幾分はそこへ移つた。それだから書いた物から、書いた人の精靈を呼び起す事ができたのであつた』

鮫人の感謝

昔、近江の國に俵屋藤太郎と云ふ人があつた。家は名高い石山寺に遠くない、琵琶湖の岸にあつた。彼には相應の財產もあつて、安樂に暮らしてゐたが、二十九歳にもなつて未だ獨身であつた。彼の大野心は絕世の美人を娶る事であつたから、氣に入る少女を見出す事ができなかつた。

或日、瀬多の長橋を通ると、欄干に近く蹲つて居る妙な物を見た。その物は體は人間のやうだが、墨のやうに黑く、顏は鬼のやうであつた、眼は碧玉の如く綠で、鬚は龍の鬚のやうであつた。藤太郎は初めは餘程驚いた。しかし彼を見るその綠の眼は餘程やさしかつたので、彼は少しためらつたあとで、その動物に問を發して見た。そこで、それが彼に答へて云つた、『私は鮫人(さめびと)です、ついこの間まて、八大龍王に仕へて龍宮の小役人を務めてゐましたが、私の犯した小さい過ちのために、龍宮から放逐され、それから又海からも追放される事になりました。それ以來私はこの邊に、——食物を得る事も、臥すべき場所さ

へもなく、――漂泊して居ります。どうか哀れと思召して、住居を見出せるやうに助けて下さい、それから何か喰べる物を頂かして下さい、御願です』

この懇願は如何にも悲しい調子と、如何にも卑下した様子で云はれたので、藤太郎の心は動いた。『一緒に來い』彼は云つた。『庭に大きい深い池があるから、そこに好きな程いつまでもゐたらよい、食物は澤山あげる』

鮫人は藤太郎について、その家に行つて、池が餘程氣に入つたらしかつた。

それから、殆んで半年程、この奇妙な客は池に棲んで、藤太郎から海の動物の好きさうな食物を毎日貰つてゐた。

〔もとの話のこの點から見ると、鮫人は怪物ではなく、同情のある男性の人間のやうに書いてある〕

ところでその年の七月に、近くの大津の町の三井寺と云ふ大きな寺に女人詣があつた、藤太郎はその佛事を見物に大津に出かけた。そこに集まつた大勢の女や娘のうちに、彼は非常に美しい人を見つけた。十七歳ばかりに見えた、顔は雪のやうに白くて淸かつた。口のやさしさは見る者をして、その聲は『梅の木に囀る鶯のやうに美し』からうと思はせた。藤太郎は見ると共に戀に陷つた。彼女が寺を離れた時、彼は適當な距離て彼女のあとをつ

けて行つて見ると、彼女は母と共に、近所の瀬田村の或家に數日の間逗留して居る事を發見した。村人の或者に問うて、彼は彼女の名が珠名（たまな）である事、獨身である事、それから彼女の家族は彼女が普通の人と結婚する事を喜ばない事、——そのわけは一萬の珠玉を入れた箱を結納として要求してゐたから、——を知る事ができた。

この事を聞いて藤太郎は大層落膽して家に歸つた。娘の兩親が要求する妙な結納の事を考へれば考へる程、彼は彼女を妻にする事は決して望まれないやうに感じた。たとへ全國中に一萬の珠玉があるとしても、大きな大名ででもなければそれを集める事は望まれなかつた。

しかしただ一時間も藤太郎は、その美しい人の面影を彼の心から忘れる事ができなかつた。喰べる事も眠る事もできない程、その面影が彼を惱ました、日が立つに隨つて益〻はつきりするやうであつた。そしてたうとう彼は病氣になつた、——枕から頭が上らない程の病氣になつた　それから彼は醫者を迎へた。

丁寧に診察してから、醫師は驚きの叫びをあげた。「どんな病氣でもそれぞれ適當な處方はあるが、戀の病だけは別です。あなたの病氣はたしかに戀煩ひです。直しやうはない。

昔、瑯琊王伯輿はこの病で死んだが、あなたもその人のやうに、死ぬ用意をせねばならない』さう云つて醫者は、藤太郎に何の藥も與へないで、去つた。

この時、庭の池に棲んでゐた鮫人は主人の病氣を聞いて、藤太郎の看護をしに、家に入つて來た。そして彼は夜となく晝となくこの上もない愛情をもつて看護した。しかし彼はその病氣の原因も重大な事も知らなかつたが、一週間ばかりして、藤太郎は自分の命數ももうつきたと思つて、こんな永訣の言葉を發した、——

『こんなに長くお前の世話をする事になつたのも、前世からの不思議の緣であらう。しかし私の病氣は今餘程惡い、そして毎日惡くなるばかり、私の生命は夕を待たぬ間に消ゆる朝の露のやうだ。それでお前のために、私は心配して居る。これまでお前を養つて來たが、私が死んだあと誰も世話して養つてくれる者はなからう。……氣の毒だ。……あゝ、この世ではいつでも思ふ事がままにならぬ』

藤太郎がかう云ふや否や、鮫人は妙な苦しみの叫びを發して烈しく泣き出した。そして泣き出すと共に、大きな血の涙が綠の眼から流れて出て、彼の黑い頰を傳うて床の上に落ちた。落ちる時は血であつたが、落ちてからは固く輝いて綺麗になつた、——貴い價の珠

玉、眞赤な火のやうなすばらしい紅玉(ルビー)になつた。卽ち海の人が泣く時には、その涙は寶石になるのであつた。

その時、藤太郎はこの不思議を見て、元氣が回復したやうに、驚きかつ喜んだ。彼は床から跳び起きて、鮫人の涙を拾つて數へ始めた、同時に「病氣は直つた。もう死なぬ、死なぬ」と叫びながら。

そこで鮫人は非常に驚いて、泣くを止めて藤太郎にこの不思議に直つた理由を說明して貰ふやうに願つた、そこで藤太郎は三井寺で見た若い女の事、その女の家族によつて要求された異常な結納の事を話した。藤太郎は加へた、「一萬の珠玉は決して得られないと信じたから、私の望みは到底達せられないと思つた。しかし今、お前が泣いてくれたので、私は澤山の寶石を得る事ができた、それて私はあの女を娶る事ができると思ふ。ただ――未だ寶石が足りない、それて賴むからもう少し泣いて貰ひたい、必要な數だけにしたいから」

しかしこの要求に對して鮫人は頭を振つて、驚きと非難の調子て答へた、――

「私は賣女のやうに、――何時でも好きな時に泣く事ができるとお考になるのですか。いや、違ひます。賣女は人をだますために涙を流します、しかし海の者は本當の悲しみを

感じないで泣く事はできません。あなたが亡くなられると思つて、心に本當の悲しみを感じたので泣きました。しかし病が直つたと云はれたので、もう泣く事ができません』

『それぢやどうしたらいゝだらう』藤太郎は悲しさうに問ふた。『一萬の珠玉がなければ、あの女を娶る事はできない』

鮫人は暫らく默つて考へてゐた。それから云つた、——

『聞いて下さい。今日はどうしても、もう泣けません。しかし明日一緒に酒と肴をもつて瀨田の長橋に參りませう。暫らく一緒に橋の上に休んで、酒を飲みながら、はるかに龍宮の方を望んで、そこで樂しい月日を送つた事を考へて、故鄕を慕ふ心が出て來れば——私は泣けます』

藤太郎は喜んで承諾した。

翌朝二人は酒肴を澤山携へて、瀨田の橋に行つた、そしてそこに休んで宴を開いた。酒を澤山飲んでから、鮫人は龍宮の方向を眺めて、過去の事を想ひ出した。そして次第に心を弱くする酒の力で、過ぎ去つた樂しい日の記憶が彼の胸に一杯になつた、そして彼は盛んに泣く事ができた。そして彼の流した大きな赤い淚は、紅玉(ルビー)の雨となつて橋の上に落ちた。そして藤太郞は落ちるに隨つてそれを拾つて箱の中に入れた、そして數へて見たら、

正に一萬の數に達した。その時彼は喜びの叫びを發した。

殆んど同時に、はるかの湖上から、樂しい音樂が聞えた、そして沖の方に、湖上から、何か雲の形のやうな、落日の色の宮殿が浮んだ。

直ちに鮫人は橋の欄干の上に跳び上つて、眺めて、喜んで笑つた。それから藤太郎の方に向つて、云つた、――

「龍宮國に大赦があつたに相違ありません、王様達は私を呼んでゐます。それで今お別れをいたします。御高恩に報ゆる事が少してきたので嬉しく思ひます」

から云つて彼は橋から跳び下りた、そして再び彼を見た人はなかつた。しかし藤太郎は珠名の兩親に紅玉の箱を贈つて彼女を娶つた。

日本研究

……………………生は久しき前に
あからさまにわれに來りて、背に優して
深く眼を向けぬ。死にもわれは逢ひ、
曙の輝きわたるを見たり。

ジョージ・メレディス

蟬（シカダ）

聲にみな泣きしまふてや蟬の殼　　日本の戀の歌

一

日本文學では陸雲（譯者註一）といふ名で知られて居る有名な支那の學者が、次に記載する珍奇な蟬（譯者註二）の五德といふものを書いた。

『一、蟬は頭に或る模樣か徽號（註）かがある。これはその文字、文體、文學を現はして居る。

二、蟬は地上のものは何も食はず、ただ露だけ吸ふ。これはその淸潔、純粹、禮節を證明して居る。

三、蟬は常に一定の時期に出現する。これはその誠忠、摯實、正直を證明して居る。

四、蟬は麥や米は受けない。これはその廉直、方正、眞實を證明して居る。

五、蟬は己が棲む巢を造らぬ。これはその質素、儉約、經濟を證明して居る』

註　日本の蟬の一種がその頭の上に有つて居る妙な模樣は、魂の名を示す文字だと信ぜられて居る。

我々は之を二千四百年前に書かれたアナクレオン[譯者註三]の蟬への美しい話掛と比較することが出來よう。一箇處どころか多くの點に於てこの希臘の詩人とこの支那賢者とは全然一致して居る。

「蟬よ、我等はいましを幸（さち）あるものと思ふなり、王者の如く、纔かの露のみ吸ひて、木末に樂しく囀ることとて。いましが野原に眺むるもの總て、四季がもたらすもの總て、皆いましが物なれば。されどいましは――人を害ねんものは何物をも取ること無く――土地を耕す者共の友にてあるなり。いのちある人の子等は、夏を知らする嬉しの先驅といましを尊み、ミューズの神はいましを愛で給ふ、フイーブス[譯者註四]もいましを愛で給ひて、清き鋭き歌をいましに與へ給ひぬ。また年老ゆるもいましが身は衰へず。あゝ天賦すぐれしいましや、――地に生まれ、歌を好み、苦をのがれ、肉あれど血の無き――いましが身は、神にさも似たるかな！」

註　希臘詩選集からのこの引用も今後の引用もすべてパアゼズの英譯に據つた。

そして我々は、奏樂虫類を詠んだ日本文學の詩歌に匹敵するものを見出すには、必らず希臘の古代文學に遡らざるを得ぬ。蟋蟀を詠んだ希臘韻文中の最も美はしいのは、恐らく

は[譯者註五]ミリエチャの『戀の思ひをさまよはしむる、聲音の糸を織り成して……眠鎮むる、いましこほろぎ』といふ詩であらう。……が、蟋蟀の囀りを詠んだもので、感念の微妙さ、殆ど之に讓らぬ歌が日本に澤山ある。そして此の小歌人に報ゆるに新しい非を以てしよう、『ちさくさざみし露の玉』を以てしよう、といふミリエチャの約束の言葉は、奇妙に日本風にきこえる。それからアニテ[譯者十六]が書いたとされて居る、自分の秘藏の蟬と蟋蟀とに墓を建ててやつて、『說けど語れど聽き容れぬ』[譯者註七]ヘイディズが自分の玩具を奪つて行つたのだと言つて泣いて居るミロといふ小娘を詠んだ詩は、日本の兒童生活には有りふれた一經驗を敍述して居るのである。今日の日本の小さな女の子が、記念碑の用にとその上へ小石を置くのと丁度同じ様に、ミロ孃は――（二十七世紀の後の今日、その淚の玉は猶ほ如何に新しく輝くことであるか）――その祕藏の虫に『よせ墓』を造つたことと自分は想像する。然しもつと利發な日本のミロ孃は、その墓に向つて佛教の祈禱の文句を口ずさむことであらう。

　古代の希臘人が虫の曲調を愛したことを告白して居るのを見るのは、殊に彼等が蟬を詠んだ歌に於てである。その證據に、蜘蛛の係蹄に捕へられて、詩人が外づしてやるまで、『か弱き械に悶え泣き』して居た蟬を詠んだ、名詩選集中の詩句を讀んで見給へ。――ま

た『仰げば高き木の上に、夏の暑さに暖たまり、女の乳にさも似たる、露を啜りつ』して居る、この『道行く人に歌きかす、酬も受けぬ旅樂師』を描いて居る、タレンタム[譯者註八]のレ[譯者註九]オニダスの詩を讀んで見給へ。――或はまた

『聲音朗らの蟬　君、露を吸りつ花の上、鋸の齒なせる脚踏まへ、いましが黑き脇よりぞ、妙なる琴の音の出づる』

の詞で始まつて居る、ミリエヂヤの風雅な斷片を吟じて見給へ。……或はまた、エヹヌス[譯者註一〇]が夜鳴鶯（ナイチインゲール）に與へて詠んだ、次記の美妙な文句を誦して見給へ。――

『蜜に育てる汝アテイカの少女よ。囀りつ汝は囀れる蟬を捉へて、翼なき汝が幼兒へ持ち去りぬ、――囀り巧みなる汝が、囀り巧みなるものを――外人（よそびと）たる汝が、その外人を――夏の子たる汝が、その夏の子をば！放ちやらずや早く。歌にたづさはる者が、歌にたづさはる者の口に滅びんは正しからねば、理に悖れば』

之に反して日本の詩人は、セミの聲よりも蟋蟀の聲を遙か多く賞讚する傾向のある、の

を我々は認める。セミの詩は無數にあるが、その歌ひ聲を褒めて居るのは極めて少い。固よりセミといふのは希臘人の知つて居た蟬（シカダ）とは餘程異つて居る。眞實音樂的な種類のものも少しはあるが、大多數は驚く許りに騷々しい、――そのメンメンと鋭く叫ぶ聲は、夏の大苦惱の一つに思はれて居る程に騷々しい。だが蟬を詠んだ日本の韻文幾百萬の中から、上に引用したエヹヌスの詩句に匹敵すべきものを探索するは、無益の勞であらう。實際が、鳥に捕られた蟬といふ題で自分が發見し得た日本の詩は、ただ次記の一つであつた。

あなかなし鳶にとらるゝ蟬の聲　　嵐雪

或は『子供にとられる』と此詩人は述べてもよかつたことであらう――あの哀れな啼き聲を出す原因は、此の方が餘程餘計なのだから。ニキアスが蟬に代つて歎いた句は、日本の多數のセミの輓歌の用を爲すことである。

『疾く動く、翅に音をば放ちつつ、樂しまむこと早絕えぬ、綠の蔭にやすらへる、我を圖らず捉へたる、男の子が無態の手に在れば』

序に此處へ書いてもよからう、日本の子供は通例鳥黐を尖端へ着けた細長い竹竿でセミを捕る。捉まつた折或る種のセミが放つ聲音は實に可哀想である、脅された折に鳥が放つ聲ほどに可哀想である。その折の音は、人間が用ひる『聲』といふ意味での苦痛の『聲』では無くて、特殊な發達を爲し來たつた體の外側に在る膜の所作であると、から合點するのが困難な位である。捕まつた蟬が斯んな啼き聲をするのを聞いて、或る虫類の發聲器は一種の樂器と考ふべきものでは無くて、言語の一機官と思ふべきもの、そしてその發聲は鳥の音聲もさうのやうに——非常な相違は虫はその聲帶を躰の外部に有つて居るといふことで——單純な情緒と密接な關係を有つて居るのだ、と斯う全く新規な確信を近頃自分は抱くやうになつた。然し昆虫世界は全く妖魔神仙の世界である。我々がその用を發見し得ない機官を有ち、我々がその性質を想像し得ない官能を有つて居る動物が居る。——幾萬といふ眼を有つたり、背中に眼を有つたり、鼻や角の尖端で動き廻る眼を有つて居る動物が居る。——腹や脚に耳があつたり、腰に腦!があつたりする動物が居るのである。だから或る種の昆虫が、偶々身體の內部で無くて外部に聲を有つて居ても、誰れもその事實に驚く理由は無いことである。

自分は日本の韻文で、蟬の發聲器に言ひ迫んで居るものは——そんな韻文が存在して居さうなものとは思ふが——まだよう一つも見出し得ないで居る。日本人は、確に自國の啼く虫の特性に就いて、數世紀の間馴染になつて居る。然し自分は日本の詩人が、蟋蟀の或は蟬の『聲』というて居るのは不正確だ、と今言はうなどいふ考は無い。虫は音樂を奏するにその翅と脚とを以てす、と現に說いて居る古昔の希臘詩人も、斯くと知つては居ながら、——日本の詩人が使ふと正しく同樣に——『聲』とか、『歌』とか、『囀り』とか言つて居る。例を擧げればミリエチヤは蟋蟀へ斯う言ひかけて居る。

『聲音するどき翅を有ちて、身は自づからなる七絃琴の、いましこほろぎ我が身の爲めに、聲なす翅を脚もてたたき、歌ひきかせや樂しき節を！……』

二

進んでセミの詩文學に就いて語る前に、自分はセミその物に就いて二三の談論を試みなければならぬ。然し讀者は何等昆蟲學上のものを期待し給ふ要は無い。日本の昆蟲は、恐らく蝶類を除いて、科學者にまだ少ししか分かつて居ないので、自分が蟬について言ひ得

ることは、總て皆學聲により、個人的觀察により、また興味はあるが全く非科學的な日本の古い書物によつて、知り得たものだけである。著作家が、一番に能く知られて居るセミの名前や特性に就いて、互に矛盾して居る許りでは無い、蟬で無い昆蟲の名にセミの語を用ひさへして居る。

次記のセミの列擧は確に不完全である。が、能く知られて居る種類と最上の旋律家とは網羅して居ると自分は信じて居る。が然し、或る種の蟬の出現時が日本の地方に依つて異つて居る事、同一種の蟬が國に依つて名を異にして居るかも知れぬ事、且つ此記述は東京で爲したものといふ事、これを心に有つて居て貰ひたいと讀者に乞はなければならぬ。

一　ハルゼミ[譯者註一]

種々な小蟬が春出る。然し大きな蟬で耳にきこえる聲を立てる第一番のはハルゼミ（春蟬）、またの名ウマゼミ（馬蟬）、クマゼミ（熊蟬）など稱するものである。これはジーイーイーイーイーイイイイイと、最初は低いが、段々と著しい程高い調子に上つて行く――鋭いゼイゼイゼイ聲を立てる。春蟬ほど騷々しい蟬は他に無い。が、此のセミの壽命はその時候と共に終はるらしい。これが乾度、

と、古い句に詠まれて居るものである。

二　シンネシンネ（圖譜註一二）

シンネシンネ――又の名ヤマゼミ（山蟬）、クマゼミ（熊蟬）、オホゼミ（大蟬）――は五月に早歌ひはじめる。頗る大きな蟬である。體の上部は黑いといつていい位、腹は銀白、頭には赤い妙な模様がある。シンネシンネといふ名は、その音色から來て居るので、それはシンネといふ綴音を連續して早く反復するに似て居る。此蟬は京都邊では普通。東京では稀に聞く。

「自分が初めてオホゼミを檢べる機會を得たのは靜岡であつた。その聲音は日本の擬音が現はして居るよりも遙か複雜で、精一パイに廻して居る折の裁縫ミシンの音に似て居るやうに思ふ。音が二重で、金屬性な鋭いリンリンといふ音が連續して聞こえる許りで無く、その底に、もつとゆるく續いて居る重いヂャンヂャンといふ音がある。發聲器官は色は薄綠で、胸廓に附着して居る小さな青葉一枚といつたやうな外觀のものである」

三　アブラゼミ[訳者注一三]

アブラゼミ即ち油蟬は夏早く現はれる。聞けばその名は、その耳を貫くやうな鋭い聲が、鍋で油揚げをする折の音に似て居る、といふ事實に基づいて居るといふ事である　その鋭い音がガチャリンガチャリンときこえるといふ作家もあるが、湯の沸き立つ音にたぐへて居る者も居る。アブラゼミは日の出頃から歌ひ出す。すると大きな低いシイシィといふ聲があらゆる樹々から立ち昇るやうに思はれる。そんな時刻に、即ち森や花園の木の葉がまだ露できらきらして居る時分に、次記の句は作られたものかも知れぬ。自分の蒐集中油蟬を詠んだものはただこれだけてある。

あの聲て露が命かあぶらぜみ　（？）

四　ムギカリゼミ[訳者注一四]

ムギカリゼミ（麥刈蟬）又の名ゴシキゼミ（五色蟬）は夏早く出る。シインシン――チ

イチイといふ綴音に似た、調子の異つた二樣のはつきりした音を出す。

五　ヒグラシ或は『カナカナ』

『日を暗くす』といふ意味の名を有つた此蟬は日本の蟬類中一番顯著なものである。一番巧妙の歌手といふのでは無い。然し旋律家としてもただツクツクボウシの次位に位するだけてある。他の多數の蟬はその樂(がく)を燃える日盛にだけ奏して、雨雲が日をかぎらふ折にさへ中止するのに、これは未明と日沒にだけ歌ふ特別な黃昏の樂師である。ヒグラシは東京では通例六月の末七月の初め頃現はれる。其驚くべき――カナ、カナ、カナ、カナといふ――叫聲は、いつも高い明瞭な調子に始まつて、徐々に低うなるが、いかにも上等な呼鈴を極早く振る音に酷似して居る。亂暴に振る時のやうな、チヤリンチヤリンといふ音ては無くて、速くキマリがついて、兼ねてまた驚く許り清亮な音である。一匹のヒグラシを四分の一哩離れた處で明瞭に聞き得ると自分は思ふ。でも古昔の日本詩人也有が言つたやうに[譯者註一五]『ひぐらしは多きも八釜敷からず』である。ヒグラシの叫は、金屬の反響の如くに、力の强いそして貫通(つきとほ)す音ではあるが、優雅とも思へる許り音樂的である。そしてそれには、暮れ初める時刻と調和した一種特別な悲哀な調がある。然しヒグラシの叫に關して最も驚

く可き事實は、その一匹一匹の音色に特色を帶ばしめる個性てある。正しく同じ音調で歌ふヒグラシは一匹も居らぬ。十匹が同時に歌ふのを聞いて居て、一匹一匹の音色が判然と區別の出來ることを諸君は認めるてあらう。或る音色は銀の如く響き、或るものは銅の如く震ひひゞく。そして、重量と素質との異つた鐘を暗示する種々な音色のほかに、鐘の色んな形狀を暗示する差違すら音色に存して居るのである。

ヒグラシといふ名は——黄昏、薄暗、朦朧の意味で——『日を暗くす』といふ意義を有つて居ることは既に述べた。ところで此の語を弄んだ——次記の例に見るやうに、その啼くのが暗黑の到來を促すと作者が信じて居る風にしての——澤山の韻文が日本に在る。

日ぐらしや捨てゝ置いても暮るゝ日を　すて女

或る悲哀な氣分を言ひ現はさうとした此の句は、西洋の讀者にはこじつけに思へるかも知れぬが、今一つの小詩——此聲が横着者の良心に來たす効果に言ひ及ぼして居るの——は、ヒグラシを聞き馴れて居る人は誰れも感服するてあらう　この序に、これが初めてはつきりした聲で夕方鳴くと、鐘を突然に鳴らすと同樣に、全く人をびつくらさすことを述べてよからう。

六　ミンミンゼミ

ミンミンゼミは大暑の頃鳴き出す。ミンミンといふ綴音を——初めは緩やかに且つ甚だ聲高く、後、倍々速かに且つ倍々聲和らかに、終には聲音がヴーンンといふやうな音に消え去る迄——反覆するのに、即ちミンーミンーミンーミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ズズズズズといふに似て居るので——ミンミンと稱せられて居るのである。その音は悲哀な調を帶びて居るが、不快では無い。往々僧侶が經文を誦する聲にたゞへられて居る。

七　ツクツクボウシ

日本の舊暦（自然の變化と表現とに關しては比較にならぬ程西洋暦よりも精確なもの）に據つて言つて、死者の祭日のすぐ後にツクツクボウシは歌ひ出す。この蟬は鳥のやうに歌ふと言つてよろしい。ツクツクボウシとも、チヨコチヨコウイスとも、ツクツクホツシ

とも呼ばれて居る、――いづれも擬音的命名である。その歌の響は種々な作家に色々に模擬されて居る。出雲では普通の解釋は、

ツク、ツク、ウイス
ツク、ツク、ウイス
ツク、ツク、ウイス――
ウイ、オオス
ウイ、オオス
ウイ、オオス
ウイ、オオス、ススススススス

他の解釋では、

ツク、ツク、ウイス
ツク、ツク、ウイス
ツク、ツク、ウイス――

チイ、ヤラ
チイ、ヤラ
チイ、ヤラ
チイ、チ、チ、チ、チ、チイイイ。

ところが或る人は、この音はツクシコヒシだと言ふ。古昔筑紫(九州の古名)の人が遠國で病氣の爲め死んで、その魂魄が一匹の秋蟬となつたもので、それてツクシコヒシ、ツクシコヒシ(『筑紫慕はし!筑紫見たし!』)と絕え間無しに叫ぶのだといふ傳說がある。

早出の蟬が一番聞き苦しい一番單純な音を出すといふのは奇妙な事實である。音樂的な蟬は夏までには出て來ぬ。そして就中最も複雜な最も瞭喨たる聲を發するツクツクボッシは成育の最も遲いものの一つてある。

八　ツリガネゼミ

此蟬は主もに四國に居るやうである。

ツリガネゼミは秋蟬である。ツリガネといふは吊るしてある鐘――殊に佛教寺院の大鐘――を指す言葉である。自分は此名稱の解釋に惑うて居る。といふのは、この蟬の音樂は、――立派な權威が明言して居るやうに――眞實日本のハアプ即ち琴の音を思ひ浮かばせる。だから此命名は、鐘のゴォンと響く音に似た處があるからといふのでは無くて、鐘を撞いた後に響く、波また波の、好い唸り聲に似て居るといふので附けたものであらう。

三

蟬に關する日本の詩歌は極めて短いのが普通である。そして自分の蒐集は主として――十七綴音の作品たる――ホックから成つて居る。此の發句の多數は、蟬の聲に――否、寧ろその聲が詩人の心裏に產出した感じに――關して居る。次記の例に附けてある人名は、殆ど皆昔の詩人の名で――言ふ迄も無く實名では無くて、號即ち通例それて美術家文學者が世人に知られて居る文學上の名で――ある。

發句の作者として著名な、十八世紀の日本の詩人橫井也有は、蟬を聽いた夏秋の感情の、

こんな天眞な記録を我々へ殘して居る。――

『三伏の日ざかりの暑さにたへがたくて

蟬あつし松きらばやと思ふまで

とロずさびし日數も程なく立ちかはりてやゝ秋風に其聲のへり行く程さすが哀におもひかへりて

死にのこれ一つばかりは秋の蟬』

（譯者註一八）ピエル・ロティ（世界最大の散文家）の愛讀者は、その『お菊夫人』の中で、或る日本家屋に就いて、百夏の鋭い聲の蟋蟀の爲めその古い乾いた木細工が妙音を孕んで居ると述べて居る面白い文句（註）を記憶して居らるゝであらう。それと全然相違しても居ない意匠を有つた日本の詩が一つある。――

註　ロティは家屋の内部の描寫をしようとする己が企に就いて斯う言うて居る。『自分が描寫した此家には、そのか弱い風（ふう）とその鋭いヴァイオリン的な好い響とが缺けて居る。木細工を寫して居る鉛筆のタッチに、その細工の極めて微細な精緻さが無く、またその非常な古雅なところが無く、またその申し分無しの清潔さが無く、その乾上がつた纖維に百夏の間孕まされて居るらしく思へる蟋蟀の響も無い』

蟬を詠んだ日本詩歌の大多數は此蟲の音聲を苦痛だと述べて居る。そんな詩人の不平に充分同情を感ずるには、二三種の日本蟬の眞夏に於ける合奏を聞いてからでなければならぬ。然しその喧噪の經驗の無い讀者にも、次記の句は多分暗示的だと思はれることであらう。

われ獨り暑いやうなり蟬の聲　　文素

うしろから擱むやうなり蟬の聲　　除風

山の神の耳の病かせみの聲　　貞德

底の無い暑さや雲に蟬の聲　　左簾

水涸れて蟬を不斷の瀧の聲　　幻吁

かげろひし雲また去つて蟬の聲　　几董

抱いた木は葉も動かさず蟬の聲　　可風

隣から此木にくむやせみの聲　其角

この句は、也有をおもひ出させる。蟬が頻繁に訪れる木を憫れんて居る別な詩人が居る。――

風はみな蟬に吸はれて一木かな　烏醉

時には蟬の音聲を或る動力だと叙べて居る。――

蟬の聲木々に動いて風も無し　宗養

竹[註]に來て雪より重し蟬の聲　桃月

註　日本の藝術家は、その頂に附いて居る雪の重みに曲つて居る竹の景色によつて幾多の面白い感想を得來たつて居る。

諸聲に山や動かす木々の蟬　楚江

梢も動くやうなり蟬の聲　梅雀

時にその音を湯のたぎる音にたぐへて居る。――

日盛は煮えたつ蟬の林かな　露英

煮えて居る水ばかりなり蟬の聲　大無

此喧噪家の大勢なのと共喧噪の遍在なのとに殊に悲痛をこぼして居る詩人がある。――

ありたけの木に響きけり蟬の聲　稻起

松原を一里は來たり蟬の聲　沾荷

たまたま此題目を滑稽な誇張を以て取り扱つて居る。

ないて居る木よりも太し蟬の聲　（？）

杉高しされども蟬のあまる聲　龜文

聲長き蟬は短きいのちかな　（？）

その聲音の休止に次いで來る消極的な快感を讃へて居る詩人もある。――

蟬に出て螢に戻る納涼かな　　也有

蟬の立つあと凉しさよ松の聲　　梅雀

「序に此處て「松の聲」についての短い日本の歌のあることを言つてもよからう。この歌にある「ザザンザ」といふ擬音は、松葉を吹拂ふ風の深い唸聲を實にうまく現はして居る。——

ザザンザ！
濱松のおとは
ザザンザ！
ザザンザ！」

ところがまた、蟬の音聲が起こす感情は、全く聽く者の神經狀態に依るのだ、と宣言する詩人がある。——

森の蟬凉しき聲やあつき聲　　乙州

凉しさも暑さも蟬の心かな　　不白

涼しいと思へば涼し蟬の聲　吟江

蟬の騷々しさに對する日本詩人のこの多數の不平を見て居て、そしてその蟬の殼から日本でも支那でも——多分、類は類を治す主義で——耳病[譯者注一九]の藥劑！を昔時製した、と聞き給ふ讀者は定めし驚かるゝことであらう。

が然し或る詩は蟬の音樂に賞讃者のあることを證明して居る。——

面白いぞや我が子の聲は
　高い森木の蟬の聲

この歌に能く似た歌がある。「面白いぞや、我が兒の泣くは、千部施餓鬼の、經よりも」

が斯んな賞讃は稀だ。蟬はその夜毎の露の馳走に與らうとて叫んで居るのだ、と說く方が餘計である。——

蟬をきけ一口ないて夜の露　共角
夕露の口に入るまでなく蟬か　梅室

蟬は時折戀の歌に讀み込んである。次記のはその立派な標本である。これは普通藝者共が歌ふ小唄の部類に屬するものである。その揶へたやうな感傷的な處は好ましからぬけれども、ただ意匠としては旨いと自分は思ふ。が日本人の趣味には確に野卑である。たゞくといふは嫉妬の爲めにてある。――

ぬしにたゝかれわしや松の蟬
　　すがりつきつきなくばかり

實際次に示す小さな繪の方が、日本人の美術主義に從へば、一層眞實な作品である（自分はこの作者の名を知つて居らぬ）

蟬一つ松の夕日を抱へけり　　　繞石

四

哲學的な詩歌は蟬を詠んだ日本詩篇には多數には無い。が全く異國風な情趣を具へて居る。恰も蝶の變形變態が靈魂の昇天の表號を古昔の希臘思想に供給した如くに、蟬の一生はその教理を説く比喩や寓言を佛教に與へて居る。

人間がその體軀を脱離するのは丁度蟬がその皮を脱ぐと同じである、だが肉身を得る度毎に前生の記憶が暗くなる。我々が前生を記憶して居ないのは、蟬が自分が出て來た殼を記憶して居ないと同じである。蟬の中には自分が脱ぎ捨てた皮膚の横で歌つて居るのも屢屢見らるゝことであらう。だから或る詩人は

われとわが殼やとむらふ蟬の聲　　也有

と詠んだ。

生きて居るやうに木の幹や枝にしがみついて居て、ギラギラした大きな眼で今猶ほ何か凝視して居るやうに思へる、この脱殼卽ち類像は、不信心な詩人にも宗教的な詩人にも、

種々な事柄を暗示し來たつて居る。戀の歌では屢々之を熱烈な戀慕に瘠せ枯れた身體に比して居る。佛敎的な詩歌では、浮世の華奢の表象に――人間の偉大と稱するものも實は空虛なものだといふ表象に――なつて居る。

世の中よ蛙の裸蟬の衣　可言

だが詩人は時々、啼いて居る翅のある蟬を人間の靈に譬へ、破れた脫殼を後に殘した屍體に喩へて居る。――

たましひは浮世にないて蟬の殼　（？）

それから蟬類の日光に活氣づく大擾音――あの如く早く過ぎ去る運命を有つた夏時の陸暴風――は、說敎師や詩人に、人間の欲望の擾亂にたぐへられて居る。蟬が地中から現はれ出て、暖氣と光線を受けに這ひ上り、囂々騷ぎ、間も無く再び塵土と沈默とへ歸ると同じく――代々の人間は、出て、騷いで、去つてしまふのである。――

やがて死ぬ景色は見えず蟬の聲　芭蕉

此小詩中の思想は、蟲の聲の悲調と共に自然の寂寞が我々へもたらす彼の夏の憂愁を幾分か說明して居はせぬかと自分は思ふ。斯んな幾萬幾億の小生物どもは、東洋の古代の知識を――永久の眞理たる諸行無常の經典を――無意識に說いて居るのである。

だが、我々西洋の近代詩人で、蟲の聲に注意を拂つた者は如何に僅少なことであるか！昔時自然がソロモン[譯者註二〇]に語つたやうに、自然が今日、斯んな微かな可愛い震音で語り得るのは、生の謎に刻薄にも煩はされて居る者だけへであらう。

東洋の智慧は萬物の語を解する。そしてこの知識を身に得る人ばかりが――ジイガルド[譯者註二一]が龍の膽を嘗めて突然鳥の談話を解したやうに――そんな人ばかりが、蟲の言葉を解することであらう。

譯者註一　一種の蟬說の中に『さればこそ陸雲も五德をあげて之を賦し』とあり、田中支水の『百蟲譜』の中にも『陸雲が爲めに五つの德に稱せられしは一代の譽なり』とあり。漢書には陸士龍とあり。

譯者註二　この五德の條は『和漢三才圖會』に載り居る文を材料とせしもの。同書には『……蟬に五德あり、頭に緌あるは文なり、露を飮むは淸なり、候に應じ常あるは信なり、黍稷享けざるは廉なり、處巢穴せざるは儉なり、實に卑穢に含とりて高潔に趨る者なり……』とあり、陸士龍の『寒蟬賦』には『夫頭上有緌則其文也含氣飮露則其淸也黍稷不享其廉也處不巢居則其儉也應候守節則其信也加以冠冕則其容也君子

閒其操可以事君以立身豈弟至德爲哉云々」とあり。

譯者註三　アナクレオンは殊に戀愛詩に名高き希臘の敍情詩人（紀元前五六三――四七八）

譯者註四　フイーブスはアポロの通り名。アポロは文藝（ミューズ）九神の主長にて日の神。

譯者註五　ミリエヂヤは紀元前一世紀の央に希臘に其名高かりし警句詩家。

譯者註六　アニテ（タゲアの）は紀元前三百年頃の有名な女詩人。

譯者註七　ヘイデイズは陰府下界の王プルウトオ。

譯者註八　タレンタムは南伊太利の古名。今はタラント。

譯者註九　レオニダスは紀元前二百七十五年頃盛名を馳せし希臘詩人。その百篇に近きエピグラム傳はり居り文學愛好者の賞讃を博し居れり。

譯者註一〇　エヹヌスは紀元前四百五十年頃の希臘パロスの詩人。ソオクラテスは此人に就いて詩を學びたりと稱せらる。

譯者註一一　ハルゼミはマツゼミともクダマキともいふ。ウマゼミ或はクマゼミはそれとは別種なり。

譯者註一二　このシンネシンネが普通クマゼミともウマゼミとも或はなほ普通にシヤアシヤアゼミ或はワシワシゼミとも稱せらるゝものなり。

譯者註一三　秋山蓮三氏に據ればアカゼミ、サトゼミ、ヤマトゼミとも呼ばれ居るものなりと。

譯者註一四　普通ニイニイゼミ（蟪蛄）と呼ばれ居るものなるべし。ムギカリゼミ、ゴシキゼミの名のほかにナツゼミ、コゼミの名あり。

譯者註一五　その『百蟲譜』に『日ぐらしは多きも八從數からず。暑さは萱の梢に過ぎて夕は草に露置くころならん』とあり。

譯者註一六　メンメンともヤマゼミとも呼ぶ。

譯者註一七　也有の『百蟲譜』に『つくつくほうしといふせみはつくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して此物になりたりと世の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず』とあり。

譯者註一八　本名ルイ・マリイ・ユリアン・ギオウ（一八五〇生まれ）。一八八二年『ル・マリアアジュ・ド・ロティ』と稱する。一英人とタイチ女との結婚物語に文名一時に擧がり、つぎつぎに小說旅行記を物して名聲を博し、一八九一年學士會員に選ばる。『ヤポヌリイ・ドオトンヌ』『ファントム・ドリアン』等名著多き中に小泉先生は『ランド・サン・ザングレ』を殊に賞讃し居られたり。

譯者註一九　『和漢三才圖會』に『蟬脫は皮膚瘡瘍風熱を治す。驚癇眼目の翳膜及び啞病夜啼皆馬蟬之蛻を用ゆべし』とあり。田中支水の『百蟲譜』に『脫捨の古着も故做衣買の手に落入らず藥屋の手に渡り醫者にもてなされ不意の效をあらはして人を救ふめり』とあり。

譯者註二〇　イスラエルの有名な王（紀元前九九三——九五三）。禽獸の語を解したりと傳へらる。

譯者註二一　エダに詠まれ居る、北歐神話に見ゆる王。

日本の女の名

一

日本では或る種の娘を薔薇娘と人がいふ。我が讀者はテニスンの『娘の薔薇の蕾[譯者註一]の園の女王薔薇』を思つて、薔薇が表象する女性に就いての日本と英國との觀察の類似を想像するかも知れぬ。然しその樣な類似は全く無い。薔薇娘といふのは女が優しくて可愛い爲めでも無く、顏を紅くする爲めでも無く、薔薇の樣である爲めでも無い。實は薔薇色の顏は日本では賞でられぬ。いな、女が薔薇に比べられるのは主として薔薇に刺ある爲めである。日本の薔薇を摘まふとする人は指を傷つけ勝ちである。薔薇娘を我が有にしようとする男はもつとひどく怪我をし、死に到ることさへある。單獨で武器も携へずに虎に出會ふは薔薇娘の愛撫を誘ふに勝さる。

さて薔薇娘の名稱は、西洋の花と人の比較の多くのものより比喩として餘程合理的であ

るが、それが西洋の詩的慣例及び感情的習慣と合致せぬので不思議に思はれるに過ぎぬ。由來日本の比喩や隱喩は一目瞭然たるものでない事はあらゆる多くの例があるが、これもその一例である。そして此事は特に呼び名、即ち日本の女の個人名によく例證される。呼び名が木、鳥、花などの名と等しくあつても、そんな個人の名稱が日本人の想像に對して、それらと同じ英語が同樣の場合に英人の想像に起こし來る樣な觀念を起こすとは云はれない。譯して特に美はしく我々に思はるゝ呼び名のうち、美感の爲めに與へられたのはほんの小數である。多くの人々は今もさう思つて居るが、日本の娘は通常、花や優しい灌木や其他の美しい物の名をつけられると思ふのは正しく無い。美的の名は用ゐられて居るが、呼び名の多くは美的で無い。數年前に若い日本の學者がこの問題に關する興味ある論文を[譯者註二]發表した。彼は女子高等師範學校の約四百名の學生、それは帝國の各地方から集まつた女子の個人名を集め、そのうちに五十乃至六十の名のみが美的性質を帶ぶることを見た。然しそれ等に就ても彼は注意してそれが『美感を起こす』といひ、美的の理由でつけられたとはいはぬ。それ等の中には、崎、峯、岸、濱、國など元來の地名も、鶴、田鶴、千鶴、また吉野、綾野、しるし（證）[譯者註三]、眞砂などの名もある。西洋人に美的と思はれるのは此等のうちに殆ど無い。恐らく何れももと美的の理由でつけられたのではあるまい。『鶴』と

いふ字の名は長壽に關はる名で美の名で無い。『野』を語尾とする名の多くは道德的性質に關する名である。私は眞に美的なる呼び名が一割五分もあるかすら疑ふ。それよりずつと大多數のものは道德的又は心理的性質を示す名である。順良、親切、巧妙、怜悧は屢々呼び名に出づる。然し形態の愛嬌を意味し、また美的觀念のみ暗示する名稱は比較的に例が少い。思ふに全く美的な名は藝娼妓につけられるので、爲めに俗化したことも一理由であらう。然し家庭道德が今も日本の道德的評價に於て重要なことが恰も西洋の中世の生活に於て宗教の信仰を重んじたるに比すべきこと、それがたしかに主要なる理由である。理論に於てのみならず、日常の實際に於ても道德の美は遙に形態の美の上に置かれる、そして娘が妻に選ばれるのは美貌よりはむしろその家庭的の性質による。中流社會に於て餘り美的の名は善良なる趣味に思はれぬ。貧しき社會ではその樣な名はとても相當と思はれぬ。高貴の婦人は之と變はつて、ずつと詩的な名を帶ぶる特權がある。それでも貴族の呼び名の多くもまた美的よりは道德的である。

然し呼び名の研究に於ける第一の大いなる困難は、それを飜譯するの困難である。それには日本口語の知識も餘り役に立たぬ。漢語の知識はまた缺いてはならぬ。假名のみで書

いた名の意味は概ね推察もしかねる。其名の漢字のみがそれを說明し得る。さきにいふた日本の論文家は二百十三名の表から三十六の名[譯者註四]を投げ捨てねばならなかつた。その理由はただこれら三十六の名が假名のみで書いてあつて解釋がつかぬからであつた。假名は發音を示すのみで、女の名の發音は多くの場合に何物をも說明せぬ。羅馬字に譯すと、一の呼び名が二、三、または五、六の異ることを意味し得る。表から捨てられた名の一つはバンカであつた。バンカは盤何[譯者註五]（植物）でもあり（それは綺麗な名）、また晩霞でもあり得る。も一つ捨てられたユカはユカブツ[譯者註六]（貴い）の略でもあれば、床でもあり得る。第三の例、ノチは未來の意にもなるが、後裔にも、外種々の意にもなる。我が讀者は後に掲ぐる名の表のうちに外の多くの同音異義の語を見出すことが出來よう。例へばアイは羅馬字では愛か藍か、チョウは蝶か、超か、長か、エイは鋭か英か、ケイは慶か敬か、サトは里か砂糖か、トシは年か鎌か、タカは高、尊、鷹の何れかを意味す。現に日本語を羅馬字で書くに主要なる、そしてとても避けられぬ障礙は國語にある同音異義の語が夥しいことである。何れか和英の良辭書を一見しさへすればこの困難の重大なることが判かる。例を增さぬ爲めに私はただチョウと綴る語が十九あること、キが二十一、ト又はトウが二十五、コ又はコウが四十九にも及ぶことを擧げておく。

然し私が既に暗示した如く女の名の眞義は、漢字の助をかりて爲せる字譯を以てしても確實にはなり難い。例へばカガミ（鏡）といふ名は清淨の心の意で、それは西洋の意味でなくて、儒教の意味での清淨である。ウメ（梅花）は婦人の貞德に關はる名である。マツ（松）は名として樹の美に關はらず、その常綠の葉が老いて盛んなるしるしなるによる。タケ（竹）は竹が幾百年の久しき間、幸運の表象であつたので子に命名される。セン（仙、森の精）は西洋人の想像には興ある響だが實は父母がその娘及びその子孫の爲め長壽を願ふ意に外ならぬ。森の精は數千年も生きると想像されて居るから……また、多くの名は奇妙なものでその持主または名附け人の何れかに問はねば意味がわからぬ、そして時には本來の意義が久しき前に忘れられて居て、一切の穿鑿は無效に歸する。

更に問題に深入りするに先き立ち、私は先づさきの東京の論文家の名の表を掲げる、それは前後の敬稱を廢してアルファベット順にする。普通の名でその中に載つて居らぬ類もあるが、此表は今も尚ほ好んで用ゐらるゝ多くの呼び名の文字を示し、且つ私が既に注意を呼んでおいた事實の若干を說明するに足りやう。

女子高等師範學校生徒及び卒業者（一八八〇年――一八九五年）の名の選集

	同名人數		同名人數		同名人數
藍	一	長	二	銀	二
愛	一	頴	一	濱	三
赤助	一	英	二	花	三
朝	一	悦	一	春江	一
淺	二	筆	一	初	二
逢	二	富士	一	英（ヒデ）	四
文（ブン）	一	藤	二	秀	二
近	五	蕗	一	久野	二
千歳	一	福	二	市	四
千代	一	文（フミ）	五	育	三
千鶴	一	文野	一	稻	三
蝶	一	房	三	石	一

糸　四
岩　一
順　一
鏡　三
鎌　一
龜　二
龜代　一
勘　二（譯者註七）
假名　二
兼　三（譯者註八）
勝　二
かござし　一（譯者註九）
數　一
敬　三
謙　一

菊　六
菊枝　一
菊野　一
君　一
金　四
絹　一
岸　二
喜代　一
淸　五
鑠（クワウ）　一
孝　二
好　一
駒　一
こめ　一
琴　四

熊　一
組　一
都（クニ）　一
國　三
倉　一
倉野　一
栗　一
桑　一
正　三
眞砂　一
益　三
增枝　一
松　二
松枝　一
道　四

三枝	一	陸	一	重	二
幹枝	一	祿	一	鹿	二
峯	二	龍	一	鹿江	一
光	五	隆	三	しめ	一
光枝	一	貞	八	眞	一
盛江	一	崎	一	品	一
仲	四	作	三	しな（德）（?）	一
波	一	里	二	篠	一
信	六	澤	一	しるし（證）（譯者註一〇）	一
延	一	勢	一	俊	一
延枝	一	關	三	末	二
縫	一	仙	三	杉	一
織野	一	節	二	捨	一
樂	三	鎮	一	鈴	八
進	一	静	二	錫	一

鈴江	一	富	三	浦野	一
妙	一	富壽	一	牛	一
たか（德）（？）	二	友	四	歌	一
高	九	虎	一	若菜	一
竹	一	とし（鋭）（？）	一	八重	一
玉	一	豐	三	安	一
環	一	次	二	陽	一
爲	三	綱	一	米	四
谷	一	常	一〇	良	一
田鶴	一	鶴	四	芳野	一
鐵	四	梅	一	勇	一
德	二	梅ケ枝	一	百合	一
留	一	梅野	二		

右の表に於て恒常、忍耐、及び孝德に關はる名が最も多數なる事が注目されやう。

二

日本の女の名に關しての重要な規則の若干を今擧げて見ねばならぬ。

此等の呼び名の大多數は假名二字の語である。中流及びそれ以下の相當の身分の女の個人名は殆ど凡て二字、但し或る奇妙な接尾音をつけて延ばす場合は別である、そのことは後に言ふ。以前には三字又はそれ以上の名は上流の女のものであつた。然るに今日は上流の間にても二字だけの女の名が流行して居る。

二字の女の名は敬稱として上にオを、下にサンをつけるのが習慣である。オ松サン、オ梅サンなどと。然し三字の名には敬稱のオをつけず、菊枝といふ名の女はオ菊枝サンでなしに、ただ菊枝サンと呼ぶ。

註　或る親密の場合にはオもサンも省く。目上の人が目下の人を呼ぶときも同じで、淑女が召使をオ米（ヨネ）サンと呼ばず、ただ米（ヨネ）と呼ぶ。

貴夫人の名の上に敬稱のオをつけることはもはや以前の樣て無い。それは名が唯だ一音

であるときでもさうである。呼び名の上に何もつけないで下に敬稱として子の字をつける。富といふ名の農家の娘は同輩からォ富サンと呼ばれる。同名の淑女は富子と呼ばれる。例へば華族女學校教頭下田夫人は歌といふ美しい名を有つ。彼女は手紙に下田歌子と書かれ、自らも返書に同じ樣に署名する。日本の習慣では家の苗字はいつも個人の名の上におかれて西洋とは反對である。

名の下につける子は漢字で書いて子供の意であるが、同音の漢字の小と混じてはならぬ。小は屢〻舞妓の名に見ゆる。この上品な子の字は愛撫的に物を小さく見る語の價があると私は言つて見たい。それで愛子といふ名はスペンサァの仙女王(フェアリ・クィン)のアモレタ(Amoretta)によくあたると思ふ。それは何れにしても、節、貞の如き日本淑女は今日はォ節、ォ貞と呼ばれずに、節子、貞子と呼ばれる。然るに民衆の女が節子、貞子などと署名すれば笑はれるにきまつて居る。それは節子夫人、貞子夫人といふ意味になるからである。

私は中流及びそれ以下の女の呼び名の上に敬稱のォをつけるといつた。車屋の妻でも多分ォ何サンといはれるであらう。然しォに關するこの一般の規則には著しい例外がある。或る地方では二字の通常の呼び名の終に妙な字を加へて三字にするが、かゝる三字名の上には決してォをつけぬ。例へば紀伊國和歌山の娘は通常呼び名の下にェをつける、それは

江、灣、時には河の意である。それて波江、富江、住江、靜江、玉江などの名を見る。また地名により野又は原の意なるノを多くの女の名につける所がある。吉野、梅野、靜野、浦野、歌野などが此類の模範的の名てある。波江とか菊野とかいふ娘は、ォ波江サン、オ菊野サンとは呼ばれず、ただ波江サン、菊野サンと呼ばる。

註　『江』と『枝』とは混同してはならぬ。『枝』もまた多くの通常の名につけられる。漢字を見ぬと例せばタマエといふ名が玉枝だか玉江だか判からぬ。

サンはもと形式、外見の意の『樣』を略したのだが、女の名の下につけると英語の Miss 又は Mrs. に當たる。男の名の下につけると少くも英語の Mr. に當たり、或はそれ以上の意があらう。『樣』といふ略さない形は男女とも高貴の人の名の下にも、神々の名の下にも用ゐらる。神道の神は神樣といはる、それを譯せば The Lords Supreme であらう。地藏菩薩は地藏樣と呼ばる。淑女にも樣をつける。例せば綾子といふ淑女は當然綾子樣と呼ばる。然し淑女の名が子を除いて三字以上の時は子又は樣をつけぬ例である。菖蒲夫人は菖蒲子樣とはいはれず、もつと音の良い菖蒲樣又は菖蒲子と呼ばる。

註　しかし菖蒲樣の方が通例だが、此形式は知らぬ人が口語で呼ぶときには用ゐぬ、手紙ならさう書いて

名の上下の文字に關してはそれだけとして、私はこれから女の名の類別を試みよう、先づ普通の呼び名からはじめる。此等の名が特に興味があるわけは、それが倫理學や美學に關して民族感情のあるものを示し、また日本の習慣に關する奇妙な事實を說明するに足るからである。私は先づ純然道德的の意義の名を第一位におく、それは概ね子供がその名にふさはしいものになれとの望てつけられたのである。然し次の表は決して完全と認むべきて無く、ただ代表的のものを擧ぐるに過ぎぬ。それから或る名の理由は說明が出來ず、それは私にも私の日本の友人にも謎てあつたことを告白しておく。

道德及び禮節の名

オ愛	オカイヨウ（赦しの意）（?）	操
オ智慧	オ賢（道德的分別の意にて）	オ直
オ忠	オ孝	オ信
オ仁	オ正	オ禮（古き漢字の意にて）
オ順	オ道	オ烈

オ良　オ節　オ常
オ貞（サダ）　オ爲　オ安（ヨシ）
オ誠　オ貞（テイ）　オ良
オ信（シン）　オ德　オよし（尊敬の意）〔?〕
オ靜　オ友

次の表は一見すると實際よりは混種と見ゆるであらう。それは前の表よりもつと變化多き名稱を含む。然し殆ど凡ての呼び名は何か善良な性質、または或る將來の幸福に關はり、親達が子がその德を示すことを冀ひ、或はその幸に與るに足ることを望んでつけたのである。その後者の類に美代、正代の如き幸運の名が屬して居る。

個人の性質又は親の希望を表はす諸名

オ篤　オ長　オエ（幸福の意）〔?〕
オ近　オ大　オ榮
オ千賀　オ傳　オ艶

オ延
オ越
オ悦
オ福
オ源
オ早
オ秀
秀代
オ廣
オ久
勇（イサム）
オ甚（ジン）（?）
龜代
オ粂（一時に二つのことを爲す意）
薫

オかた
オ勝
オ慶
オ敬
オ謙
オ吉
オ君
オきわ（顯著の意）（?）
オ清
清（キヨシ）
オくる（來る人、『口笛吹かば我れ來る』と英詩にあるに似たれどさにあらず、家庭にての從順の意あらん）
オ丸
オ正
正代
オ益

オ三枝
オ幹
オ三緒
オ滿
オみわ（先見）（?）
オ三輪（佛教の名らしけれど、佛教的の呼び名は殆どなき筈）
オ美代
深雪（ミユキ）（雪積もれる後の靜寂の意にて美しき名）
オ元
オ仲
オ賴（ライ）
オ樂（諺に『樂は苦の種』といへば、この名あるはいぶかし）
オ幸（サチ）
オ才

榮　　オ賤　　寶
オ咲　　オ正　　オ玉
オ清　　オ俊　　玉枝
オ勢　　オスキ（愛さる）（？）　　常磐（磐の如く動かぬ道德的の意、この名は源義經の母の名として知らる）
オ仙　　オ助　　オ富
オ茂　　オ澄　　オ敏
オしめ（全—最上善（？））　　オ捨（必らずしも捨はれし捨兒にあらず、子供續きて死せし後に生まれし子を殊更に一度捨てて拾ふときは其子よく生長すとて、然する習はしあり）
オ新　　オ妙　　オ妻
オ眞　　オ尊（タカ）（？）　　オ賴（ヨリ）
オ品　　オ高　　オ若
しるし（證）（譯者註一〇）

地名卽ち地理名は普通であるが、此等は特に說明が難い。子の生地の爲めに、または親の家のありし地の爲めに、方角や地位に關する昔の支那の哲學に屬する信仰の爲めに、傳統的習慣の爲めに、または神道の宗敎と聯關する觀念の爲めに樣々の名がつけられる。

地名

オ富士	松江	オ里
オ濱	オ南（ミナ）（南の階）	オ澤
オ市	オ峯	オ陽
オ伊豫	オ宮（神道）（一の宮に關係あるかと思ふ）	繁木（シゲキ）
オ河	オ門（關の如く、或る門の傍に住む爲めかと想像す）	オ島
オ岸	オ村	オ園
オ北	オ波（不運なりとかいふことの外は不明）	オ瀧
オ際（きハ）	浪速	オ谷
オ國	オ西	オ塚
オ京	オりん	オ山
オ町	オ崎	

次の表はそれに含まるゝ呼び名の性質に關はる上に於ては奇異なる混合である。或る名

は眞に美的で快い。或る名はただ工業的である。少數は極めて不快な綽名とも認めらる。

物の名及び特に女に屬する職業の名

綾子又はオ綾（京都の綾錦のことか）	オ釜（婢の名、婢はその娘をも婢にするつもりにて育つる故に、かかる醜き名もあり）	オ縫
オ文	かざし	オしめ（飾り結び）〔？〕
オ房	オ絹	オ染
オ糸	オ琴	オ椋
オ鎌（農家に多き名）	オ鍋	

次の表は全く物質名詞を名としたものから成る。そのうち或る呼び名は私にはその寓意が判からない。概言すれば貴い物質を示す呼び名、例へば銀や金の如きは美名である。石、岩、鐵の如き普通の堅い物質を示すのは性質の確實とか強力とかを暗示する。然し岩といふ名は時には長壽又は家族の生命の永續を願ふの象徴として用ゐらる。砂といふ奇名は個人の剛さ（グリット）と關係なく、それは半ば道徳的、半ば美的である。細かい砂、特に色のついた砂はこの造園の仙境たる日本に於て大いに貴ばれ、いつも汚塵なく美しくしておいて、園丁

の外は踐んではならぬ場所にはさういふ砂が敷いてある。

人の名として用ゐられたる物質名詞

オ銀　オ瑠璃又は瑠璃子（これはエスメラルダと同じき美感を含まず、瑠璃は概ね綠でなくて青、るり色は通常深い菫色）
オ石　オりゆう（精金屬）（？）　オ砂
オ岩　オ砂糖（？）　オ錫
オかね　オ石（セキ）　オ種
オ風（この奇名の理由不明）　オ鹽　オ鐵
オ金

次の五の呼び名は美名である、但し文字の上では知的の業に屬する物を意味す。少くもそのうち四は、西洋で文學の美といふ何物よりも、寧ろ書法、それは天下無双の極東の書法に關はる。

文學の名

オ文（ブン）　オ筆　オ文（フミ）

ォ書く〔?〕　ォ歌

數に關はる名は多々あるが頗る興味あるものである。此等は更に誕生の順序又は時を示す名と、祝賀の名とにあらまし二分される。一、三、六、八などの呼び名は概して誕生の順序による。但し時には誕生の日取りを示す。例へば私はォ六といふ人を知つて居るが、その人はその家の第六子であつたのではなくて、明治六年六月六日に此世に生まれたので、この名をつけられた。それから表に二、五、九が無いことがわかるがォ二、ォ五、ォ九などいふのは日本人には馬鹿らしくて考へられぬ。私はよくは知らぬがそれは不快な洒落を暗示する爲めかもしれぬ。だがォ二の代はりにォ次といふ名があつて、次の表にも見ゆる。八十から千、及びそれ以上にいたる數を示す名は祝賀の名である。それらは名の持主が極めて長壽であること、又はその子孫が幾百年も榮える樣にとの願を寓したのである。

數字及び數に關する語

ォ一　ォ三つ　ォ六
ォ三　ォ四つ　ォ七

オ八　　オ千　　オ八重

オ十　　オ三千　　オ數

オ五十（父五十歳にて擧げし長子の意なる事あり）　　オ万　　オ皆

オ八十　　オ千代　　オ半（英語のベタア・ハアフの意かと思はるべきも、これは父が半右衛門又は半兵衛にて其名の一音をとれるならむ）

オ百（「ひやくは」假名三つにて例外の樣なるがこれは一つ假名の如く發音す）　　八千代

オ八百　　オ重（シゲ）　　オ幾

誕生の順序に關する他の名

オ初　　オ仲　　オ末

オ次　　オ留

次の名の一類のうち或る者は多分美名てあらう。然し時にはかゝる名は誕生の時又は季節の關係だけてつけられる。そして此類の或る特別の呼び名の理由は人毎に尋ねて見ねば定め難い。

時及び季節に關する名

オ春　オ朝　オ今
オ夏　オ朝（テウ）　オ時
オ秋　オ宵（ヨヒ）　オ年
オ冬　オ小夜（サヨ）

實在する又は神話的なる動物の名が呼び名のまた一類となつて居る。此種の名は概ねその動物の表象する性質か器量かを養ふ様にとの望でつけられる。龍、虎、熊などの名は概ね外の性質よりは寧ろ道徳性を示す積りてある。鯉の道徳的象徴はよく知られて居て、ここに説明を要せぬ。龜と鶴の名は長壽に關はる。駒はそれが奇妙に思はれ様が愛撫の名である。

鳥、魚、などの動物の名

千鳥　オ鯉　オ熊
オ龜　オ駒　オ龍（リユウ）

オ鹿	オ章魚（タコ）（?）	オ鳥
オ鯛	オ龍（タツ）	オ鶴（縮めてオツといふことありこの頃東京にては子供を呼ぶごとくツチャンといふを習とす）
オ鷹	オ虎	オ鷲

花又は果、植物又は木の名なる呼び名すら概ね美的の意味の名よりは、寧ろ道徳又は祝賀の名である。梅花は婦徳の標章である、菊は長壽、松は長壽及び恒常、竹は忠信、杉は正直、柳は溫順及び形の優美を示す。蓮と櫻の花の象徴は恐らく熟知されて居よう。然し『花』や『瓣』は眞に美しい意である、百合は外國に於ての如く日本にても婦人の優雅の標章となつて居る。

花の名

菖蒲	オ花	櫻子
薔薇	オ菊	オ梅
オ瓣	オ蘭	オ百合
オ藤	オ蓮	

植物、果實、及び木の名

オ稲　オ豆　オ菅
楓　オ桃（これは百モモの誤字かも測られず）　オ杉
オ萱　オ檜　オ竹
オ榧カヤ　オ柳　オ蔦
オ栗　早苗　オ八重（花の名に相違なけれど、こゝでは八重櫻の略ならんか）
オ桑　オ核サネ　オ米ヨネ
オ槇　オ篠　若菜

光又は色を示す名は我々には凡ての呼び名の中、最美的と思はる。それは多分日本人にもさう思はれるのであらう。だが此等の名すらその關係的意味が一見して判かるのでは無い。色は昔の自然哲學に於て道德的及び其他の價値を有つ、而して西洋人の心にはただ光彩又は美をのみ暗示する名稱が實に道德的又は社會的に顯著なることに關はり、さういふ名の娘が光榮あるものになれかしとの望にも關はるのである。

光輝を示す名

オ三日（ミカ）（三日月の略ならむ）　オ照　オ露

オ光　オ月　オ雪

オ霜　オ艶（ツヤ）

色彩の名

オ藍　オ紺　紫（特に貴族的の名、但し華族女學校の名簿に見えず、色の名に概して少き故階級に關はらずこゝに集む）

オ赤　オ黒

オ色　綠（貴族的の名なれど中流にも見出さる）　オ白

次の最終の一類は種々奇異な謎を含む。日本の娘は時には家紋によりて名をつけられる。紋章學が此等呼び名の一二を說明し得よう。但し或る娘が舟と呼ばるゝ理由は私は確に推察し得ぬ。或る讀者はニイチエの「アンジエリンと呼ばるゝ小舟」を思出づるかもしれぬ。

アンジエリン——人はさう我を呼ぶ——
今は舟、かつて少女、
（嗚呼、いつまでも少女！）
漕ぐ人を戀ふ、あなたこなた、
立派に出來てる車が廻る。

然しかゝる空想は日本人の心には入るまい。だが私は家紋の表のうちに舟を示す意匠の變種二つ、箭を示すもの二十、弓を示すもの二つを見る。

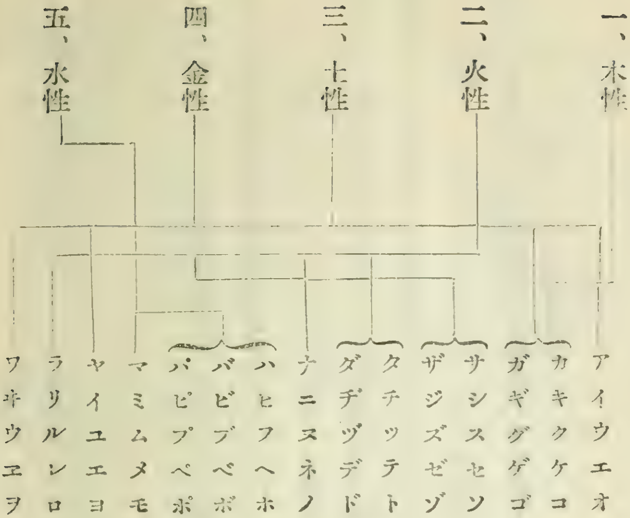
分類又は說明の困難なるもの

オ服（これはオ縫オ染と同類ならんか但し確ならず）	オ雷	オ民
オ舟	オ類	オとし（鋲）（？）
オ雛（愛撫の名、人形—紙人形、但し雛祭の雛もあり）	オ鈴（美しき音の爲めに名づく、子供の守り袋に小さき鈴をつけ、その歩むごとに鳴るは美しき風習）	
オ此（コノ）	鈴枝	オ對（ツイ）

オ尚　オ唯　オ綱
オ鳴（雷鳴）　手卷　オ弓
オにほ　鸊鷉）〔?〕

貴族の名に移るに先き立ち日本の名の昔の規則を擧げよう。それは奇妙な規則で前の諸表中の種々の謎を解くに助になるやも知れぬ。此規則は以前は男女とも總ての人名に應用された。本論に於てそれを十分に說明する譯にはいかぬ。滿足な說明には少くも五十頁を要す。然し最も簡單に云へば、この規則は、個人の帶ぶる名のはじめの文字が支那の哲學の意に於て、その人の所謂性（シヤウ）と思はるゝもの、卽ち星占術て定められた性質と一致すべしといふにある。その必要なる一致は漢字の意味てなくて發音て定まるのてある。此問題の困難なることは幾らか次の表て覺らるるてあらう。

日本文字と五行との發音的關係



三

現代貴族の名の例として私は明治十九年から二十七年迄の間に發行せられた華族女學校の報告を參照した。華族女學校は同族以外の女子も入學を許して居るが、私は研究の目的の爲めに華族のみの名を百四十七だけ選んだ。

三字四字の名は此等の中に稀であること、また現代の貴族の二字の呼び名は、發音も說明も一般の呼び名と差別が無いことが注意されやう。然し漢字で書くと外の女と餘程異るものがある。それは多くは複雜で見慣れぬ文字で書かれる爲めである。その樣な精妙の文字を用ゆることは主として次の表に見る如き同音異義の名が比較的多いことの說明になる。

華族女學校生徒の個人名

秋子	朝子	近子
明子	綾子	千鶴子
晨子（アキ）	千春子	千代子

えい子（[illegible]）〔?〕
悦子
藤子
繭子
文子
芙蓉子
冬子
花子
華子
治子
春子
はる子（遠く離るの意）〔?〕
初子
秀子
英子

博子
廣子
久子
ひさ子（繼續の意）
星子
育子
今子
五百子
糸子
龜子
周子
鐘子
かた子（條件）〔?〕
一子（カズ）
數子

和子
淸子
孝（日本語を知らぬ讀者に說明しかねるが、音訓の都合で子を省く、この名の音が一つの時も二つの時も）
鴻子
琴子
國子
邦
京子
萬千
誠（マコト）
正子
まさ子（信任の意）〔?〕
增子
また子（完全にの意）〔?〕

松子
三千子
峯
嶺子
光子
美代子
元子
長子
永子（永生）
波子
直子
によ子（神道にも佛教にもある何にても望むものを授くといふ如意寶珠より取れる名。地藏も此珠を有つ。『東方聖書』第十一卷なる大善見王の經第一章のヴエルリアの珠と同じ物ならん 譯者註一）
信子
のぶ子（多量）〔?〕
延子

範子
縫子
沖子
貞子
定子
櫻子
榮
里子
さと子（辨別）
せき子（大の意）〔?〕
節子
茂子
繁子（繁榮）
茂子（シゲ）（豐富なる生長）

しげ子（生長）〔?〕
しげ子（芳香）〔?〕
しき子（愼）〔?〕
島子
新子
靜子
靜江
園子
末子
助子
澄子
すみ子（眞實）
澄江
錫子
鈴子

鈴音
高子
孝（タカ）子
たか子（貴き意）
竹子
瀧子
玉子
珠子
爲子
民
たね子（成功）（?）
達子
多鶴子
田鶴子
輝子

鐵子
時子
留子
富子
智
知
友子
敏子
豐子
恒
常子
つね子（前と同義別字）（?）
つね子（眞實）
鶴子
艷子

卯女
梅子
八千子
八十子
八十四子
保子
寧子
安子
米子
賴子
よし（卓越）（?）
芳子
良子
愛（ヨシ）子
淑（ヨシ）子

よし子（悦）　　よし子（輝きて明）（？）　　行子
慶子（ヨシ）　　幸子（ユキ）　　豐（ユタカ）
よし子（幸）　　雪子

四

本論のはじめに私は純然たる美的の呼び名の好まれぬ理由は一面に極めて詩的の名が藝娼妓につけられる習慣の爲めであらうといつた。それで或る外人の誤解を正す目的で私は藝妓の名に就て二三の攻究を試みる。

藝妓の名は——他の名の類の如く——好奇的興味に充ち、またそれだけで眞に美しいが、尊敬と正反對の職業と聯想する爲めに全然俗化してしまつた。嚴密に云へば、此等の名は本研究の問題と全く關係が無い、それは實は個人名で無くて、唯だ職業の名稱に過ぎず、呼び名で無くて藝名であるからである。

かゝる名の大部分はある接頭字、接尾字の特徴がある。例へば左の如きものがある。

（一）上に若をつける、若草、若鶴、若葉、若駒の類。

二　上に小をつける、小艶、小花、小園の類。
(三)　下に龍をつける、（豆・龍は特に成功の象徴である）、玉龍、花龍、金龍の類。
四　下に治をつける、歌治、しゝね治（？）、勝治の類。
(五)　下に助をつける、玉助、菊助の類。
(六)　下に吉をつける、歌吉、玉吉の類。
(七)　下に菊をつける、三菊、雛菊、小菊の類。
八　下に鶴をつける、舞鶴、小鶴、糸鶴の類。

かゝる形式は證明の助にならう。然しまだ外のがある。眞名は概ね二つの漢字で書いて、三音又は四音に讀む。五音の眞名も折々ある、二音だけのは少くも藝妓には稀である。而してかゝる職業的の名は何等道徳的の意義あることは殆ど無い、これらは長壽、富、快樂、若さ、幸運などに關ける物の意義で、恐らく特に幸運に關係が多い。

近年都の藝妓の或る者のうちには上品な子を名の下につけることが流行となり、又は貴族的の呼び名を名乘るものさへ現はれて來た。一八八九年に東京の一新聞は法律の手段でこの事實を停止することを論じた。この事がこの問題に關する公衆の感情の證明を與ふる

と見られよう。

譯者註一　テニスン作 "Maud" XXII,IX の第一行。

譯者註二　譯者が『哲學雜誌』第十三卷、第百四十號（明治三十一年十月）第百四十一號（同十一月）第百四十二號（同十二月）に掲げたる『美感の研究』と題する論文。そのうち『女の名』に關する一部がこゝに參照せらる。

譯者註三　原文は澄なりしが右の雜誌に證と誤植せられし爲め、そのまゝ著者は、しるし（證）としたのである。

譯者註四　三十三種の名、そのうち同名二人が三つありし爲め、三十六人となりしこととの誤。

譯者註五　原名は假名の『ばんか』にあらず、漢字の『盤何』なりしが、意味判然せず、不明の部に入れおきしもの。著者はそれを植物と見た。

譯者註六　ユカブツの意不明。床ならぬことは確である。

譯者註七　拗の數一一とあるは一の誤。

譯者註八　著者は黎を金屬の青銅だと思つて、さう譯したが、こゝはもとの通りにしておく。

譯者註九　劍、紛などの名ありしを著者は釵と見誤りしならむ。

譯者註一〇　この誤は前述の（三）の通り。

譯者註一一　『東方聖書』第十一卷は第七卷の誤ならん。パリ語より譯せるヴィナナ本文といふ中に、佛

敎の Suttas といふものあり、その第六 Legend of the Great King of Glory Mahâ-Sudassana Suttanta.『大善見王經』といふ）あり。この大王を阿難陀といひ、七種の寶あり。その一を Veluria 卽ち寶珠といふとあり。但し『にょ子』といふ名が果して如意寶珠より取りしものか疑はしい。

尙ほ本文中著者の自註は概ね日本語の說明であるが、我が讀者に不用のものは省き、あるものは略記した、そのうち誤解も往々あれどそれらはそのまゝになしおき、不明のものは（?）を附けておいた。華族女學校の方の名も同校卒業者名簿を參照して見たが今考へ難きものが少からぬ。

本文のはじめの薔薇姫のことは小泉夫人が何か物の本にて讀みしかと思ふことを著者に告げられしによるらしといふ。

日本の古い歌

今年の正月元日の朝、見ると自分の机上に、自分が敎へて居る文學科の一靑年詩人からの非常に嬉しい贈物が二品藏つて居る。一品は新しい着物にとの織物――我が西洋の讀者が一度も見たことの無いやうな織物――の一卷(まき)である。その褐色の經(たて)は木綿絲であるが、緯(よこ)は不規則に黑の斑點のある白い柔らかい紙糸である。細かに檢べて見ると、その黑い斑點は支那文字や日本文字であることが判かる。といふのはその紙製の緯糸(よこいと)は、字の書いてある表面を外側にして、手際よく撚つて細い紐にしてある肉筆物――歌の肉筆物――で出來て居るからである。地合のその白と黑と褐色との全體としての感じは暖か味のある灰鼠である。出雲の多くの家庭でこれと似寄つた織物を家族用に製するのであるが、此の一卷(まき)は自分のその生徒の母が特に自分の爲めに織つたのである。頗る氣持ちのいい冬着になるであらう。そしてそれを着て居る時は、恰も神が日の光を纏うて居るが如くに、自分は文字通りに詩歌を身に纏うて居ることにならう。

他の一品はこれまた詩歌であるが、その原形を保つて居る詩歌である。餘り人の知らぬ書物から蒐めたもので、その殆ど全部が覆唱句（くりかへしく）を有つて居るといふ事實からして殊に興味のある日本の歌の筆寫した驚嘆す可き蒐集なのである。舊いのもあり新しいのもあり——いくつもの異常な物語歌（バラッド）、多くの踊歌、それから驚く許り種々雜多な戀歌を含んで居て——幾百の作品から成つて居る。感情に於ても構造に於ても、自分が、今迄の書物で、飜譯して見本を既に提供した日本の歌に類似して居るものは唯だの一つも無い。その形式は、多くの場合、奇妙にも不規則である。がその不規則さはそれ獨得の一種奇異な妙趣を有たぬでも無い。

自分はさういふ作品の——一つにはそれが情操的に珍らしい性質を有つて居るが爲めと、また一つにはその構造法が奇異なので、その方面に我々は得る所がありうるが爲めとて——實例を提供しようと思ふ。古い方の歌（古代の劇詩（譯者註一）から拔萃した）は殊に注目に値するやう自分には思はれる。思想若しくは感情とその發言とは極めて單純であるが、反覆と途切れとの原始的な手段に賴つて、頗る著しい效果が奏せられて居る。次記の見本のうち特に注意に値すると自分に思はせる事は、第一節の三行目で始まつて居て途中一種の和唱句

て中斷されて居る句が、次の節で繰り返されて言ひ終へられて居る遣り方である。恐らくはこの休止は、二重の和唱句がある英吉利の物語歌の或る物が、或はかの有名な

Au jardin de mon père–
  Vole, mon coeur, vole!
Il y a un pommier doux,
  Tout doux!

（ふる里の父の園生へ――
  飛べ、わが心よ、飛べ！
そこには林檎の木があつて
  甘い甘い實がなる！）

のやうな佛蘭西歌の妙な古い形式が與へる效果を、西洋の讀者に思ひ出させることであらう。然し日本の歌では途切れ句の反覆は、日本の舞踊の動作が西洋のどんな輪舞とも同じからぬ如く、この佛蘭西の作品の效果とは同じからぬ夢見るやうな悠々とした效果を奏する。

彼乃行（十一世紀のものであらう）

かの行くは
雁か鵠か
雁ならば。
（覆唱句）　ハレヤ、トウノ〳〵。
　　ハレヤ、トウノ〳〵。

雁ならば
名のりぞせまし
猶ほくぐひなりや
（覆唱句）　トウ〳〵。

上記の形式での古い敍情詩は澤山にある。構造は異つて居るが、これ亦古い劇詩から採つた別な歌を次に掲げよう。これには覆唱句は無いが、句の同じく特有な中絶がある。そ

してその四つ拍子の反覆の效果は情緒的に感銘が深い。

礒等（いそら）

いそらが崎に
鯛釣る海士（あま）も
鯛釣る海士も
我妹子（わぎもこ）がためと
鯛釣る海士も
鯛釣る海士も。

が然し次記の古歌では、言ひ終へて居ない句の異常な反覆と、二重の中絶とて、前のよりも尚ほ一層著しい效果を得て居る。自分はこれほど純然と自然なものは想像が出來ぬ。實に此の單純な發言の寫實は殆ど哀切の性質を有つて居る。

總角（あげまき）（古い敍情劇詩——年代不明）

總角（あげまき）を
早稲田にやりてヤ
其（そ）をもふと（譯者注二）
そをもふと
そをもふと
そをもふと
そをもふと

そをもふと
何もせずして
春日すら
春日すら
春日すら

春日すら
春日すら。

註　昔は、男の子は前の顱頂の毛だけ一總(ふさ)の垂れ髮を殘して頭を綺麗に剃るが習慣であつた。そんな垂れ髮を『アゲマキ』と呼んだもので、總といふ意味の語である。ところがしまひには其語が男兒或は童といふ意味を有つやうになつた。この歌のやうな意では——丁度英國の少女がその愛人のことを『マイ・ディア・ラッド』或は『マイ・ダアリング・ボイ』と言ふやうに、なつかしみいとほしみての言葉として使用されて居るのである。

反覆と覆唱句との他の形式を次記の二つの敍情詩が提供して居る。

鬢多多良(びんたたら)　（十二世紀の昔に作られしものと想はるゝもの）

びんだたらを
あゆかせばこそ
あゆかせばこそ
愛敬(あいぎやう)づいたれ。

ヤレコ　トウトウ。
ヤレコ　トウトウ。

様は天人　（多分十六世紀のもの）
様（さま）は天人（てんにん）。
ソレソレ
トントロリ。

乙女の姿
雲の通ひ路
ちらと見た。
トントロリ。

乙女の姿
雲の通ひ路

ちらと見た。

トントロリ。

自分が次に選んだのは年月不明の戀歌からてある。時代は鎌倉時代（一一八六――一三三二）てある　この斷片は、佛教の言葉が引いてあるのと、節（せつ）の形式が甚だ規則正しいのとが主として目立つて居る。

まことやら
鹿島の港に
彌勒の船が
着いて御座りまうす。
ヨノ！
サア、イヨエイ、イヨエイ！
サア、イヨエイ、イヨエイ！

ほばしらは

黄金(こがね)のほばしら
帆には法華經の
五のまんまきもの。
　サア、イヨエイ、イヨエイ！
　サア、イヨエイ、イヨエイ！
　…………………………

奇妙な覆唱句があつて、他の點で興味があるのは、『サイバラ』といふ奇妙な一類の敍情劇詩[譯者注三]の一つたる、今一つの『あげまき』といふ名の歌である。これには稍〻『放恣』といふ缺點があるが、殆ど同年代に作られたらしく思はれる我がエリザベス朝の歌の世人が賞讃するもののうちの或る物よりも餘計に非難を受くべきものとは自分は考へぬ。

總角(あげまき)　（多分十六世紀のもの）

あげまきや
トウトウ！[譯者注四]

尋(ひろ)ばかりや
　　トウトウ！
放(さか)りて寢たれども
まろび逢ひにけり
　　トウトウ！
かより逢ひにけり。（譯者註五）
　　トウトウ！

自分が次に掲げる一群の選擇は『地方の歌』から成つて居る。『地方の歌』とは自分にそれを蒐めて吳れた生徒の心では、特殊な郡或は國に固有な歌といふ積りである。いづれも——前に掲げた作品よりも古くはないけれども——古いもので、その興味は主として情緒的なところに在る。が、讀者は氣附かれるてあらうが、妙な覆唱句のあるのが數々ある。此種の歌は殊に村の踊に——盆踊や豐年踊に——歌ふものである。

戀　歌　（越後國）

花か蝶々か
蝶々か花か
　　ドンドン！
來てはちら〱迷はせる
來てはちら〱迷はせる。
　　サウカネ、ドンドン！

戀　歌　（紀伊國小川村）

聲はすれども
姿は見えぬ
深野のきりぎりす！

註　キリギリスは非常に音樂的な音を出す一種のグラスホパアである。色が全く草色だから、近く鳴いて居る時でも、之を見るのは困難である。此歌は田畠で仕事をしてゐながら歌をうたふ百姓の愉快な習慣を

仄めかせて居るのである。

戀　歌　（陸奥國津輕郡）

私の心と
沖來る舟は
らくに見せても
　苦が絶えぬ。

戀　歌　（周防國井關村）

涙こぼして
辛苦を語る
可哀らしさが
　ましまする！

戀　歌　（駿河國御殿場村）

花や能く聽け
性(しやう)あるならば
人がふさぐに
　何ぜひらく。

古の東京の歌

いやなお方の
親切よりか
好いたお方の
　無理がよい。

戀　歌　（石見國）

可愛らしさよ

螢の蟲は
忍ぶ繩手に
　灯をともす。

おどけ歌　（信濃國）

あの山かげて
光るは何ぢや
月か星か螢の蟲か
　月でも無いが
　星でも無いが
姑のお婆の眼が光る――
　（合唱）　眼が光る！

かへり踊　（讃岐國）

かへり踊（文字通りでは「變へる踊」又は「歸る踊」）の眞の意味は自分は確とは知らぬ。

おれが姑のたけちなや！

（合唱）　たけちなや！

流るゝ水にも繪をかけと！

流るゝ水に繪をかかば

あなたはそら夜の星ぞ讀め！

　　星ぞ讀め！

お庭踊はいざをどらう！

　　チャン、チャン！

　　チャチャ！

　　ヨイトセ！

　　ヨイトセ！

誰ぞやお裏に竹伐るは？

（合唱）　竹伐るは？

おれが殿御のうゑ竹を

　　うゑ竹を？

お庭踊はいざをどらう！
　　チャン、チャン！
　　チャチャ！
　　ヨイトセ！
　　ヨイトセ！

おれが姑（しうとめ）のたけちなや！
　　たけちなや！

岩を袴にたち縫へと！
岩を袴にたち縫へば
あなたは小砂を糸に縒（よ）れ！
　　糸に縒れ！

お庭踊はいざをどらう！
　　チャン、チャン！
　　チャチャ！
　　ヨイトセ！

ヨイトセ！

お寺踊　（伊賀國上野町）

お寺へまゐりて御門を見れば、
御門は白かね扉はこがね、
御門は氣高いお寺かいな、
　　　　お寺かいな！
お寺へまゐりて御庭を見れば、
せり〳〵小松は四方に榮え、
一の小枝へ四十雀が巣を
　　　　巣をかけた。
お寺へ參りて泉水見れば、
色々の小ばなを集めてござる、
めんめにその色咲き分ける、
　　　　咲きわける。

お寺へ參りて書院を見れば、
いろ〳〵の小鳥を集めてござる、
めんめにその音をいだしける、
いだしける。
お寺へまゐりて客殿見れば、
かゝへの屛風にゆえんをすゑて、
御經あそばすありがたや！
ありがたや！

註　四十雀は英語のマンチュリアン・グレイト・ティット。その巢を邪魔せずその雛を保護しやれば、そが巢をつくる庭の持主に幸運を齎すといふ。

通俗な歌——殊に田舍の蹄にうたふ歌——には記憶を助ける工夫に作られて居る種類のが多い。節の數は普通は十で、一節々々の第一の綴音がその句の前に置いてある數詞の第一綴音と音に於て同じなやうにしてあるのである。時には漢語の數詞を用ひ、時には日本語の數詞を用ひる。が、その規則は必らずしも完全に守られては居らぬ。次記の例に於て

一（ヒトツ）といふ日本語の初の二綴音を有つて居る第一句の最初の二綴音の一致はただ意味ての一致であることを觀らるゝであらう。イチといふは漢語の數詞であるから。

漁師[參考註七]の歌　（下總國銚子町[註一]）

一つとせ、
　一番船へ積み込んで、
　川口おしこむ大矢聲、[註二]
　　この大漁船！[註三]

二つとせ、
　二葉の沖から外川[註四]まで
　續いて押し込む大矢聲、
　　この大漁船！

三つとせ、
　みな一同に招をあげ、
　通はせ船の賑かさ、

この大漁船！

四つとせ、
夜晝焚いても焚きあまる、
三バイ一挺の大鰯、
この大漁船！

五つとせ、
何時來て見ても乾鰯場に。
あき間隙間は更に無い、
この大漁船！

六つとせ、
六時から六時まで粕割が。
大割小割で手に追はれ、
この大漁船！

七つとせ、
名高き利根川一面に、

粕や油を積み送る、

この大漁船！

八つとせ、

八手舟（やてぶね）[註五]の沖合若衆が、

萬祝（まんしゆく）揃へて宮まゐり、

この大漁船！

九つとせ、

此浦守（まも）る川口の、

明神利益（りやく）を現はする、

この大漁船！

註一　銚子といふは可なり重要な町で利根川の河口に位して居る。鰯漁で名高い。鰯といふはサアディンの大いさの魚で主としてその油の爲めに漁獲する。此海岸で採れる油の量は大したものである。煮て油を搾るのである。その搾滓は肥料として内地へ送られる。

註二　櫓を漕いでゐる水夫全體の合唱を「矢聲」と呼ぶ。

註三　形容詞「大」は「漁」を形容するので、「船」を形容するのでは無い。

註四　恐らくは「外川」は利根川河畔の銚子から遠くは無い、外川といふ川の口の村を指すのであらう。この兩河は堀割で結合されて居る。川を意味して居るのか、村を意味して居るのか、文句の上では明白で無い。

註五　ヤタイとは宗教的行列に於て綱で曳く裝飾された車に與へる名である。ここのヤタイブネはそんな車に載せた小舟の雛形か、或は宗教的行列でのそんな裝飾をした小舟か、を意味するもののやら思はれる。自分は美保關で、或る宗教的行列の時祭り屋臺の上に載せてあつた、本當の小舟を見たことがある。

少くとも百年前に作られた或る子供歌に此の數詞的排列の一層奇異な一例がある。江戸の小娘共は手毬を弄びながらその歌をうたつたものである。今日と雖も、東京の靜かな街路てならどんな街路でも、それと同じ手毬遊戲を女の子がして居るのを見ることが出來る。歌の拍子に合はせて巧みに手で打つて、殆ど垂直な線にいつも手毬が彈き上がるやうにし續ける。上手な者は一突(ひとつき)も仕損ぜずに、その歌をうたひ終はることが出來なければならぬ。仕損ずるとその手毬を今一人の者に讓らなければならぬ。面白い『手毬歌』が澤山にあるが、次記の古風な、永く忘られて居る歌は道德的な一珍品である。

上記のが、より普通な遊び法(かた)であるが、他の形式が澤山にある。時には二人で一緒に同じ手毬を――彈(はず)む毬

をかたみがはりに突いて——もてあそぶ。

一つとや、
　人は孝なを人といふ、
　恩を知らねば孝ならじ。
二つとや、
　富士より高き父の恩、
　常に思うて忘れまじ。
三つとや、
　水うみ却て淺しとは、
　母の恩ぞや思ふべし。
四つとや、
　よしや貧しく暮らすとも、
　直ぐなる道を曲ぐるまじ。
五つとや、

いつも心の變はらぬを、
誠の人と思ふべし。

六つとや、
空しく月日を暮らしなば、
後の嘆と知りぬべし。

七つとや、
慈悲は人の爲めならで、
我が身の爲めと思ふべし。

八つとや、
厄難無量の禍も、
心善なら逃るべし。

九つとや、
心詞の直ぐならば、
神や佛も守るべし。

十とや、

貴い人と成るならば、
孝行者といはるべし。

註　ヒト・パアスン）は男にも女にも用ひ、屢々『人々』（ピイプル）『人類』（マンカインド）の意にも用ふる。『人といふ』の『人』は『人間』（ヒユウマン・ビイング）の意。

讀者は『「手毬歌」』にさへ道德敎訓の反復を要求し得る訓練はどんなにか恐ろしくやかましいものだらう』と思はれるかも知れぬ。いかにも七やかましい、――が然し此の世界がこれまで見たことの無い程の非常にうるはしい型の女をそれが造り出したのである。

或る踊歌ではその覆唱句は各節の最後の一行又は最後の一行の一部分の反復だけで出來て居る。次記の珍奇な物語歌はそれを實行して居る一例で、且つまた吟詠文の或る句の處へ挿入されて居る妙な擬聲的合唱があるが爲め、一層特色のあるものである。

鐘卷踊歌（伊賀國名賀郡）

京山伏は熊野へ參る。

白たか濱が長者屋へ腰掛けて、
三つになる姫抱きそめて、
妻にしよというて戯れられた、
　　（合唱）　戯れられた。
それから山伏や諸國を廻る。
その姫が十三といふ年又まゐり來て。
姫よ姫よ約束の姫よ。
連れておいきやれお山伏、
　　（合唱）　お山伏。
いままたまゐる、また參る。
こんど下向にや連れていこ、
　　（合唱）　連れていこ。
それから山伏逃げられて。
早よ／＼急げば早よ。
田なべみなべを早打越して、

小松原まで逃げられた、

（合唱）　逃げられた。

カッカラ、カッカラ、カッカラ、カッカ！

特殊の合唱といつたやうなものになつて居る此の擬音は、全く擬聲に他ならぬもので、非常に早く走つて居る下駄穿きの跫の音を現はすつもりのものである。

それから姫が追ひかけて、
早よ〳〵急げば早よ。
田なべみなべを早打越して、
小松原まで追ひかけたさ、

（合唱）　追ひかけたさ。

それから山ぶしや逃げられて、
あもだの川まで逃げられて、
あもだの川の船頭を頼む。
後から姫が追ひかけ來るに、

渡して給るな船頭殿や、

（合唱）　船頭殿や。

デボク、デボク、デボク、デン、デン！

此の擬聲は、適當な身振をして、踊手が皆、合唱するのであるが、渡守が漕ぐ櫓の音を現はしたものである。擬音そのものには何の意味も無い。

それから姫が追ひかけて、
あもだの川で追ひかけて。
あの船出しやれ、この船出しやれ。
あの船出さぬ、この船出さぬ、
女人禁じの船てそろ、

（合唱）　船てそろ。

渡さにや渡る、渡さにや渡る。
あもだの川にや渡りよが御座る。
はいたる草履を手に持ちて、

はいろと思たら蛇になりて、
十二の角が生えそろた、
（合唱）　生えそろた。
それから山ぶしや逃げられて、
道成寺てらまで逃げられて、
道成寺てらの同職衆を頼む。
後から姫が追ひかけ來るに、
隱してたもれよどじゆくしゆ、
（合唱）　どじゆくしゆ。
それから同職衆が御相談なさる。
釣鐘下ろしてかくされた、
（合唱）　かくされた。
それから姫が追ひかけて、
道成寺てらまで追ひかけて、
御門のけあげにしばらく立ちて、

庭なる鐘を不思議と思て、
一巻まこよ、二巻まこよ。
三巻と巻いたら湯になりたさ、
（合唱）　湯になりたさ。
鐘巻寺の縁起をきけば、
日本の浦にや姫多いけれど、
長者が娘が蛇になりたてさ、
（合唱）　蛇になりたてさ。
鐘巻踊はこれまてさ、
（合唱）　これまてさ。

註　この傳説は古今幾多の日本劇の材題となつて居る。元の話は斯うである。安珍といふ僧が無謀にも淸姫といふ乙女に戀情を起こさせ、僧たる身の故にその娘に結婚することが出來ないが爲めに、娘が言ひ寄れぬやう逃げて身の安全を求めた。淸姫は挫かれた熱情の激しさに、火のやうな龍蛇に姿を變じた。そしてその姿でその僧を追跡して、（今の紀州の）熊野の道成寺といふ寺へ行く。僧は其處の大鐘の下へ身を隱して居るのである。がその龍蛇はその鐘を卷くと、その鐘は直ぐに赤熱して、中なる僧の身體は全く燒

けてしまつた。

此の粗笨な物語歌では清姫は——長者、即ちその村の金持たる——一旅宿主人の娘となつて居る。そして僧の安珍は山伏に變はつて居る。山伏といふのは眞言宗と呼ぶ妙な宗派の一處不住の僧で——神道佛教兩方を奉じて居る、諸國巡歴の、惡魔拂禁厭卜者である、否、少くともあつた。近年その職を行ふことを法律で禁じられたから、本當の山伏は今は滅多に眼にすることは出來ぬ。

道成寺は巡禮者が參詣する有名な寺で、紀州の西岸の御坊(ごばう)から遠くは無い。安珍と龍蛇との出來事は十世紀の初にあつたとの事である。

自分は街路(とほり)を歌ひあるく本當の物語歌(バラッド)の——方々ぶらつきあるく三味線彈(ひき)が普通に歌ふやうな物語歌の——たつた一つの見本を與へよう。これは音格が不規則に出來て居て、一行の長さ十二綴音から十六綴音に至つて居るが、多くは十三綴音である。その作の年代は分からぬ。が、その子供時分にその歌はれるのを聞いたことを覺えて居る老人の話では、天保(一八三〇——四三)時代に流行つたといふ。節(せつ)には分かれて居ないけれども、不規則な間を置いて休止があつて、其處の處でヤンレイといふ覆唱句がある。

お吉清三くどき

今度サアエ、哀れな情死ばなし、
國は京都にその名も高き、
糸屋與右衞門有徳な暮らし、
店も賑か　暮らしも繁昌、
一人娘にお吉というて、
年は十六　今咲く花よ、
見世の番頭に清三というて、
年は二十二で男の盛り、
　　　　　ヤンレイ！

器量よければお吉が見染め、
通ふ〳〵が度重なれば、
親の耳へもそろ〳〵はいり、

これを聞いては儘にはならぬ、
　　ヤンレイ！

そこでお吉を一間へ呼んで、
店の清三と譯あるさうな、
思ひ切る氣か切らぬかお吉、
　　ヤンレイ！

これさ母さん何言はさんす、
俺と清三とその仲仲は、
墨と紙とのしみたが仲よ、
何が何でも離れはしない、
　　ヤンレイ！

奥の一間へ清三を呼んで、

其方(そち)を呼ぶのは別儀ぢや無いが、
内の娘のよいきをはらし、
夫(それ)を聞いては置かれはしない、
仕舞うて行かんせ今日(こんにち)かぎり、
ヤンレイ！

じたい淸三は大阪生(うま)れ、
物も言はずに唯だハイ〳〵と、
家(いへ)へ歸りて四五日經つて、
お吉思うて病氣となりて、
是非も叶はぬ相果てました、
ヤンレイ！

お吉とろ〳〵眠りし處(とこ)へ、
夢か現(うつつ)か　淸三が姿、

枕元へと顯はれました、
そこでお吉は不圖眼をさまし、
見れば清三が姿は見えず、
ヤンレイ！

さらばそれから清三が方へ、
親の手許を忍んで行きやる、
ヤンレイ！

在へサアエヽはいれば船場が御座る、
船にや乘らんで陸路を行きやる、
急ぐ程なく大阪町よ、
清三やかたは何處かと聞けば、
橋のもとより三軒目で御座る、
ヤンレイ！

清三やかたの前にとなれば、
笠を片手に腰をば屈め、
御免なされと腰打かけて、
清三やかたは此處かと聞けば、
　　　　ヤンレイ！

物の哀れや清三が母は、
數珠を片手に唯だ泣きながら、
若い女中は何處から御座る、
　　　　ヤンレイ！

わたしや京都の糸屋の娘、
清三さんには譯ある故に、
遠い處を尋ねて來たよ、

どうぞ清三さんに逢はせてお呉れ、
ヤンレイ！

そちが尋ねる清三は果てて、
今日は清三が七日で御座る、
聞いてお吉はただ泣くばかり、
ヤンレイ！

さらばこれから墓所へ參り、
立てた塔婆にすがりて泣けば、
ヤンレイ！

人の思は恐ろし物よ、
清三墓所は二つに割れて、
其處へ清三が顯はれ出でて。

『キリアムとマアジョリイ』（チャイルド編第二巻一五一頁參照）といふ古い英吉利の物語歌に、墓が開いたり閉ぢたりすることに就いての珍らしい想像が詠まれて居る。

後をしたひて　路たかくひくく
　草綠なる　墓場に着きぬ。
深き墓石　打ち開かれぬ、
　見ればキリアム　寢ねてぞありし、

とある。

其處へ來たのはお吉ぢやないか、
遠い處を能く來て呉れた、
お吉泣くなよ　泣いたるとても、
どうて此世で添はれはすまい、
わしを思はば香花（かうはな）立てて、

來る命日に回向を賴む、
　　ヤンレイ！

と言うて滿三が姿は消える、
これさ待たしやれこれ待たさんせ、
そなたばかりは一人はやらぬ、
わしも一緒に行かねばならぬ、
　　ヤンレイ！

この挿話と「うるはしのキリアムの魂」（チヤイルド編第二卷一四八頁參照）の結末とを比較されたい。

「此處に居たまへ　立ち去りますな」
　操正しき　マゲリト叫ぶ。
顏靑ざめぬ、　眼をとぢぬ
　やはき手を延べ、呼吸絶え果てぬ。

とある。

寺の大門四五丁離れ、
小石拾うて袂へ入れて、
前のお濠へ身を捨てまする、
　　　ヤンレイ！

自分は佛教的なのを二つ引用して、人の餘り知らぬ歌の野原へのこの短時の遠出を終はることとしよう。初のは多分十二世紀の末か十三世紀の初かに作られ「源平盛衰記」といふ有名な書物のうちにあるものである。「今様」といふ音格で――即ち、七綴音と五綴音とのかはるがはるの短い句（七、五。七、五。七、五。と無制限）で書かれて居る。今一つの哲理的な作品は十六世紀の『隆達節』といふ歌集から採つたものである。

一　（今やう調）

様も心も　變はるかな！
落つる涙は　瀧の水、
妙法蓮華の　池となり、

弘誓の船に　棹さして、
沈む我が身を　乘せ給へ！

二（文祿年間——一五九二—九六——のもの）

誰れか再び花咲かん
あだ夢の間の
露の身に。

譯者註一　劇詩（ドラマ）とあれど寧ろ謠ひ物とあるべきもの。
譯者註二　『もふと』は『おもふと』の意。
譯者註三　劇詩は謠ひ物とあるべきもの。
譯者註四　原英文に『トントン』とあるは誤。
譯者註五　『かより』の『か』は接頭語。『かより逢ひ』は『寄り逢ひ』なり。
譯者註六　原歌は此一節は『お寺へ參りて御庭を見れば、せりせり小松は四方へ榮え、一の小枝へ四十雀は巢に巢をかけて、其子が育てばお寺繁昌、お寺はんじよ』なり。そのまゝ逐字譯しては行數他の節よりも多くなる爲め都合よく自由譯されしなり。

譯者註七　第一節『一番船へ積み込んで』は『一番づつで積み立てて』とも歌ふ。第二節『二葉の沖から外川まで、續いて押込む大矢聲』は『二葉の沖側外川まで、續いて押込む大鰯』とも歌ふ。

幻想

人々各〻流を下り
空しく想ひまた夢む
時の川が
その水面に彼の生るゝ前に過ぎ
彼の目閉づる後に達すならん
國土を

マシウ・アァノルド　（『未來』より）

夜光蟲

月いまだ昇らず、夜の大空に星湧くが如く、いとも明かるき銀河の橋を渡し、風立たず、見渡す限り海は火の漣波立てて駛る、幽冥の美の幻覺。波頭のみ輝き、その間は全く黒く、しかも照明は驚くばかり。波動は概ね燭の焰のごとく黄なれど、紅に射る光もまたあり、――しかして蒼、また橙黃、また鮮綠。一切の蜒々たる煌きは、多量の水の脈搏ならで、多數の意志の努力かと思はれ――意識ある怪しき物の疾き移ろひ――冥界の深淵に龍の生の限りなく蜿き且つ群れ動くかと疑はる。

實に生命がその光景の奇怪な光彩を呈して居るのであつた――それは無數の生命、しかも幽靈の如く纖細のもの――限りなき生命、しかも蜉蝣のそれ、空の線までも水の全面に亘り絕え間あらぬ變遷のうちに燃えては消ゆる、なほその上なる更に廣き深淵には異る無數の光が異る分光の色に鼓動して居た。

見守りつゝ私は驚きまた夢みた。私は夜と海との巨大なる燦爛のうちに表現された究極の靈を想ふた――それが我が上には、分解せる過去の恐ろしき融合によつて輝く諸ゝの系統となり、再生すべき生命の濛氣を包んで蘇り、また我れの下には、流星の迸り、星座、またそれより冷たき光の星雲の質となりて動くを想ひ――遂には私は太陽星の千萬年にも、不斷の分解の流にあつては、消えゆく一の夜と海の瞬時の閃光に勝さる何者ありやと疑ふにいたつた。

この疑と共にすら幻覺は變つた。私はもはや火の振動する昔の東洋の海を見ずに、永遠の夜と廣さ、深さ、高さを一にするかの潮流を見た――死と生の岸邊なく時間なき海。億萬の太陽の光の霧――銀河の霄靄――それは無限の潮の流に於ける單一の熛ぶる波動であつた。

またも起こる一の變化、私はもはや諸ゝの太陽の濛氣の如き波動を見ず、私の周りに無限の閃光を放つて流れ且つ震へる生ける暗を見た、そして閃光の一つ一つが心臟の如く鼓動し、――海の火の彩りの如き色を打ち出して居た。そして一切の物の射る如き光は照明の振動する絲の如く無限の神秘のうちに流れ去つた。

それて私は自己もまた燐の一點――測られぬ流に浮かぶ泡沫の如き閃きてあることを知つた、――そして我がものたりし光は思想の變化毎に色の移ろへることを見た。時には紅玉と輝き、時には青玉、忽ちそれが黄玉の焔となるかと見れば、また碧玉の火となる。そして變化の理由は十分に悟れなかつた。然し地上の生命を思へば光は赤く燃ゆるかと見え、天上の存在――靈の美と靈の幸との存在――を思へば蒼と紫の不滅のリズムと燃ゆるかと思はれた。

然し凡ての視界に白光は全く無かつた。そして私は不思議に思つた。

そのとき一の聲が私にいうた――

「白は高位のもの、億萬の混合によりて成る。その燃ゆるを助成するは汝の役目。汝の燃ゆる色と汝の價値と正に相同じ。汝の生くる間は暫時のみ、されど汝の脈搏の光は生き續く、その光明の時の汝の思により、汝は神々を造るものとなる」

橋の欄干に倚り下の流の皺や襞を眺めたことのある人は、其水は瞬間毎に變はりながら微動する表面の姿はいつも變はらぬことに心惹かれなかつたものは無からう。此光景の神祕に魅力がある、そしてそれを考究する價がある　それ等の振動する型は我々の存在の謎の象徵である。我々のうちに於ても物質は絶えず無限の流と過ぎて變はりゆく、然るに形は、常に種々内に相鬩ぐ力に激せられながら、多年に亘りそのまゝに殘る。

また或る大都の街路に注ぎては脈搏つ人間の流を觀て誰れか同じく魅せられぬものがあらう。これもまたその流と反流と渦卷を有つ、——それらは都の勞作の海のさす潮と引く潮とにより或は强く或は弱くなる。然し我々にとつてより大なる光景の引力は實は運動の神祕ではなくて、寧ろ人間の神祕である。外面の觀察者としては我々は主として過ぎ行く形や顏に——それ等が人格を暗示し、それらが同情または反感を思はせることに感興を有つ。まもなく我々は一般の流を思はなくなる。何故ならば人間の流の原子は我々の目に見

え、我々は彼等の歩むを見、彼等の運動は我々自らの歩行の經驗て十分說明せらると考へる。然るに目に見ゆる個人の運動は、いつも見えぬ水の分子のそれより一層神祕である。——私は運動の一切の形式はつまり不可解であることは忘れて居らぬ、私はただ意志に賴ると想像されて居る運動に就ての我々の普通の關係的知識は、水流の原子の行動に關して我々の有ち得る關係的知識よりも、もつと少いといふ事實に言及して居るだけである。

大都會に住んだ人は誰れても、人通りの多い大通を過ぐる人間の流を調節する運動の或る法則の有ることに氣がついて居る。（我々は目前の目的の爲めには、馬蹄や車輪の音喧しき、生命ある川の複雜な中流に就て考へなくともよい、私は唯だ側方の流に就てのみ談らうとする）そのどちらかの步道にて、群集は自然に上りと下りの二つの流に別かれる。一方に行く人々は右側を通り、他方に行く人々は左側を通る。此等二つの流の何れかと共に動けば速かに進めるが、我々はそれに反對しては行かれぬ、唯だ醉漢や狂人のみがそんなことをする。二つの流の間には、壓力の理によつて、個人が互に左に右に斷えず自己排除を行つて居る。かく讓り且つ遁れる樣は、二重の流を畫くときに上りと下りとの電光形の中間線て示されやう。この不斷の讓步がありてこそ進行は可能になる、それが無くては

相反する兩流が忽ち側面の壓力の爲めに互に立ち止まりになる。然しこの系統的な自己排除が研究の價あるところは街の角に於ての如く二つの群集の流が相互に交錯する點である。誰れでもこの現象を認めるが、それに就て考へる人は少い。誰れなりと本氣に之を考へる人は其處に神秘の存することを見出すであらう、――それは如何なる個人の經驗も十分には說明し得ぬ神秘。

大都會の人の群れる街路の何れにても、幾千の人々が互に擦れ違ふ爲めに左に右に斷えずわきに寄る。かゝる群中、二人の人間が反對方向から向かひ合つて來るとき次の三の場合の何れかが起こる、――卽ち、相互に讓るか、一人が他の爲めに讓るか、または兩方とも調和するつもりで同時に同方向に歩み出て、その誤を改めるとてまた直ぐ誤を反覆し、互に人を遮りつづけて、そのうちに其愚を悟つた方が立ち留まるか、または稍ゝ激昂した方が相手を一方に押し退ける。然しかゝる誤は比較的に少く、概して必要な讓步が速かに正しく行はれる。

勿論すべて此の自己排除を調節する或る一般法則がなければならぬ、――それは最小抵抗の方向に於ける運動の普汎の法則と一致する法則である。我々はこの事を覺るには何れ

の人の群れる街路でも午時間も注目せば足る。然し法則はさう容易に見出されまたは形造られぬ、この現象には種々の謎がある。

我々が群集運動を嚴密に研究すれば、相逢うて一人が道を讓る場合は、二人共に道を讓る場合より餘程少いことを認めるであらう。然し少し反省すると、相互讓歩の場合でも一人の方が必らず相手より早く讓るに相違ない、――但し發動表現の時の差は――屢〻然る如く――全く判からぬ程であらう。蓋し身體上及び精神上の性格の總量は二人の人間に於て精密に同一であり得ぬからである。如何なる二人も知覺と意志の能力が全く同じであることはない、また精神上及び身體上の活動に現はるゝ經驗の性質が全く同じであることも無い。故に一見すれば相互讓歩と見ゆる場合にも、讓歩は實は連續的であつて同時では無い。こゝに『個人方程式』と呼ばるゝ事が、相互讓歩のあらゆる場合に一人は必らず他人よりさきに讓ることを證明するとも、それて讓歩が相互的で無い場合の個人の發動の神祕を毫も說明せぬ、我々は或る時は自分に向つて來る人に讓歩させ、また他の時には此方で讓歩せねばならなくなるのは何故なるかをそれは說明せぬ。この感情の起原は何か。

嘗て一人の友が此問題をば、街路の群中、相逢ふ各〻の二人間に眼の決鬪が行はれると

いふ巧妙な說で解決せんと試みた。然し彼の說は千のかゝる場合のうち五六の場合の心理的事實を說明するにも足らぬと思ふ。濃厚な群中相互に急ぎ合ふ人々の大多數は人の顏を見ることは稀である。唯だ無關心の閑人のみがそんなことをする時を有つて居る。幾百の人が實際眼を路面に注いで街路を過ぎて行く。要するに急いで行く人は容貌を瞬時に見て、それによつて行動する樣なことは無い、――彼れは通常彼れ自らの思ひに沈んで居る。……私は自己の場合を反覆して研究した。群中にあつて私は人の顏を見ることは稀で、それて何等の意識的觀察なくして、私は何時道を讓るべきか、また何時我に向かひ來る人が道を讓つてくれるかを知ることが出來る。私の知識はたしかに直覺的である――唯だの感情の知識である、そして私は、あの盲目的能力、それによつて眞の暗の中で、人が未だ手を觸れずして巨きな物の近接するを知る能力以外、それと比較すべきものを知らぬ。私の直覺は殆ど誤る事は無い。若し私が之に從ふことを躊躇すれば必らず衝突の結果を來たす。

更に、私の自動的または少くとも半意識的行動が理性的行爲に變はる時、――もつと明らかに云へば、何時でも私が自分の運動を考へ始めるときは、必らず間違ひをする。何か外の事を考へて居るときのみ、――私が殆ど自動的に行動して居るときのみ、私は群衆の中を容易に縫つて行かれる。實際、私一個の經驗によれば濃厚な群衆の中を迅速に、且つ

安全に通らせるのは、全く意識的觀察によらず、ただ理性的ならぬ直覺的知覺に由ることを悟る。然るに何れの直覺的行爲も遺傳的知識、即ち過去の生命の經驗を代表するものてあるが、此場合にはそれが無數の過去の生命の經驗てある。

　全然數へられぬ程……何故私はさう考へるか、それは群中に自己を直覺的に指導する此能力は人間とずつと劣等の動物と共通のものてあるので、それが人間よりも極めて古き能力てなければならぬ進化的の證據てある。牛や鹿や羊の群は相互讓步の同一現象を我々に示すてはないか。また鳥の群、特に群居性の鳥、烏や雀や、野鳩もさうてはないか。また魚の群も、蜂、蟻、白蟻の樣な蟲の中に於てすら我々は直覺的自己排除の同一法則を學び得る。讓步は何れの場合にも想像されぬ程に古い遺傳の經驗を代表するに相違ない。かゝる遺傳の全過程の跡をたどる事が出來れば、我々は此地球上の感覺ある生命の最初に溯るにとどまらず、尙ほ遙かに、無感覺物質の歷史にまでも、更に元素の原子中に蓄へらるゝ神經傾向の原始的進化までも戾らねばなるまい。かゝる原子は多數抵抗の點として、不可解の力の不可解な組み合はせとしてのみ我々は知る。原子の諸傾向すら疑も無く遺傳の集積を示す――然してここに至れば無限の謎の永遠の障壁に突き當たつて思考は停止する。

ゴシック建築の恐怖

一

教義問答（カテキズムス）で所謂理性年齢に達せしよりずつと以前に私は、いやいやながら屢〻教堂に連れて行かれた。その教堂は頗る古くて、私にはその内部が四十年前に惡夢の樣に見えた通り明瞭に今も目に見える。其處ではじめて私はゴシック建築の或る形式が誘起する特殊の恐怖を知つた……私は horror（恐怖）といふ語を古典的の意に用ゐる、即ち幽靈の恐ろしさといふその昔の意味である。

私の子供心の想像は、此經驗の一番はじめの日に、恐怖の根源を置くことが出來た。窓の枯凋して尖れる形が直に私を怖れさせた。その輪廓に私が眠るときに私を苦しめるお化けの形が見えた、そして直に怪物とゴシック教堂との間に或る恐ろしい類似を想像する樣になつた。すると高い戸口にも通廊の穹窿形にも、屋根の肋骨形にも交會線にも、私は外

のもつと手荒い恐怖の暗示を見出した。廻廊の上に影の如く高く聳ゆる、オルガンの前面さへも恐ろしい物と思はれた。『御前は何が恐ろしいのか』と突然訊かれて答へなければならぬとしたら、私は『あの尖つてるところ』と囁いたてあらう。それより外に説明が出來た筈は無い、私はただあの尖頭が恐ろしかつたことを知る。

其の敎堂で私の感じたことは私が化物を信じて居る間は勿論、それが私の心に眞の謎とはなり得なかつた。然るに迷信的恐怖の年を過ぎて久しき後、他のゴシック的經驗が子供の感情を別に復活させ、それは子供の想像てこの感情を說明し去ることは出來ぬと思はせて私を驚かした。それから私の好奇心が起こつた、そして私は恐怖の何等かの合理的原因を發見しようと試みた。私は多くの書を讀み、多く質問したが、神祕はただ深くなるのみてあつた。

建築に關する書は全く失望であつた。その中て見たことよりも、ゴシック建築の恐ろしさに言及した純然たる小說の方が私に印象を殘した、――特に或る作者がゴシック敎堂の內面を夜間に見ると或る巨大な動物の骸骨の內部に居る樣な觀念を抱くといつた告白、及び敎堂の窓を口に比し、その戸を『人を喰ふ』大きな口に比した、よく評判になつて居る比較を尤もと思つた。此等の想像は餘り說明にはならぬ、それらは漠然たる暗示以上に開

展されぬ、然しそれらは感情に訴ふるところがあつて、體に或る美に觸れて居ると私は感じた。眞にゴシック伽藍の建築は骨の構造と不思議に似て居る。そしてそれが心に與へる一般の印象は生命の印象である、然しこの生命の印象または感覺は定義を下しかねる、——何等有機的な生命の感覺でなくて、隱れたる魔の生命のそれである。そしてその生命の表現は構造の尖頭部にあると私は感じた。

高さ、暗さ、大いさの影響で感情を解說しようとする企ては、私には何の價も無かつた、何故ならば何れのゴシックの伽藍よりも高く大きく、且つ暗くて、建築の別種に屬する、例へば埃及建築の如きものは同樣の印象を生ぜぬからである。故に恐怖はゴシック作りに全く特有の或るものに因るのであつて、この或るものが穹窿の頂上に徨つて居るのであることは確實だと私は感じた。

或る宗教家なる友人が云ふた、『左樣、ゴシック建築は恐ろしい。それは基督教の信仰の示現である爲めである。他の何れの宗教的建築も精神の憧憬を象徵するものは無い。ただゴシックがそれを具象して居る。各部盡く攀ぢまた跳る、上の方はすべて翔りまた火の如く光つて居る……』と。私は答へた、「君の言には餘程眞があるかも知れぬ、然しそれは私を惑はす謎には觸れない。何故に精神の憧憬を象徵する形が恐怖を生ずるのであらう。

何故に基督教の法悦の表現が驚愕を覺えさすのであらう』と。

尙ほ外の多くの假說を試みても無効であつた。それで私は恐怖の祕密は何となく穹窿の尖頭部に屬すると思はるゝ單純にして粗野な悟りに返つた。然し幾年もそれが判からないで居た。終に、終に或る熱帶地の早朝に、私が椰子樹の堂々たる一群を眺めて居たとき、思ひがけなくそれが現はれて來た。それでもつと前にどうして謎を解けなかつたかと我が愚さに驚いた。

二

多くの椰子の種類の特徵は繪や寫眞で見慣れて居た。然しアメリカの熱帶地の巨大な椰子は、今の繪で示す方法では適切に現はし得ぬ、それは實物を見ねばならぬ。高さ二百呎もある椰子を描くことも寫眞に撮ることも出來ぬ。

かゝる樹の群を熱帶森林の自然の環境ではじめて見るのは偉大な驚異であつて、驚いて物が言へなくなる。溫帶で見る何物も――カリフォルニヤの斜面地のもつと巨大な生長す

らも――あの偉大な柱列の魔の如き嚴肅さに接する爲めに我々の想像を準備させ難い。その石に似た灰色の幹は一本毎に完全な柱である、――但しその柱の洪大な優美は人間の作物に比すべきものが無い。この巨大な柱の天に冲するを仰ぐには、頭をづつと背ろに引いて、綠の薄明りの深淵を通して上へ上へと見上げ、終に森の屋根たる枝や攀援莖の無限の交錯の中の切れ目を超えて遙に――柱頭をわづかに眩視する、それは蒼空の電氣の觀念を暗示する程に目映ゆい空に擴げられた綠の羽の傘。

かゝる視覺が刺戟する感情、それは驚異と呼ぶには餘りに強く、享樂と呼ぶには餘りに氣味惡るい、この感情は何であらう。その最初の衝動が過ぎて――その中に籠められた種の要素が差の廣い諸〻の觀念の群を動かし出すときに、はじめてそれが如何に複雜であつたかを覺える。個人の經驗に屬する多くの印象は、疑も無くそのうちに甦る、但しそれと共にもつと影の如き感覺の群、――有機的記憶の集積も立ち返る、――何となればこの感情を惹き起こす熱帶地の形態は人類よりももつと古き歷史を有つて居る故に。

明らかに辨別さるゝ樣になる感情の第一要素の一は美的である。そしてこれはその總體として恐るべき美の感覺と名づけ得よう。たしかにその見慣れぬ生命の光景、――沈默に

して莫大に、太陽に向つて巨大な渇仰をもて延び上がり、巨人（タイタンス）と爭つて光を求め、下の薄暗いところに這ふ甲蟲に對すると同じく、人間などは見向きもせぬその光景は、一見して覺えられ、永久に忘れられぬ或る簡單な驚くべき詩句のリズムの樣に心魂に徹する。然しその享樂は、その最も生き活きしたときですら、奇妙な不安に掩はれる。怪奇、蒼白、裸形で、滑かに擴がる柱の姿は蛇の生の如く、意識ある生を暗示する。我々がその形の冲天の線を眺めて——忍び行く運動の或る徵候、波動のある起原を見附けはせぬかとの漠然たる惧れを覺ゆ。その疑を視覺と理性とが、力を合はせて修正する。然り、そこに運動はある、そして非凡な生命もある、——但し太陽のみを求むる生命——巨大なる日に向つて真直に、噴泉の吹き出る如く迸る生命。

三

私自らの經驗の間に享樂の波に混ずる或る感情、——それは力と莊嚴と勝利の觀念に關はる感情——が宗教的敬畏の微かな感覺を伴なふことを認めた。思ふに近代の美感は宗教的感情主義の種々の遺傳的元素と入れ交つて居るので、敬畏の感情と離れて美の認識は起

こり得ぬ程てある。それは何れにしても、私が眺めて居るうちにかゝる感情が自ら判然となつた、――そして直に大なる灰色の幹が通廊の巨大な柱と變じ、夢の高所から突然、私の上にゴシック的恐怖の古い暗い戰慄が降つた。

それが消え去る前に、私はそれは薄暗がりに立ち上る、それ等の巨大の幹を見た爲めに昔の伽藍の或る記憶が甦つた爲めであることを認めた。然し高さも、暗がりも、記憶を越えた何物をも說明し得なかつた。それ等の椰子程に高く、しかし上に古典的な圓柱上部を支へた柱はゴシック的恐怖に似たる不安の感覺を呼び起こし得ぬ。このことは慥だと私は思つた、――何故なら私は何等の困難無く直にかゝる建築の表面を想像し得たからである。然るに忽ち心の中の畫が亂れた。私は圓柱の間の各〻の空處に弧線が上方に腕を差し出し、そしてそれが圓くなりまた、尖りて巨大な穹窿の列になると見た、――すると再び暗い戰慄が私の上に降つた。同時に私の心に神祕の解釋が閃めき出た。私はゴシック建築の恐怖は奇怪な運動の恐怖なることを了解した、――そして恐ろしさは穹窿の尖頭に有ると思つたのは、かゝる運動の觀念は主として穹窿の弧線が相觸るゝ非凡の角によつて暗示される爲めであることを知つた。

練熟せる眼にはゴシックの穹窿の弧線は植物生長の或る弧線と著しき類似あることが判かる、——恐らく梅が枝の弧線が特に暗示されやう。然し建築形式は何等の植物の比較が說明するより以上のことを暗示することに注意せよ。二條の梅の梢の相逢ふは實にゴシック穹窿の一種を作るらしい、けれどそんな短い穹窿の効果は著しく無い。眞のゴシック穹窿の不可思議なる印象を自然が反復せんとせば相觸るゝ冠部の枝は、弧線の長さに於ても、彈力性の力に於ても、植物界に存する其種の何れよりも遙に超過することを要す。ゴシック穹窿の見映は全く勢力の暗示に賴る。二つの短き芽生の線の交叉はただ發育の微弱なる力を暗示し得るのみ、然るに中世の高き穹窿は直に自然のそれに超過する發揚力を示すと見ゆ。而してゴシック建築の恐怖は發成する生命の暗示にのみ存せずして、超自然的なる莫大なる勢力の暗示に存す。

いふ迄もなくゴシック形式の不思議さに壓迫された子供は、未だ受けたる印象を解剖することは出來ぬ。彼は了解することなくして嚇かされる。彼は尖頭や弧線が植物生長の本則の甚だしき誇張を表はす故に恐ろしいのであることなどを察し得ぬ。彼れは形が生きて居る如く見ゆる故に恐る、されどこの恐怖を如何に表示すべきかを知らぬ。何故かと思ふ

ことなく、彼れはこの無言なる力の表現が到るところに上方を指し、且つ貫いて居るのが自然で無いことを感ず。彼れの驚かされし想像力には建築物は睡眠の幻影の如く擴がりて見え、人を嚇す目的を以て高く高く上るかと思はる。人の手に造らると雖、それは死せる石の集塊たるに止まらず、思考し威嚇する或る者、そのうちに交じり、それは暗影ある惡意、多様の怪物、巨大な崇拜物體となつたのである。

夢飛行

或る階上の窓から私は黄色の家屋の街路を眺めて居た、――或る植民地の舊式な、狹い街路、その瓦の屋根の上には椰子の梢が見えて居た。影は何處にも無い、日が出て居らぬ、――ただ早い黄昏の様な灰色の柔らかい光ばかり。

突如、私は窓から落下する自分を見た。私の心臟は恐ろしさに惱ましく一躍りした。然るに窓から鋪道迄の距離が豫想より餘程長く、私は恐れながら、不思議に思ひ出した。それでも落ち、落ちつづけた、が恐れた撃突は來たらぬ。それから恐れが止んで、妙な快さとなつた。私は急に落下せずに、ただ流れ下るのがわかつた。その上に私は足を前にして浮いて居る、降るうちに向きが變つたに違ひない。終に石に觸れたが、極めて輕く、しかも片足だけて、すぐに私はその觸接でまた上に行つた、軒の高さに登つた。人々は立ち止つて私を見つめた。私は人間以上の力の歡喜を覺えた、しばらくは神の樣に感じた。

それから徐ろに降りはじめ、私の下に集まる人の顔が見えると、見物人の頭上を越えて、

街路を飛行するやうに急に決心を促された。再び私は泡沫の如く昇り、それから同じ衝動て、自ら驚くばかりの距離まで一大弧線を描いて流れた。私は少しも風を感ぜぬ、ただ勝利の運動の喜びを感ずるばかり。再び舗道に觸れて一躍して百ヤードばかり翔つた。それから街路の端末に達して、回轉して驚くべき高度の長い緩かな空中飛躍をして、大きく舞つて飛び返つた。街路は死せる如く靜であつた、多くの人々が仰ぎ見て居たが、何人も談るものは無い。人々は私の業蹟を何と思つたらう、また如何に容易にその事が出來たかを知つたら何といふだらう。全く偶然に私はその仕方を知つた、それが業蹟と見えたのは外の何人も曾てそれを試みたものがないだけの事だ。本能的に私はこの發見に到れる由來に就て何か談るのは不謹愼なことだと感じた。そのとき街路の不思議に靜肅な眞意が判かりそめた。私は自分に云ふた。

「この靜肅は夢の靜肅である、これは夢であることがよく判かる。以前にもこんな夢を見たことを覺えて居る。然しこの力の發見は夢では無い、これは默示だ。……今や飛行を覺えた以上は、水泳家が泳ぐことを忘れられぬと同じく忘れ得まい。明朝、町の屋根の上を飛んで行つて人々を驚かしてやらう」

朝になつた、窓から飛び出ようと堅く決心して、私は目覺めた。然し床を離れるや否や

身體的關係の知識が忘れた感覺の如く還つて來て、私は何等の發見をしたのでもないといふ眞實をいやいやながら承認せねばならなくさせた。

これはかゝる夢の初めのものでも終りのものでも無い。ただそれが特に生き活きして居たので、私は此種のものの良い例として、談の爲めにそれを選んだ。私は今も折々飛ぶ、――時には野を越え流れを越えて、――時にはよく知つて居る街道を通じて、そしてその夢は幾度過去に於ける似たる夢の記憶を伴なひ、尙ほまた眞に祕密を發見したのだ、本當に新たな能力を得たのだとの確信が伴なふのである。私は自らにいふ、『今度こそ間違ひは無い、目が覺めた後幾度も飛べるのだ。以前外の夢のときには度々祕密を覺えたと思つても目覺めると直ぐ忘れるばかりであつたが、今度こそは忘れないに全く極つて居る』と、そしてその確信は自分が床を離れる時迄實際に殘つて居るが、床から起きて體を動かして見ると直ぐ重力の恐ろしい現實を思ひ出す。

此經驗の最も奇妙な點は浮揚の感覺である。それは例へば微溫湯の中で浮沈する樣な、流れ行く如き感覺である、そして何等努力して居る樣な感じが無い。それは嬉しいことだ、

然しまだ何か物足らなく思ふ。私は低空飛行者である、鼯鼠や飛の魚の如く進行するのみ、然もそれらよりずつと遲く、それに衝動を新たにする爲めに時々地を蹴まねばならぬ。二十五尺乃至三十尺の高さに揚がることは殆ど無い、大概は地面を掠つて行くに過ぎぬ。僅に數百ヤアド行く毎に地に觸れるのは樂しい掠り過ぎである、然し私はいつもぼんやりと、下の地が重苦しく自分を牽いて居る樣に感ずる。

要するに多くの夢中飛行者等の經驗は大概私と同樣であつた。もつと勝れた力を得るといつた人は一人だけであつた。彼は山々を越えて、峯から峯へ鳶の如く飛ぶといつた。外に私の尋ねた人々は皆低く――長い拋物線的の弧を描いて――飛ぶ、然もこれさへ時々地に觸れるのだといつた。彼等は概ねまた、彼等の飛行は先づ墜落の想像から、または止むを得ず飛び下ることから始まるといふ、そして四人までも階段の頂からいつも出發するのだと云つた。

* * *

幾萬年の間も人類はかく夜間飛行をして居た。實際生活の何れの經驗とも極めて緣無き想像的運動が如何にして睡眠の生活の普汎的經驗となつたのであらうか。

空中運動の或る種の記憶印象——例へば跳躍又は鞦韆乘の快活な經驗——が夢に甦つて擴大され引展されて飛行の幻覺を生じたのかも知れぬ。我々は實際の時間に於ける夢の繼續する間は極めて短いことを知る。然し睡眠中の半生命に於ては——（夢魔は或る驚くべき例外を呈するが）——實際の腦作用の迅速なる閃めきと潑剌たる戰慄と比すれば、漠然たる意識の燻ぶる如きもののあるに過ぎぬ、——そして夢みる頭腦には時間は擴大して思はるゝこと、恰もそれが昆蟲の弱き意識に關係的に廣大さるゝと同じであらう。墜落の感覺の何等かの記憶と、之に伴なふ恐怖の記憶が偶然睡眠中に甦るとすると、感覺及び感情の夢中の延長が——自然の結果なる衝突によつて遮られぬときは——空中運動の他の記憶、愉快な記憶すら再現するに足るのであらう。そして更に此等は長き幻影の一切の事件と光景とを呈するに足る相關的記憶の別の連合を刺戟することにならう。

　然しこの假說は覺醒時の何れの經驗とも異れる性質の或る感情及び觀念を十分に說明するに足らぬであらう。例へば、努力せずに隨意に運動する樂み、全然不可能事の樂み、重量全く輕減せる奇怪なる悅びなどは說明が難い。更にまたこの假說は跳躍又は落下の感覺から起こらざる、概ね快く無い夢中飛行の經驗を說明することを得ぬ。例へば夢魔に壓はれて居る間に夢みる者が動く力も談る力も無くなつて、實に我が身體が空に擧げられ、心

に抱く恐怖の力によつて浮流される様なことが起こる。また夢みる者が全く形體としての存在を有せぬ夢がある。私も全く身體を有せず、――見ることもなく聲もなき幻となり、黄昏の時に山路に徨ひ、小さな呻き聲して孤客を驚かさうとしたことがあつた。その感覺は全く意志の行爲のみて空中を通つて動くのてあつた、地の表に觸れることも無い、そして私は路上約一尺のところを滑り行くと思つた。

人間よりも昔の生命の狀態、卽ち重量ある生命が羽翼ありて地上を低く、重げに飛びたる狀態の有機的記憶をもつて夢中飛行の感情の一部分が解釋されやうか。

それとも萬有に浸徹する超靈が外の時には眠つて居て、睡眠時の稀有なる瞬間に於てのみ頭腦中に目覺むと想像し得ようか、限られたる人間意識は目に見ゆる太陽光線の分光景に美はしく比せられ、若し優越なる感覺が進化せば、現に見えざるその以上及び以下の色の全帶が見ゆるならんと思はれる、そして神祕論者は我々より偉大なる心ある者の見る紫外線又は赤外線が瞬時夢に見らると稱す。確に我々各自に存する宇宙の生命は空間と時間の一切の形式に於ける一切のものてあつた。恐らくは太陽よりも古き事物の漠たる感覺記憶――卽ちそれは旣に消滅したる遊星、そこには重力が稀薄て、自發的運動の正規の樣式

は我々の飛行の夢の實現の樣てあつた、その遊星の記憶を睡眠の中に搔き起こすことありと、我々は信ぜんと欲するのであらう……

夢魘

一

幽靈を信ずる人達のうちに存する幽靈の恐怖は何か？

すべて恐怖は經驗の結果、——卽ち個人又は種族の經驗、——現在の生命か、または忘られた多くの生命の經驗の結果である。知られざるものの恐怖とても此外に起原がある筈が無い。そして幽靈の恐怖は過去の苦痛の產物で無ければならぬ。

思ふに幽靈の恐怖も、幽靈の信仰と共に、夢から起こつたものらしい。それは獨得の恐怖で、他にそれほど强烈な恐怖なく、またそれほど漠然たるものもない。かく容積の大きくて暗い感情は槪ね超個人的のものである——卽ち遺傳された感情——死者の經驗によつて我々のうちに作らるゝ感情。

何の經驗？

何故に幽靈が恐ろしいか、その理由を明白に記述したものを私は讀んだ覺えが無い。幽靈を恐れた記憶ある知人のうち、何れの有識者なりと十人を選んで、何故に恐ろしかつたかと問ひ、恐怖の裏面の空想を定義せんことを求めて見よ、唯だ一人でもよくその問に答ふるものあるや疑はしい。民俗學の文書や傳説はこの問題に何等の光明を投ぜぬ。もとより化物に引き裂かれた人の種々の談などもあるが、かゝる粗大な想像で幽靈の恐怖の特質を說明し得ぬ。それは身體に及ぼす暴行の恐れでは無い。それは理由ある恐れでさへ無い、容易く說明さるべき恐れでない、――もしそれが身體の危險の明白なる觀念に原因するものならば、その說明の出來ぬ筈は無い。その上に、原始的の幽靈は裂いたり喰つたりするものと想像され得るとしても、幽靈に關する一般の觀念は慥にそれが觸れられぬ、そして殆ど重量の無いものとなつて居る。

註　こゝに注意すべきは多くの古い日本の物語や歌に、幽靈が人の首を引き拔く力を有つて居るとしてあることである。然し幽靈の恐怖の起原に關する限りに於て、かゝる談は何物をも說明せぬ、――何故なれば恐怖を起こし來たつた經驗は想像的のものでなくて、眞實のものでなければならぬから。

こゝに大膽に私は幽靈の共通的恐怖は幽靈に觸れられる恐れであると稱へて見る。別の

言ては、想像せられた超自然者は主として、それが畏れる力ありと想像さるゝ故に恐れられるのであるといふのである。念を押しておくが、畏れるだけである、殺傷するので無い。

然しこの種の恐れそれ自らも經驗の結果であらう、それは私は思ふに、子供の暗を恐れると等しく、遺傳によつて個人の上に積まれた前生的い經驗の結果であらう　それで誰れが、嘗て幽靈に畏れられた感覺を持ち得たらうかと問はれるならば、答へは簡單である、——夢に幻影に捉へられたものは誰れでも然りと。

原始的恐怖、卽ち人類よりも古き恐怖の要素は疑ひも無く子供の暗の恐怖のうちに入つて居る。然しもつと明確な幽靈の恐怖は夢の苦痛の遺傳的結果から、卽ち夢魔の昔の經驗から成ることは誤り無い樣である。そして超自然的種の直覺的恐怖はかくして進化論的に說明が出來る。

これより若干の模範的經驗を談つて私の理論の證明を試みやう。

二

凡そ五歳の頃、私は罰として或る孤立の室に獨りて眠らせられた、その後この室を坊やの部屋と呼んだ。（其頃私は殆ど名を呼ばれずに、ただ坊やといはれて居た）その室は狹いが餘程高く、一つの丈高い窓があつたが甚だ暗かつた。そこに爐があつたが火を燃やしたことは無い、それで坊やは煙突に魔がさして居るのかと思つた。

坊やは暗を恐れるとの理由だけで、夜その室に燈を置かぬことに定められた。彼の暗の恐れは嚴重な手術を要する精神上の疾患と判斷された。然し手術は却て疾患を增した。以前には私は燈の明かるい室で、乳母に世話されて眠る習慣であつた。それが暗の中に獨りて寢る宣告を受けて恐ろしくて死ぬかと思つた。そして非常に殘酷だとその時思つたのは、家中の最も忌まはしい、その私の室に實に閉めこまれて錠をおろされたことであつた。每晩私は溫かに床に就かせられてランプは持ち去られ鍵の音たてて錠はおろされ、そして保護の燈火も保護者の跫音も共に退き去つた。すると恐怖の苦痛は私を襲ふて來た。暗い室中に何物かが集つて、それが大きくなる樣で――（その大きくなる音が聞こえさへすると

私は思つた。遂に私は叫び出した、叫ぶと乾燥罰が来る、然しその苛責も来るので、それが罰以上に慰であつた。此事が遂に判かつたので、坊やが叫んでも何等構ふなといふ命令が発せられた。

何故私は言ふはかりに恐ろしかつたか、一面には私は時にはいつも恐ろしい物の形が充ちて居ると思つたからである。時に戻り得る限りの記憶をたどると、私は屢々本当に悩んだ、そして夢が醒めると、私はいつも夢に見た物の形が室の影に潜んで居るのが見えると思つた。此等の形はおきさに消えた、然し数分間は手で触れられる實在の様に見えた。しかもそれ等はいつも同じ姿であつた。……時には先づ夢を見ることもなくして、私は黄昏時にその姿を見た、それが室から室へと私に附き纏ひ、または階上にゆくに連れて奥深い階段の中間からすつと長い黒い手を私の方に差し出した。

私がこの執念の姿に就て苦情を云ふと、決してそれ等に談しかけてはならぬこと、またそれ等は存在しては居らぬのだといふことを聞かさるゝばかりであつた。私は家中の皆に苦情を云つた。すると家中の皆が同じことを私に云つた。然し私の目の證據があつた。その證據を否定するには唯だ二の方法があるばかり、即ち物の姿は大人を恐れて、私が幼弱

であるので私にのみ現はれたのか、または全家の者が何か嫌な理由で一致して、私に眞實でないことを云ふのか、何れかでなければならぬ。この第二の考への方が私にはさもありさうに思はれた、何故なれば私は誰れも傍に居らぬ時に度々物の姿を見た、――それで後に祕密を裝うて居ることが、幻覺そのものが驚かしたに劣らず、私を驚かした。何故私は斯る手段の上や、搖らぐカアテンの後ろで、見たり、聞いたりさへしたことを談つてはならないのだらう?

「何も御前を痛めはしない」――この無意味な答を私が夜獨りで居ない樣に訴へる度毎に聞かされた。然し執念の姿は實に私を痛めた。唯だ、私が眠つてしまつて彼等の力に身を委ねる迄待つてからさうした、何となれば彼等は私を起きたり動いたり叫んだりさせぬ不思議な手段を有つて居たから。

私獨りを黑い室の中に此等の恐怖と共に閉ぢ込める策に就ては註解するの要は無い。私はその室で云ふにいはれぬ苦悶をした――數年間。それ故終に子供の寄宿學校へやられた時比較的に幸を覺えた、そこには執念の姿が出てくることは極めて稀であつた。

彼等は私の今迄見た誰れとも似て居らぬ。彼等は影の樣な黑衣の姿で、途方もなく自己

の體を歪めることが出來、例へば天井迄延びたり更にそれを横切り、それから反對側の壁に沿ひて身を長くして頭を下にする。彼等の顏のみが判然として居るが、私はその顏を眺め様としなかつた。私は唯だ私の夢のうちに、自分の指で眼瞼を引張つて目を覺まして、それで彼等を見なくなる様にしようとした、またはさうする積りだと思つた、然し眼瞼は封印された様に閉ぢて開かなかつた。……多年の後、私がはじめて見たオルフィラ（譯者註）の「墳墓發掘誌」といふ書の中の挿畫が子供の時の夢の恐怖を惱ましい思ひで再び考へさせた。然し子供の經驗を了解するにはオルフィラの畫をずつと生かして想像し、それが斷えず延びたり歪んだりして、何か怪異な畸形を呈して居ると思はねばならぬ。

譯者註　オルフィラは Matthieu Joseph Bonaventure Orfila （1787—1853）といひ、フランスの醫者及び化學者にて毒藥學、法醫學の名著などありといふ。

然し其等の夢魔の顏を見ることのみが坊やの部屋の最惡の經驗では無かつた。夢はいつも疑念からはじまつた、即ち空中に何か重いものが有る感覺、——それが徐ろに意志を抑へて、——徐ろに私の動く力を萎徴させる。かゝる時に私は通常、燈の無い一の大きな室に獨り居た、そしてはじめの恐怖感覺と殆ど同時に、室の空氣が、天井への央ばまで、

微かに物が見えるほどの暗黄色の光に充たされる、ただし天井はまだ眞暗てある。これは光の眞相てはなくて、寧ろ黒い空氣が下から變色しつゝあると見えた。暴風雨の晩に入日の或る恐ろしい光景が、これと似たる氣味惡るき色の効果を呈す事がある。直ぐと私は逃げようとする、（一歩毎に徒渉する樣な感じをして）そして時には室を過つて半途迄蹌き行くだけは出來る、――然しそこで立往生させられる、――何か名狀し難い抵抗に麻痺させられる。次の室には樂しさうな聲が聞こえる――戸の上の欄間を漏れる光を見る、戸まで行き着かうとするけれど適はぬ、――そして私が一聲高く叫べば救はれるのだと思つて居た。然し狂ふ許りに努力しても囁きより高い聲が出ない……そしてこれ等一切の事は無名のものが來ることを意味するのみ、それが近づく、階段を上る。跫音が聞こえる、――包み太鼓の音の樣に陰に響く、――何故外の人には聞こえぬか不思議だ。執念の者が來るに長い、長い時がかかる、――氣味惡るい足踏みの一つ一つ毎に意地惡るさうに立ち停まる。それから、軋る音も無く、錠をおろした室の戸が開く、――遲く、遲く、――そして其物が入つて來る、音無く喋る、――それから手を差し出す――私を摑む――私を黒い天井に投げ上げる――落ちて來る私を捕へてまた投げ上げる、又も、又も。……かゝる瞬間の感情は恐怖てない、恐怖其ものは最初に摑まれたとき感覺を喪つてしまつた。それは

話に名の無い感覺であつた。觸れられる毎に苦痛よりは無限に惡るい或る物の激動を伴なふた、――それは私の內面秘密の存在に戰慄を與へるものであつた、――忌まはしい電氣の一種で感性の全くよく知られぬ部分にいまだ想像されなかつた苦しみを受くる力を發見したのだ。……これは通常私を苦しめるものが一人であるときの業であつた、私は又一群のものに捕へられて、殆ど數十分間も、其一人から一人へと投げ渡された事を覺えて居る。

三

かゝる姿の想像は何から起こつたか。私は知らぬ。多分最も幼い時の恐れの印象から來たれるかとも思ふ、また私の生とは別の生の恐怖の或る經驗から來たれるかと考ふ。その神秘は永遠に解かれぬ。然し觸を惡るゝ神秘は一定の假說をゆるす。

第一に私は、感覺そのものの經驗が「唯だの想像」だとして度外視されぬことに注意することを許されたい。想像は頭腦の活動を意味する、その快苦は共に神經の作用から分離し得ぬ、そしてその身體的重要性はその生理的努力によつて十分證明される。夢の恐怖は他の恐怖の如く、人を殺すこともある、それ程に強い感情を研究の價無しと考ふるは無理

である。

この問題に於て考へらるべき一の著しき事實は、夢中に捕へらるゝ感覺は通常の覺醒生活に於て慣れた一切の感覺と全然異るといふ事である。何故に此差あるか。戰慄の非常な重々しいことと深いこととを如何に說明するか。

私は既に、夢みる者の恐怖は多分關係的經驗の反影では無くて、祖先以來の夢の恐怖の數へ切れぬ總數を代表するものであることを暗示しておいた。若し活動的生活の經驗の總量が遺傳するものならば、睡眠の生活の經驗の總量もまた傳はらねばならぬ。そして正規の遺傳に於てこの兩者の遺傳の各種は別々に殘るらしい。

さて、この假說を許すとして、夢に捕へらるゝ感覺は夢の意識の最初の段階にその起原を有したのであらう、――それは人間の世に生まれしよりずつと以前であつたらう。思考と恐怖とをなし得る最初の動物は、その自然の敵に捕へられたことを度々夢みたに相違無い。これ等の原始的の夢には多くの苦痛の想像は有り得なかつた。然し其後の動物に於ける神經の高等なる發展は夢の苦痛をもつと大いに感受する樣になしたらう。更に後になると、理性の發達と共に超自然の觀念が夢の恐れの性質を變化し、且つ之を强めたであらう。更に進化の一切の過程を通じて、遺傳はかゝる感情の經驗を集積したであらう。宗教的信

念の反動を通じて發展した想像的苦痛の、これ等の形式の下に野蠻なる原始的恐怖が臆けに存續を固執したらう、そしてまた、この下に、もつと朧な、然し比較にならぬ程に深い昔の動物恐怖の深層が存續したのであらう。現代の子供の夢には此等の潜在が悉く刺戟を與へる、——層の下に他の層ありて、——測りがたく——夢魔の襲來とその生長と共に。

或る特殊の夢魔の幻影は、それがその中に動く頭腦よりも古き歴史を有すといふことは或は疑はるかも知れぬ。然し個の恐れは、影の如き捕捉に關する全人類の經驗と夢中に接觸する或る點を示すと思はれる。自我の深奥——太陽の生命からの光がいまだ達せぬ深淵——は不思議に眠の中に掻き亂されるのかも知れぬ、そしてその暗黒の中より、百萬の年を以てすら數へがたき記憶の振動が直接に之に應答するのであらう。

幾度か、夜の深更に、私は一の書を讀んで居る、——大きな幅廣い書、——夢の書。それは夢に關する書では無い、夢を作る資料から成れる書である。

私はその書の名も、著者の名も知らぬ、私はその表紙を見ることも出來なかつた。そこに標題も記して無い。その卷の裏は——月の向う側と同じに——永久に見られ無い。

如何なる時にも私は一切その書に觸れぬ、——頁を繙すこともない。目には見えぬ誰かが、いつも、それを捧げて、暗中私の前にそれを開く、それが何處より來るとも無き光で照らされるので私はやつとそれを讀める。その書の上と下と兩側は全然暗、然し頁は曾てそれを照らした燈の黃光を保持して居ると見ゆ。

不思議な事には、私は頁の全面を明らかに見ながら、同時に頁の全文を見ることが決して出來ぬ。本文は私が見て居るうちに紙の表に浮き上がる、または浮き上がる様に見ゆ、そして讀まれると直に消える。ただ意志の單純な努力に由つて、私は消えた文を頁に呼び

返す事が出來る。然しその文は始めと同じ形では還つて來ない、その間にその文が妙に修正されたかと思はれる。いまだ一度も、始めに讀んだ通りに一度去つた文の一行だも再現する樣に誘ふことは出來なかつた。然しいつも私は何物かが還つて來る樣に强ゆることは出來た。そしてこの或る物は通讀の間に鋭く區別されて殘る。それからそれが微かな灰色に化し、そして、濃い乳の中に入る如くに、視覺の背後に沈み行くかと見ゆ。

目覺めて直に、私が夢書からの讀み物を控えて居ることは何でも書く樣に規則正しく注意したので、私は昨年本文の或る部分を再現さすことが出來た。然しこれ等の斷片をこゝに示す順序は、私がそれを恢復した順序では全く無い。若しそれに何等かの內面の連絡があるとすれば、それは私が合理的繼續があると想像したまゝに、それを配列しようとしたからである。原文の位置や關係は私は全く何も知らぬ。そして其書の性質そのものに關してすら、私はその大部分が考ふ可からざるものに關しての對話から成ることのみを發見したに過ぎぬ。

斷片の一

そのとき波が永久に波でありたしと祈つた。

海は答へた、
『否、汝は碎けねばならぬ、我れに安息は無い。億萬の億萬度も汝は起ちては碎け、碎けては起つならむ』
波は訴へた、
『我は恐る。汝いふ、我は再び起こるべしと。されど何時、一の波がその碎けたところより返れることがあつたか』
海は答へた、
『言ふべからざる、限り知られぬほどあまた度、汝は碎け、而して尙ほ汝は存す。汝の前に走る千萬の波を見よ、また汝を追ひくる千萬を。――すべて言ふべからざるほど數多度、碎けたるところにありしもの、而してそこへ彼等はまた碎けんとて今急ぐ。我のうちに彼等は溶け、また新たに漂る。されど彼等は過ぎねばならぬ、我れに安息なきが故に』
呟きつゝ、波は答ふ、
『凡てこれ等の千萬の混淆と混ずべく我は直に散るにはあらぬか。如何にして我はまた起つか。決して、決して再度我れは同じものと成り得べきにあらず』
海は答ふ、『汝はいまだ曾て同じものたらず、汝の走る如何なる二瞬間も然あらず、永

劫の變化が汝の存在の法則。汝の「我」とは何？いつも汝は忘られたる波の實質より造らる、――我の岸の沙よりも以上に無數なる波の實質より造らる。汝の多數なるに於て汝は何か？――一の幻影、一の非永久！』

波は啜り泣きした、『實在は苦痛、而して恐怖、希望、光明の喜び。我もし實在ならずば、此等は何處より來り、また何物か』

海は答ふ、『汝は苦痛を有たぬ、恐怖も、希望も、喜悦も有たぬ。汝は我れに有る外に、何物にてもあらず。我れは汝の自我、汝の「我」、汝の形は我が夢、汝の運動は我が意志、汝の碎くるは我が苦痛。汝は碎けねばならぬ、我れに安息無き故に、然し汝はまた起つ爲めにのみ碎く、何となれば死は生命のリズムなるが故に。見よ、我れも亦、生きん爲めに死す、これ等の我が水は過ぎ行いた、我もまた過ぎ行かねばならぬ、無數の世界の破壞と共に無數の太陽の燃燒にまで。我もまた、言ふべからざる程の多樣性のもの、諸〻の大洋の億萬の波が我が滿干のみぎりに再生す。汝ただ嘗て在りし故に今在り、今在るが故にまたも在らんとすることをのみ知るを以て足れりとす』

波は呟いた、

『我は了解せぬ』

海は答へた、
『鼓動して過ぎ行く、これ汝の分、――決して了解せずに。我れもまた、――大海なる我れすら、――了解せず』

断片の二

……『石も岩も感覺があつた、風は呼吸また言語であつた、地の川と海とは心の室内に閉ぢられて居た。而して輪廻轉生は一切の宇宙の分子があらゆるもののうち最高の生命のありとあらゆる至極の經驗を經過し終はるまで止まぬであらう』
『然し遊星の心髓は如何、――それもまた感じ且つ思ひたるか』
『一切の肉は太陽の火なりし如く、それほど確に然り。成住壞空の不斷の連續のうちに萬物は無慮億萬の度數、關係と位地を變じた。古い月の心臟が未來の世界の表面を作るならん……』

断片の三

『如何なる悔恨も無用では無い。月の光より柔らかく、芳香よりも薄く、死よりも强き

絲、即ち大記憶のグライプニア（譯者註）の連鎖の絲を紡ぐのは悲哀の所爲である……

譯者註　神仙の造る靈妙の鎖。

『百萬の年を經て汝達は再び相逢ふならむ、――而して時間は長くは思はれない、死者に取りては百萬年も一瞬も同じなれば、その時汝は汝の現在の自我の凡てではあるまじ、また彼女も彼女が嘗て在りし凡てであるまじ、汝達何れも同時により少く、しかも比較を絕する程により多きものであらう。そのとき、汝に起こるべき願に對し、身體そのものは汝が彼女に到る迄にそれを通過せねばならぬ一の障礙と思はるるならん。若しくはまた其時に到る迄に性は數へがたき程度々變化したるべきにより、彼女ならで彼に到るといふべきやも知れず。尙ほ兩者とも記憶せざらむ、但し各〻は以前に相逢へることありとの測りがたき感情に充つるならむ……』

断片の四

……『愛する人を戀しざまにいふ、――その人は唯だ、昨日のものと盲信されて居る、――この嘲弄者は世界の靈の過去に於ける神聖なるものを嘲弄するのである。そのとき數

へられぬ千萬の悲哀の忘られし墓に葬られたりしものが、その心に甦る、――時の初めより以來、忍びて憎惡と爭鬪したる、愛の一切の古き苦痛が甦る』

『然して神々は知る、――それは空間を超えて住まふ醜なる者――形と名との神秘を紡ぎつつ。何故なれば彼等は生命の根柢に坐し、苦痛は彼等に馳せ返り、而して彼等はその網を感ずる故に、――蜘蛛がその網の振動に於て、絲の觸られたるを感ずるが如くに…』

斷片の五

……『見ての愛は死者の選擇である。然し彼等死者の多數は倫理の諸系統よりも古い、而して彼等の多數の決定は道德的なることが稀である。彼等は美によりて選ぶ、――身體の卓越の彼等の記憶によりてさうする。而して身體の適合は精神の力、また道德の力の基礎を爲すが故に彼等は選を謬りさうで無い。されど時には彼等は不思議に欺かれる。彼等は未だ嘗て體に靈を導き入れ得ざりし存在者、即ち空虛の妖鬼を缺くと知られた』

斷片の六

『自我を作る小さき諸靈は分解としての死を恐れぬ。彼等は唯だ再完成としての死を恐

る、――他の生の奇異なるもの及び憎むべきものとの再結合を恐る、彼等は愛するものが憎むものと共に、他の體内に禁錮さるゝことを恐る……』

断片の七

『昔は魔女は荒涼の場、及び寂寞の道にのみ坐した。然るに今や町の影にて、彼女は青年に胸を捧げる。而して彼女に誘はれしものは直に狂となり、彼女の如く空虚となる。何となれば彼れを作る爲めに彼れに入れる高等の靈は妖鬼の接觸によりて死す、――繭の中にて蛹が、ただ殼と塵とを跡に殘して死す如く死す……』

断片の八

……人間が彼の靈の殘れる群にいうた、

『私は生に倦んで居る』

そして群れるものどもが答へた、

『我々もまたかゝる卑しい住家に住む恥辱と苦痛とに倦んで居る。我々は斷えず梁が折れ、柱が挫け、屋根が我々の上に落ちる樣に努めて居る』

人間は呻いて云ふた、『私の上にはたしかに咀ひがある。神々の中には正義が無い』

そのとき諸靈は騷がしく嘲笑した――丁度森の木葉が風を受けた樣に、もろ共にくすくす笑つた。そして彼等は彼に答へた、

『愚者の如く汝は僞りをいふ。汝の外の誰れが汝の卑しき體を作りたるものぞ。それは汝自ら以外の業と思ひによりて作られたるか、或は作り損ねられたるか？』

人間は答ふ、『私に來たれるものに價する業も思ひも記憶して居らぬ』

諸靈は笑つた、『記憶！否――その愚は別の生にあつた。然し我々は覺えて居る、而して覺えて居て、我々は憎む』

人間は云ふた、『汝すべて我と一なるに如何にして汝は憎み得るぞ』

諸靈は嘲つた、『汝と一、それなら衣を着て居る人と衣と一なるか。……如何にして憎めるといふのか。火を燃す人が木から引き出した火が木を喰ふと同じに――その通りに我我は憎むことが出來る』

人間は云ふた、『これは咀はれた世だ。汝は何故に私を指導しなかつたか』

諸靈は彼に答へた、『汝は我々よりも賢かりし靈の指導を心に留めなかつた、……怯者と弱者とが世を咀ふのだ。强者は世界を非難せぬ、世界は彼等の要するものを皆與へて居

る。彼等は力で碎き、取り、また保つ。彼等にとりて生命は喜悦、勝利、歡喜である。然るに無力者は何物にも價せず、彼等は何物も有たなくなる。汝と我々とは今直に無有に歸せんとする』

人間は尋ねた、『汝等は恐るゝか』

諸靈は答へた、『恐るゝ理由はある。されど我々のうち一も、汝の如きかゝる存在の一部たることを存續して、それで我々の恐るゝ時の來るを遲からせんと願ふものは無い』

人間は驚きながら尋ねた、『然し汝等は數へられぬほどあまた度死したるか』

諸靈はいふ、『否、然らず、我々の覺ゆる限り一度だも死せず、而して我々の記憶は此世界の始めに達す。我々は唯だ種族と共に死す』

人間は何も云はなかつた、――恐れたから。諸靈は再びいふた、

『汝の種族は止む。その繼續は我々の目的に副ふ汝の力如何による。汝は一切の力を喪つた。汝は骨堂か墓穴たる以外に何か。我々は自由を要した、而して空闊をも。こゝに我我は詰め込まれて、一本の針先きに我々は億萬も集つて居る。我々の室に戸もなく窓も無い、――而して通路は皆詰まりまた損して居る、――そして階段は何處へも通はぬ。その上にここには執念の者共が居る、――それは我々の類で無い、名づくべからざる物だ』

暫くの間、人間は死して塵となるのが有難いと思つた。然し突然、彼の記憶に彼の敵の顔が惡しみの笑をその上に浮かべて現はれた。さうすると彼は長命を願つた、――生命と苦痛の百年を――唯だその敵の墓の上に草が丈高く生ふるを見ん爲めに。而して諸靈は彼の願を嘲つた、

『汝の敵は汝に對して多く思ひを費すまい。彼れ即ち汝の敵は半分の人間では無い。その體内の諸靈は室と大なる光とを有つ、彼等の住家の天井は高い、通廊は廣くて綺麗、庭は輝いて清らか。汝の敵の腦は堂々と守備された要塞の如く、――そして其處に達する何れの地點へも、防禦の軍は戰ふ爲めに瞬時に集められる。彼れの代は終はらぬであらう――否、彼れの顔は幾世紀に亘つて増加するであらう。その故は汝の敵は何れの時にも彼れのより高き靈の需要の爲めに準備した、彼れは彼等の警告に注意した、彼れはすべて正しき道にて彼等を樂ませた。彼れは彼等に敬意を表することを誤らなかつた。それが爲めに彼等は今彼れが要求すれば彼れを援助する力を有つて居る。……しかるに汝は如何に我々を尊びまた樂ませたか』

人間は暫く默して居た。それから疑の恐れを抱ける如く彼れは尋ねた、

『何の爲めに汝は恐るべきか——若し終りは無有なりとせば』

諸靈が答へた、『無有とは何か、迷妄の言語に於てのみ、終りなるものがある。汝が終りと呼ぶものは實は眞の始めである。我々の本質は止むこと能はず。世界の燒くるとき、それは盡きず、それは大なる星の心髓に入つて振動する、——それは他の太陽の光の中に入つて震へる。而して再び、或る未來の宇宙に於てそれは再び知識を獲得しよう——但しそれは群衆には考へられぬほどの進化の後に。形の無名の起原より、而してそれより失せたるものの一切の循環を通じて、——疲れ果てたる苦痛の一切の繼續を通じて——過去の一切の深淵を過ぎて——それは再び攀ぢ登らねばならぬ』

人間は一言もいはなかつた、諸靈は談り續けた、——

『幾千萬の代々、我々は火の暴風の中に震へて居らねばならぬ、そして我々は新たに或る元始の土に入り、そこにて活き、またあらゆる醜き無言盲目の形を通して上へと跳ぢ登る。轉生は數へ難く——苦悶も測り難い。而してその罪科は何の神々のものにもあらず、それは汝のもの』

人間は呟いた、『善か惡、その各々は何を意味するか。無終の變化に碾かれては最善も最惡の如くならぬことを得まい』

諸靈は叫んだ、『否、强者の爲めには達すべき目標がある、——それは汝が得んとして努力し得ざる目標。彼等はより美しき世界を作る爲めに助力するならむ、——彼等はより大なる光に到るならむ、——彼等は神聖の地帶に入るべく焔の如く揚がり且つ翔けるならむ。されど汝と我々は土に還るのみ、我々の爲めに有り得べかりし億萬の夢を思へ、——投げ棄てられし喜悅と、愛と、勝利とを思へ、——夢見られざりし知識の曉を、——想像せられざりし感覺の光榮を、——限られぬ力の歡喜を、——思へ、思へ、愚なる者よ、汝の喪ひたる一切を』

かくて人の中なる諸靈は蟲と化し、而して人を喰ひ盡くした。

永久に忘られぬ成熟物の一時、その時、男兒は或る一對の眼より驚くべきもの此世界に無しと信る。はじめに發見の驚異が其の呼吸を止める、本能的に彼れは視線を傍に轉ず。その幻影は眞實であるには餘りに佳良と思はる。されど間も無く、彼は再び視んと試む、――新たなる恐れを覺えつつ、――現實を恐れ、自己が視らるゝことを恐れて、――而して見よ、彼の疑念は新たなる歡喜に打たれて分解する。それ等の眼は彼れが想像せるよりも更に驚かるゝ――否、彼れが續いてそれ等を見る毎に益々恍惚たらしむる。たしかに全宇宙に於て外にかゝる一對の眼はあり得ぬ。何がそれ等の眼にかゝる魅力を與ふるか。それ等は何故に神聖と見ゆるか。……彼れは誰れにか說明を聽かねばならぬと感ず、――彼れの新たなる感情の謎を賢明なる年長者に打ち明けねばならぬと思ふ。それから彼れは彼れの告白をする、笑はれることを微に直覺的に恐れて、然しそれを談るに不思議に新たなる驚喜の感覺を以て。彼れは笑はれる――やさしく、然しそれは、彼れが彼れの質問、―

―彼れの無邪氣な驚きと臆病な赧顏とで特に興味あるものとなつた單純の『何故』といふ質問に答へを與へられぬ事實程には彼れを當惑させぬ。何人も彼れに光を與へ難い、然し誰れも皆、子供の彼れの長い魂の眠りから突然覺めて度を失へるに同情し得る。

思ふにその『何故』は決して十分には答へられまい。然しその問を起こした神祕は斷えず人を誘つて理論を立てさせ樣とする。而して理論は直接の結果を離れて獨立の値を有ち得よう。若し不可知に關はる古い理論が無かつたら、我々は果たして可知に就て何を學び得たらうか。不可能の追求中に我々はいまだ夢みざりし而して無限に驚くべき可能に躓き當たるのでは無いか。

何故に人間の眼の一對が我々に一時極めて美はしく見え、その時、その眼の輝きを金剛石や紫水晶や碧玉に比すれば、その比較を冒瀆とさへ感ずるのであらうか。何故に我々はその眼を海よりも深く、日よりも深く、多くの太陽の燦めく霧を含む空間の夜よりさへ深く思ふのであらうか。たしかにそれは唯だ放奔の空想の爲めで無い。かゝる思ひ、かゝる感情は驚くべきものの或る現實の知覺から、――談られぬものの或る眞實の表現から、――生ずるに相違無い。そこに、眞實に、生の單なる一時があつて、その間は世界が我々の爲

めに一對の眼眸驚くべき何物も有たぬのである。而して其時、それを見て居ると、我々の遒樂の中を過ぎりて振動する畏怖の戰慄を見出す――それは見たるよりは感じたる、或る物によりて成さるゝ畏怖、一の潜在、一の力、――宇宙的エーテルほどに測り難き深さのさす影である。それは生くる者の或る强き急激な刺戟を通して、我々は――天上を超越する一瞬間――決して以前に想像せず、また決して再び表現せざるべき一の實在の面影を提へたるが如くてある。

勿論そこには幻覺がある。我々は神聖なるものを見ると思ふ、然しこの神聖そのものは我々を眩惑し且つ欺瞞するが、それは一の靈である。魅力は現實に存せず、現に在る何物にも存せず、嘗て在りし無限に輻合せる或る幻影に存す。その視影は驚くべく、それは我我の人間の視覺がその時、現在の表面を越えて貫徹し、千萬の年の深奥に達し、生命の假面を越えて死の巨大なる夜に徹するが故にのみ驚かるゝのである。暫くは我々は云ふにいはれぬ美と神祕と深遠とを見守り、しかして幕は再び永久に落つるのである。

我々が崇拜する眼の光榮は、曉の明星に光輝あると同じ樣に於てのみ存在す。それは現今の影の彼方より來る反射である――消滅せる太陽の靈光である。その少女の眼中に我々は知らず識らず天の群星よりも多數なる眼の眺めに會ふ――それ等は他所にて暗と塵とに

過ぎ去れる限。

かくして、ただかくしてのみ、その眺めの深さは死生の海の深さである、——而してその神祕は存在の深淵の沈默の廣大なる中から我々を見守る世界心靈の視影である。

かくして、ただかくしてのみ、眞理と幻覺とが限の魔力の内に混ず、——過去の目視が現在の出現と拭ふべからざる魅力をもて相交じはる、——而して見者の魂に於ける突如の光榮は唯だ一の閃めき、——無限の記憶の音なき一條の電光に過ぎぬ。

日本雜錄

エリザベス・ビスランド・ウエットモア夫人へ

奇談

約束

「この秋早々歸ります」と、數百年前、赤穴宗右衞門がその義弟丈部左門と別れる時、云つた。時は春、場所は播磨國加古村。赤穴は出雲の武士であつた、それで彼は郷里を訪れようと思つた。

丈部は云つた、――

『あなたの出雲、――八雲立つ出雲の國は甚だ遠い。それ故恐らく或定まつたお歸りの日を約束なさる事はむづかしいでせうが、もしその日が分つたら私共は幸に思ひます。さうしたら、私共は歡迎の宴の用意ができます。そしてお出でになるのを門に出て見張つて

居られます』

『さあ、その事については』赤穴は答へた、『私は旅にはよく慣れて居るから、或場所に着くにはどれ程かかるか豫め云ふ事ができます、それで定まつた日にここへ着く事は安心して云へます。重陽の佳節ときめて置いてどうでせう』

『それは九月九日ですね』丈部は云つた、――『その頃は菊の花も咲くから、一緒に菊見もできます。愉快愉快。……それおやお歸りは九月九日と約束して下さいますね』

『九月九日』赤穴は別れの微笑を見せながら、くりかへした。それから彼は播磨の國加古村から、大股に歩き出した、――そして丈部左門とその母は、眼に涙を浮べてそのあとを見送つた。

『月日に關守なし』と古い日本の諺は云ふ。速かに幾月か過ぎ去つた、そして秋――菊花の季節――が來た。そこで九月九日の早朝から　丈部は彼の義兄を歡迎する用意をした。品々の肴を調へ、酒を買ひ、客間を飾り、床の間の花瓶には二色の菊花を挿した。その時、これを見てゐた母は云つた、――『出雲の國はここから百里以上もあります。山を越えてそこから來る旅は苦しくて疲れませう、赤穴が今日來る事ができるかどうかは、あてにな

らない。そんなに骨を折らないで、來るのを待つてからにしてはどうかね』『いゝえ、母樣』丈部は答へた――『赤穴は今日ここへ來ると約束しました、約束を破るやうな人ぢやありません。到着してから用意を始めるのを見たら、私達はあの人の言葉を疑つたと思ひませう、それが恥づかしい』

その日は美はしく、空には一點の雲もなく、空氣は澄み渡つて世界はいつもより千里も廣くなつたやうに思はれた。朝のうち、多くの旅人は村を通つた――武士も幾人かあつた、そして一人一人の通るのを見守つてゐた丈部は、度々赤穴が近づくのを見たやうに思つた。しかし寺の鐘が正午を知らせたが、赤穴は見えなかつた。午後も續いて丈部は見張つて待つて見たが無駄であつた。日は沈んだ、しかしやはり赤穴の來るやうすはなかつた。それでも丈部は門に立つて往來を眺めてゐた。やがて母は來て云つた、――『諺に云ふ通り――男の心は秋の空のやうに早く變る事もあらう。しかし菊の花は明日も未だ鮮かであらうから、もう床についてはどうか、明朝になつてから、又赤穴を待ちたければ、待つ事にしては』『母樣、お休みなさい』丈部は答へた、――『しかし私はやはり來るとしか信じられません』それから母は寢室に行つて、丈部は門にためらつてゐた。

夜は晝のやうに澄んでゐた、空には一面に星が動いて、銀河は異様の光をもつて輝いてゐた、――靜けさを破る物は、ただ小川の音とはるかに吠える犬の聲だけであつた。丈部はやはり待つた、――細い月が近くの山のうしろに沈むのを見るまで待つた。その時やうやく彼は疑ひ恐れ始めた。丁度家に戻らうとした時、彼は遠くからたけの高い人が――甚だ輕く、かつ速く、――近づいて來るのを見た、そして直ちにそれが赤穴である事を認めた。

『やあ』丈部は彼を迎へるために、跳び出して叫んだ、――『朝から今まで待つてゐました。……やはり約束を守つて下さつたね。……しかし兄樣、あなたはきつと疲れたでせう、――入つて下さい、――何でも用意してあります』彼は客間の正座へ赤穴を案内して、急いで細くなりかけて居るあかりを直した。丈部は續けて云つた、『母は今晩少し疲れて居るのでもう寢ました。しかし、やがて起しませう』赤穴は頭を振つて、不承諾の身振をちよつと示した。『兄樣、それではあなたの好きなやうに致しませう』と丈部は云つて、この旅客の前に暖い酒肴を置いた。赤穴は酒にも肴にも手を觸れないで、暫らく動かないで、默つてゐた。それから、母を起す事を恐れるかのやうに、――ささやきの聲になつて、云つた、――

『こんなにおそく來るやうになつたわけを、これから云はねばならない。私が出雲へ歸ると、人々は以前の君主塩冶殿の厚恩を忘れて、あの富田城を取つた謀叛人の經久に媚を呈して居るのを見た。從弟の赤穴丹治が經久に仕へて、その家臣として富田の城内に住居して居るのを訪れねばならなかつた。彼は私に經久の前に出るやうに勸めた、私は新しい君主の顏を見た事がないから、重にその人の性格を見るためにその勸めに應じた。經久は熟練なる軍師で、非常な勇氣があるが、狡猾で殘忍である。私はこの人に仕へる事は決してできない事を知らして置く事を必要と思つた。その面前を下ると、彼は私の從弟に命じて私を留めた、――家の中から私を出さないやうにした。私は九月九日に播磨へ歸る約束のある事を云ひ張つたが、出る事を許してくれなかつた。それで私は夜城から逃げ出さうと思つたが、たえず見張りがついてゐたので、たうとう今日まで約束を果す方法は見出せなかつた。……』

『今日まで！』丈部は驚いて叫んだ、――『城はここから百里以上もある』

『さうです』赤穴は答へた、『人は一日に百里を行く事はできない。しかし、約束を守らなければ私はよくは思はれない事を思うた、それから私は「魂よく一日に千里を行く」と云ふ古い諺を思ひ出した。幸にして私は刀を携ふる事を許されてゐた、――それでやう

やく私は歸つて來る事ができた。……母上を大事にして下さい」

かう云つて、彼は立ち上つて同時に消えた。

その時丈部は赤穴が約束を果すために自殺した事を知つた。

未明に丈部左門は出雲の國富田城に向つて出發した。松江に着いて彼はそこで九月九日に赤穴宗右衛門は城內の赤穴丹治の家で切腹した事を聞いた。それから丈部は赤穴丹治の家に行つて、丹治の信義のない事を責めて、家族の面前で彼を殺して、自分は怪我もしないで逃れた。それから經久がこの話を聞いた時、丈部を追はせないやうに命令を出した。即ち經久自らは亂暴な殘忍な人ではあつたが、外の人の信を愛する事を尊敬して、丈部左門の友情と勇氣を感嘆する事ができたからであつた。

破約

一

『私死ぬ事かまひませんし』死にかけて居る妻が云つた、——『ただ一つ氣にかかる事があります。私の代りにこのうちへ誰が來るでせう、それが知りたい』

『愛する妻』悲しんで居る夫は答へた、『誰も代りなどは入れない。もう決して、決して再婚はしない』

から云つた時は、彼は心から云つたのであつた、今失ひかけて居る女を愛してゐたからである。

『武士の誓にかけて？』かすかな微笑をもつて彼女は尋ねた。

『武士の誓にかけて』彼は答へた、——彼女の青白いやせた顔を撫でながら。

『それなら、あなた』彼女は云つた、『あなたは私を庭に埋めて下さいね、——いゝて

せう、——あの向うの隅に、私達が植ゑたあの梅の林の近くに。私は先からこの事を頼みたかつたのですが、もしあなたが再婚なさると、そんな近いところに墓のあるのがおいやでせうと思つたのです。今あなたが再婚しないと約束なさつたから、——それで私遠慮しないで私の願を申します。……私お庭に埋めて欲しい、時々あなたの聲が聞かれるでせうし、又春になつたら花が見られるでせうから』

『好きなやうにして上げる』彼は答へた、『しかし今からそんな葬式の話は止めよう、もう駄目と云ふ程重いわけでもないのだから』

『駄目ですよ』彼女は答へた、——『今日朝のうちに死にます。……しかし庭に埋めて下さいますね』

『宜しい』彼は云つた、——『私共が植ゑた梅の木の影の下に、——そしてそこに立派な墓をたてて上げる』

『それから小さい鈴を一つ下さいませんか』

『鈴——?』

『はい、棺の中へ小さい鈴を入れて下さい、——巡禮のもつて居るやうなあんな小さい鈴。あんなのを下さいませんか』

『上げよう、そんな小さい鈴を、——それから何か外に欲しい物は』
『外に何もありません』彼女は云つた、……『あなた、いつでもあなたは私に大變親切にして下さいました。もう安心して死なれます』
それから妻は瞑目して死んだ、——丁度疲れた子供が寢込むやうに無造作に。死んだ時美しい顏をしてゐた、そして顏に微笑があつた。

彼女は庭園に、愛した樹の影の下に埋葬された、そして小さい鈴は一緒に埋められた。墓の上に家の定紋の飾りのある、そして『慈海院梅花明影大姉』と云ふ戒名のある立派な石碑がたてられた。

* * *

しかし妻の死後一年たたぬうちに、その武士の親戚や友人は、彼に再婚を迫り出した。『未だ若い』彼等は云つた、『そして一人息(むすこ)だ、子供がない。武士は結婚すべき義務がある。子供がなくて死んだら、祖先を祭つたり、供物をしたりする事を誰がするか』
澤山のそんな申し立てによつて、彼はたうとう再婚するやうに說破された。花嫁は僅か

十八であつた、そして庭にある墓の沈默の非難があつたが、深く彼女を愛する事のできる事が分つて來た。

二

結婚後七日目までは、若い妻の幸福の邪魔が起らなかつた、——七日目になつて、夫は夜、城につめて居る事の必要な或役を命ぜられた。獨り留守居をせねばならなかつた第一夜に、妻は說明のできないやうな不安を感じた、——理由は分らないが、何だか妙に恐ろしかつた。床についても眠られなかつた。何となしにあたりは重苦しかつた、——嵐の前に時としてあるやうな一種名狀し難い重苦しさであつた。

丑の刻に、彼女は夜外の方で鈴の鳴る音を聞いた、——巡禮の鈴であつた、——そして彼女は今頃何の巡禮が士族屋敷を通るのかと不思議に思つた。やがて、暫らく休んでから、鈴がもつと近くひびいた。明らかに巡禮はこの家に近づいて來るのであつた、——しかし何故道もない裏から近づいて來るのであらうか。……突然犬が妙な恐ろしさうな風に吠え泣きをし出した、——そして夢の恐怖のやうな恐怖が彼女を襲うた。……その鈴の音はた

しかに庭てあつた。……女中を起しに起きようとした。しかし起きる事もできない、――動く事もできない、――聲をあげる事もできない事が分つた。……そして近く、段々近く、鈴の音が聞えて來た、――そしてあゝ、その犬の吠えやうはどんなであつたらう。……それから影がそつと忍んで來るやうに、その部屋へ一人の女がそつと入つて來た、――戸と云ふ戸は皆固く閉ざされたまま、それから、ふすまが動きもしないで、――經かたびらを着て、巡禮の鈴をもつた女が。死んでから餘程になるから、眼はない、――そしてほどいた髮の毛は顏の廻りに長く垂れてゐた、――そして彼女はその亂れた髮の毛の中から眼なくして見、舌なくして語つた、――

『いけない、いけない、このうちにゐてはいけない。未だ私はこのうちの主婦だ。出て行け、そして出て行く理由を誰にも云つてはいけない。もしあの人に云つたら、八つ裂きにする』

さう云つて、その幽靈は消えた。花嫁は恐怖のために正氣を失つた。あけ方まで彼女はそのままになつてゐた。

それでも、樂しい日の光を見ると彼女は見たり聞いたりした物の事實を疑つた。云つてはならないと云はれた事の記憶は未だ彼女をそんなにひどく憺ましてゐたので、彼女は夫にも誰にも、その幽靈の事を話す氣にはなれなかつた。しかし彼女はただ恐ろしい夢を見て病氣になつたのだと自分で納得する事が大方できた。

しかし、翌晩は疑ふ事はできなかつた。再び丑の刻に犬が吠え泣きを始めた、――再び鈴がひびいた、――庭の方から徐ろに近づいて、――再び、聞いて居る彼女は起きて呼ばうとしたが駄目であつた、――再び死者は部屋に來て、小聲で叱つた、――

『出て行け、その理由は誰にも云つてはならない。もしあの人にそつとでも云つたら、八つ裂きにする。……』

今度は幽靈は床の近くまで來た、――そして床の上で屈んで、つぶやいて、變な顏をして見せた。……

翌朝武士が城から歸つた時、彼の若い妻は彼の前に平伏して歎願した、――

『お願です』彼女は云つた、『こんな事を申上げるのは恩知らずで、失禮ですが、赦し

て下さい、しかし私を里へ歸して下さい、――今すぐ歸して下さい』
『ここに何か面白くない事があるかね』夫は心から驚いて尋ねた。『誰か留守中に何か意地の悪い事でもしたかね』
『そんな事ぢやありません――』彼女はすすり泣きをしながら答へた。『誰でも皆、ここでは私に大變親切にして下さいます。……けれども、私は續いてあなたの妻になつて居られません、――私出て行かねばなりません。……』
『困つたね』彼は非常に驚いて叫んだ、『このうちで何か面白くない事があるのは甚だ殘念だ。しかし出て行きたい理由が分らない、――誰か大變不親切な事でもしない以上は。……本當に離縁してくれと云ふつもりでないだらうね』
彼女は震へながら、泣きながら答へた、――
『離縁して下さらなければ、私は死にます』
彼は暫らく默つてゐた、――どうしてこんな驚くべき事を云ひ出したのであらう。その理由を考へて見ても駄目であつた。それから何の感情をも面に表はさないで答へた、――
『何も缺點のないお前を兩親の方へ送りかへすのは恥づかしい行であらう。何かさうして貰ひたい相應な理由を云つてくれたら、――どんな理由でも、わけの分る理由なら宜し

いから、――私は離縁狀を書く事ができる。しかし、理由、――相應な理由がなければ、離緣するわけには行かない、――私共の家の名譽は世間の人の口の端にかかつてはならないから』

そこで彼女は云はずには居られなくなつて來た、そして彼女は一切の事を告げた――恐怖の苦痛のうちにつぎのやうに云ひ足した、――

『もうあなたに話しましたから、私は殺されます、――殺されます。……』

勇敢な人であり、又お化けなどを信ずる人ではないが、武士は一時非常に驚いた。しかしその事の簡單な自然の解決が心に浮んで來た。

『お前は』彼は云つた、『お前は今大層神經を起して居る、誰かつまらない話をした者があるのぢやないか。ただこのうちで、變な夢を見たと云ふわけで、離緣するわけには行かない。しかし留守中にこんな風に苦しんでゐたのは、本當に氣の毒だ。今夜も又城へ行かねばならないが、お前一人にしては置かない。お前の部屋にゐて、寢ず番をしてくれる武士を二人云ひつける、そしたら、安心して寢られるだらう。二人ともよい人だから、できるだけの注意をしてくれる』

それから、夫がそれ程思ひやり深く、又それ程情け深く話してくれたので、妻は自分の

恐怖が殆ど恥づかしくなつて來た程であつた、そしてこの家に止つてゐようと決心した。

三

若い妻の保護を托された二人の武士は、大きな、强い、心の單純な人達であつた、――女や子供の保護者として經驗のある人々であつた。彼女の氣を引立てるために、花嫁に面白い話を聞かせた。彼女はこの人達と長い閒話した。彼等の面白いおどけで笑つた、そして殆ど彼女の恐怖を忘れた。いよいよ眠るために床についた時、二人の武士はその部屋の一方で屛風のうしろに陣取つて碁を始めた、――彼女の邪魔にならないやうに、小聲で話してゐた。彼女は赤兒のやうに眠つた。

しかし又、丑の刻に彼女は恐怖のうめきをもつて眼をさました、――例の鈴を聞いたのであつた。……それはもう近くに來てゐた、そして段々近くなつて來た。彼女は飛び上つた、彼女は叫んだ、――しかしその部屋に動く物はない、――ただ死の如き沈默、――段々と增して行く沈默、――段々と濃くなつて行く沈默、――があるだけであつた。彼女は武士のところへ飛んで行つた、彼等は碁盤の前に、――動かないで、――銘々相手を坐つ

た目附でにらんでゐた。彼女は彼等に叫んだ、彼等をゆり動かした、彼等は凍りついたやうになつてゐた。……

あとで彼等の云つたところでは、彼等は鈴を聞いた、――花嫁の叫びも聞いた、――起さうとして彼女がゆり動かしたのさへも知つてゐた、――そしてそれにも拘らず動く事も、物云ふ事もできなかつた。その時から彼等は聞く事も、見る事もできなくなつた、黒い眠りが彼等を捉へたのであつた。

＊

＊

＊

夜明けになつて、主人は花嫁の部屋に入つて、消えかかつた燈火の光て、血の溜りの中に寢て居る若い妻の首のない死骸を見た。やはり未だ打ちかけの碁を前にして坐りながら二人の武士は眠つてゐた。主人の叫びを聞いて彼等は飛び上つた、そしてぼんやり床の上の恐怖すべき物を見つめてゐた。……

首はどこにも見當らなかつた、――そしてその物すごい疵は、それが斬り取られたのでなく、もぎ取られた事を示した。血のしたたりはその部屋から椽側の角まで續いて、そこ

て雨戸は引裂かれたやうであつた。三人はその跡をたどつて庭に出た、――草地を通つて、――砂場を超えて、――廻りに花菖蒲のある池の岸に沿うて、――杉と竹との暗い蔭の下へ。そして不意に曲つたところで、彼等は蝙蝠のやうに嘲る魔物と面と向つて立つて居る事に氣がついた、卽ち長く埋められた女の姿が、墓の前に棒立ちになつて、――一方の手に鈴をつかみ、他方に血の滴る首をもつて居るのであつた。……暫らくの間、三人は痺れたやうになつて立つてゐた。それから一人の武士は念佛を唱へながら、刀を拔いて、その姿を打つた。直ちにそれは――經かたびら、骨、及び髮の空しい散亂となつて、――地上に崩れた、――そして鈴はその崩壞のうちから、チリンと鳴つて轉がり出た。しかし筋肉のない右の手は、手首から離れながら、なほ放たないで、――その指はやはり血の滴る首をつかんで、――そして黃色の蟹の鋏が落ちた果物をつかんで放たないやうに――爪をたてて、さいなんでゐた。……

＊
＊　＊

「『これはひどい話だ』私はそれを物語つた友人に云つた。『一體復讐をしたければ、その死人は、男に對してすべきであつた』

「男はさう考へます」彼は答へた。「しかし、それは女の感じ方ぢやありません、……」

彼の云ふところは正しかつた。

名高い佛僧存覺上人の『敎行信證』に云つてある、『人の禮拜する神は多く邪神なり、故に三寳に歸依する者は多くこれに仕へず。かかる神を禮拜して恩惠を受けたる者も、後になりて、かかる恩惠は不幸を生ずる事を常に知る』日本靈異記の中に記してある話がこの道理のよい例てある。

聖武天皇の御世に、讃岐國山田郡に、布敷臣(ふしきのをみ)と云ふ人の一人子に衣女(きぬめ)と云ふ娘があつた。衣女は容貌のよい大層強い女であつた、しかし彼女が十九になつて間もなく、その地方に危險な病氣が流行して、彼女もそれに襲はれた。兩親や親戚はその時、彼女のために或疫病神に祈つて、その神のためにさまざまの行をして、――彼女を助ける事を願うた。

數日の間、人事不省になつてゐたあとで、病人の娘は或晩我にかへつて、兩親に自分の見た夢の話をした。彼女は疫病神が現れて、彼女にかう告げた夢を見た、――『お前のう

ちの人々がお前のために熱心に自分に祈つて、信心深く自分を祟めるから、自分はお前を本當に助けてやりたい。しかしさうするには誰か外の人の生命を與へねばならない。お前と同じ名の誰か外の娘を知つてゐないか』『知つて居ります』衣女は答へた、『鵜足郡に私と同じ名の娘が居ります』『その女を自分に指し示せ』疫病神が云つて、眠れる人に觸つた、――それから觸られると共に、二人は鵜足郡の衣女の家の前に行つた。夜であつたが、うちの人々は未だ床についてゐなかつた、そして娘は臺所で何か洗つてゐた。『あれです』と山田郡の衣女が云つた。疫病神が帶にもつてゐた緋袋の中から鑿のやうな長い鋭い道具を取出して、家に入つて、鵜足郡の衣女の額にその鋭い道具をつき込んだ。そこで鵜足郡の衣女は非常に苦悶して床の上に倒れた。山田郡の衣女は眼を覺して、その夢の話をした。

しかし、それを物語つたあとで、彼女は再び人事不省になつた。三日間彼女は何事も分らないでゐた、そして兩親は彼女の囘復を望みなく思つてゐた。その時もう一度彼女は眼を開いて、物を云つた。しかし殆んど同時に彼女は床から起き上つて、物狂はしさうに部屋を見廻して、部屋から跳び出して、叫んだ、――『これは私のうちぢやない、――私の兩親ぢやない』……

何か餘程變な事が起つたのであつた。

鵜足郡の衣女は疫病神の鑿にさされて死んだ。兩親は歎き悲しんだ、檀那寺の僧侶達は彼女のために讀經して、遺骸は野外で火葬になつた。それから魂は冥途へ行つて閻魔大王の前に出た。しかし大王はこの少女を見るや否や叫んだ、――『この少女は鵜足郡の衣女だ、こんなに早くここへ連れて來てはならぬ。すぐ娑婆世界へかへせ、今一人の衣女――山田郡の少女を連れて來い』その時鵜足郡の衣女の魂は閻魔大王の前に哀泣して訴へた、――『大王さま、私死にましてから三日以上になります、今頃は私のからだは灰と煙になつて居りますので、――私のからだはございません』『心配には及ばぬ』畏ろしい大王は答へた、――『お前には山田郡の衣女のからだを與へる、――その女の魂は今すぐここに來る事になつて居るから。お前はからだが燒けた事は氣にかけなくともよい、お前には別の衣女のからだの方がもつと好都合だらう』それからかう云ひ終るや否や鵜足郡の衣女の魂は山田郡の衣女のからだに入つて再生した

ところで山田郡の衣女の兩親は、病人の娘が『これは私のうちぢやない』と叫びながら、

跳び上つて驅け出すのを見た時に、――彼等は娘が發狂したと想像した、そして、そのあとから『衣女、お前はどこへ行く、――ちよつと、お待ち、お前は病氣だから、そんなに走つてはいけない』――と呼びながら、走つた。しかし、娘は止まらないで、走り續けて、たうとう鵜足郡に行つて、死んだ衣女の家まで來た。そこへ驅け込んで、老人達を見た、それから、お辭儀をして、叫んだ、――『あゝ、うちへ歸つて嬉しい。……父樣も母樣も、お變りありませんか』彼等はその女が何者だか分らなかつたから、狂人だと思つた、しかし母はやさしく彼女に問うて云つた、――『お前はどこから來ましたか』『冥途から來ました』衣女は答へた。『私はあなたの娘の衣女です、冥途から歸つて來たのです。しかし今はからだが違つてゐます、母樣』それから彼女はこれまでの話をした、そこで老人達は非常に驚いたが、どう信じてよいか分らなかつた。やがて山田郡の衣女の兩親は娘をさがしながら、その家に來た、それから二人の父と二人の母は一緒に相談して、娘に話をくりかへさせて、何度も質問した。しかしどんな質問に對しても彼女の答は、正しいので、彼女の話は疑はれなくなつて來た。たうとう、山田郡の衣女の母は、病氣の娘が見た妙な夢を述べてから、鵜足郡の衣女の兩親に云つた、――この娘の魂はあなた方のお子さんの魂だと私達は承知します。しかし、御覽の通りからだは私達の娘のからだです。それでこの

娘は兩方の家の者ですね。これからはこの娘を兩方の家の娘とするに御同意ありたい」これには鵜足郡の兩親も喜んで一致した、そして、その後衣女は兩家の財産を相續した事が記錄に殘つて居る。

佛敎百科全書の著者は云ふ、『この話は日本靈異記第一卷の十二枚目の左のとこに見えて居る』

果心居士

天正年間、京都の北の方の町に、果心居士と云ふ老人がゐた。長い白い鬚をはやして、いつも神官のやうな服裝をしてゐたが、實は佛畫を見せて佛教を說いて生活を營んでゐたのであつた。晴天の日にはいつも祇園の祠の境內で、木に大きな掛物をかけるのが習慣であつた、それは地獄變相の圖であつた。この掛物はそれに描いてある物が悉く眞に逼つて巧妙にできてゐた。そして老人はそれを見に集まつて居る人々に見せて、携へてゐた如意をもつて色々の責苦を詳しく說き示し、凡ての人に佛の教に從ふやうに勸めて、因果應報の理を說いてゐた。その繪を見て、それについて老人の說教するのを聞くために、人が群をなして集まつた、そして喜捨を受けるためにその前に敷いてあるむしろは、そこへ投げられた貨幣の山で、表面が見えない程であつた。

その當時、織田信長が畿內を治めてゐた。彼の侍臣荒川某、祇園の祠へ參詣の途中、偶然そこでその掛物を見て、あとで殿中に歸つてその話をした。信長は荒川の話を聞いて興

味を感じ、直ちに果心居士に幅を携へて參上するやうに命じた。

掛物を見た時、信長はその繪のあざやかさに驚いた事を隱す事はできなかつた、鬼卒及び罪人は實際彼の眼前に動くやうであつた、そして彼は繪の中から叫號の聲を聞いた、そしてそこに描いてある鮮血は實際流れて居るやうであつた、――それで彼は、その繪が濡れて居るのではないかと指を觸れて見ないわけに行かなかつた。しかし指は汚れなかつた、――卽ち紙は全く乾いて居るからであつた。益々驚いて信長はこの不思議な繪の筆者を尋ねた。果心居士はそれに對して、それは名高い小栗宗丹が、――靈感を得んがために淸水の觀世音に熱心に祈り、百日の間每日齋戒を行つたあとで、――描いた事を答へた。

その掛物をたしかに信長が所望して居る事を見て、荒川はその時果心居士にその幅を信長公に献上してはどうかと尋ねた。しかし老人は大膽に答へた、――『この繪は私のもつて居る唯一の寶で、それを人に見せて少し金を儲ける事ができるのです。今この繪を信長公に献上すれば、私の生計の唯一の方法がなくなります。しかし、信長公が是非お望みとあれば、黄金壹百兩を頂きたい。それだけのお金で、私は何か利益のある商賣でも始めま

せう。さうでないと、繪はさし上げられません』

信長はこの答を聞いて、喜ばないやうであつた、そして默つてゐた。荒川はやがて何か公の耳にささやいたが、公は承諾したやうにうなづいた、それから果心居士は少しのお金を賜はつて、御前から引き下がつた。

しかし、老人が屋敷を離れると、荒川はひそかに跡を追つた、——奸計をもつてその繪を奪ひ取るべき機會を得ようとしたのであつた。その機會は來た、果心居士は郊外の山の方へ直ちに通ずる途に偶然さしかかつたからであつた。彼が山の麓の或淋しい場所に達した時、彼は荒川に捕へられた。荒川は彼に云つた、——『その幅に對して黄金百兩を貪るのは何と云ふ慾張りだらう。黄金百兩の代りに、三尺の鐵の一片をやる』それから荒川は劍を拔いて老人を殺して、幅を奪つた。

翌日荒川は掛物を——果心居士が信長の邸を退出する前に包んだ通りに包んだままで、信長に獻上した、信長は直ちにそれを展いて掛ける事を命じた。しかし展いて見ると、信長も彼の侍も二人とも、繪は全く無い、ただ白紙だけてある事を見て驚くばかりてあつた。

荒川はどうして、もとの繪が消え失せたか說明ができなかつた、そして彼は――知つてか或は知らないでか　主人を欺いた事について罪があるので、處罰されるときまつた　それて彼は長い間閉門蟄居を命ぜられた。

荒川の閉門の時期が終るか終らないうちに、果心居士が北野の祠の境内にその名高い繪を見せて居ると云ふ通知があつた。荒川は殆んどその耳を信ずる事ができなかつた。しかしその通知を得て、彼の心にどうにかしてその掛物を奪つて、それて先頃の失策を償ふ事ができさうな望みが湧いて來た。そこで彼は急いで從者の幾人かを集めて、寺に急いだ、しかし彼がそこに達した時に、彼は果心居士が去つてしまつたと云はれた。

幾日か後に、果心居士がその繪を淸水堂で見せて、大きな群集に對して、それについて說敎して居る事が知れて來た。荒川は大急ぎで淸水へ行つた、しかし、そこに着いた時、群集は丁度散つて居るところであつた、――卽ち果心居士は再び消えて、ゐなかつたのであつた。

たうとう或日の事、荒川は思ひがけなく或酒店で果心居士を認めてそこで彼を捕へた。老人は自分の捕へられたのを見て、機嫌よくただ笑ふだけてあつた、そして云つた、――

『一緒に行つて上げるが、少し酒を飲むまでお待ちなさい』この要求には、荒川は異存はなかつた、そこで果心居士は十二の大杯を飲みつくして、觀て居る人々を驚かした。十二杯目を飲んでから少し滿足したと云つた、それから荒川は命じて彼を繩でしばつて信長の邸へ連れて行つた。

邸の取調所で、果心居士は、直ちに奉行の取調を受けた、そして嚴しく責められた。最後に奉行は彼に云つた、――『お前は魔術で人を欺いてゐた事はたしかだ、その犯罪だけで、お前はひどい罰を受ける資格がある。しかしもしお前がその繪を信長公に恭しく献上すれば、今度はお前の罪は大目に見てやる。さもなければ、甚だ重い罰を必ず課する事にする』

このおどかしを聞いて果心居士は困つたやうな笑方をした、――『人を欺くやうな罪を犯したのは私ではない』それから、荒川に向つて、彼は叫んだ、――『お前こそうそつきだ。お前は繪をさし上げて信長公に諂はうとした、そしてそれを盜むために私を殺さうとした。罪と云つたら、これ程の罪はどこにあるか。幸にして、お前は私を殺す事はできなかつた、しかし、お前の望み通りにできたらその行に對してどんな辯解ができるか。とにかく、繪を盜んだのはお前だ。私のもつて居る繪はただの寫しだ。お前が繪を盜んでから、

信長公に献上する事がいやになつたので、その祕密の行や心をかくすために、その罪を私に着せて、私が本物の繪を白紙の掛物と取替へたと云つて居るのだ。どこに本物の繪があるか私は知らない。多分お前は知つて居るのだらう』

かう云はれて、荒川は怒りの餘り、驅け寄つて、果心居士を打たうとしたが、番人等に遮ぎられて果さなかつた。しかしこの不意の怒りの破裂は、奉行に荒川が全く無罪ではあるまいと思はせる事になつた。暫らく、果心居士を獄に下してから、奉行は荒川を嚴しく調べにかかつた。ところで荒川は元來訥辯であつたが、この場合、殊に興奮の餘り、殆ど云ふ事ができないで、吃つたり、撞着したりして、どうしても罪のありさうな形跡を表はした。そこで奉行は、荒川を打つて白狀させるやうに命じた。しかし事實の白狀らしい事も彼にはできさうになかつた。そこで彼は鞭て打たれて、感覺を失つて、死人のやうになつて倒れた。

果心居士は獄にゐて、荒川の事を聞いて笑つた。しかし少ししてから、彼は獄吏に向つて云つた、――『あの荒川と云ふ奴は全く姦邪の振舞をしたので、私は態とこの罰を與へて、彼の惡い心根を懲らしてやらうとしたのだ。しかし、荒川は事實を知らないに相違な

いから、それで私はよく分るやうに一切の事を說明しますと今奉行に傳へてくれ給へ」

それから果心居士は再び奉行の前に連れられて、つぎのやうな宣言をした、――『本當に優れた繪なら、どんな繪にも魂がある、そして、そんな繪には自分の意志があるから、自分に生命を與へてくれた人から、或は又正しい所有者から、離れる事を好まない事がある。眞の畫には魂がある事を證明するやうな話が澤山ある。昔、法眼元信が襖に描いた雀が何羽か飛んで行つて、そのあとが空になつた事はよく知られて居る。掛物に描いてある馬が毎夜草を喰ひに出かけた事もよく知られて居る。ところで、今の場合では、事實はかうだと私は信ずる、即ち信長公は私の掛物の正當の所有者ではなかつたから、繪が信長公の面前で展かれた時、紙の上から自分で消えたのであらう。しかし、もし私が始めに云つた通りの價段、――即ち黃金壹百兩、――をお出しになれば、その時は私の考では、繪はひとりで今白紙になつて居るところへ現れませう。とにかく、やつて見てはどうです。少しも危い事はない、――繪が現れなければ、金は直ちに返すまでの事だから』

こんな妙な斷言を聞いたので、信長は百兩を拂ふ事を命じて、その結果を見るために親しく臨席した。それから掛物は彼の前で展かれた、そして列席者一同の驚いた事には、その繪は、悉く詳細に現れた。しかし色が少しさめて、亡者と鬼卒の形が、前のやうに生き

て居るやうでなかつた。この相違を見て、信長公は果心居士に向つて、その理由を説明するやうに求めた、そこで果心居士は答へた、――『始めて御覽になつた繪の價値は、どんな價もつけられない繪の價値でした。しかし御覽になつて居る繪の價値は、正にお拂になつた物――卽ち黃金壹百兩――を表はして居ります。……外に仕方がございません』この答を聞いて列席の人々は、もうこれ以上この老人に反對する事は到底無效である事を感じた。彼は直ちに赦された、そして荒川も亦赦された、彼の受けた罰によつて彼の罪は十二分に償はれたからであつた。

ところで、荒川に武一と云ふ弟がゐたが、――やはり信長の侍であつた。武一は荒川が打たれて獄に入れられたのを非常に怒つて、果心居士を殺さうと決心した。果心居士は再び放免されるや否や、酒屋へ行つて酒を命じた。武一はそのあとから店に入つて、彼を斬り倒し、首を切り落した。それから老人に拂はれた百兩を取つて、武一は首と金とを一緒に風呂敷に包んで、荒川に見せるために家に急いだ。しかし彼が包みを解いて見ると首と思つたのは空の酒德利で、黃金は土塊であつた。……それから間もなく、首のない體は酒屋から步き出して、――どこへだか、いつだか誰も知らないが、――消え失せた事を聞い

て、この兄弟は益々驚くばかりであつた。

一月ばかり後まで、果心居士の事は知られなかつた、その頃になつて、信長公の邸前で、遠雷のやうな大鼾をして寢て居る一人の泥醉者があつた。一人の侍が、その泥醉者卽ち果心居士である事を發見した。この無禮な犯罪のために、老人は直ちに捕へられて牢に入れられた。それでも眼をさまさない、そして牢で彼は十日十晩間斷なく眠り續けた、——その間たえずその高鼾が餘程遠くまで聞えた。

この頃に、信長公は部下の一人である明智光秀の反逆のために死ぬやうになつたので、光秀がそれから政を取つた。しかし光秀の權力は十二日しか續かなかつた。

ところで、光秀が京都の主人になつた時、彼は果心居士の事を聞いた、それから命じて、その囚人を彼の前に出させた。そこで果心居士は新しい君主の面前に呼ばれた、しかし光秀は彼に丁寧な言葉をかけて、賓客として待遇し、そして立派な饗應するやうに命じた。老人に御馳走をしてから、光秀は彼に云つた、——『聞くところによれば、先生は大層お酒が好きださうです、——一度にどれ程めし上がりますか』果心居士は答へた、——『量

はよくは知らんが、醉へば止めます』そこで光秀公は果心居士の前に大盃を置いて、侍臣に命じて老人の飲めるだけ、幾度となく、酒を注がせた。そこで果心居士は、續いて十度大盃を飲み干して、さらに求めたが、下來は酒が盡きた事を答へた。列席の人々で、この强酒ぶりに驚かない者はなかつた、そこで光秀公は果心居士に尋ねた、『先生、未だ不足ですか』『はい、少し滿足しました』果心居士は答へた、――『ところで御親切の御返禮として、私の技を少し御覽に入れませう。どうかその屏風を見てゐて下さい』彼は大きな八曲屏風を指した、それには近江八景が描いてあつた、そのうちの一つに、湖上遙かに舟を漕いで居る人があつた、――その舟は、屏風の表面では、長さ一寸にも足りなかつた。果心居士は舟の方へ手をあげて招いた、すると舟が突然向き直つて、繪の前面の方へ動き出すのが見えた。近づくに隨つて段々大きくなつた、そして船頭の顏つきが、はつきり認められるやうになつて來た。やはり段々舟が近くなつて來た、――いつでも大きくなつて、――たうとうそれが近くに見えて來た。それから突然、湖水が溢れて來るやうであつた、――繪から、部屋へ、――そして部屋は洪水になつた、そして水が膝の上まで達したので見物人は急いで着物をかかげた。同時に舟が、――本當の漁船が、――屏風の中から、滑り出すやうであつた、――そして一丁の艪の軋る音が聞えた。やはり部屋の中の洪水は增

す一方であつたので、見物人は帶まで水に浸つて立つてゐた。それから舟は果心居士のところへ近づいて來た、そして果心居士はその舟に上つた、そこで船頭はふりかへつて、甚だ速かに漕ぎ去らうとした。それから舟が退いた時、部屋の水は急に低くなつて、――屏風の中へ退却するやうであつた。舟が繪の前面と思はれるところを通過するや否や、部屋は再び乾いた。しかし、やはり繪の中の舟は、繪の中の水の上を滑るやうであつた、――段々遠くへ退いて、段々小さくなつて行つて、たうとう最後に沖の中の一點となつて小さくなつた。それから、それは全く見えなくなつた、そして果心居士はそれと共に消えた。

彼は再び日本には現れなかつた。

梅津忠兵衞

梅津忠兵衞は非常な力量と勇氣のある若い武士であつた。彼は戸村十太夫と云ふ地頭に仕へてゐた、その居城は出羽の國横手の近傍の高い山の上にあつた。家中はその山の下に小さい町をつくつてゐた。

忠兵衞は城門の夜番に選ばれた一人であつた。夜番には二通りあつた、——第一のは夕方に始まつて夜中に終り、第二のは夜中に始まつてあけ方に終るのであつた。

或時、忠兵衞が第二の夜番に當つて居る時、不思議な事件に遇つた。眞夜中に夜番の務めにつからうとして山を上つて居る間に、彼は城の方へ行く曲つた道の最後の曲り角に一人の女が立つて居るのを見た。彼女は一人の子供を抱いてゐて、誰か人を待ち合せて居るやうであつた。そんな時刻に、そんな淋しい場所に女の居る事は、最も特別な事情でもなければ、説明のできない事であつた、そして忠兵衞は化け物は暮れてから人をだまして殺すために女の姿になる事を思ひ合せた。それで彼は目の前の女と見える物も本當に女である

かどうかを疑つた、それて彼女が彼の方へ話しかけるやうに急いて來たのを見て、彼は一言も云はないでやりすごさうとした。しかし、女が彼の名を呼んで、甚だやさしい聲で、つぎのやうに云つた時に、彼は餘り驚いてさうはできなかつた、――『梅津殿、私は今夜大層困つてゐます、そしてせねばならぬ難儀な務めがあります、どうかほんの暫らくこの子供をもつてゐて下さいませんか』そして女は子供を彼にさし出した。

忠兵衞はこの大層若さうに見える女を知らなかつた、彼はその魅力のある知らない聲を怪しんだ、超自然的誘惑を怪しんだ、何でも怪しんで見た、――しかし彼は元來深切であつた、そして化け物を恐れて、深切なる行爲を控えるのは卑怯だと思つた。返事もしないて子供を受取つた。『歸つて來るまでもつてゐて下さい』女が云つた、『すぐ歸ります』『もつてゐませう』彼は答へた、それから直ちに女は彼からふり向いて、彼が殆ど自分の眼を疑つた程、輕く、早く音もさせずにその道を離れて、飛ぶやうに山を下つて行つた。忽ちのうちに彼女は見えなくなつた。

忠兵衞はその時始めて子供を見た。餘り小さくて、生れたばかりのやうに見えた。抱かれたまま甚だ靜かにしてゐた、少しも泣かなかつた。

不意にそれが大きくなるやうに思はれた。彼は再びそれを見た。……否、それはやはり

小さい物であつた、そして動きもしなかつた。何故大きくなつたと思つたのであらう。

そのつぎにその理由が分つた、――そして彼は全身ぞつとするのを覺えた。子供は大きくなるのではなかつた、それは重くなるのであつた。……始めのうちそれはただ七八百目のやうであつたが、つぎにその重さが次第に二倍になり――三倍になり――四倍になつた。もう五貫目より輕い事はないと思はれて來た、――そしてやはりそれが重さを加へて行つた。……十貫、――十五貫、――二十貫。……忠兵衛はだまされた事を知つた、――彼は人間と話したのではない事、――その子供は人間でない事を知つた。しかし約束は約束だ、武士たる者は約束は守らねばならない。そこで彼は子供を抱いてゐた、子供は刻々重くなつた、……三十貫――四十貫――五十貫。……どうなつて行くのか見當がつかなかつた、しかし彼は恐れない事、力の續く限り子供ははなさない事を決心した。……六十貫、――七十貫、――八十貫。彼の筋肉は緊張の餘り震ひ始めた、――それでも重さが增して行つた。……『南無阿彌陀佛』彼は呻いた――『南無阿彌陀佛、――南無阿彌陀佛』彼がこの唱名を三度目に唱へた時、その重さは一時に消えた、そして彼は空手でぼんやり立つてゐた、――即ち子供は不思議にも消えたのであつた。しかし殆ど同時に、その不可思議な女が、行つた時のやうに、又早く歸つて來るのを見た。やはり息をきらしながら、彼女は彼

のところへ來た、その時始めて彼は彼女が甚だ美しい事を見た、――しかし彼女の額に汗が流れてゐた、そして彼女の袖には、今まで働いてゐたやうに、たすきがかかつてゐた。

『梅津殿』彼女は云つた、『甚だ大きなお蔭に預かつた。私はこの氏神だが、今夜氏子の一人がお產をするので、私に助けを斷つた。しかしその骨折は中々てあつた、私一人の力では、その氏子を助ける事ができない事が分つた、――それでお前の力量と勇氣を見込んで賴んだわけだ。そしてお前の手に置いたのは未だ生れ出ない子供であつた、それから始めて子供が段々重くなつて行くのを覺えた時分は、產門が閉ぢてゐたので大層危い時てあつた。子供が餘り重くなつて、もうこれ以上その重さにたえられないと絕望した時、――丁度その時、母が死んだやうて、一族の者皆泣いたのであつた。その時『南無阿彌陀佛』の唱名を三度お前が唱へてくれた、――そして三度目に、佛の力が助けとなつたので、產門が開いた。……それてお前のしてくれた恩は、適當に報じたい。勇氣のある武士に取つては力量より有用な物はあるまい、それ故お前ばかりでなく、お前の子供にも、子供の子供にも、大力量を授ける事にする』

それから、この約束をして氏神は消えた。

梅津忠兵衛は非常に不思議に思ひながら、城の方へ進んだ。勤務を終つて、朝の祈りをする前に、いつものやうに顔と手を洗ひにかかつた。使つてゐた手拭をしぼらうとすると、その强い物が二つにきれたので驚いた。そのきれたのを重ねて、しぼつて見た、丁度ぬれ紙のやうに――又それがきれた。彼は四枚重ねてしぼつて見たが、結果は同じであつた。やがて、唐金や鐵の色々の物を扱つて見ると、粘土のやうに彼の思ふ通りになる事を見て、彼は約束の通り大力を充分に授けられた事、それから物に觸れる時注意しないと手の中でつぶれる事をさとつた。

うちに歸つてから、その夜その土地で出產があつたかどうかを尋ねて見た。そして彼は丁度その事件のあつた時刻に出產のあつた事、それからその事情は氏神から聞いた通りであつた事を知つた。

梅津忠兵衛の子供等は父の大力を相續した。彼の子孫の多くは――皆著しく强い人々だが――今この話の書かれた時、出羽の國に未だ住してゐた。

僧興義

殆んど一千年前、近江の國大津の名高い三井寺に、興義と云ふ博學の僧がゐた。繪の大家であつた。佛像、山水、花鳥を殆んど同じ程度に巧みに描いたが、魚を描く事が最も得意であつた。天氣の好い日で、佛事の暇のある時には、彼はいつも漁師を雇うて琵琶湖に行き、魚を痛めないやうに捕へさせて大きな盥に放ち、その游ぎ廻るのを見て寫生した。繪を描いてから、勞りながら食物を與へて喜び、――自分で湖水までもつて行つて、――放つてやるのがつねであつた。彼の魚の繪はたうとう名高くなつたので、人はそれを見に遠くから旅をして來た。しかし彼の凡ての魚の繪のうちで、最も不思議なのは、寫生ではなくて、夢の記憶から描いた物であつた。そのわけは、或日の事、彼が魚の游ぐのを見るために、湖岸に坐つて居るうちに思はずまどろんで、水中の魚と遊んだ夢を見た。眼をましてから、その夢の記憶が餘りに鮮明であつたので、彼はそれを描く事ができた、そしてお寺の自分の部屋の床の間にかけて置いたこの繪を、彼は『夢應の鯉魚』と呼んだ。

興義は、彼の魚の繪を一枚も賣る事を喜ばなかつた。山水の繪、鳥の繪、花の繪は喜んで、手放したが、彼はいつも、魚を殺したり喰べたりするやうな殘酷な者には、生きた魚の繪は賣りたくないと云つてゐた。そして彼の繪を買ひたがる人々は皆魚食の人々であつたから、彼等が如何程金を積んでも、彼はそれには迷はされなかつた。

或夏の事、興義は病氣になつた、それから一週間病んだあとで、物言ふ事も、動く事もできなくなつたので、彼は死んだと思はれた。しかし讀經など行はれたあとで、弟子達は體に幾分の溫みのある事を發見して、暫らく埋葬を見合す事にして、その死骸らしく思はれる物のわきで、見張をする事に決した。同じ日の午後に、彼は突然蘇生した、そして見張の人々にかう云つて尋ねた、——

『私が人事不省になつてから、幾日になりますか』

『三日以上になります』一人の弟子が答へた。『いのちがお絕えになつたと思ひました、それで今朝日頃のお友達、檀家の人々がお寺に集まつておとむらひをいたしました。私達が式を行ひましたが、お體が全く冷たくないから、埋葬は見合せました、それで今さうした事を甚だ喜んでゐます』

興義は成程とうなづいてから、云つた、——

『誰でもよいから、すぐに平（たひら）の助（すけ）のうちに行つて貰ひたい、そこでは今、若い人達が宴會を開いて居る——（魚を喰べて、酒を飲んで居る）——それで、云つて貰ひたい、——「あるじは蘇生しました、どうか宴會を止めて、卽刻來て下さいませんか、あなた方に珍らしい話をいたしますから」……同時に』——興義は續けて云つた——『助と兄弟達が、何をして居るか、見て來て貰ひたい、——私が云つた通り、宴會をしてゐないかどうか』

それから一人の弟子が直ちに平の助の家に行つて、助と弟の十郎が、家の子掃守（かもり）と一緒に、丁度興義が云つた通り、宴を開いて居る事を見て驚いた。しかし、その使命を聞いて三人は、直ちに酒肴をそのまゝにして、寺へ急いだ。興義は床から座蒲團に移つてゐたが、三人を見て歡迎の微笑を浮べた、それから、暫らくお祝と御禮の言葉を交換したあとで、興義は助に云つた、——

『これから二三お尋ねする事があるが、どうか聞かせて下さい。第一に、今日あなたは漁師の文四から魚を買ひませんでしたか』

『はい、買ひました』助は答へた——『しかしどうして御存じですか』

『少し待つて下さい』僧は云つた。……『その漁師の文四が今日、籠の中に三尺程の長

さの魚を入れて、お宅の門へ入つた。午後の未だ早い時分でしたが、丁度あなたと十郎様が碁を始めたところでした、――それから掃守が桃を喰べてゐながらその碁を見てゐました――さうでしたらう』

『その通りです』助と掃守は益々驚いて、一緒に叫んだ。

『それから掃守がその大きな魚を見て』興義は續いて云つた、『すぐにそれを買ふ事にした、それから代を拂ふ時に、文四に皿に入れた桃をいくつか與へて、酒を三杯飮ませてやりました。それから料理人を呼んだら、その人は魚を見て感心しました、それからあなたの命令て、それを膾にして、御馳走の用意をしました。……私の云つた通りぢやありませんか』

『さうです』助は答へた、『しかしあなたが、今日私のうちであつた事をどうして御存じですか、實に驚きます。どうかこんな事がどうして分りましたか聞かして下さい』

『さあ、これからが私の話です』僧は云つた。『御承知の通り殆んど皆の人達は私を死んだと思ひました、――あなたも私のとむらひに來てくれましたね。しかし、三日前に私はそんなにひどく惡いとは思はなかつた、ただ弱つて、非常に熱いと思つたので、外へ出て少し涼まうと思つた。それから骨を折つて床から起き上つて、――杖にすがつて、――

出かけたやうです。……事によればこれは想像から知れない、しかしやがてその事は皆さん御自分で判斷ができませう、私はただあつた事を何でもその通りに述べるつもりです。私がうちからあかるい外へ出ると、全く輕くなつたやうな、――籠や網から逃げ出した鳥のやうに輕くなつたやうな氣がした。私は段々行くうちに湖水に達した、水は青くて綺麗だつたから、しきりに游いで見たくなつた。着物を脱いで跳び込んで、そこら邊泳ぎ出した、それから、私は非常に早く、非常に巧みに游げるので驚いた、――ところが實は、病氣の前は游ぐ事はいつも非常に下手であつた。……皆さんは馬鹿な夢物語だと思はれるだらうが――聽いて下さい。……私がこんなに新しい力が出て來たので不思議に思つて居るうちに、氣がついて見ると、私の下にも廻りにも綺麗な魚が澤山游いでゐた、私は不意に幸福な魚が羨しくなつて來た、――どんなに人がよく游げると云つたところで、魚のやうに、水の下で面白くは遊ばれないと思つた。丁度その時、甚だ大きな魚が私の目の前の水面に頭を上げて、人間の聲で私にかう云つて話しかけた、――「あなたの願は何でもなく叶ひます、暫らくそこでお待ち下さい」それから、その魚は下の方へ行つて見えなくなつた、そこで私は待つてゐた。暫らくして湖水の底から、――私に物を云つたあの大きな魚の背中に乗つて、――王公のやうな冠と禮服を着けた人が浮かび上つて來て、私に云つた、

――『暫らく魚の境遇になつて見たいとの御身の願を知しめされた龍宮王から使をもつて來た。御身は多くの魚の生命を救つて、生物への同情をいつも示して居るから、神は今御身に水界の樂みを得させるために黄金の鯉の服を授け下さる。しかし御身は魚を喰べたり、又魚でつくつた食物を喰べたりしないやうに注意せねばならない、――どんなによい香がしても、――それから漁師へ捕へられないやうに、又どうかして體（からだ）を害をする事のないやうにやはり注意せねばならない』から云つて、その使者と魚は下の方へ行つて、深い水の中に消え失せた。私は自分を顧みると、私の全身が金のやうに輝く鱗で包まれてゐた、――私には鰭があつた、――私は實際黄金の鯉と化して居る事に氣がついた。それから、私の好きなところ、どこへでも游げる事が分つた。

『それから、私が游いで、深山の各所を訪れたらしい。「ここで、原文には、近江八景を說明した歌のやうな文句が入れてある」時々私は青い水の面で躍る日光を見たり、或は風から遮ぎられた靜かな水面に反映する山や木の美しい影を見たりしただけで滿足した。……私は殊に島の岸――沖津島か竹生島か、どちらかの――岸が赤い壁のやうに水の中に映つてゐたのを覺えて居る。……時々私は岸に餘り近づいたので、通つて行く人の顏を見たり、聲を聞いたりする事ができた、時々私は水の上に眠つてゐて、近づいて來る櫂の音

に驚かされた事もある。夜になれば、美しい月の眺めがあつた、しかし私は片瀬の漁舟のかがり火の近づいて來るのには幾度も驚かされた。天氣の惡い時には、下の方へ、――ずつと下の方へ、――一千尺も、――行つて湖の底で遊ぶ事にした。しかしこんな風に二三日面白く遊び廻つてゐたあとで、私は非常に空腹になつて來た、それで私は何か喰べる物をさがさうと思つて、この近所へ歸つて來た。丁度その時漁師の文四が釣をしてゐた、そして私は水の中に垂れてゐた鉤に近づいた。それには何か餌がついてゐて、よい香がした。私は同時に龍宮王の警告を想ひ出して、獨り言を云ひながら、游ぎ去つた、――「どうあつても魚の入れてある食物は喰べてはならない」それでも私の飢は非常に烈しくなつて來たので、私は誘惑に勝つ事ができなくなつた、それて又鉤のところへ游ぎかへつて、考へた、――「たとへ、文四が私を捕へても、私に害を加へる事はあるまい、――古い友達だから」私は鉤から餌を外す事はできなかつた、しかし餌の好い香は到底私が辛抱できない程てあつた、それて私はがぶりと全部を一呑みにした。さうするとすぐに、文四は糸を引いて、私を捕へた。私は彼に向つて叫んだ、「何をするんだ、――痛いぢやないか」――しかし彼には聞えなかつたらしい、直ちに私の顎に糸を通した。それから籠の中へ私を投げ入れて、お宅へ持つて行つたのです。そこて籠を開いた時、あなたと十郎様が南の部屋

て碁を打つてゐて、それを番守が——桃を喰べながら——見物して居るのが見えた。そのうちに皆さんが私を見に椽側へ出て來て、そんな大きな魚を見て喜びましたね。私はできるだけ大聲で皆さんに、——「私は魚ぢやない、——興義だ、——僧興義だ、どうか寺へかへしてくれ」と叫んだが、皆さんが喜んで手をたたいて私の言葉には頓着しなかつた。それから料理人は臺所へもつて行つて、荒々しく俎板の上に私を投げ出したが、そこには恐ろしく鋭い庖丁が置いてあつた。左の手で、彼は私を押へて、右の手で庖丁を取り上げた、——そして私は彼に叫んだ、——「どうしてそんなに殘酷に私を殺すのだ。私は佛の弟子だ、——助けてくれ」しかし同時に私はその庖丁で二つに割られるのを——非常な痛さと共に——覺えた、——そしてその時突然眼がさめた、そしてこの寺に歸つてゐた』

僧がこの通り話を終つた時、兄弟は不思議に思つた、そして助は云つた、——『今から想へば、なる程私達が見て居る間、魚の顎が始終動いてゐた、しかし聲は聞えなかつた。……それではあの魚の殘りは湖水に捨てるやうに、家へ使を出さねばならない』

興義はすぐに病氣が直つた、そしてそれから又澤山の繪を描いた。死後餘程たつてから、

彼の魚の繪が或時湖水に偶然落ちた事があつた、すると魚の形がその地の絹や紙から直ちに離れて游ぎ去つたと傳へられて居る。

民間傳說拾遺

蜻蛉

一

日本の古名の一つにアキツシマといふがある。それは『蜻蜓の島』といふ意味て、そして蜻蛉といふ意義の文字で書き現はされて居る。この蟲は、今はトンボといつて居るが、古代に於てはアキツと呼んだものである。思ふに、このアキツシマ即ち『蜻蜓の島』といふ名は、同じくアキツシマと發音はするが、異つた文字を用ひて書き現はされて居る『豊穰な國』といふ意味を有つた、なほ一層古い日本の稱呼からして、聲音上思ひ附いたものてあらう。それは兎も角、約二千六百年前に、神武天皇が大和の國を眺望しに或る山へ登られて、國の形蜻蜓のとなめせるに似たり、と御附の人達に御述べになつたといふ傳說がある。この御言葉があつたので、大和の國は蜻蜓洲と言はれるやうになり、しまひには此名が全土に及ぶやうになつた。そして蜻蛉は今日に至る迄も依然この帝國の徽號となつて

居る。

日本は、文字通りの意味で、蜻蛉の國と呼ばれる價値を充分に有つて居る。といふは、レインが詩的に述べて居るやうに、日本は「脈翅類愛好者にはまことのエルドラアドー」だからである。恐らくは南北兩温帶のどの國も、日本ほど多種類の蜻蛉を所持しては居まい。また熱帶國すらも、日本の種類の或る種のものより、もつと珍らしく美しい蜻蛉を造り得るかどうか、自分は怪しむものである。自分がこれまで見たうちで一番驚嘆すべき蜻蛉は、昨夏靜岡で捕つた一カロプテリックスであつた。土地の人は「黑トンボ」と呼んで居るものであつた。が、その色は實際は非常に濃い紫色であつた。天鵞絨のやうな紫色のその細長い翅は――觸つて見ても――不思議な或る花の花瓣のやうに思はれた。縫針のやうにか細いその紫色の體は、光澤無しの金の點線の裝飾を有つて居つた。頭部と胸部とは眼の覺めるやうな金線であつたが、眼は磨きをかけた金の球そつくりであつた。脚は、肢部に直角を爲して、丁度豆仙人の櫛の齒のやうな、何とも言へぬ纎細な棘がその内側を縁取つて居た。それは餘りに微妙なものだつたので、その平和を亂したことに一種の後悔の念を自分は覺え――神界に屬する者に要らぬ手出しをしたやうに感じ――た程であつた。――て、自分は直ぐとそのとまつて居た灌木へ返してやつた。……此の特殊な蜻蛉は燒津町の近く

の湧流の附近だけに棲んで居るといふことである。が、然しこれは多くの可愛らしい變種の一つたるに過ぎぬのである。

だが、より美妙な蜻蛉は稀に目にするもので、且つ日本文學に出て來ることは滅多に無い。――それて自分が讀者の興味を呼び得るのは、ただ蜻蜓の詩歌と、民間傳說との方面に於てのみてある。自分は蜻蜓の談論を古風な日本流儀で試みたいのである。そして自分が――奇妙な書物と永く人に忘られて居る圖畫との助を藉りて――此題目に就いて知り得た僅少の知識は、大半は、より普通な種類に關してである。

だが蜻蛉文學を論述する前に蜻蛉の名稱に就いて少しく語る必要があらう。日本の古書は五十種許りを名ざさうとする。『蟲譜圖說』には實際その數に近い蜻蛉の彩色繪があるのである。が此書には、蜻蛉に似て居る蟲で、不穩當にも蜻蛉の部に入れてあるのが數々あり、又同一種の雄と雌とに異つた名が與へられて居るやうに思へる例が少からずある。之に反して、異つた種類の蜻蛉が四つも同じ普通名を有つて居るのを自分は知つて居る。そこで如上の事實を眼中に置いて居て、次記の目錄は先づ完全なものと思つてよからうと

自分は敢て考へるのである。――

一、ムギワラトンボ（或は單にトンボ）即ち麥藁蜻蛉　その身體が形も色も稍ゝ麥藁に似て居るので斯の名がある。――これは多分蜻蛉のうちで一番普通なもので、且つ最も早く現はれるものであらう。

二、シホカラトンボ或はシホトンボ――即ち、鹽辛蜻蛉或は鹽蜻蛉――尾の尖が鹽に浸つて居たやうな色をして居るので斯の名がある。シホカラとは鹽に漬けられた一種の魚の食品である。

三、キノトンボ、即ち黄蜻蛉――まつ黄では無く、黄色い線や條のある赤味がかつた蜻蛉である。

四、アヲトンボ、アヲといふ言葉は青にも綠にも使ふ。で、異つた二種類の蜻蜓を――一つは綠、一つは金屬質の青いのを――此名で呼んで居る。

五、コシアキトンボ――腰明蜻蛉。普通斯く呼ばれて居る蜻蛉は黑と黄との斑のものである。

六、トノサマトンボ――殿樣蜻蛉。恐らくその色が美しいが爲めであらうが、種類の異つた澤山の蜻蛉を此名で呼んで居る。コシアキ即ち腰明といふ名も、これと同樣、種々な變種の數々に與へられて居る。

七、コムギトンボ、即ち小麥蜻蛉。――麥藁蜻蛉よりか少し小さい。

八、ツマグロトンボ、即ち褄黑蜻蛉。翅の端が黑いか又は濃い赤い色かなので、斯う呼ばれて居

る蜻蛉で種類の異つて居るのがある。

九、クロトンボ、卽ち黑蜻蛉。クロといふ語は色の濃い意味にも、黑い意味にも用ひるから、濃紅色の蜻蛉にも、濃紫色の蜻蛉にも、此名が與へられて居るのは不思議では無い。

十、カラカサトンボ、卽ち傘蜻蛉。この蜻蛉の身體は、形も色も、細かに割つた竹で骨組が出來て居て、それへ厚い油紙を張つたカラカサといふ傘をすぼめたのに似て居るといふことである。

十一、テフトンボ、――卽ち蝶蜻蛉。翅の模樣が蛾か蝶の翅模樣に似て居るので、この名を有つて居るのだから、同じ名でゐて種類の異つて居るのがある。

十二、シヤウジヤウトンボ、鮮やかな赤い色の或る蜻蛉を斯う呼んで居る。色が赤いので此名があるのである。支那及び日本の動物神話に於て、シヤウジヤウといふのは、人間以下のものではあるが、動物以上のもので、――姿をいふと、深紅な長い髮を生やした、巖疊な子供のやうである。この深紅の髮毛から不思議な赤の染料がとれると言はれて居る。此の猩々は非常に酒が好きだと想像されて居る。そして日本の美術では此の動物は酒壺のあたりで踊つて居る處を普通は見せてある。

十三、ハグロトンボ、卽ち羽黑蜻蛉。

十四、オニヤムマ、卽ち鬼ヤムマ。日本の蜻蛉のうちで一番大きなものである。どつちかといふと不快な色をして居る。身體は黑くて、あざやかな黃色い條がある。

十五、キャムマ、卽ち鬼ヤムマ。キエムマともいふ。エムマといふは死界の王で靈魂の審判者である。

十六、シャウリャウトンボ、卽ち精靈蜻蛉。此名は、似よつた意味の、も一つの名、シャウライ蜻蛉と共に、自分の知つて居るところでは、多くの種類の蜻蛉に與へられて居るやうである。

十七、ユウレイトンボ――卽ち幽靈蜻蛉 種々な蜻蛉がこの名で呼ばれて居る。或る美しいカロプテリックスで、その音無しに黑く飛ぶのが影の動くが如くに――蜻蛉の影の動くが如くに――思ひ誤らるゝやうな一種のカロプテリックスの場合には、此名は殊に適切である、と自分は思つた。實際此の黑い蜻蛉に此名を附けたのは、影を幽靈だと思つた、原始的な思想を思はせる爲めであつたのかも知れぬ。

十八、カネツケトンボ或はオハグロトンボ。どつちも古昔夫のある婦人が齒を黑くする爲めに用ひた調劑に關係のある名である。だから御齒黑蜻蛉と譯していい譯である。オハグロ（御齒黑）或は鐵漿は齒を染めるに用ひる浸劑を呼ぶ普通の言葉であつた。カネヲツケルといふは、その品物を用ひる、或はもつと文字通りに言へば、『附着』するといふことである。だからカネツケトンボといふ稱呼は、鐵漿附け蜻蛉と譯しても宜い。此の蜻蛉の翅は半黑で、半分印氣に浸けたやうに見える。同じく繪のやうな、コウヤ卽ち紺屋といふ別名がある。

十九、タノカミトンボ、卽ち田の神蜻蛉。赤と黃とが雜つた色の蜻蛉につけた名である。

二十、ヤナギヂヨラウ、卽ち柳女郎。美しいが氣味の惡るい名である。といふのは、柳女郎といふは柳の木の靈であるから。非常に優美な蜻蛉で此の名で呼ばれて居るのが二種あると思ふ。

二十一、セキイシシヤ、卽ち赤衣使者。

二十二、ヤムマトンボ、此名は類語を重ねたやうなものである。ヤムマは大きな蜻蛉で、トンボはどんな蜻蜓でもさう呼ぶ。これは黑味のある綠色をした蜻蛉につけた名である。出雲では之をヲンジヤウと呼んで居る。

二十三、クルマヤムマ、卽ち車ヤムマ、――尾に圓盤のやうな附屬物があるのでさう呼んだものであらう。

二十四、アカトンボ、卽ち赤蜻蛉。種々な種類に此名を今つけて居る。だが殊に赤蜻蛉と古の詩人が言うて居るのは、小さな蜻蛉で、屢〻群を爲して居るものである。

二十五、トウスミトンボ、卽ち燈心蜻蛉。非常に小さい。古風な日本のラムプに使用するか細い、木の髓の心に身體が似て居るので此名があるのである。

二十六、モノサシトンボ、卽ち尺蜻蛉。これもまた甚だ小さな蜻蛉である。關節の條の十あるその身體がこの名を思ひ附かせたのである。――普通竹で出來て居る尋常一般の日本の物指は、甚だ幅の狹いもので、ただ十スン卽ち十吋に區劃されて居る。

二十七、ベニトンボ、色が赤い爲めにつけたもので、淡紅色の美しい蜻蛉である。ベニといふは

日本の女の子が或る場合にそれを脣や頰に少しつける一種の臙脂である。

二十八、メクラトンボ、卽ち盲蜻蛉。この名を有つた蜻蛉は決して盲目では無い。然しその大きな身體を不細工に室内の品物へぶつつけるので、一時視力の無いものと想像されて居たのである。

二十九、カトンボ、卽ち蚊蜻蛉。――多分、亞米利加のモスキイトホークと同じ意味のものであらう。

三十、クロヤマトンボ、卽ち黑山蜻蛉。――ヤマトンボ卽ち山蜻蛉といふがあるが、これは大抵綠色をして居るので、それと區別する爲めに斯く呼んだものであらう。

三十一、コヤマトンボ、卽ち小山蜻蛉 形も色も山蜻蛉に似て小さい。

三十二、ツケテダン。ダンといふ語は雜色の織物への總名である。でツケテダンとは『色んな色の衣物を着たもの』と大まかに譯してもよからう。

上記の目錄のうちで、なほ進んで說明の要ある名は、『死者の蜻蛉』といふ意味のシャウリャウトンボ又の名シャウライトンボだけであらうと思ふ。同じく無氣味なユウレイトンボ卽ち幽靈蜻蛉とは異つて、シャウライトンボといふ名は、その姿形に關係を有つた名では無くて、或る種の蜻蛉には――翼ある馬として――死者が騎つて居るといふ、妙な迷信から來て居るのである。舊暦七月の十三日の朝から十五日の夜半まで―― 盆會のあひだ

——蜻蛉は、その時分にその舊の家を見舞はるゝホトケサマ即ち祖先の靈を背負つて居る、と言はれて居る。だから、佛教の此の『萬靈節』中は、子供はどんな蜻蛉でもそれを——殊にその折家の內へ偶ゝ入つて來る蜻蛉を——いぢめることを禁ぜられる。蜻蛉と超自然界との此の想像されて居る關係が、今なほ方々の國に行はれて居る、蜻蛉とる子は『智慧を得ぬ』といふ意味の、古くからの諺を說明する役に立つ。も一つ奇妙な信仰は、或る種の蜻蛉はクワンノンサマ（觀音菩薩）を背に負うて居る、といふ信仰である。——背の斑點模樣が佛像の形に微かに似よりがあるからのことである。

二

蜻蛉は異つた種類のが時期を異にして出る。そして殆ど例外無しに、一層美しい種類のが一番後れて出現する。日本の蜻蛉全部を古昔の作家は一々の主要な色に從つて四種類に——黃、綠（或は靑）、黑（或は濃い色）及び赤に——部類分けをして居る。黃な色合のが一番早く現はれ、綠色の、靑いの、それから黑いのは極暑になつて初めて出て、赤いのが一番後れて出て、去るのも一番後で、秋の末になつてやつと無くなるといふことである。

漠然一般的に、如上の叙述は觀察の結果として承認し得らるゝものである。が然し、蜻蛉は一般には秋の蟲となつて居る。蜻蛉の異名のうちに『秋の蟲』といふ意味の、アキツムシといふ名がある程である。そしてこの稱呼は實際適切である といふ譯は、人の注意を惹く程に蜻蛉が群を爲して現はれるのは、秋になつてからのことであるからである。が、詩人には、秋の眞の蜻蛉は赤蜻蛉である。

秋の季の赤蜻蛉に定りぬ　　白雄

己が身に秋を染めぬく蜻蛉かな　　麥醉

秋の日の染めた色なり赤蜻蛉　　桂秋

或る日本詩人が『春は眼の季節て、秋は耳の季節である』と言うて居る。いふ心は、春は樹々の花や朝霞の魔力が眼を樂ましめ、秋は耳が無數の蟲の音樂に魅せられる、といふのてある。が、此詩人は進んて、秋の此快樂は憂愁を帶びて居ると言ふ。その哀れ氣な聲は消えし幾年の、また消えし幾多の顏の、記憶を喚起し、斯くて佛教思想に無常の教理を思はせる。春は約束と希望との時期てあり、秋は懷舊と哀惜との時てある。そしてまた、

秋の特殊な蟲が即ち音を立てぬ蜻蛉が出て來る事は——聲の季節に聲無きものが出て來ることは、變化の姿を一層無氣味にするばかりてある。到る處に微小な稻妻の聲無きひらめきが——地面の上を、はてし無き妖術を織り編むが如くに、絶えず交錯する色のきらめきが——見られる。斯く古の一詩人は叙べて居る。——

くれなゐのかげろふ走る蜻蛉かな　　呉　蓮

三

十世紀以上の間、日本人は蜻蛉の詩を作つて居る。そして此題目は今日の青年詩人にも依然好かれて居るものてある。蜻蛉を詠んだもので現存して居る一番古い歌は、千四百四十年前、雄略天皇がお作りになつたものだと言はれて居る。或る日天皇が狩獵をされて居た時、と舊記にあるが、一匹の虻が來て御腕を咋つた。すると其處へ蜻蛉が一匹其虻へ飛びかかつて來て、それを咋つてしまつた。そこて天皇は大臣達にその蜻蛉を讚めた歌を作れと命じ給うた。だが皆がどうやつていいか躊躇して居るので、自ら其蜻蛉を稱へた歌を

お作りになつた。其御歌の結末は斯うである。——

波賦武志謀、飫裒枳瀰儞、磨都羅符、
儺我柯陀播於柯武、婀岐豆斯麻野麻登。

そして、その忠義な蜻蛉の爲めに、此事のあつた處は、アキツノ即ち『蜻蛉の野』と名づけられて居る。

雄略天皇が物せられたといふ歌は、ナガウタ即ち長歌といふ形式で書かれて居る。が、近時の蜻蛉の歌は大半もつと短い形式で書かれて居る。短い形式には三通りあつて、三十一綴音から成る古來の短歌、二十六綴音の通俗な都々逸、それからたつた十七綴音の發句である。蜻蛉の詩の大多數は發句である。此題目を都々逸で詠んだ詩は殆ど無い。そして——言ふも不思議であるが！——古典的な短歌で詠んだものは實際頗る尠い。此の一文に引用して居る詩歌全體並びになほ幾百首の詩歌を自分の爲めに蒐めた友人は、蜻蛉の短歌一首を見つけ了ほせるまでに、帝國圖書館で三十一字詩の書を五十二卷讀んだと言うて居る。そして、なほ一層進んで穿鑿をした後、到頭その友人は短歌でのそんな詩をやつと十

二ばかり發見し得たのであつた。

此の理由は、詩の上の古來の因襲に求めねばならぬのである。日本の三十一字詩は幾百年間決定されて居る法則に從つて作られる。詩に取扱ふ殆どあらゆる題目は、四季のどれか一つに幾分の關係を持して考察すべき事を、此の法則が要求して居る。そして是は或る一定の分類法に――繪畫にも詩歌にも認許されて居る、長い間確定されて居る取り合はせの因襲に――從つて爲されなければならぬ。例へば、黄鳥は梅と一緒にして述べるか描くかする。雀は竹と一緒に、時鳥は月と一緒に、蛙は雨と、蝶は花と、蝙蝠は柳と、といつた譯である。日本の子供はどんな子供でも、こんな規則に就いて少しは心得て居る。さて、蜻蛉に就いては、どうしたものか、そんな規則が短歌では明白に決定されて居らぬ。尤も繪では、或は手摺の縁に止まつて居たり、或は熟した稻の穗に止まつて居たり、して居るのを屢〻見るが。その上また、詩歌の題目の分類の上に於て、蜻蛉はムシ（蟲――蟲としては無くて、雜の中に入れてある。雜といふのは非常に廣い意義の語で――馬、猫、犬、猿、鳥、雀、龜、蛇、蛙等、要するに殆どあらゆる動物を包含して居るのである。

蜻蛉の短歌の稀なことは斯く說明され得るのである。然し何が故に都々逸では蜻蛉が殆

ど無視されて居るのてあらうか。この詩形は通例戀の題目にのみ用ひられて居る、といふ理由からなのてあらう。聲を立てぬ蜻蛉は、戀愛詩人には啼く蟲が――殊にその啼き聲が或る夜の迻引の記憶に殘つて居る所の夜の蟋蟀が――鼓吹するやうな、あんな空想を思ひ浮かばしめ得ないからてあらう。自分が蒐めて貰つた幾百の蜻蛉の詩のうちて、直接或は間接に、戀の題に關係して居るのは七つしか無い。しかもその七つのうちに二十六字詩のものは唯だの一つも無いのてある。

然しホックといふ――十七字音に限られた――形式ては、蜻蛉の詩は初秋の蜻蛉そのものの如くに殆ど無數てある。といふのは、此の詩格ては、旨意にも方法にも、作者に殆ど何等の拘束が置かれて居らぬ。發句に就いての殆ど唯一の規則は――それも決して嚴格なものては無いが――句は一つの小さな言葉ての繪てなければならぬといふこと、――見たり感じたりしたものの記憶を復活すべきものてなければならぬこと――感覺の或る經驗に訴へるものてなければならぬこと、てある。自分がこれから引用する發句の大多數は、確に此要求を充たして居る。讀者は、それが眞の繪てある――浮世繪派の手法の小さな色彩畫てある――ことを知らるゝてあらう。實際次記の俳句の殆どいづれもが、日本の畫伯が二た筆三筆使へば面白い繪になり得るものてある。

稻の穗の蜻蛉とまり垂れにけり　橈石

蜻蛉の枝についたり忘れ鍬　素麿

蜻蛉の嗅いで行きけりすて草鞋　許白

袖につく墨か尾花にかねとんぼ　（「續子」所載）

日は斜め關屋の槍に蜻蛉かな　蕪村

蜻蛉の草に倦んでや牛の角　太無

垣竹の一本長き蜻蛉哉　芦雀

垣竹と蜻蛉と映る障子かな　（碧雲會應募句中のもの）

釣鐘に一時休む蜻蛉かな　梅路

尾を以て鐘に向へる蜻蛉かな　來川

なき人のしるしの竹に蜻蛉かな　几董
往つては來て蜻蛉絶えず船の綱　太巣
蜻蛉や舟は流れて止まらず　青扇
蜻蛉や帆柱當てに遠く行く　梅室
蜻蛉や日の影出來て波の上　（「今人名家發句九百題」ニアリ）
綿とりの笠や蜻蛉の一つづつ　也有
流れ行く泡に夢見る蜻蛉かな　仙溪
浮草の花にあそぶや赤とんぼ　雨柳
蜻蛉の一としほ赤し淵の上　（「俳諧古今六百題」ニアリ）
釣り下手の竿に來て寢る蜻蛉かな　也有
蜻蛉の葉裏に淋し秋時雨　白圖
蜻蛉の十ばかりつく枯枝かな　士朗

よそごとの鳴子に逃げる蜻蛉かな　民花

青空や蚊ほど群れとぶ赤蜻蛉　繞石

古墓や赤とんぼ飛ぶ桔槹　（碧雲會應募句中ノモノ）

淋しさをとんぼ飛ぶなり墓の上　繞石

蜻蛉飛んで事無き村の日午なり　虚子

夕づく日薄きとんぼの羽影かな　花朗

蜻蛉の壁をかゝゆる西日かな　沾荷

蜻蛉とる入日に鷄の眼付かな　成美

蜻蛉の舞ふや入日の一世界　倚菊

生壁[註]に夕日射すなり赤とんぼ　芦帆

註　これは小さな色彩習作である、塗りたての壁の色は暖かい灰色と想はれて居る。

出る月と入る日の間や赤とんぼ　二丘

夕影や流れにひたすとんぼの尾　　如泊

四

前掲の作は多くは舊作家のである。此題目での近代の發句で、それと同じやうな技巧の無い、繪のやうな性質を有つたものは至って尠い。舊詩人は、繁忙な此の現代には、不可能な忍耐力と生新な好奇心とを以てして、蜻蛉の習慣を眺めて居たやうに思はれる。彼等は蜻蛉のあらゆる習慣や特性に就いて——一度止まらうと選んだ場處はどんな場處でも、續けさまに幾度もそれへ立ち還るその妙な性癖のやうな、そんな事に就いてすら——句を詠んだ。時には彼等はその翅の美はしさを賞めて之を提婆或は佛教の天使の翼にたぐへ、時には彼等はその飛翔の輕い極みの優美さを——その運動の靈の如くに靜かに輕いことを——讃へ、そして時には彼等はその怒の地蜂のやうな様子を、或はその睇視の化物のやうな妙な様を嘲弄した。彼等は蜻蛉が、その進行の方向を變じ得る不思議な仕方や、或はトンボガヘリ（蜻蛉がへり）といふ新語を思ひつかせた、突然翅を裏返す妙な仕方を注意し

て眺めた。その飛行の――眼にはとまらて唯々矢と早き色の針のきらめきとしか見えぬ、――眼くるめく如き早さに、彼等は無常に對する比喩を見出した。が、此の電光の如き飛行は短い距離しか續かぬこと、また蜻蛉は追跡を受けなければ遠く行くことは滅多しないもので、一日中一と處を飛び廻る事を好むこと、を彼等は認めた。彼等の或る者は、蜻蛉は日暮には悉く明かるい方へ群れ飛ぶ事を、また日が地平線下へ沈む時には――高みからして消え行く光耀の最後の一見を得んと望むが如くに――空高く上がること、を句に詠む價値があると考へた。彼等は蜻蛉は花は少しも顧みずして、花の上よりも寧ろ杭か石の上に止まり勝ちなこと、に注目した。また彼等は壁の棧や牛の角にとまつて何が面白いのだらうと怪しんだ。それからまた彼等は杖や石で攻撃される折の――其危險物から去りもするがまた同様に屢〻その方へ飛んで來る――その愚鈍さに驚いた。だが彼等は蜘蛛の巣にかかつてのその奮鬪に同情して、網を衝き破るのを見て喜んだ。次記の例は、幾百の作中から選んだのであるが、此の奇異な研究の廣汎な範圍を暗示する役に立つことと思ふ。

蜻蛉と日光

蜻蛉や日の射す方へ立つて行く　（『今人名家發句九百題』ニアリ）

日あたりの土手やひねもすとんぼとぶ　繞石

五六尺己が雲井の蜻蛉かな　蓼太

蜻蛉の向きを揃へる西日かな　嵐外

蜻蛉や空へ離れて暮れかゝり　太無

星一つ見るまであそぶとんぼかな　左梁

遠山やとんぼつい行きついかへる　秋之坊

行きあうてどちらもそれるとんぼかな　（『俳諧古今六百題』ニアリ）

並ぶかと見えてはそれる蜻蛉かな　貞山

かげろふのかげとも我はなりにけり
　あるかなきかの君がなさけに　長延（『鴨川三郎集』）

覺束な夢かうつゝかかげろふの
　ほのめくよりもはかなかりしは　讀人不知（『怜野集』）

蜻蛉や身をも焦さずなきもせず　鳥醉

奇異と美

蜻蛉の顏はおほかた眼玉かな　知足

聲無きを蜻蛉無念に見ゆるかな　可昌

蟬にまけぬ羽衣もちし蜻蛉かな　太無

蜻蛉の燕と

燕より蜻蛉は物も動かさず　西洋

蜻蛉や鳥の踏まれぬ枝の先　太無

蜻蛉の止り

打つ杖の先にとまりしとんぼかな　東燕

立歸る蜻蛉とまる雁かな　鶴白

蜻蛉と蜘蛛

蜘の巣のあたりに遊ぶ蜻蛉かな　波音

さゝがにの網をはづれてとんぼかな　麦波

蜘垣も破るきほひや鬼とんぼ　雅勇

蜻蛉や花野にも眼は細らせず　柳居

蜻蛉や花には寄らで石の上　湖上堂

蜻蛉や花無き杭に住みならひ　柳居

寝た牛の角にはなれぬやんまかな　花鐘

杭の先何か味はふとんぼかな　桊木

固よりのこと此等の作品は美的感念に訴ふところ洵に僅かである。多くは、珍らしいだけのものである。然し此等は古い日本の精神を幾分了解するに役に立つ。幾世紀の久しき、昆蟲の習慣を觀察し、且つそれに關する斯んな句を作つて悦樂を見出し得た此國民は、人生の單純な快樂を我々よりも遙か能く理解して居るに相違無い。彼等は我が西洋の大詩人が記述して居るやうには自然の魔力を記述し得なかつた。だが、その悲哀の無い此世の美を感じ、また物事を知りたがる幸福な子供等のやうに、その美を喜び得たのである。

若し彼等日本人が我々が蜻蛉を見得る如くに見得たならば――若し彼等が寶石のやうな單眼を持つたその小鬼の如き頭や、その驚嘆すべき複眼や、その不思議な口を、顯微鏡の下に眺め得たならば、この動物はどんなにかもつと異常なものに彼等に思へたことであらう！……でも、我々は賢いが爲めに此等奇妙な詩人の作品を彩る自然觀察のあのなまな初心な快樂を得なかつたのであるけれども、此の蟲の眞の驚異に就いては彼等よりもさう大して賢くも無いのである。我々は唯だこの蟲に關する我々の無智の絶大さを一層精確に評價し得るだけである。蜻蛉の複眼には此世界がどんなに見えるものか、それを我々に示して呉れる、彩色版畫のある博物學書を手にすることを我々はいつか希望し得るであらうか。

五

蜻蛉を捕ることは幾百年の間、日本の兒童の好きな娯樂となつて居る。時候が暑くなると始つて、秋の大部分の間續く。それに就いての――小さな狩手どもの無思慮を述べた、――古い詩が澤山にある。今日も、他の數世紀間と同じに、その追跡の面白さが、兒童を色々な難儀な目に會はす。棘や泥穴や沼を顧みずに――暑さも意とせずに――飯時すら思

はずに――土手を轉がり落ちたり、溝へはまつたり、引掻いたり、非常に身體を汚ごしたりする。

飯時も戻り忘れてとんぼつり　樂遊

裸子の蜻蛉釣りけり杢の辻　闌更

然し此の遊びに關しての最も有名な句は人を感動せしめる性質のものである。これは加賀の有名な女俳人千代がその小さな子を亡くしてから作つたものである

とんぼつり今日は何處まで行つたやら

此句は母の感情を言明はせずに、暗示するやうにしたものである。蜻蛉を追ひ走つて居る多勢の子を見て、常にその遊びを一緒にした自分の死んだ子のことを思ひ、――無限無窮の神祕へ出て行つたあの子の靈はどうなつたのか知らと怪しむ。何處へ行つたのであらう。あの世てどんな遊びをして樂しんて居るのてあらうか今は。

蜻蛉は時には網て捕り、時にはその先きへ鳥黐を塗つた竹竿て捕り、時には輕い杖か棒

てたゞき落としても捕る。棒切れを使ふ事は、然し、普通善いとはされて居らぬ。蟲の身體に傷がつくからで、不必要に傷める事は、多分死者に緣のあるものと想像されて居るが爲め、不吉な事だと考へられて居るからである。蜻蛉捕りの――主として西部諸國で行はれて居る――頗る有效な方法は、捕つた雌の蜻蛉を囮に遣ふ法である。長い糸の一端に雌の尾を結び附け、その糸の他の一端を曲り易い竿の先きへ結びつける。その竿を或る特別な振りやうをして振り廻はすと、糸一パイの長さで羽を立てていつも其雌を飛び廻はらせて置く事が出來る。すると雄が直ぐと惹き寄せられる。それが雌へつかまるや否や、すぐその竿を輕くしやくると、二匹とも釣手の手中へはいる。雌一匹を囮にして續けさまに八匹十匹の雄を捕るは容易な事である。

この蜻蛉狩をして居る間に子供は蜻蛉を呼び寄せの短い歌を普通唄ふ。そんな歌は隨分にあつて、地方によつて異ふ。此種類の歌で出雲で歌ふのは、第三世紀に、神功皇后の軍勢が朝鮮を征服したといふ傳說に奇妙にも關係のあるものである。雄の蜻蛉を斯う呼びかけるのである。――

「こな、男將高麗――東の女頭に――負けて逃げるは――恥ぢや無いかや」

註　此歌は『知られぬ日本の面影』第二卷に引用。

東京では現今蜻蛉の小獵者は普通次の歌をうたふ。

とんぼ！　とんぼ！
　　お泊り！
明日（あした）の市に
しほから買うて
ねぶらしよ！

子供はまだ蜻蛉の幼蟲を捕へて面白がる。この幼蟲の普通名は澤山にあるが、東京では通常タイコムシ即ち太鼓蟲と呼んで居る。水の中でその前足を動かす有様が人間が太鼓をたゝく折の腕の動かしやうに似て居るからである。

蜻蛉を捕る頗る珍らしい工夫は紀伊の國の子供がやる方法である。長い髮毛を――女の髮毛を――一本貰つて來て、其兩端へ非常に小さな小石をくつつけて、小さな小さなボーラスのやうなものを造る。そして之を空高く投げ上げる。蜻蛉は自分の前をすいと通つて

行く此物へ飛びかかつて來る、が、それを摑むが早いか、その髮毛が身體へ捲きついて、小石の重さで地上へ落ちる。蜻蛉をボーラスで捕る此手段を日本外の何處かで用ひて居るかどうか自分は怪しむ。

譯者註　ムギワラトンボは學名 Orthetrum japonicus. シホカラトンボは別種では無く、麥藁蜻蛉ノ雄である。キノトンボは學名 Diplax croccola. アヲトンボ——動物學上此名は無い。コシアキトンボの學名は Pseudothemis zonata. 『蟲譜圖說』には、之をトノサマトンボともいふ人あり、と書いてある。トノサマトンボは腰が白い。キノトンボの一變種か。コムギトンボ——麥藁蜻蛉の一變種か。動物學上にはこの名は無いやうである。ツマグロトンボは蝶樣蜻蛉の翅の尖端が黑いもの。クロトンボとカラカサトンボとは譯者には學名不詳。テフトンボの學名は Rhyothemis fuliginosus. 全身淡黑にして翅の先き白し、と『蟲譜圖說』には書いてある。シヤウジヤウトンボの學名は Crocothemis servillia. ハグロトンボの學名は譯者これを知らぬ。オニヤムマの學名は Anotogaster Sieboldii. オホヤマトンボともいふ。キヤムマは『鬼ヤムマ』とあるが、鬼(き)では無く、黃(き)であらう。キトンボともいつて、黃色で、翅も淡黃、大小の黑點がその翅にある。學名未詳。シヤウリヤウトンボは、『言海』に據ると、キヤムマと同じものらしい。精靈祭頃に見るのにこの名を與へるのではあるまいか。ユウレイトンボ——動物學上にはこの名を見ぬ。カネツケトンボの學名は Calopteryz atrata. タノカミトンボ——『蟲譜圖說』には、形キノトンボに似て、身丹黃、

尾に黒斑あり、足黒く、翅赭色、とあれども、會津地方で或る種のものに與へて居る地方名らしい。ヤナギデヨラウ　學名は譯者には分からぬ。セキイシシヤは別種では無く、猩々蜻蛉の別名である。ヤムマトンボの學名は Anax pa thenope. キンヤムマとも呼ぶ。クルマヤムマの學名は譯者には未詳。アカトンボ——これは種の名では無くて、小さな赤い色の蜻蛉の總稱かと思ふ。トウスミトンボの學名は Agrion quadrigerum. モノサシトンボ——動物學上この名は無いやうである。ベニトンボもメクラトンボも動物學上認めぬもののやうである。前者は或は Psilocnemis annulata か。カトンボは實は蜻蛉では無い。蜉蝣科のものである。學名 Heptagenio binotata. 亞米利加のモスキイトホークと同意味のものであらう、と原著者は言うて居るが、モスキイトホークは蚊を好んで食ふ一種の蜻蛉。日本のこのカトンボは蚊のやうに小さいからこの名を有つて居るのであらう。クロヤマトンボの學名は譯者之を知らぬ。コヤマトンボの學名は Epophthalmiaa mphigena. ツケテダンといふは實は譯者にも不明である。『蟲譜圖説』に載つてゐたので、當時そのまま、譯者は原著者に報道したのであつた。

佛教に緣のある動植物の名

一時(いつとき)自分は日本の動植物に附けてある佛教に緣のある名の語彙を編纂したいと思つて、その著作の材料を蒐め始めた。が、其時は自分はそんな事業の實際の困難に就いて餘り知つてゐなかつた。そのうちの唯だ一つを述べて見れば、日本の殆ど何れの州にも他の州とは異つた民間語があつて、その差異が或る植物昆蟲爬蟲類禽鳥に附けてある名にさへ見えて居る。そんな名は、固よりのこと、百姓や漁夫の口から聽き取らなければならぬもので、自分が爲(し)ようと思つて居る事は民間傳說研究會の堅忍な勞力に依らなければ、決して立派には爲し得られぬものである。て、今のところ自分は、豫ての志の語彙は作ることが出來ないで、この問題に對する二三の一般的註釋て甘んじなければならぬことになつて居る。

が、恐らくは此註釋は——それに對して所要の學識も手段も自分が持たなかつた一事業の殘物ながらも——極東の民間傳說といふ此の未着手の地域への未來の開拓者には少くとも暗示的價値はあるてあらう。

佛といふ名は數々の木や植物の名稱に見えて居る。マルブシユカン（佛の圓い指）といふは――その果實の恰好が甚だ能く、それに似て居るが爲めさう名づけられた――一種の檸檬樹(レモン・トリイ)の名である。扶桑はブッソウゲ（佛の桑）と呼ばれて居り、岩苔の一變種は普通ホトケノツメ及びブッカウサウといふ――兩方とも『佛の指の爪』といふ意味の――繪のやうに美しい名によつて知られて居る。一種の藷は――その名稱を適當な漢字で書くと「佛の手の藷」といふ意味を有つ――ツクネイモと呼ばれて居り、つめくさの一變種にホトケノザ（佛の座）といふ名を戴いて居るのがある。

菩薩や他の佛教の神々(ディヸニティ)の名がまた植物と動物との稱呼に見出される。クワンノン（梵語のアヴロキテシヴラ）といふ名はクワンノンチク（觀音の竹）といふ語に見え、種類の異つた數々の植物が、州を異にして、クワンノンサウ（觀音の草）といふ名で知られて居る。フゲン（梵語のサマンタバドラ）といふ名は櫻の一變種に與へられて居る、――フゲンザクラ（普賢櫻）がそれである。ダイモクケンレン（梵語のマハモウドガルヤアヤナ）といふ――普通にはモクレンと短くして用ひる――名は、モクレンとして知られて居るフ

イクス・ピュミラの普通名にも用ひられ、また通常ハクモクレン（白い木蓮）と呼んで居る、マグノリア・コンスピキュアの普通名にも用ひられて居る。ブラアマといふ——日本の佛教では梵天として知られて居る——名は一種の陸稲の名稱に見えて居る。即ち梵天米(ぼんてんまい)である。ボダイダルマ（ボディダルマ）の名は、ダルマサウ（達磨の草）（英語のスワンプ・キャベヂ）の名に保存されて居ると同様に、ダルマギク（達磨の菊）（學名アステル・スパテュフォーリウム）といふ俗稱に保存されて居る。また此祖師の名を有つて居る魚が二種ある。一は學名プリアカンサス・ニフヲニウスといふ魚で、之をダルマダイ（達磨の鯛）と呼んで居り、今一つは學名シナンセイア・エロサといふ魚で、之を普通ダルマカサゴと言うて居る。『カサゴ』は本當は學問の方ではセバステス・イネルミスと名づけて居る魚の名である。が然し、上に掲げた名稱の何れよりも妙な名稱は米の蟲の一種に附けて居る普通名コクウザウである。『虚空藏(こくうざう)』といふはかの大菩薩アカサプラティシタの日本名である。

ボサツ（菩薩）といふ名はまた二三の植物の名に見えて居る。薔薇の一種にボサツイバラ（菩薩の茨）といふのがあり、米の一種にボサツといふのがある。

ラカン（梵語のアルハット）は、いろいろな植物名の接頭字(プリフィックス)となつて居る。ラカンハク

（羅漢柏）は學名スヤ・ドロブラタの普通名である。ラカンショウ（羅漢松）は學名ポドカルプス・マクロフイラの普通の稱呼であり、ラカンマキ（羅漢槇。『マキ』は學名ポドカルプス・チネンシスの日本名）は英語のアムブレラ・パインに與へてある名である。それから、その學名を自分は發見出來ない或る木の實が方々の州でラカン（羅漢）と呼ばれて居る。それはその恰好が寺の境內にある羅漢の粗末な石像に妙に能く似て居るからである。

眞言宗の日本の大闍師クウカイ即ちコウボフダイシは、またその名簿の中に一つの地位を有つて居る。コウボフムギ（弘法大師の麥）は學名カレツキス。マクロセフアラの普通名であり、栗の一變種がコウボフダイシ、クハズ、ノ、クリ（弘法大師食はずの栗）と呼ばれて居る。

植物または生物の名で佛敎の習慣、傳說、儀式若しくは信仰に關係を有つたのが多くある。バウズ（僧。英語のボンズの原）といふ語が種々な植物名に與へられて居る。異つた三つもの草に、日本の方々異つた處で、バウズグサ（僧の草）の名を附けて居る。筑前の

方言では一種の海龜をウミバウズ（海の僧）と呼んで居る。序だから言ふが、この名は日本の繪本に能く出て來る或る神話的な海の怪物にも與へて居る名である。佛教傳說のあの有名なボオ・トリィの名は、日本では學名フィクス・レリヂオサに與へられて居る許りで無く、普通にボダイジユ（ボディドゥルマ）と呼んで居る學名ティリア・ミクエリアナにも與へられて居る。春分（しゆんぶん）の佛教大祭卽ちヒガン（彼岸）の祭は、その時分に開花する二種の植物に名を提供して居る。ヒガンザクラ（彼岸櫻）（學名プルヌス・ミクエリアナ）とヒガンバナ卽ち『彼岸の花』（學名ライコリス・ラディアタ）とがそれである。我々英人が『デョップス・ティアズ』と唱へて居るものは日本ではズズダマ卽ち數珠玉と呼ばれて居り、鳩の一種に――恐らく其斑紋の故であらう――ズズカケバト（數珠掛け鳩）といふがある。學名アリウム・ギクトリアレはギヤウジヤニンニク（行者の葫）。『ギヤウジヤ』とは英語のハアミットを言ふ佛教の言葉）と呼ばれて居り、英國のブリーディング・ハートの日本の普通名はケマンサウ卽ち『華鬘草』である。多分その花がケマンに、卽ち佛陀の像の頭上に置く裝飾の華鬘に、似て居るからの稱呼であらう。恐らくは斯んな佛教的稱呼のうちで一番奇妙なのは、英語のヲータア・エーラムが有つて居るものであらう。その日本名コクウゼンサウは文字通りに言ふと『坐禪をして居る小さな草』である。

センニン（普通之を英語ではジイニアスとかフエアリとか譯するが、本來はリシである。リシとは難行苦行の效によつて超自然的な威力を得て、その生命無限な者）といふ語はたまたま植物名に見える。英語のクレマティスの一變種にセンニンサウ（仙人草）といふがあり、英語のカクタスの一種にセンニンシヤウ（仙人掌）といふ奇怪な名稱を貰つて居るのがある。

人間を食ふ鬼といふ意味の梵語のヤクシヤといふ語は、その日本化された形のヤシヤとなつて、種々な植物名に見える。學名アルドゥス・フイルマの毬果は、繪畫的にヤシヤブシ（夜叉節）と呼ばれて居り、或る水草はヤシヤビシヤク（夜叉柄杓）といふ妙な名で知られて居る。

植物、鳥類、魚類併びに蟲類の日本名に――丁度英吉利の民間の言葉に、デヴルス・エブロンとかデヴル・ウッドとかデヴルス・フインガとかデヴルス・ホースとかデヴルス・ダーニング・ニードルとかいふやうな植物名昆蟲名があるやうに――英語のディモン或は

デヴルに當たる佛敎語の『オニ』といふ語を接頭字に附けて居るのが甚だ多い。英語のタイガ・リリーは日本ではそれと同樣奇妙なオニユリ（鬼百合）といふ名を有つて居る。英語のコイックスの一種はオニズズダマ（鬼の數珠玉）と呼ばれて居る。英語のバー・マリゴールドはオニバリ（鬼の針）と呼ばれて居り、一種の水草で蓮の繁殖に害を與へるものを通常オニバス（鬼蓮）と唱へて居る。このオニといふ接頭字は、多分幾百もの植物併び（フロラ）に動物（フオーナ）の俗名に、附けられて居ることであらう。自分が集めたものでもその數七十一を下らぬ。が然し、そのうち興味のあるものは尠い。

日本の佛敎で認められて居る一種の化物（ばけもの）を意味して居る、キジン或はキシンといふ語は、同じくまた接頭字として使用されて居る。例を擧ぐれば、英語のニードル・グラスの一種はキシンサウ（鬼神草）として知られて居る。一種の女化物を意味して居る、今一つの佛語のキヂヨといふ語が、或る蘭の普通名に見えて居る。キヂヨラン（鬼女蘭）がそれである。それからまた、鬼（おに）とか化物とかの意味の語の省略のキといふ接頭字があつて、これが時々植物名に現はれて居る。例へば學名バルダンサス・チネンシスは日本ではキセン（意味は『鬼扇』）と呼ばれて居る。こんな惡魔に因んだ名は、ただ單にその恰好が醜惡であ

るか異常であるかの爲めては無く、著しく大きいが爲めに植物なり動物なりに與へてあるといふことは、述べて置く價値がある。例へば一種の告天子をオニヒバリ（鬼告天子）と呼んで居るのは、偶〻それが普通の野告天子よりも餘程大きいからである。また非常に大きな或る蜻蛉を同じ理由でオニヤンマ（鬼蜻蛉）と名づけて居る。

動物並びに植物の佛教に縁のある名に靈的なのが多い。或る綠色の可愛らしい螽蟖にホトケノウマ（佛の馬）といふがある。この蟲の頭は恰好が馬の頭に奇妙にも似て居る。が、『ホトケ』といふ語は――俗衆の信仰では善人は總て佛になると想はれて居るから――死者の靈といふ意味も有つて居る。だから、ホトケノウマといふ名の本當の意味は『死者の馬』である。さて、七月の三日間の死者の祭中、靈のうちで、昆蟲の助を藉りるか、又は實際昆蟲の姿となつて、己が家郷を或は己が前の友人の家を訪ふものが多い、と信ぜられて居る。で、この螽蟖の名は影の如き訪客が馬として用ふる、といふ意を實際含んで居るのである。……それからまた、シヤウリヤウといふ語――佛式に據つて祀る祖先の靈の總稱、――と或る蜻蛉の名と一緒になつて居るのを見る。シヤウリヤウヤンマ（祖先の靈の蜻蛉）がそれである。シヤウライトンボ（精靈蜻蛉）も、似た意味の言葉のキヤンマも、

同じくまたその蟲と不可見世界との關係を仄めかす積りの名である。等しく薄氣味わるいのは、京都の方言での、英語のモール・クリケットの名である。多分その蟲の地下生活で思ひついた名であらう、――シヤウライムシ（精靈蟲）と呼ばれて居るのである。植物の名稱のうちにユウレイダケ（幽靈竹）とか、ユウレイバナ（幽靈花）とか、いふやうな名がまたある。後者は花車な一種の茸の名で、不適切な名では無いと思ふ。

佛教に緣のある名のうち、名そのものに非常に興味があるけれども、寺院の什物に關係があつたり、佛教の勤行に使ふ特別な器具に關係があつたりするので、圖解の助を藉らんでは、西洋の讀者には了解の出來ないのがある。例を擧ぐれば普通サンコマツ（三鈷松）として知られて居る木の名の如きそれである。サンコ（梵語ではヴジラ）といふ語は、黃銅製の或る器具であつて、古典に見える雷電に、兩端に叉を附けたものに、似た恰好のもので、或る特別の式の場合に超自然力の表號として僧が用ひるものである。美しいグラス・スポンヂ學名ハイアロネマ・シーボルディに附けてあるホッスガイ（拂子貝）もまたさうで、拂子にそれが似て居るからである。拂子といふは佛教の勤行に用ひる、白い長い毛て造つた塵拂ひやうのものである。それからまた、コロモセミ（衣蟬）と呼ばれて居る、

小さな蟲のその立派な名もさうて、翼を收めて休んて居る折のその蟲の普通の形と色とは、實際に『コロモ』を着て居る僧侶の姿を偲ばせる。が、この蟲を實地見、また斯う述べてあるやうな『コロモ』を見なければ、この名稱の圖畫的價値を鑑賞することは出來ないから う。

或る二三の鳥に餘程佛教に緣のある名が附けてある。鳥類學者にはユウリソトマス・オリエンタリスとして知られて居るもので、その啼聲が『ブッポフソウ』といふ語を唱へるのに似て居るからといふので、『ブッポフソウ』と名づけられて居る鳥がある。此語は梵語の『トゥリラトナ』或は『ラトナトゥラヤ』(三寶)に相當する日本語であつて、『ブ』といふ綴音はブッ(佛)、『ポフ』はホフ(法)、『ソウ』は僧である。この鳥はまたサムポウテウ(三寶鳥)と呼ばれて居る。『三寶』といふ語はトゥリラトナの文字譯である。これとは異つた鳥で、自分がその學名を知らないものに、ジヒシンテウ(慈悲心鳥)といふがある。その啼聲が佛の形容詞の一つたる、ジヒシン(慈悲心)といふ句を發音するに似て居るからである。自分への報告者は「この鳥は日光の附近にだけ棲んて居て、其處では夏には絕えず「汝、慈悲心！汝、慈悲心！」と鳴いて居るのを聞くことが出來る』と書い

て居る。……殆ど同じほど興味のあるのは、日本詩人が能く褒め歌うて居るククウの一種たる、ホトトギス（學名ククルス・ポリオセフアラス）に附けてある佛教に緣のある普通名である。ムジヤウドリ（無常の鳥）と呼ばれて居るのである。此名はその啼聲から來て居るとは思はれぬ。啼聲は普通には、『もう本尊を掛けたか』といふ意味の『ホンゾンカケタカ』だと解釋されて居るからである。（ホンゾンといふは、この鳥が年々出現する時より少し前の、四月の八日に寺院に掛ける聖畫である）自分にはこの名は『死の鳥』といふ意味で附けたものとする方が當たつて居さうに考へられる。といふのは、『ムジヤウ』といふ語は、變はるといふので、また死といふ意味も有つて居る。そしてホトトギスは靈の世界から來ると想像されて居る妙な事實の爲めに、この意味を強く思ひ浮かばしめられたのである。またタマムカヘドリ（魂迎へ鳥）とも呼ばれて居る。死者の靈魂がシデの山を越えて魂の川へ旅して行く時それを出迎へる、と思はれて居るからである。ホトトギスに就いては靈的な傳說や空想が澤山ある。そしてこの無氣味な民間傳說は、ホトトギスが五十二も異つた名を！州々で有つて居る理由を說明するに足るであらう。

　英語のナイティンゲールの一變種たるもので、日本の歌謠者總てのうちで一番聲のうるはしいウグヒスは、何等佛教に緣のある俗名を有つて居るやうには見えぬ。が、その笛（フルート）の

やうな囀聲は、ニチレン宗卽ちホッケ宗の大聖典たる、妙法蓮華經の普通名ホケキヤウといふ語を發音するのだ、と云はれて居る。そして佛教の篤信は、この鳥は妙法蓮華の經を讃へて一生を送ると言ひ張る。だから、ウグヒスは實際佛教に緣のある鳥だと思はれて居る。他の鳥で佛教に少し緣があるやうに思はれる鳥は、ボンナフサギ（煩惱鷺）といふ異常な名稱が與へてある雪白の鷺である。『ボンナフ』とは浮世の願望、色慾、情慾の佛語て、どうしてそれがこの鳥の名に見えて居るか、自分は言ふことが出來ぬ。

斯んな佛教に緣のある名の起原を推測するの困難は、例證の助を藉りなくては想像すら及ばぬ。その文字通りの意味は、多くの場合、研究を誤らす用を爲すに過ぎぬ。例へば、槌のやうな頭をした鱶は、九州海岸地方では、ネムブッバウ（念佛坊）といふ異常な名稱て知られて居る。『ネムブッ』といふ語は、多くの宗派の信心者が祈禱として、殊に死者に對する祈禱として、口に唱へる『ナム・アミダ・ブツ！』（アミタバ佛に敬禮）といふ祈願の名である。で、凄味を仄めかすネムブッバウといふ名は、リトレに從へば、鱶の近代佛蘭西語は——元來は（千六百六十七年ペール・ドゥテルトルの述ぶる處に據ると）鱶に捕られた人間にはその鎭魂の祈禱を唱へるほか他の策が無い、といふ意味が籠もつて居

る名稱たる――『レクイエム』の訛つたのである、といふことを自分に思ひ出させた。が念佛坊といふ佛教に緣のある名が、それと同じ樣な意味をやゝ含んで居はせぬか、と想つた自分は間違つて居つた。この言葉の眞の意味はこの怪物が有つて居る佛教的な別な名――シユモクザメ（撞木鮫）――に依つて證明されて居る。『シユモク』といふ語は、僧が念佛や他の祈禱を唱へる間鉦を打つ、T字形の槌を意味するのである（信心深い家では、家の内の佛壇の前で念佛を唱へる間に、鉦を鳴らすのに同じ種類の槌を用ひることを述べてもよからう）シユモクザメ（撞木鮫）の別名としてネムブツバウといふ語を思ひ附かせたのは、祈願の言葉を唱へる間に斯く撞木と鉦とを使用するが爲めであつた。だからネムブツバウの眞の意義は『念佛坊』では無くして『撞木坊』なのである。

二萬七千の小學校の影響を受けて、日本の古い民間文學は、物の本に載つて居ない歌と傳說との文學は、急速に人の記憶から消え去りつゝある。自分だけの追憶のうちにさへ、我が英國の子供部屋の文學に稍ゝ相當する、この口の上の文學の一種が、新規な物事の爲めに大なる影響を蒙つて居る。自分が初めて日本へ來た時は、――家庭の教は普通祖父祖母に任されて居るから――子供達はその祖父祖母どもに教はつた古い歌をうたつて居つた。ところが今日は、街路や寺院の庭で遊んで居る小さな者共は、學校の教室で教はつた新しい歌を――西洋の音階に依つて書いた譜に合ふやうな歌を――歌つて居る。――だから、それよりか遙かに興味の多い明治前の歌は、今はただ稀にしか耳にすることが出來ぬ。てはあるが、そんな歌は――一つにはそんな歌の多數が急に廢止することの出來ぬ遊戯と離すことの出來ぬ關係がある爲めと――一つには一度もオルガンを彈ずる學校教師に就いて學んだことが無く、その上子供達が古昔の小曲を歌ふのを聽くのが好きな、喜ばしい

祖父祖母が幾百萬人とまだ生きて居る爲め——全然忘れられては居ない。が、そんな面白い老人達がその祖先の居場所へ呼び寄せられてしまへば、それが敎へた歌は歌はれなくなるであらうと思ふ。幸にも日本の民間傳說研究家はそんな口傳の文學を保存するに努力して居る。そしてその勞苦が自分をしてこの一文を企て得さしたのである。

自分の爲めに注意して筆寫しまた飜譯された、非常に澤山な舊時の子供歌及び無意味な詩歌のうち、次記の順序に六項目に類集して、可なり代表的な選擇をするやうにと力めた。

一、天氣と天象との歌。
二、動物に關した歌。
三、種々な遊戲歌。
四、物語の歌。
五、羽子突歌と手毬歌。
六、子守唄。

この分類は、殊に第三類に關しては、甚だ漠として居る。が、作品の多くがその性質不

思議にも不確實なものであるから、先づこれで宜いとしてよからうと思ふ。

言ふまでも無く、その平易な英譯は、書物の頁の間に壓し乾かした花がその自然の環境に在つての生きた花を示すと同じ程度に於て、ただその日本の詩歌の概念を與へ得るに過ぎぬ。脚韻の無い句の奇妙な節奏（リズム）、日本の言葉の飾り氣無さ、小鳥の囀の如くに記憶しにくい短い妙な節（ふし）、一緒に歌つて居る多勢の子供聲の氣持ちのいい晴れやかさ、——これ等が手傳つて原歌の妙趣を爲すのであるが、それがどれも同樣に寫し現はすことの出來ぬものである。

自分のこの選擇のうちに餘程異國的（エギゾティック）な處が發見されるかも知れぬ。が、讀者はまた、既に熟知して居らるゝ子供歌を懷ひ出させるやうな處を、何處か見出さるゝことであらう。一體子供といふものは、全世界到る處、或る種の題目に對しては殆ど全く同じやうに考へまた感じるもので、似寄つた經驗を詠じるものである。殆どどんな國でも、子供は日と月とに就いて——風と雨とに就いて——鳥と獸（けもの）とに就いて——花と木と小川とに就いて、それからまた、水を汲むとか火を燃（おこ）すとか料理するとか洗濯するとかいふやうな日常の家事に就いて、歌ふものである。でも、そんな範圍内に在つてすらも、日本の子供文學と他國の子供文學との差異の方が、類似の方より餘計興味がある、といふことが判かるであらう

祖父祖母・る。
い老人
るてあ
てこ

一

天氣と天象との歌

夕焼け、こうやけ、
あした天氣になあれ。　（東京。日暮の歌）

附記　この短い歌は、美しい夕焼の折、自分の近處で子供が今なほうたふ歌である。

天狗さん、風おくれ、
風が無きや、錢おくれ。　（伊賀。紙鳶揚げ歌）

附記　東京で紙鳶を揚げる折『風の神は弱いな』と歌ふ。出雲では『大山(だいせん)の山から大風(おほかぜ)吹いて來いよう』と歌ふ。

雨、雨、降りやめ！
お寺の前の
柿の木の下で
雉子の子が啼くぞ！　（土佐。雨の歌）

雪はちら／＼！
雲は灰だらけ！　（伊賀。雪の歌）

雪や　こんこや、
霰や　こんこ！
お前の背戸で、
團子も煮える、
小豆も煮える、
山人は戻る、
赤子はほえる、

杓子は見えず、
やれ、いそがしやな！　（出雲）

星さん、星さん、
一つ星で出ぬもんぢや、
千も萬も出るもんぢや。（伊賀。星の歌）

附記　日沒後星のきらめきそめる時に歌ふ。

お月さま、
觀音堂下りて、
まんま　あがれ！
まんまはいやなら、
あんもなら二つ與れら！　（信濃。月の歌）

お月さま、いくつ、

十三 なゝつ、
そりやまだ若い、
若船へ乘つて、
唐（から）まで渡れ！ （紀伊）

お月さま 桃色、
誰（だれ）が言うた、あまが言うた。
あまの口 引裂け！ （土佐）

お月さま、お月さま、
もうし、もうし、
猫と鼠と一升樽さげて、
富士の山を今越えた。 （周防）

附記 雲が月の上を通る時歌ふ。猫と鼠といふは——子供の繪本に出て來るやうな——遊び好きの化物であること言ふまでも無い。この歌の目的は、月に顏をまた出させやうといふのである。

こんなものはどんなものよりか面白い、出雲の月の歌が、自分の『心』に載せてある。

二

動物に關した歌

昆蟲と爬蟲、鳥と獸とに關した子供歌は――日本の殆どどの村もこの部類に屬する歌を一つ二つ銘々に有つて居るから――その數驚くべきものがある。その大多數は二行乃至八行の短いものである。其うちの好いのは同種類の英國の子守唄――例を擧ぐれば、『蝙蝠、蝙蝠！わしの帽子の下へ來い！』――『てんたうむし、てんたうむし、飛んで歸れ！』――『クックウ、クックウ！お前何をする？』――『かささぎ止つた、梨の木に』等等のやうな子守唄――を思ひ出させる。次に記す拔萃のうち、我々の子供歌の多數のものよりも古いのが隨分澤山あるやうである。殆どこの何れもの變種が非常に多い。

附記　動植物に關した出雲の歌の小蒐集が自分の『世に知られぬ日本の面影』の中の『日本の庭』にあるから、參照されたい。

鳩ぽつぽ、
豆がたべたい！（東京。鳩の歌）

烏、かあらす、勘三郎[注]！（東京。烏の歌）
親の恩を忘れなよ！

附記　勘三郎といふは極めてありふれた固有名である。此處では多分ただ音の關係でこの烏へ附けたのであらう。この歌は疑も無く「烏に反哺の孝あり」から思ひ附いたものである。年老いた烏は自分で餌を求めることが出來なくなると、その子が養つてやるといふことである　烏が群を爲して日暮に飛んで居るのを見ると子供が之を歌ふ。

五郎助ほうこ、
むだぼうこ！（東京。梟の歌）

雀はちゆう〳〵忠三郎！
烏はかあ〳〵勘三郎！

とんびは外山の鍬たゝき！
一日たゝいて米一升！
　　栗一升！（伊勢。烏の歌）

附記　「鳶はとうとう藤三郎」とも歌ふ。藤三郎といふ名は、忠三郎勘三郎同樣、實際にある名である。

勘三郎、忠三郎、五郎助といふ人名は男子に普通見る名である。チユウといふ音に似た雀の鋭い啼聲が、前記の子供歌に忠三郎といふ名を使はうと、初めに思はせたに相違無い。そして烏の啼聲は『カ』といふ綴音のやうにきこえるから、烏を勘三郎と呼んだのであらう。が、梟に附けた名――五郎助――には妙な傳說がある。古昔或るえらいサムラヒの邸內に五郎助といふ家來があつた。この五郎助生まれ付き愚鈍で、大切な勤務を託された極の最初に、大失策をやつて重大な損害を招いた。爲めに誰れも彼れもが嘲り笑つて辱かしめた。そこで到頭自殺した。その後その靈が、今呼ばれて居る名前の小さな梟になつて、夜通しその梟は全く絕望の調子で、

　　五郎助奉公

無駄奉公！

と叫ぶ、といふのである。

附記　鳥は普通カハ！カハ！（川！川！）――『川へ行かう、川へ行かう』といふ意味で――と啼くと言はれて居ることを書いてもよからう。鳥の啼聲は實際『カハ』といふ語の音に能く似て居る。

兎、うさぎ！
何を見てはねる？
十五夜のお月さま見てはねる！
　　　ヒヨイ、ヒヨイ！　（東京。兎の歌）

附記　『ヒヨイ、ヒヨイ』の言葉で歌つて居る者皆、飛ぶ。

雀のあつまり、チイチイ、パッパ！
だれにあたつても怒（おこ）るなよ！
怒るなら最初（はじめ）から加（よ）らんがよい。　（東京。雀の歌）

附記　チイは雀が怒つた時の啼聲を現はすに發明した擬聲である。パッパはその翼を早くはたく音

を意味　て居る。

白鷺、白鷺、
なぜ首が長い？
ひだるて長い。
ひだるきや田打て。
田打ちや泥がつく。
泥がつきや拂へ。
はらや痛い。（伊勢。白鷺の歌）

蟇さん蟇さん、出てごんせ！
出んにや熟艾すゑるぞ！（土佐。蟇の歌）

鳶、鳶、舞うて見せ！
あしたの晩に、

鴉にかくして鼠やる！（出雲。鳶の歌）

蝙蝠來い！酒飲ましよ！
酒が無きや、樽振らしよ！（出雲。蝙蝠の歌）

螢來い、水飲ましよ！
あつちの水はにがいぞ！
こつちの水はあまいぞ！
甘い方へ飛んで來い！（出雲。螢の歌）

螢來い！つち蟲來い！
己（おの）が光で狀もつて來い！（伊勢。螢の歌）

附記　「ツチムシ」は文字通　では「地蟲」であるが、此の歌では多分「螢」の意味であらう。

おほわた來い！來い！

豆食はしよ！

おまんまがいやなら魚(とと)くはしよ！（東京）

附記　「おほわた」（御綿）といふは、その尾に、綿の線に似た白い絨毛の突出を有つた紫色の小さな蝿である。

蝶々、蝶々、

菜の葉にとまれ！

菜の葉がいやなら手にとまれ！（蝶の歌）

附記　「ナ」といふ名は種々異つた野菜に與へてある名であるが、此處では多分蕪菁を指して居るのであらう。この歌は日本の殆ど到る處で歌ふ。

蝶々とんぼも鳥のうち。

山に囀るのは

まつむし、すずむし、轡蟲。

オッチヨコ、チヨイ、ノ、チヨイ！（東京の歌）

あつちへ行くと、
閻魔がにらむ。
こつちへ來ると、
ゆるしてやるぞ！（蜻蛉を追ふ時歌ふ）

蜒や！鐵漿（かね）や！
やんま　かへせ！（東京。蜻蛉の歌）

附記　この歌は頗る古い。これに名ざしてある蜻蛉の事はこの前に載つて居る蜻蛉の文にある。

まいまいつぶろ！
お湯屋の前に、
喧嘩があるから、
角（つの）出せ、槍出せ！（東京。蝸牛の歌）

蛙が鳴くから
かへろ！（東京。蛙の歌）

附記　この歌には言葉のたはむれがある。『カヘル』は發音しただけでは『歸る』とも『蛙』とも意味するる。『カヘロ』はその動詞の未來形である。

つぶ、つぶ、山へ行け！
おりやいやだ、われ行け！
去年の春も行つたれば、
鴉と申す黑鳥が、
あつちへつゝき、つんまはし、
こつちへつゝき、つんまはし、
二度と行くまい、あの山へ。（信濃。蝸牛の歌）

つくつくばうさんな、
なんゆう啼くか？

親が無いか？子が無いか？
親も御座る、子も御座る。
おいとし殿御を有つたれば、
鷹匠（たかじやう）にとられて今日（けふ）七日（なぬか）、
七日と思へば四十九日！
四十九日の銭金（ぜにかね）を、
どうして遣ふたらよからうか？
たかい米買うて船に積む。
廉い米買うて船に積む。
船は何處船、大阪船。
大阪船こそ　價（ね）がよけれ。（筑前。つくつくぼうしといふ蟬の歌）

附記　この珍らしい蟬に就いての記事が自分の『影』の中の『セミ』といふ文にあるから参照されたい。　また、この歌には死後四十九日目に營む佛教の法要のことが詠みこんである。

三

種々な遊戯歌

遊戯歌は――戸外或は戸内の種々な遊戯と共にうたふ歌は――その數頗る多い。自分が蒐めたものだけでも二百以上を含んで居る。物語の體(てい)のもあり、問答になつて居るのもある。佛蘭西人が『かぞへうた(シヤンソン・エヌメラチイフ)』若しくは『循環うた(ランドンネイ)』と呼んで居るあの部類に屬するのもある。分類の不可能なのも少しある。そして最も顯著なものの中に頗る奇怪なのがあつて――西洋の子供がうたふどんな物とも全く類を異にして居るから――澤山の註釋の助を藉りても、日本人の生活を知つて居られぬ讀者には、了解が出來なからうと思ふほどである。が、次に記載する一聯の見本はこの範疇(カテゴリイ)に屬する子供歌の珍妙さと多方面とを示して餘りあることと思ふ。

泣き蟲、毛蟲！

はさんで棄てろ！（泣く子に向つて歌ふ）

附記　百足蟲、毛蟲その他の不快な訪客は日本では鐵のチョプ・ステッキか火箸で棄てる。

歸のる、いのる！
いながさきに鬼が居る！
あと見りや蛇が居る！（家を出るのを恐がる子に向つて歌ふ）

蓮華の花開らいた！
ひいらいた、ひいらいた！
ひいらいたと思つたら、
やつとこさとつぼんだ！（踊歌）

附記　この蓮華の歌は、皆手をつないで、内側へ向いて圓を卽ち踊の環を造つて居る一組の子供が歌ふ。歌が始まるとその圓が次第に擴がる。が、『ヤットコサ』といふ言葉で、みんな一緒に走り込んで、同時に手を引つぱつてその環を閉づる。

梅干さんといふ人は、
足から顔まで皺よつて、
　　皺よつて、
あれは酸い、これは酸い、
　　すい、すい、すい！（遊戯歌）

チンカン、チンカラ、鍛冶屋の子、
裸で飛び出す風呂屋の子……（遊戯歌）

附記　いろんな商賣の名をあげての或る「數へ歌」の斷片のやうである。

鍛冶どん、かぢどん、
火一つごしやれ！
火は無い無いや！
あの山越えて、
この山越えて、

火は此處ここに在る！　（遊戯歌）

附記　この歌は或る器用なそしてむつかしい指の遊びに伴なふて歌ふ。英國の『ダンス・サムキン・ダンス』の子供遊に全然似ないでも無いが、もつと込み入つて居る。兩手を使ふ。

中(なか)の、中の小佛は
なぜまたかゞんだ？
親の日に蝦たべて、
それでまたかゞんだ！　（踊歌）

附記　親の命日と盆とには善良な佛教信者は魚はどんな魚も食はぬ。

まはりまはりの小佛は
なぜ丈(せ)が低い？
親の日に魚(とと)食つて、
それで丈(せ)が低いそな！　（前のと同種）

ゆらすや百足蟲(むかで)！
頭(あたま)は　茶臼、
尾(を)はヒコ／＼よ！　（紀伊。百足蟲踊(註)）

附記　この百足蟲踊は銘々がその前の人の帶を捉へて居て、一列に並んで居る大勢の子供がやる。その先頭の者は手に、百足蟲の頭のつもりの、何か茶臼に似た恰好の物を持つて居る。本當の茶臼では遊戯には重過ぎよう。

地藏さん、地藏さん、
おまへの水を、
どんどと汲んで、
松葉に入れて、
まつくりかへた！　（出雲。踊歌）

附記　これは普通小さな女の子供が歌ふ。歌を歌ふ者は、二人づつ、歌ひながら手を持ち合うて、面と向かひ合つて立つ。『マックリカヘタ』で、背中向きになるやうに、手ははづさずに、轉ずる。

一がさいた！二がさいた！
三がさいた！四がさいた！
五がさいた！六がさいた！
七がさいた！蜂が刺いた！
熊蜂がさいた！とかげが刺いた！（手遊歌）

附記　ハチは發音では『八』とも『蜂』とも意味する。

此處は何處（どこ）の細道ぢや？
天神さまの細道ぢや。
一寸（ちよつと）通して下しやんせ！
御用の無いもの通しません！
天神さんへ願かけて、
御札納めに參ります。
おまへの家（うち）は何處ぢやいな？
箱根のお關で御座ります。

そんなら通りやれ、通りやれ！
行きはよい〳〵、歸りは恐い！（遊戯歌）

附記　箱根には古昔武人の番所があつて、どんな旅人も其處で、通る前に、身の上を語らなければならなかつた。

こな子よい子だ、何處の子だ？
問屋八兵衛の末娘！
なんとよい子だ、器用な子だ！
機巧に育つて來たほどに、
親に十貫、子に五貫、
せめておばばに四十五貫。
四十五貫のお金を何にする？
廉い米買うて船に積み、
船は白金、艪は黄金、
あさあ、押せ押せ、都まで！

都もどりに何もろた？
一にかんざし、二に鏡、
三に更紗の帶もろた！
絎けてくだされ、おばさん！
くけう〳〵と思へども、
帶に短し、たすきに長し、
山田藥師の鐘の緒に！　（出雲。遊戲歌）

附記　一貫は古昔は銅錢千に當つて居た。祖母に深山な贈物をする事が、日本の家庭では子供の若い時分の仕附けは祖父母に、殊に祖母に普通に任せられてゐたことを思ひ出させる。更紗は一種のキヤラコ或はチンツ。タスキといふは仕事をする時の間日本の長い袖を後ろへ結はへるに使ふ紐。ヤクシはバイシヤギヤラガの日本名。（バイシヤギヤラガは文字通りでは『醫王』の意味・ヤクシ卽ちヤクシニヨライは日本の非常に人氣のある佛で、醫治の佛として特に人が祈る。

小僧、小僧、子一人ごしやれ！
どの子が欲しけりや？

あの子が欲しいわ！
何添へて養う？
鯛そへてやしなはう！
それは骨があつていけぬ！
そんなら鯛が骨なら、
烏賊そへてやしなはう！
それはむしの大毒！
それなら殿様の二階で、
毛氈敷いて手習さしよぞ！
手がよごれていけぬ！
そんなら殿様の二階で、
毛氈敷いて砂糖餅！
そんなら遣ろぞ！　（遊戯歌）

千艘や萬艘！

お船がぎつちりて、
ぎつちり〳〵漕げば、
お惠比須か、大黑か、
こちや福の神！（新年の歌）

古昔の東京の盆踊歌

一

盆の十六日　遊ばせぬ親は
木佛金佛　石佛、
石佛！

二

盆、盆、盆の十六日

お閻魔様へ、
參ろとしたら、
草履の緒が切れて、
鼻緒が切れて、
南無釋迦如來！
手で拜む、手で拜む！

三

お盆が來たら、髮結うておくれ！
島田がよいか？唐子(からこ)がよいか？
島田もいやよ！唐子もいやよ！
お江戸ではやるおさげ髮！

附記　シマダは花嫁の結ふ髷。カラコワゲは古風な髷で、その名の示す如く支那來のものであらう。文字通りでは「唐の子の髷」サゲガミとはだらりと垂らした髮。太古は貴婦人がその髮をさうして

ゐた。

四

一の丸越えて、二の丸越えて、
三の丸先きへ、掘井戸掘つて、
堀は掘井戸、釣瓶は黄金（こがね）、
黄金の先きへ　蜻蛉がとまつて、
やれそれ蜻蛉！それ〱とんぼ！
飛ばなきや羽（はね）を　きり〱す！
きりこが燈籠、きりこが燈籠！
きりこが燈籠は　どなたの細工？
御（み）あかし様の　御（お）手細工！

附記　日本の城のまはりの防禦線は内から外へかぞへる。きりこ燈籠は一種の四角又は多角形燈籠。

五

長い、長い！兩國橋長い！
長い兩國橋 納涼(すずみ)に出たら、
お子様がたが、屋形(やかた)の船で、
彈くや語るや、やれ面白や！
やれ面白や！森陣！

六

柳の下(した)の 鴛鴦様(さん)は、
朝日に照らされてお色が黒い！
お色が黒けりやがんぐり傘おさし！
がんぐり傘 いやよ！
がんぐり傘 いやよ！

お江戸ではやる蛇の目傘！
　　蛇の目傘！

附記　どんな傘をガングリガサといふのか自分は知らぬ。ジヤノメガサとは、頂から四五吋の處につけたバンドを殘して餘は黑く塗つた紙張の傘。だから開くと、黑い圓を取り卷いて居るこの白い環が、形が蛇の目に似る。

七

こなたの屋敷は　綺麗な屋敷！
奧の間で三味線、中の間で踊、
臺處までも笛太鼓　笛太鼓！

おほやまの、おほ山の　お紺さんは、
何處へ行つた？お隣へ、
お薯たべに　行きました！

おゝ可笑し、おゝ可笑し！（東京の遊戯歌）

向うの山の、
相撲取り花は、
エンヤラと引けば、
お手々が切れる、
お手々が切れた。
お薬無いか？
赤いのもある、
白いのもある。
同じくなれば、
赤いのにしようよ。（東京の遊戯歌）

向うの山の、
かはづ鳴くが、

なして鳴くか？
寒うて鳴くか？
ひもじて鳴くか？
ひもじきや田つくれ！
田つくりやきたない！
きたなきや洗へ！
洗や　つめたい！
つめたきや　暖れ！
あたりや　熱い！
あつきや　退れ！
しざりや蚕が食ふ！
蚕が食や殺せ！
殺しや可哀い！
可愛いきや　抱いて寝！
抱いて寝りや蚕が食ふ！

蚤が食や殺せ！……………………（出雲の問答歌）

自分が蒐集した此の部類のものの中で特に最も奇異なものは、子供が遊戯歌としてうたふ一種の哲學的問答の歌である。多分これは子供の教育が主として佛教僧侶の手に委ねられてゐた時代、そして殆ど寺といふ寺がすべて兼ねてまた學校であつたか、或はそれに附屬して居る學校を有つてゐたか、した時代からして殘存して居るものであらう。作品そのものには甚だしく珍らしい處はない。西洋人の心にこれを奇異だと思はせるのは、その題目の選擇に——遊戯歌としては驚くべき題目たるに——在るのである。

この題目は、その溫顔を殆ど到る處の路傍に、また數限りない佛教の墓地に、見ることの出來る彼の地藏菩薩（ボディサットヷ・クシティガルバ）の無限無窮である。屢〻十字路に於て、またなほ多く墓地に於て、一體の地藏で無くして、各〻の像が一々異つた神祕的表號を有つて居る、一列の六體を見るであらう。この六體の地藏即ちロクヂザウは、地藏菩薩は自己を幾體にも增して、同時に六道の一切衆生を——即ち、宇宙全界を——能化し給ふといふ教を象徴したものである。が、より高等な佛教教理に據ると『佛陀のほかに

實在無く、實在のほかに佛陀無』してある。一切の諸佛一切の菩薩は實はただ一である。――一切の物質、一切の生、一切の心はただ一である。だから六道の地藏といふも絶對を多様に表現しただけのものであるばかりか、彼も亦絶對である。……そんな思想が子供の遊戯歌に具體化されて居るのはやゝ驚嘆すべきである。が、古い通俗な佛教文學には全くこれと同様に驚くべきものが數々あるのである。

橋の下の六地藏、
鼠に頭を嚼じられて、
鼠こそ地藏だ！
鼠　地藏だら、
何しに猫に捕られべな？
猫こそ地藏よ！
猫は地藏だら、
何しに犬に捕られべな？
犬こそ地藏よ！…

犬は地藏だら、
何しに狼に捕られべな？
狼こそ地藏よ！
狼　地藏だら、
何しに火にまかれべな？
火こそ地藏よ！
火は地藏だら、
何しに水に消されべな？
水こそ地藏よ！
水は　地藏だら、
何しに人に飲まれべな？
人こそ地藏よ！
人は地藏だら、
何しに地藏拜むべな？
眞(ほん)の地藏は六地藏！（陸奥）

四

物語の歌

おらが隣の　千松は、
近江の軍に　頼まれて、
一年經つても　まだ來ない、
二年經つても　まだ來ない、
三年經つたら　首が來た。（銚子）

向うの山に
猿が三匹とうまつて、
前なる猿は物知らず。
後の猿も物知らず。
中の小猿がよう物知つて、

ござれともだち花見に行こや！
花はどこ花？
地藏の前のさくら花。
一と枝折ればパッと散る。
二た枝折ればパッと散る。
三枝がさきに日が暮れて、
どっちの紺屋（こうや）に宿とろか？
東の紺屋に宿とろか？
南の紺屋に宿とろか？
殿さんの紺屋に宿とつて、
疊は短し　夜は長し。
あかづき起きて空見たら、
きつこのばつこのきいせんご。
船どもさらへて帆を掛けつ。
帆掛船のつりものは、

白織、赤織、赤地の
交じつた　つばかたな。　（出雲）

附記　一行飜譯を爲し得なかつたのがある。キツコノバツコノキイセンゴである。多分文句が訛つたのであらう。この歌と同種類のが澤山に在る。こんな種類のをランドンネの不完全な形式のもの――發展の初期のランドンネ――と言つてよくはなからうか。

やれ腹が立つ！立つならば、
硯と筆とを　手に持つて、
思ふことをば　書き置いて、
柴川へ　身を投げた！
下から雑魚が　つゝくやら、
上から鴉が　つゝくやら！
つゝいた鴉は　何處へ行た？
森木の下へ　麥蒔きに！
何石何石蒔いて來た？

二千石 毒いて来た！
二千石の 能には、
寺の前で 子を産んだ！
住持の衣へ 血がついて、
雨垂水で 洗つて、
香燈の火で 炙つて、
香爐の火が 足らいて、
油火で 炙つて、
油火が 足らいて、
竈(くど)の火で 炙つて、
竈の火が 足らいて、
炬燵の火で 炙つて。 （出雲）

附記 自殺をする前にその動機を説明する手紙を書く習慣が詠み込んである 炬燵は四角な物で、四方と上とは木の棒で出来て居り、下には金属製の火鉢か鍋かを置き、それへ炭火が入れる。上へは重い布団を掛ける。その布団の下へ膝を入れて幾人もがそのまはりに坐つて暖まることが出来る。

大きさは一呎平方から二呎平方に至る。辭書は不合理にもこれを「一種のハース」と書いて居る。
これはハースでは無い。が、西部日本では西洋のハースが占めて居る地位をその家で占めて居る—
—一家の者が冬の夜そのまはりに集まるから。

猫が桑名へ　參るとて、
桑名の道で　灯が消えて、
とぼしてもとぼしてもとぼらいて、
茶屋の緣へと　腰かけて、
水を一パイお吳れんか？
水をやるのは　易いけど、
釣瓶の底が　拔けました。
やれ〳〵きつい　姉さんぢや！
お茶を一ぷく　お吳れんか？
御茶をやるのは　易いけど、
茶釜の底が　拔けました。
やれ〳〵きつい　姉さんぢや！

煙草を一ぷく　お呉れんか？
煙草をやるのは　易いけど、
煙管の首が　拔けました。
やれ〳〵きつい　姉さんぢや！
ひい――ふう――みい――よう――いつ――むう――なな――やあ――
この――とう！　（伊勢）

附記　『姉さん』は宿屋の女中に向つて今たほ用ひられて居る尊稱。アネサンの略のネイサンといふを一層屢〻使用する。ひいふうの數はこの歌と共に行ふ遊戯に關係のあるもの。

固よりの事上記の物語に述べて居る猫は化猫――多様な姿に身を現じ得る力を有つて居る猫――である。それが人間の姿をして旅をして居る。が其假相は茶屋の女中の看破する所となつて女中はそれに答へるのに化物に對して答へる道を以てする。……化物若しくは幽靈が通か他の容物をなふなら直接それを拒むのは宜しくない。それを與へる前に忘れずに其容物の底を拔かなければならぬ、――て無いと其結果は取り返しのつかぬ物である。

それて想ひ出すか、蛙や鳥が美しい少女に戀をしたり、種類の異つた動物が結婚したりする、ことを語つて居る西洋のお伽噺に關して、時折皮相な批評を下す者がある。そんな途方も無い不合理な物語は兒童の讀み物には不適當であり、なほまた藝術的價値を全く失はせる、といふのである。が、そんなお伽噺の多數は、その起原を溯つて東洋に求めることが出來るものである。ところが、東洋人の心には――動物の中で意の儘に人間の姿に現じ得るものが澤山あると信ぜられて居ることだから――人間と人間ならぬものとの結婚、といふ考には少しも不合理なところは無いのである。極東人の信仰では、一切の生は一であつて、それを包んで居る形態はただ一時の狀態である。極東人の信仰に就いて幾分かの知識を有つて居ないでは、日本のお伽噺の眞の妙味は了解が出來ぬ。兎に角、飜譯てそれを讀む折は、必らず日本の藝術家の圖解のあるので讀まなければならぬ。ただの本文だけては不可解に終はることを、その圖解が大いに說明して吳れるてあらう。

附記　この信仰は佛教よりも古い。が、佛教は餘程それを承認して居る。佛門に入らんと欲する者に對して、以前問ふことになつて居た問の一つは、『毘奈耶』に據ると、斯うであつた。『お前は人間か？』

次記の歌には蛇が或る人の娘の姿を執つて居る話がある。蛇女や龍女の話は日本文學に

甚だ多い。多分この歌も前の歌も、古い小説か戯曲かを懐ひ出して作つたものであらう。

向うの小澤に　蛇が立つて、
八幡長者の　末娘。
巧くも立つたり　企んだり。
手には二本の　珠を持ち、
足には黄金の　靴を穿き、
あゝ呼べ、かう呼べと、言ひながら、
山くれ野くれ　行つたれば、
草刈殿御に　行きあつて、
帯を下され　殿御さま！
帯も笠も　易い事、
己の女房に　なるならば、
朝は起きて　髪結うて、
花の咲くまで　寝て待ちよ！　（信濃）

五

羽子突歌と手毬歌

正月の休暇時分には、幾組もの少女が羽子を突いたり、手毬の種々な遊戯をしたりして居るので、街路はまことに美はしくなる。袖の長い、色取りの多樣な、晴衣をまとうて居るそんな少女共よりも美はしいものは、何も想像が出來にくからう。蛾か蝶の非常に燦爛たるものだけがそれに比べられよう。さういふ少女の優美さと上品さとを描くのに東京の畫工は甚だ巧みで、年ごとにそんな畫工は、手毬をついて居る少女共の群集の（時の流行も見せて）新しい着色の版畫や、或は、羽子板を手に、飛んで行くその羽毛の球を見やつて居る、花の唇を半ば開き、微笑む顔と輝く眼とを上に向けて居る、仙女のやうな少女の繪、を提供して我々を悦ばせる。それでも實物の方が時にはその繪よりも愛らしいこともあらう。それから、嗚呼！どんなにか驚嘆すべき羽子板を時々見ることが出來ることか！或る山水、或る庭園、或る古代の貴公子の夢、かと思ふやうなのをば、絹のモザイク細工でその裏に貼り附けてある！

が、その妙味は眼へだけのものでは無い。——さういふ仙女達は、遊戯を爲しながら、節奏と旋律とが不思議な、聞いて實に面白い、そして（西洋人の耳には）記憶することの不可能な、短い歌をうたふのである。

此等の奇妙な短い歌は、多くは、つぎつぎの行又は句の最初の綴音が、その行又は句の順位を示して居る數詞の最初の綴音と同じになるやうに構成されて居る。最も普通に用ひられる日本の數詞はヒトツ、フタツ、ミッツ、ヨッツ、イッツ、ムッツ、ナナッ、ヤッツ、ココノツ、トヲである。が、種々な實例に於て支那の數詞が用ひられて居る。卽ち、イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク、シチ、ハチ、ク、ジフである。そして色々の作品にその二組の數詞が交ぜて用ひてある。行又は句の一つづつを歌ふと共に、羽子板なり球なり、それを一度突くことになつて居る。『チヤウ』（偶數）といふ言葉は普通は十たび突くことを意味して居るやうである。——が、この意味は必らずしも明白では無い。

一人來な！
二人來な！

見て行きな！
寄つて行きな！
何時來て、
六づかし！
七藥師！
此處のまで！
十よ！　（東京。羽子突歌）

一人來な！
二人來な！
見て行きな！
寄つて行きな！
何時來て見ても、
七子帶を、
矢車に締めて、

ここのよて、

一丁！（京都。羽子突歌）

附記　ナナコはうねうねの光澤のある、一種の重い綾織の絹。ミテモの「ミ」といふ綴音がこの歌ではムツ（六）の最初の綴音の「ム」の代りになつて居る。

一と目！
二た目！
目證！
嫁御！
いつ屋の
六指！
なな屋の
矢指！
ここの屋
とを！（京都。羽子突歌）

比良屋彦兵衛！
中根のお豊！
三度目に負けて、
あべこべちんちくりん！
ちんちくりんのちんちくりん！
一人子に　双児！
見渡す　嫁御！
何時来て　見ても、
七子の帯を、
矢の字に　締めて、
此の家を　通る！　（伴讀、羽子突歌）

附記　此歌にいうて居る「ヤ」は片假名の「ヤ」である。帯のこの結び方は今も流行つて居て、「やの字結び」といつて居る。

時には有名な十ヶ寺の名、或は十體の神佛の名、或は月の名すら――次記の例に見る如く――この數へ立てる目的に用ひる。

一に一畑お藥師様よ！
二には日本の日光様よ！
三に讃岐の金比羅様よ！
四には信濃の善光寺様よ！
いつつ江の島辨天様よ！
六に六角堂の觀音様よ！
ななつ七浦の天神様よ！
八つ八幡の八幡様よ！
ここのつ　高野の弘法様よ！
十で　處の氏神様よ！
掛けた願なら解かねばならぬ！　（東京。手毬歌）

附記　この作品の變形が殆ど日本到る處にあるやうである。

正月 門松、
二月 初午、
三月 節句、
四月 お釋迦、
五月 幟、
六月 天王、
七月 七夕、
八月 八朔、
九月 菊月、
十月 蛭子講、
霜月 師走、
ここので 一丁とん！　（京都。羽子突歌）

附記 カドマツ即ち「門松」は新年の元日に家の正門の前へ樹てる。ハツウマは稲の神の大祭。三月の節句は雛祭ともいふ。佛陀の誕生日は四月八日に祝ふ。幟は男の兒の祭。ノボリは紙で象徴的な模様を描いて居る。男兒の出生を祝つて掲げる。東京ではノボリの代りに紙又は布で造つた鯉な

用ひる。天王は市又は郡の守護神に普通與へる名。七夕の織姫はヹガの星。エビスは勞働の守護神。

大黒樣といふ人は、
一に俵を踏んまへて、
二ににつこりと笑うて、
三に杯いただいて、
四つで世の中よいやうに、
五つで泉の湧くやうに、
六つで無病息災に、
七つ何事無いやうに、
八つで屋敷を平らげて、
九つこ倉を推し立てて、
十でとつくり治まつた。（信濃。手毬歌）

最後に記した此歌は、祈願の言葉を手毬歌に變形した珍らしい一例である。初めの四行を除いては、その文句は、一語一語、昔のサムラヒが唱へた文句——どんなサムラヒも毎

日唱へた家内での祈願の文句——である。……之に反して次に記すものの中には、殆ど無意味詩(センス・ヴァアス)といつても宜いものが二三ある。

ひや、ふや、
おこまさん！
たばこの煙は
丈八さん！ （越前。羽子突歌）

附記　この歌は『お駒才三』といふ通俗な戯曲に關係して居る。その戯曲の女主人公お駒は美しい女なのだが、その父の店の番頭丈八なるものの奸策の爲め、不幸な最期を見る。丈八は芝居では種種な場に、火鉢の前に坐つてて盛んに煙草を吹かす。

一月二月、
三月さくら、
柳の下(した)で
化粧して十(とを)よ！ （信濃。羽子突歌）

ひや　彦兵衞！
はげたか　次郎兵衞！
次郎べの頭（あたま）は、
なぜはげたか？
親が邪慳で
火へくべた！（信濃。羽子突歌）

ひい、ふう、みい、よ、
よもの景色を、
春と眺めて、
梅にうぐひす、
法法華經と囀る。
明日（あす）は　祇園の
二軒茶屋で、
琴や三味線、

はやしテンテン、
てまりうた。
歌の中山、
ちよ五に五十で、
ちよ六――六　六！
ちよ七――七　七！
ちよ八――八　八！
ちよ九に九十で、
ちよつと百ついた！（京都。手毬歌）

附記　うぐひすの啼聲に關して、この文の前にある、偶數に縁のある名、の一文を讀まれたい。この歌でのチヨはチヨウと同じで、偶數か又は全る十の意味。

うぐひすや！うぐひすや！
たま〳〵都へ上（のぼ）る時、
梅の小枝に晝寢して、

お千代に何々着せてやる？
上衣は紺々　紺縮緬！
下着はちんちんちんちりめん！
それを着せてやつたれば、
道でころぶか　手を突くか？
殿さんが通たら御辭儀せよ！
おん馬が來たらば傍へ寄れ！
手習子供をかまふなよ！
かまふと草紙でぶたれるぞ！
先づ〳〵一貫お貸し申した！　（靜岡。手毬歌）

附記　昔の一貫は一千文で、だからその値は百セントの一弗と似たもの。

一つ挽いた豆
　粉にした豆！
二つ踏んだ豆

つぶれた豆！
三つ味噌豆
ふくれた豆！
四つ選つた豆
綺麗な豆！
五つ炒つた豆
腹切つた豆！
六つ貰うた豆
得した豆！
七つ生つた豆
莢つき豆！
八つ與つた豆
損した豆！
九つ買うた豆
錢出した豆！

十（と）で取（と）つた豆
盗人（ぬすと）した豆！　（越前）

次に拔萃する手毬歌の一番好い――のの興味は前のとは全く性質を異にして居る。作（さく）の仕組は英國のあの有名な子供歌『わたしの好きなは、アの字附き』の仕組に似ねても無い。演者の想像的機智次第て、無限に擴げたり或は變更したり、出來るのである。

甲の洒戲者。

おかん、かん、かん、
加賀樣屋敷だや。
おけさ米搗く、
小糠が落ちる。
なんとて落ちる？
いゝ、いゝ、
さゝ、しちく竹！
いゝ、いゝ、
さゝ、はちく竹！

向うの向うの、
格子づくりの、
白壁づくりの、
赤い暖簾のかかつた、
お姫樣まで、
おゝ渡し――
もうす――す――す――の――す！

此處で手毬を乙の娘に渡すと、その娘はそれを受け取つて斯う歌ひ出す。

乙の淺藏者。

受け取つた！受け取つた？
受け取つた！
大事のお毬を受け取つた！
あゝ受け取つた！
蝶や花やと

おそだて申して、
おかへし申して、
今夜の晩から、
紙もいらずみ、
硯もいらずみ、
針三本、
絹糸三筋に、
おん馬が三匹、
お籠が三挺、
のりかへひつかへ。
向うの向うの、
格子づくりの、
柿の暖簾の
　?　さんまで。
おゝ渡し

もう——す——す——の——す！（東京。手毬歌）

附記　シチクダケ、ハチクダケ、共に竹の名。ササは一種の小さな竹。シチクダケは黑い竹、ハチクダケは紫がかつた竹である。が、此の歌では兩語とも擬聲である。『ササ』といふ擬音は、米搗きが足で揚げた時の木造の大きな臼が軋る音。シチクダケ、ハチクダケは、槌の落つる音や、打たれてどしんといふ音やらを現はしたもの。？の處で、次にその毬を渡してやる女の子の名を言ふのである。

六

子守唄

子守唄文學には、國といふことと或は人種といふこととと離れて、一種特別な心理的興味が附隨して居る。子守唄は母の慈愛の自然の發言であるから、愛情經驗の最も古い形式を現はして居ると言つてよい。そして殆どいづれの時いづれの場所に於ても、此種の民間歌謠の本質的特性は、如何なる種類の社會的變化にも、殆ど影響されて居ない。それが物語風

てあらうとただの音響であらうと、意味があらうが無意味であらうが、その文句は子供の心がそれを見て不思議に感ずる、見慣れて居るものに——例へば馬或は牛、木或は花、月と星、鳥或は蝶、街路や庭園の眺め、といふやうなものに——何等かの關係を大抵は有つて居る。子守唄は愛撫の一と言葉を述べて、次に從順(すなほ)ならば褒美を與へるとの約束と、だだをこねる結果として危險があるぞとの仄めかしとを交互に述べて、それを反復して居るが常である。その約束は食物か玩具かに就いてて、脅かしの罰はその母が加へるのでは無くて、いけずな子供を罰する力のある魔物か化物かである。日本の子守唄は、この概則に對して、何等著しい例外を提供しはせぬ。が、奇妙な空想に富んでゐて、一種明らかに東洋的な性質を具へて居る。

　歐洲の讀者は、短いそんな歌の初めに『ネンネ』とか『ネンネコ』とかいふ綴音が出て來るのに、或は驚かるゝことであらう。それは、佛蘭西の搖籃(ベルシユウズ)の歌は多くは、殆ど同じ音の、『ネネ』といふ綴音で始まつて居るからである。（佛蘭西の——或る地方の方言では『ネンナ』とか『ノノ』とか發音する——『ネネ』といふ語は、多く南部佛蘭西の母親が使ふ。北部佛蘭西で、それに相當する語は『ドド』である）が、固よりのこと佛蘭西語

の『ネネ』と日本語の『ネンネ』との間には、何等實際の語原的關係があるのでは無い。『ネンネコ』といふ日本語の句は、眠るといふ意味の『ネル』といふ動詞の一綴音と、赤ん坊といふ意味の『ネンネ』或は『ネンネイ』といふ語の一綴音と、子といふ意味の『コ』といふ語の、結合から成つて居るのである。『眠れよ、赤ん坊よ』といふがその言葉の眞の意味である。

追記　『ネネ』其他の佛蘭西語に就いては、ティエルソー氏の『佛蘭西俗謠史』（イストアール・ド・ラ・シャンソン・ポプレエル・アン・フランス）一三六――三七頁及び其後を參照されたい。

ねんね、ねんねと
寢る子は可愛い！
起きて泣く子は
面（つら）憎い！　（伊勢）

ねんねこ、ねんねこ！
　ねんねこや！

寝たらお母(かか)へ
　連れて行(い)なあ！
起きたら　かがまが
　とつて囓(か)まあ！（出雲）

附記　ガガマといふは或る化物の出雲名である。これは古代の『ゴゴメ』といふ語の轉訛ではなからうかと思ふ。ゴゴメといふは原始的神道信仰の或る妖怪で、冥界の醜女である。

寝たか、寝なんだか、
枕に問へば、
枕もの言うた、
寝たというた。（京都）

ねんねこ、ねんねこ、
　ねんねこよ！
己(おら)が赤ん坊は

自家の此の子の
　枕の模樣！
梅にうぐひす
　松に鶴！
梅に慣れても
　櫻はいや／＼！
同じ花でも
　散りやすい！（越前）

附記　櫻は、だから、不吉な模樣である。民間傳說の地方的小片がこの作で窺はれる。普通には、櫻は幸福な徵號と考へられて居る。この關係に於て、蓮の花　模樣は不吉だと思はれて居る、ことを述べてもよからう。子供の衣物の模樣には、決してそれを見ることが出來ぬ。その花の繪すら殆ど部屋に掛けることをしない。その理由は、蓮は佛敎の表象的な花であるから、墓石に彫る。そして葬式の行列に一つの徵號として持ち運ぶ。

ねんねこ、ねんねこ、
　ねんねこや！
この子何故(なあ)して
　泣くやら？
お乳が足らぬか？
　おままが足らぬか？
今にお父(さつあ)んの大殿の
　お帰りに、
飴や、お菓子や、
　ヒイヒイや、
ガラガラ、投ぐれば
　フイと立つ、
おきあがりこぼし！
ねんねこ、ねんねこ、
　ねんねんや！（出雲。松江）

善い子だ、さん子だ！
　壮健（まめ）な子だ！
まめて育てた
　お子だもの！
寝るとねり餅
　くれてやる！
泣くと長持
　しよはせるぞ！
怒（おこ）ると怒（おこ）り蟲
　呉れてやる！（静岡市）

附記　この作の主たる面白味は句が頭韻を踏んで構成されて居る點にある。妙な言葉のたはむれがこゝにある。マメは發音では『豆』とも『壯健』とも意味する。同様にオコリは『怒り』とも『瘧』とも意味する。オコリムシは『瘧蟲』で、寒氣と熱とを起こすと思はれて居る、或る大きな蠅の普通名である。

坊やはいい子だ、
　ねんねしな！
この子の可愛さ
　限り無い！
山での木の數、
　榧の數！
天へ上（のぼ）つて
　星の數！
沼津へ下れば
　千本松！
千本松原、小松原！
松葉の數より
　まだ可愛い！（駿河）
お寢んね、お寢んね

いつ出來た？
三月さくらの
咲く時に、
道理てお顔が
さくら色！　（武藏）

ねんねん、ねんねん、
ねんねんよ！
ねんねした子に
羽子板と羽子と！
ねんねせぬ子に
羽子ばかり！　（讃岐）

ねんねんよう！
ころころよ！

ねんねん小山の
　　雉子の子は
啼くとお鷹にとられるよ！　（信濃）

附記　雉子といふは美しい綠色のフエザントで、屢〻その啼聲で、その居場處を獵師に洩らす。だから「雉子も啼かねば打たれまい」といふ諺がある。

ねんねこ、ねんねこ、
　　ねんねこや！
あちら向いてもやあま山！
こちら向いてもやあま山！
やあまの中に何がある？
椎やどんぐり榧の實！　（出雲）

附記　椎はライヴ・オークの一種。カヤはユウの一種。

ねんねこせ、
　　ねんねこせ！

寝んねのお守(もり)は
　　何處(どうこ)へ行(い)た？
山を越えて
　　郷(さと)へ行(い)た！
郷(さと)の土産に
　　何貰うた？
でんでん太鼓に
　　古つづみ！
おきあがりこぼしに
　　犬張子！（出雲）

『デンデン太鼓』は圓い淺いドラム。ツヅミは頗る妙な恰好のハンド・ドラム。こゝにいふ玩具ドラムは固よりのこと本當のものよりか餘程小さい。オキアガリコボシといふは相撲取の姿をした小さなもので、どんなに投げても眞直に立つやうに重みが入れてあるもの。

寝んねんさんせよ！

今日は二十五日！
明日はこの子の宮参り！
宮へ參らばどういうて拜む？
この子一代まめなよに！（伊勢）

ねんねこ、ねんねこ、
　ねんねこよ！
己が赤坊の
　寢た留守に、
小豆をよなげて、
　米といて、
赤の飯に
　魚添へて、
赤のいい子に
　呉れるぞへ！（武藏）

油買ひに　茶買ひに！
油屋の　前で
すべつて　ころんで、
油一升　こぼした！
その油　どうした？
太郎どんの　犬と、
次郎どんの　犬と、
皆なめて　しまつた！
その犬　どうした？
太鼓に　張つて、
あちの方でも　どんどこどん！
こちの方でも　どんどこどん！
　　たたいたとさ！（東京）

ねんねんや！　ころころや！

ねんねの生まれた　その日には、
赤いお飯に　魚添へて、
父様のお箸で　あげましよか？
ととさまのお箸は　ととくさい！
母様のお箸で　あげましよか？
母さまのお箸は　乳くさい！
姉さまのお箸で　上げましよう！
ねんねん、ころころ、ねんねしよう！　（岐阜）

ねんねこ、さんねこ、
　　酒屋の子！
酒屋をいやなら
　　嫁にやろ！
嫁の道具は
　　何々ぞ？

箪笥、長持、
　　ひつ、とだな！
琉球づつみが
　　六荷(ろっか)ある！
風呂敷包は
　　數知れず！
それほどこしらへ
　　やるほどにや、
一生去られて
　　戻るなよ！
そりやまたお母(か)さん
　　どうよくな！
千石(ごく)積んだる
　　船さへも、
風が變はれば

戻るもの！（攝津）

附記　琉球で製造する種々な織物は日本で珍重せられる。小さな贈物は普通それを木綿か絹かの四角な切れに包んで持つて行く。それは大きなハンケチに似たもので、それをフロシキと呼ぶ。

千疊座敷の
　唐紙そだち！
坊ちやまも善い子に
　なる時は、
地面をふや　て
　土藏たてて、
土藏の隣に
　松植ゑて、
松の隣に
　竹植ゑて、
竹の隣に

　お寝んねや！
宵には早から
　御寝なり、
あさまは早から
　お目ざめて、
御目覚のお褒美に
　なあに何？
お乳の出花を
　上げませうぞ！
お乳の出ばなが
　おいやなら、
鶏蹴合はせ
　お目にかきよ！
鶏蹴合はせ
　おいやなら、

御菓子澤山

　　おあがりか？　―出雲。大名の子に歌つた子守唄

附記　出雲松江で人のいふのを書き寫したもの。此の一篇の本眞の面白味は、その奇妙なそして全く飜譯不可能な敬語にある。

ねんねんよ！
　　ころころよ！
ねんねん小山の
　　兎(うさぎ)は、
なあぜに御耳が
　　お長いね？
お母(か)さんのお腹(なか)に
　　居た時に、
枇杷の實　笹の實
　　喰べまして、

それて御耳が
　　お長いよ！　（東京）

附記　この歌の出雲で歌ふのが自分の『知られぬ日本の面影』第二卷にある。出雲で歌ふのがこれよりも面白い。東京でもこれとは變はつた文句のがある。

ねんねん、ころいち、
　　天滿の市よ！
大根揃へて
　　船に積み、
船に積んだら
　　何處まで行きやる？
木津や難波の
　　橋の下！
橋の下には
　　お龜が居やる！

お龜とりたや
竹欲しや！
竹が欲しけりや
竹屋へ行きやれ！
竹は何でも
御座ります！（攝津）

お月さん　いくつ？
十三　ななつ！
まだ年　若い！
あの子を　產んで、
この子を　產んで、
だれに　抱かしよ？
お萬に　抱かしよ！
お萬　何處へ行た？

梅植ゑて、
梅の小枝に
鈴下げて、
その鈴ちやら〳〵
鳴る時は、
ぼつちやまもさぞ〳〵
嬉しかろ！（東京の子守唄）

金柑、蜜柑、
なんぼ喰べた？
お寺の二階で
三つ喰べた！
そのお寺は
だれが建てた？
八幡長者の

末娘！

末が嫁入り
する時にや、
なんがい寺町
シャラ〱と、
短い寺町
シャラ〱と、
シャラ〱雪駄の
緒が切れた！
姉さんたてて
呉れんかな？
たてて遣るこた
やろけんど、
針も無ければ
糸も無い！

針は針屋で
　買うてやる！
糸は糸屋で
　買うてやる！
針は針屋の
　腐れ針！
糸は糸屋の
　くされ糸！
姉さん雪駄に
　血がついた！
それは血ぢや無い
　紅（べに）ぢやもの！
大阪紅こそ
　色よけれ！
色のよい程

値が高い！（博多市）

附記　セッタとは輕くはあるが頗る丈夫な草履で、その皮の踵の處へ薄い金屬な附けて强めてあるもの。ペニは主として唇に塗る。

さて、結論のつもりで述べさせて貰ひたい事は、この稍〻長たらしい一文を起草する際、讀者に或る新しい經驗を――日本の市の街路を初めて通つた時の經驗に稍〻似寄つた經驗を――提供しようと希望し得るだけであつた。

日本の街路の初めての一般的印象は、多くの人には、奇異と云はんよりは寧ろ茫漠といつたものであるに相違無い。優れて鋭敏な五感を有つて居なければ――例へばピエール・ロティの視力の如き視力を有つて居なければ、その街路を通つて居る間に見たものを、極少ししか記憶して居ることが出來ず、殆ど何物をも理解することが出來ぬ。にも拘らず、驚きもして居り面白くも感じて居ることが判かる。――何故とは知らずに、豆仙人國の、奇怪な土地の感じを――意想外の魅力を――感ずる。

さて、自分が引用した子供歌全部のうちて、明らかに讀者の注意を惹いたものは、恐らくは五つ六つにも上るまい。殘餘のものに就いては、多分殆ど記憶にとどまるまい。が、

若しこの一聯の歌を、假令や急速に且つ皮相的にても、讀まれたならば、丁度日本の街路を初めて見た後に續いて起こつて來る感じに似ぬでも無い、或る一般的印象或は漠たる感念を得られたてあらう。——諸君のとは別なそして測り知ることの出來ぬ人性の朧氣な推測を妙に心を誘ひはするが、永久に諸君のものとは異つた、別な人種精神を、——てある。

随筆ここかしこ

橋の上

私の老車夫、平七が熊本近傍の或名高い寺へ私をのせて行くところであつた。

白川にかかつて居る駱駝の背のやうに曲つた、ものさびた橋へ來た、そこで私は暫らくそこの風景を樂しむために橋の上で止まる事を平七に命じた。夏の空の下で、電光のやうに白い溢れるやうな日光に浸された土の色は、殆んどまぼろしのやうに綺麗に見えた。橋の下には淺い川が、色々の綠の蔭になつた灰色の石の河底を、からからざわざわ、音をたてて流れた。前方には赤白い道が、肥後の大平野をとり卷いて居る高い青い山脈の方へ、森を通つたり、村を通つたりして、うねつて居るのが交々見えたり消えたりしてゐた。うしろには澤山の屋根が遙かに靑く入り交つて居る熊本があつた、――ただ遙かの森の山の綠に對して城の綺麗な白い輪廓がはつきり現れてゐた。……中で見て居ると、熊本はきたないところだが、その夏の日に私が見たやうに見ると、霞と夢てできたまぼろしの都である。……

額をふきながら平七は云つた。『二十二年前、いや二十三年前、私はここに立つて町の燃えるのを見ました』

『夜ですか』私は尋ねた。

『いゝえ』老人は云つた『午後でした、雨の日でした。……戰爭中で、町は燃えて居りました』

『誰が戰爭してゐたのです』

『城の兵隊が薩摩の人達と戰爭をしてゐました。私共は玉をよけるために、地面に穴を堀つて、その中にゐました。薩摩の人達は山の上に大砲を据ゑました、それから城内の兵隊がそれを打つたので、玉は私共の頭の上を通つて行きました、町は皆燒けました』

『ところで君はどうしてここへ來合せたのか』

『私は逃げて來たのです。私は獨りでこの橋まで走つて來ました。ここから三里程ある私の兄の農場へ行けると思つたのです。ところがここで止められました』

『誰が止めたのです』

『薩摩の人達です、——誰だか分りません。橋へ參りますと三人の農夫がゐました、—

――私は農夫だと思つたのです、――それが欄干によりかかつてゐました、大きな笠と蓑をつけて草鞋をはいてゐました。私は丁寧に言葉をかけました、すると一人は頭をぐるりと廻して、私に「ここに止まつてゐろ」と申しました。それだけでした、外の人は何も申しません。それから私はその人達は農夫でない事が分つて恐ろしくなりました』

『どうして農夫でない事が分つたのです』

『蓑の下に長い刀を――大層長い刀をかくしてゐました。大層背の高い人達でした。橋によりかかつて川を見下してゐました。私もそばに立つてゐました、丁度そこの左の方の三番目の柱のわきで、その人達と同じ事をしてゐました。誰も物を云ひません。そして長い間欄干によりかかつて立つてゐました』

『どれ程』

『はつきり分りませんが――長かつたに相違ありません。私は町が燃えて居るのを見ました。その間私に物を云ふ者も、亦私を見る者もありませんでした。皆水を見つめてゐました、すると遠足で騎兵の將校が來ました、ずつとあたりを見ながら。……』

『町から?』

『はい、そのうしろの道をずつと。……その三人の人達は笠の下から見てゐましたが頭

は動かしませんでした、川を見下して居るふりをしてゐました。ところが馬が橋にかかるその時、三人がふり向いて躍りかかりました、そして一人は馬の轡をつかむ、一人はその將校の腕を押へる、一人はその首を斬り落す、ほんのちよつとの間に。……』

『その將校の首を？』

『はい、聲を出す間もないうちに首は落ちました……そんな早業を見た事はありません。三人とも一言も發しませんでした』

『それから』

『それからその死骸を欄干の上から川へほうりました、そして一人が馬をなぐりました、ひどく、そこで馬は馳け出しました。……』

『町の方へ？』

『いゝえ、馬は橋向うの村の方へずつと追ひやられました。首は川へ投げ棄てないで、一人の薩摩の人はこれを蓑の下へ入れてもつてゐました。……それから皆、前の通り欄干によりかかつて見下してゐました。私の膝はふるへました。三人の武士は一言も物を云ひませんでした。私にはその息も聞えませんでした。私は顔を見るのを恐ろしく思ひました、――私は川を見續けてゐました。……少したつて又馬が聞えました、そして私の胸が騷い

て氣もちが惡くなりました、――それから見上げると、大層速く又一人の騎兵が往來をずつとやつて來ました。それが橋にかかるまで誰も動きません、すると忽ちのうちに首が落ちました、死骸は川にほうり込まれ、馬は追ひやられました事は、全く前の通りでした。そんな風にして三人殺されました。それから武士は橋を立ち去りました』

『君も一緒に行きましたか』

『いゝえ、その人達は三人目を殺すとすぐに出かけました、――首を携へて、――私には目もくれませんでした。私はその人達がずつと遠くなるまで、動く事もできないで、橋の上に立ちすくんでゐました。それから私は燃えて居る町へ走つて歸りました、私は一所懸命に走りました。そこで薩摩の軍勢が退却中だと云ふ事を聞きました。すぐあとで東京から軍隊が參りました、それて私も何か仕事が手につきました、私は兵隊のために草鞋を運びました』

『橋の上て殺されたのを君が見たと云ふ、その人達は誰てしたか』

『存じません』

『君は尋ねて見ようとした事はないのかね』

『ありません』再び額をふきながら、平七は云つた『戰爭がすんで餘程になるまで、そ

の事をちつとも云ひませんてした』
『そりやどうして？』私は追究した。
平七は驚いた顔をして、分らない氣の毒な人だと云ふ風ににつこりして答へた。
『と申しますのは、さうするのが、まちがつてゐたてせう、――恩知らずのやうな事になりましたてせうからね』
私は當然叱られたやうな氣がした。
そして私共は旅行を續けた。

お大の例

『汝の父母を敬へ』――申命記五章十六節
『我が子よ、汝の父の教をきけ、汝の母の法を棄ることなかれ』――箴言一章八節

一

お大は佛壇の燈明と香爐と水入れをわきへやつて、そのうしろの小さい御厨子を開いた。そのうちに、彼女の一族の位牌、――合せて五つの位牌があつた、それから觀音菩薩の黄金の姿がそのうしろに微笑しながら立つてゐた、祖父母の位牌が左の方、兩親のが右の方にあつた、そしてその間に昔幸福であつた時分に一緒に遊んだり喧嘩したり笑つたり泣いたりした小さい弟の戒名のある小さい位牌があつた。それから、又その御厨子には多くの祖先の戒名の書いてある卷物もあつた。お大はその御厨子の前で、幼少の時から合掌をす

る事になれてゐた。

この位牌と巻物は、以前は父の愛情と母の撫育よりも、――彼女の幼少の時代を養育し、彼女を脊負うて祭と云ふ祭につれて行き、彼女を喜ばせる事を工夫し、彼女の色々の小さい悲しみを慰め、歌をうたつて彼女の不機嫌を直してくれて、いつも愛情にみちた、いつも辛抱強い、いつもにこにこした老人達のどの記憶よりも、――可愛いいたづらの弟の笑と涙、やさしい呼び聲、高い呼び聲、走る音よりも、――祖先の凡ての傳説よりも、お六の信仰にとつては、大きな、遙かに大きな意味をもつてゐたのである。

その理由は、それ等の物は過去の人々が目に見えないでも實際に存在する事、――目に見えない同情とやさしさの現れ、――生者の悦びと悲しみに應ずる死者の悦びと憂を意味したからである。これまで夕方の薄暗がりの時、其位牌の前に燈明をともす事をつねとしてゐた時、いかに度々その小さい焔が、それ自身の力によらないで動くのを見たであらう。

しかし位牌は信心深い想像に取つてはただの表象以上の物てでもある。變質、變態の不思議な可能性がそれに存して居る。死から生へうつる間、魂の一時の宿ともなる、香の浸み込んで居る木の纎維の一つ一つは、見えない潜在の生命をもつて生きて居る。靈の意志

はそれに生命を與へる事もある。愛の力によつて位牌は肉と血とにかはる事もある、位牌の助けによりて、葬られた母が暗夜にそのみどり子に乳を與へるために歸つて來る。位牌の助けによつて、火葬の薪で消えた女が、その許嫁の夫と結婚するために歸つて來る事がある、――更に有難くも、男の兒を與へる事さへもある。位牌の力によつて、死んだ家來が零落から主人を救ふために永眠の墳墓から歸つて來る事もある。それから愛や忠義がその意志を果してから、その人は消える。――その肉體は再び見たところただの位牌となる。

凡てこの事をお大は知つて覺えてゐた筈である。恐らく覺えてゐた、彼女が御厨子から位牌と卷物を取り出して、窓から下の河へ落した時に泣いたからである。流れがそれを運び去つた時、彼女はそのあとを見送るに忍びなかつた。

二

お大は二人の英國の女宣教師の命によつてかうしたのであつた、その人々は色々親切を裝うて彼女を基督敎徒としようと說いたのであつた。（改宗者は祖先の位牌を埋めるか棄

てるやうにいつでも命ぜられた）それ等の宣教師はこの地方で始めて發見した唯一人の改宗者のお大に、助手として一ヶ月三圓の給料をやる約束をした、お大は讀み書きができたからであつた。彼女の手の働きでは一ヶ月二圓以上を儲ける事が到底できなかつた、そしてその中から小さい古道具屋の二階を借りて二十五錢の間代を拂はねばならなかつた。そこへ兩親の死後、彼女は家財と祖先の位牌を携へて行つた。生きるためには彼女は全く一所懸命に働かねばならなかつた、しかし一ヶ月三圓あれば甚だ安樂に暮す事ができた、そして女の宣教師は彼女のために部屋を與へた。彼女は人が自分の改宗を氣にかけるとは考へなかつた。

實際彼等は餘り頓着しなかつた。彼等は基督教については何も知らなかつた、そして知らうともしなかつた、彼等はお大が外國婦人の眞似をする程愚かである事を嘲り笑つただけであつた。彼等は彼女を馬鹿と考へて惡意のない嘲りをした。そして彼女が河に位牌を投げるのを見られたその日までは、彼等は引續きただ面白半分に彼女を嘲つてゐた。その日から彼等は笑ふのを止めた。彼等はその動機を論じないで、その行爲それ自身を判斷した。彼等の判斷は即座の、一致の、無言の物であつた。彼等はお大に一言の非難をも云はなかつた。彼等は彼女の存在を無視しただけであつた。

日本の社會の道德的憤怒はいつも烈しい憤怒、——それ自身をすぐに燃やしてしまふやうな種類の憤怒とはきまらない。冷たい事もある。お犬の場合では、それは氷の厚くなる時のやうに冷たい、無言の重い物であつた、何人も口には云はなかつた。全く自發的、本能的であつた。しかし一般の感情は、こんな風に言葉に譯する事ができたであらう、——

『この極東に於て、人間社會は、太古より、過去に對する現在の感謝、死者に對する生者の尊敬、祖先に對する子孫の愛情を要求するその信條の力によつて結合されて居る。この目に見える世界のあなたまで、親に對する子の義務、主人に對する從者の義務、君主に對する臣下の義務が及んで居る。かるが故に家庭の相談に於て、團體の會議に於て、裁判の高き座席に於て、都會の支配に於て、國の政治に於て、死者は座長となるのである。

『孝行と云ふ至高の德に反し、——祖先の宗教に反し、——凡ての信仰と感謝と尊敬と義務とに反し、——彼女の種族の凡ての道德的經驗に反して、——お犬は赦すべからざる罪を犯した。それ故人は彼女を見て汚れたる者、……——往來の犬、屋根の上の猫よりも

親切を施す資質のない者——と見なすべきである、即ちこれ等の物も、その低い程度に於て義務愛情の普通の道は守るが故である。

『お前は彼女の死者に對して感謝の言葉、愛のささやき、妻としての尊敬を拒絶した。それ故今彼女亦、生者は彼女に挨拶の言葉、普通の會釋、やさしい語を拒絶せねばならない。

『お大は彼女を生んだ父の記念、彼女がその乳を飲んだ母の記念、彼女の幼年時代を撫育したおとな達、彼女を姉と呼んだ小さき者の記念を嘲つた。それ故凡ての愛、凡ての情あるつとめは彼女に與へられない。

『彼女を生んだ父の魂、彼女を生んだ母の魂に、お大は屋根の蔭、食物の氣、水の捧物を拒んで與へなかつた　丁度その通り彼女には屋根の蔭、食物の提與、氣分を爽快ならしむる一杯の物も與へられない。

『そして丁度彼女が死者を投げ捨てたと同じく生者は彼女を投げ捨てるべきである、殘骸の如く邪魔物にさるべきである、——何人も顧みない、何人も葬らない、何人も憐まない、何人も神や佛にそのために祈らない小さい腐肉の如く。餓鬼の如く彼女はあるべきである、——塵塚の中をあさつて食物を求むる少食餓鬼の如く、生きながら地獄のうちに入

るべきである、――しかも彼女の地獄は唯一人の地獄、淋しい地獄、火の淋しさに呪はれたる魂を圍む孤獨の地獄であるべきである。……

三

思ひがけなく宣教師の女達はお大に自活すべき事を通知して來た。恐らく彼女は最善をつくしたらう、しかしたしかに彼女は彼等に何の役にも立たなかつた、そして彼等は有能な助手を要した。その上彼等は暫らくその地を去らうとしてゐた、そして彼女を一緒につれて行く事はできなかつた。たしかに彼女は單に基督敎徒であるために一ケ月三圓貰へると思ふ程愚かである筈はなかつた。……

お大は泣いた、それて彼等は彼女に勇敢てあれ、正しき道を踏めと敎へた。彼女は職を求むる事はできないと云つた、彼等は勤勉にして正直な人はこの忙しい世界に於て、就職難に苦しむに及ばないと告げた。それから絕望的恐怖の餘り、彼女は彼等に彼等の理解する事のできない、そして頑强に信じようとしない事實を告げた。彼女は危難のさし迫つて居る事を告げた、そこて彼等は彼女が全然墮落した事を告白したと信じて、彼等のできる

限りの冷静さを以て答へた。これは彼等の誤解であつた。この少女に悪意の分子は一點もない、愛すべき弱點と小兒らしい輕信とは彼女の最も悪い缺點であつた。實際彼女は助力を要した、早くそれを要した、甚しくそれを要した。しかし彼等は只彼女が金錢をほしがるとのみ考へた、そしてその金錢を得られない時には、罪を犯すとおどかしたとのみ考へた。彼女にはいつも前金で拂つてあるから、彼等は彼女に何にも負うてゐない、そして彼等はこれ以上何等の種類の助けをも與へない理由が立派にあると想像した。

そこで彼等は彼女を外に出してしまつた。すでに彼女はその家財を賣つた。もう何にも賣る物はない、ただ着て居る一枚の着物及び役に立たない足袋の數足あるだけ、その足袋は宣教師の女達が若い女が素足で居るのを見られるのは不作法であると思つて、彼女に買はせたのであつた。（彼等は又日本風に髮を結ふことが不信心に見えるので、忌まはしき束髪に結ふ事を餘儀なくさせた）

孝行の道に反した行があつたと公然判定された日本の少女はどうなるだらう。不貞と公然判ぜられた英國の少女はどうなるだらう。……

勿論お大は强かつたら、袂に石を入れて河に投じたかも知れない、――そのやうな境遇では、さうするのが立派なやりかたであつたらう。或は喉を切つたかも知れない、――その方がもつと立派だ、それには勇氣と熟練と兩方要るから。しかし彼女の階級の改宗者の多數の如く、お大は弱かつた、この人種の勇氣は彼女には缺乏してゐた。彼女は未だ生きてゐたかつた、そしてその生きる權利を主張するために、世の中と爭ふ事のできる强い型の人ではなかつた。彼女の過失を充分誓つて改めた後でも、彼女には取るべき道が只一つしかなかつた。

願はれた値段の三分の一で、お大の肉體を買つた人は云つた、――

『私の商賣はこの上もなく恥づべき商賣です。しかしこんな商賣へも、お前さんがしたやうな事をした女は入れられません。私のうちへお前さんを入れたら、お客は來なくなります、そして事が色々面倒になります。だから大阪へお前さんをやりませう、そこへ行けば分らないから、そして大阪のうちでお金を拂つてくれます。……』

そんなにしてお大は、都會の肉慾の坩堝（るつぼ）の中に投げられて永久に消えた。……多分彼女

はどの外國宣教師でも皆理解するやうに、怪しむべき事實の一例を示すために存在したのであらう。

譯者註 『知られぬ日本の面影』[illegible]參照

海のほとりにて

一

燒津の溺死者全體の爲めに、午後の二時に、濱邊でセガキ法要を營むと僧侶が豫告して居たのであつた。燒津は——（日本最古の歷史に「ヤキヅ」といふ名で記載されて居る）舊い處である。——それで燒津の漁夫共は、幾千年の間、その大海へ人身御供を几帳面に捧げ來たつて居るのである。で僧侶の此の豫告が、佛教よりも遙かに古い或る物を——溺死者の靈魂は波と共に永久に動いて居るといふ想像を——自分に憶ひ出させた。この信仰に據ると、燒津沖の海は精靈で一杯になつて居るに相違無い。……

自分は準備を見に午後早く海岸へ行つた。見ると大勢の人がはや既に集つて居た。それは燒けるやうな七月の日で——一點の雲も眼に見えず、岸の傾斜面の荒い砂利は赫々たる日の光の下に、爐から掻き出したばかりの鎔滓（かなくそ）のやうな熱を放射して居つた。だが庇金の

あらゆる色合に焦げて居るその漁夫共は、日光を何とも思つて居なかつた。焼け焦げるやうな石の上に坐つて待つて居るのであつた。海は退潮で、――緩い、長い、のろい漣に動いて――穏かであつた。

海邊には、高さ四呎許りの、粗末な祭壇様のものが建つて居て、その上に、白木の馬鹿に大きなヰハイ即ち葬禮用の牌子が、――その背面を海に向けて――置いてあつた。その位牌には、大きな支那文字で、三界の萬の――無数の――霊の住する處（座處）といふ意味のサンガイバンレイキといふ字が書いてあつた。種々な食物のお供へ物がその位牌の前に置いてあつた、――その中には、椀に盛つた飯、餅、茄子、梨があり、新しい蓮の葉の上へ盛り上げて、所謂ヒヤクミノオンジキが一と山あつた。これは名は百種の異つた滋味といふ意味ではあるが、實際は飯と薄く刻んだ茄子と交ぜ合はせたものである。飯の椀には小さな箸が突き刺してあつて、それへ色紙の切つたのが附けてあつた。それからまた蠟燭、香爐、幾把かの線香、水の入つた器、シキミといふ聖木の小枝が挿してある一對の竹筒、のあるのも見えた。そして水の入つて居る器の横に、この法要の規程に從つてお供物へ水を撒き散らす爲めの、ミソハギが一束置いてあるのであつた。

祭壇を支へて居る四本柱の一本一本へ、伐りたての竹が一本づつ結びつけてあり、此の祭壇の右と左とに、他の何本かの竹が濱へ、立ててあり、その竹のどれにも支那文字が書き記してある旗が結び附けてあつた。祭壇の四隅の竹の旗には、四天王――西方の守護神増長天王、東方の守護神持國天王、北方の守護神多聞天王、南方の守護神廣目天王――の名とその屬性とが書いてあつた。

祭壇の正面には、長さ三十呎幅十五呎許りの濱の地面を蔽ふやうに莚が敷いてあつて、此の莚敷の地面の上には、僧侶に日が當たらぬやうに、紺木綿の日覆が綱で吊り上げてあつた。自分は此の祭壇とお供物の略圖(これは後で日本の或る友人に訂して貰ひ緻密にして貰つた)を書く爲めに、その日覆の下にしばらくしやがんで居た。

法要は定刻には始まらなかつた。僧侶がその姿を現はしたのは三時近くであつたに相違無い。全體で七人、いづれも大儀式の法衣で、そして鐘、經卷、床几、經臺、その他の必要什器を手にして居る小僧が附き隨つて居つた。僧侶と小僧とは紺の日覆の下に座を取り、見物人は、日を浴びて、外に立つて居た。僧侶のうち、たつた一人――主僧――が祭壇に面して坐つて、小僧をつれた他の者共は、――互に向かひ合つて、二列になるやう――主

僧の左右に坐つた。

二

祭壇の上のお供物を置きなほしたり、線香に火をつけたりする序開きが濟んでから、本當の儀式は佛教の讃歌卽ち伽陀で始つた。これはヒヤウシギと鐘の音に連れて合唱するのである。鐘は二つて、一つは深い音を出す大きな鐘、今一つは頗る美しい音を出す小さな鐘て、これは小さな男の子が受け持つて居つた。大きな鐘はゆつくり敲き、小さな鐘は早く響かす。そして拍子木は殆どカスタネットの如くにカチカチと早く打つのであつた。そして此の異常な器樂につれて、同音て役僧總てが唱へる伽陀の感銘は、奇異でもあつたが、それに劣らず印象的でもあつた。――

ヒヤウシギといふは堅い木の小さな切れで、それを早く打ち合せて鋭い澗れた音を續けさまに出して、合圖にも音樂的な目的にも使ふもの。

ピクピクニ

ホッシンホウヂ

イッキジヤウジキ

フセジツパウ

キウジンコクウ

シウヘンホフカイ

ミデンセツヂヅ

シヨジニクド

イッサイガキ

センバウキウメツ

サンセンヂシユ

ナイシクワウヤ

シヨキシントウ

シヤウライシフシ

……………

此の朗々たる短い音律は、神佛招致祈願の若しくは呪文の合唱には、殊に能く適應して居るやうに自分に思はれた。實際が施餓鬼供養の此の伽陀は、次記の自由譯で明白に知れるやうに、正銘な呪文であつた。――

『我等比丘比丘尼共、清淨な食物を盛つた此の器を恭しく捧げて、十萬世界に住み給ふ、又その周圍の法界に住み給ふ、且つ又大道に――寺院のうちの寶座をも除くこと無く――あらゆる處に住み給ふ、誰れをも除かで、一切の餓鬼達に之をお供へ申す。また死に去つて久しきを經たる者共の靈にも、――且つは又山の、河の、土地の、また曠野の大靈にも、お供へ申す。かるが故に、願はくは、諸鬼神よ、近づき來たつて此處に集ひ給はんことを！我等は、我等の憐憫同情の餘り、卿等に食物を供へんことを願ふ。卿等の各〻が此の我等の食物の捧げ物を味はひ給はんことを欲するなり。且つ又我等は、虚空界に住み給ふ一切の諸佛及び一切の諸聖に歸敬し奉りて、卿等並びに一切の有情の者共が滿足を得んやう祈願すべし。卿等の總てが、陀羅尼吟唱の功德によりて、且つは此の捧げまつる食物を味はひ給ふ功德によりて、より高き智慧を獲、あらゆる苦を免れ、直に天界に生を得給ひ――其處に於てあらゆる至福を知り、隨意に十萬界に遊住し、到る處に歡喜を見出し給はんやう、我等は祈願すべし。菩提心を發し給へ！開悟の道を蹐み給へ！佛果を得

給へ！再び退轉し給ふこと勿れ！中途に躊躇し給ふこと勿れ！卿等のうち先づ斯の道に入り給ふ者をして今〻殘れる者を導き、かくて解脱するやう誓はしめ給へ！尙ほまた我等卿等に懇願す、卿等日夜に我等を擁護し給はんことを。また今とても我等を助けて、此の食物を卿等に與へんとの我等の願望を達せしめ給へ、――此行爲のもたらす功德が、法界に住み給ふ一切の者に及ばんやう、且つ又、此の功德の力が、その一切法界に眞理を攝むるに效あらんやう、また其處なる一切の者に無上菩提を得しめ、一切智を得しむるに效あらんやう。――斯くて我等は、今後卿等のあらゆる行爲が卿等に佛果を得しむる功德を卿等に與へんやう、今や祈願すなり。斯くて我等は卿等が疾かに成佛し給はんことを願望すなり」

それから此法要のうちで一番奇妙な部分が始つた、――それは、或る陀羅尼、卽ち呪文的な梵語で出來て居る魔力のある詩句、の吟誦と共に、お供物に水を振り撒いて之を捧げる儀式である。式の此部分は短かつた。が、その委細を詳述するには多大な紙面を要する、――主僧の唱へる言葉や身振りが一々法式に據つて爲されるからである。例を擧ぐれば、その僧の手と指とは、どんな陀羅尼を唱へる時でも、その間その特殊な陀羅尼に對して規定されて居る或る位置に保たれて居なければならぬのである。だがこの複雜な儀式の主要な事實は大略次記の如くである。

先づ第一に、精靈を『十方世界』から呼び出す『召請の陀羅尼』を七遍唱へる。これを誦する間は、主僧はその右手を差出して、拇指の尖と中指の尖とをくつつけて、餘の指三本は伸ばして居なければならぬ。それから、前とは異つて居るが、同じく不思議な身振りをして、『開地獄門』の陀羅尼を唱へる。次にセカンロ文郎ち『甘露施與』の陀羅尼を繰り返す。此の經文の力によつて、お供への食物が、精靈共の爲めに、上天的甘露飲食に變ずるものと想像されて居るのである。そして、その後で、『五種如來』に招致祈願の語を三度唱へる。——

曩謨寶勝如來——除慳貪業福德圓滿！

曩謨妙色身如來——破醜陋形相好圓滿！

曩謨甘露王如來——灌法身心令受快樂！

曩謨廣博身如來——咽喉寬大受妙味！

曩謨離怖畏如來——恐怖悉除離餓鬼趣！

『梵行施餓鬼問辯』といふ書に、

『衆僧斯く五種如來の御名を唱へ了はれば、佛の威力によりて、一切の餓鬼は前生の罪業を脱し、無量の福德を享け、妙色廣博を得、一切の怖畏を免れ、美妙の甘露と變じたる供物を味ひ得、直に淨土に生るゝことを得べし』とある。

五種如來の招致祈願をしてから又別な法句を唱へる。そしてその吟誦中にお供物を一つづつ退げる。(祭壇から取り下ろしてからは、之を柳の木、桃の木、若しく柘榴の木の下へ置いてはならぬといふ神祕的な規則がある)最後に『退散指令』の陀羅尼を七たび唱へる。その時主僧は、勝手に歸つて宜いといふ精靈への合圖に、一度一度爪彈きをする。之をハッケン卽ち『撥遣』と呼んで居る。

三

句配の急な此處の海岸では海は遠くは退かぬ。尤も恐ろしく高上りして、町內へ溢れ込むことが屢ゝあつて、そのより穩かな氣分には信用が置けぬ。て、用心の爲め、位牌臺の脚は深く濱へ突きさしてあつたのである。事實は此の警戒の無駄でなかつたことを證明し

た。といふのは、僧侶達の遅刻の爲めに、潮が變はる頃にやつとのこと儀式が始つたからである。伽陀を合唱して居る頃にさへ、海は早暗澹として荒れ模樣を見せて來て、やがてのこと、——外の大海が應答をするかのやう——岸打つ大浪の雷音が、諷文者の聲と鏗鏘たる鐘の音とを突然摧しつぶした。直ぐと別な大浪が海岸に沿うてドドンと碎けた——と、また別なのがぶつかつた。それで陀羅尼を唱へて居る間は、法要は波の碎ける間々にだけきこえるので、碎けた波の白泡は傾斜面を一面に蔽うて、祭壇數歩のうちへ迄もサッと迫つて來るのであつた。……

自分は又しても死者と海との漠たる關係の舊い信仰を考へて居るのであつた。その暗闇には、その原始的な想像の方が、餓鬼界の存在を說く佛說——怖ろしい困苦の三十六階段があるといふ、飢渴に苦み火炎に悩む魔鬼の群集があるといふ——その凄い佛說よりも、遙かに道理に適つた且つ又人情に適したものに思はれた。……否、不憫な死者共！——何が故に彼等は人間の判斷によつて斯く醜陋なものとされ、そんな境涯に置かれるのであるか。死者は水や風や雲に混じつて居るのであると夢み——或は花の心に生命を與へて居るのであると思ひ——或は果物の類の色を染めて居るのであると考へ——或は寂しい森の中

て蟬と共に鳴き叫んで居るのであると懐ひ――或は夏の黄昏に蚊の群と共に幽かに唸つて居るのであると想ふ方が、この方が一層賢い又親切な考へ方である。……自分は飢渇に苦む靈魂が在ることを信じない――いや、信ずることを欲せぬ。……靈魂は、死が手を觸れる刹那に、碎けて靈魂の微塵となつてしまふものと自分は思つて居る。尤もその微分子は、疑も無く、其後他の微塵と結合して他の靈魂と成りはするであらう。……でも自分は、此世から消え去つた物のより粗雜な物質すらも、それがどんなに分解し或は飛散しても、或は强風に疾走し、或は雲霧に漂蕩し、或は木の葉に震慄し、或は海の光に明滅し、或はチャラチャラ響く砂利に漂白し悶えもがいて雷なす大浪に何處かの荒涼たる海岸で翻弄されて居るのであつて――全然死滅してしまふものとは思ひ込むことは自分にはどうしても出來ないのである。……

儀式が濟むと、或る一人の漁夫が輕々と日覆の柱のうちの一本の頂上へ登つた。そして其處で輕業師のやうに旨く身體の釣合を取つて、群集に向つて澤山の頗る小さな餅を雨と投げ出した。それを子供等は笑ひ聲高く立てながら奪ひ合つた。あの儀式のあんな氣味のわるい嚴肅の後でのことだから、この突然の歡喜の大聲は殆どびつくりする程であつた。

だが自分は之をも極めて自然な、愉快な、また人情に適つたことだと思つた。そんなことを考へて居る間に、かの七人の僧は紅紫の色うつくしい行列をして去り、——小僧共は、その後から、臺や床几や鐘の重さに大儀さうに足をひきずつて行つた。直ぐと群集は——餅は分配されてそれぞれ懐のものとなつたから——散つてしまつた。——それから、祭壇、日覆、莚、いづれも取り去られた。——そして驚く許りの短時間に、此の不思議な儀式のあらゆる痕跡が消えてしまつたのであつた。……自分はあたりを見廻はした。——濱に居る者は自分一人であつた。……歸つて來る潮の音のほかには——平和で居たのを、覺まされて無限の苦痛を覺ゆる、名のつけやうのない或る『生き物』が發するやうな、偉大なぞつとするやうな、唸り聲のほかには——何の音もきこえなかつた。

飈風が襲ひつつあつた。そこで自分は岸打つ大波を見んと大風に防波壁の上に坐つて居た。そして老人の天野甚助が自分の横に坐つて居た。東南は一面に何處も黑味を帶びた青の薄暗がりて、唯だ海だけは一種朽葉色の妙な色をして居た。巨大な濤が既に山と高まつて推し寄せつつあつた、百碼離れたところでそれが雷と地震とのやうな音を立てて崩れ碎け、その飛沫を傾斜面一面に布と展べ散らせて、二人の顏を濡らす。どどんと長く打ち碎ける度每に、ヂャヂャヂャヂャと引いて行く砂利の音は正しく全速力で走つて居る列車の音のやうであつた。自分は怖ろしくなる、と甚助に言つた。すると甚助はにこりと笑つた。

斯う言ふのであつた。「これよりか非道い海て、私は二日二た晚の間泳ぎました。私はその時十九てありました。八人の乘組の中て、助かつたものは私だけてありました。

「私共の船は福壽丸といふ名の船てありまして――此町の前田甚五郎が有つて居りまし

た。乗組は、一人除けて、皆んな燒津の者でありました。船長は齋藤吉右衛門といつて、六十を越えた男でありました。城の腰に住んで居りました、——丁度此處の後の街路であります。も一人老人が乗つて居ました。仁藤正七といつて、これは新屋村に住んで居りました。それから、四十二になる寺尾勘吉が居ました。その弟の巳之助、これは十六の子供でありましたが、これも一緒に居ました。此の寺尾二人は新屋に住んで居たのであります。それから齋藤平吉が居ました、三十になる。それから松四郎といふ男が居りました、——これは周防の男でありましたが、燒津に住み着いて居たのであります。乗組の今一人に鷲野乙吉が居ました。これは城の腰に住まつて居りまして、やつと二十一でありました。私は船の中で一番の年若でありました、——寺尾巳之助を除けては。

「萬延元年——申の歳でありました——その七月の十日の朝燒津から船を乗り出しました——讃岐へ向けて。十一日の夜紀州沖で、東南からの颱風に襲はれました。眞夜中少し前に船は顚覆しました。ひつくらかへると思つた時、私は船板を一枚とりあげて、それを投げ出して海へ飛び込みました。その折は怖ろしい強い風で、夜は眞つ暗で、やつと二三尺先きが見える計りでありましたが、仕合せにもその板が見つかりまして、それを身體の下へ置きました。と、直ぐに船は沈んでしまひました。私の近くに、海に、鷲野乙吉と、

寺尾兄弟と、それから松四郎といふ男が居ました、――皆んな泳いて、他の者の居る樣子は見えませんてした。多分船と一緒に沈んだのてありませう。私共五人は大波と一緒に浮き沈みしながら互に呼び合つて居りました。見ると誰れも板か何かの材木を有つてゐますのに、寺尾勘吉だけ有つて居りません。そこて私は勘吉に「あにき、お前にや子供がある。おりやまだ若い。この板をお前に上げよう」と呼ばはりますと、勘吉は大聲て「此海ぢや板はあぶない――材木を離れて居れ、甚よ――怪我するかも知れんぞ」と言ひ返しました。それに返事も出來ぬうちに、黒山のやうな浪がおつかぶさりました。私は長いこと下に居りましたが、また水の上へ出て來た時には、勘吉の姿は見えませんてした。年下の者はまだ泳いて居ました。が私の左手の方にさらはれて行つて居りました。――姿は見えません。互に聲高に呼び合つて居りました。私は浪に隨いて浮いて居るやうにしました。他の者は私を呼びます――「甚よ！甚よ！――こつちへ來い――こつちへ來い！」然し私はそつちの方へ行くのは非常にあぶないことが分かつて居りました。浪が横から私を打つたんびに下へ沈められましたから。そこて私は呼び返しました――「潮に隨いて居れ！――流れについて浮いて居れ！」と。が皆んなには解らないやうてありました。――相變はらず「こつちへ來い！こつちへ來い」――と言ひます。そしてその聲が一度一度段々遠くからきこえて

來ました。私は返事するのが恐はくなりました。……水で死んだ者は、伴侶が欲しいと、そんな風に「こつちへ來い！こつちへ來い！」と呼ぶのでありますから。……

『暫くすると其の呼び聲が止みました。聞こえるものは海と風と雨とだけであります。非常に暗くつて、浪だけ、それもその退く時だけ、——高い黒い影のやうに見えて——それがまた一度一度非常に强く身體を下へ引くのでありました。その引つぱり方で私はどつちへ向いて行つて宜いか察しました。雨の爲めに浪が大して碎けません。雨が降らずに居たなら、どんな者だつてそんな海では長いこと生きて居ることは出來ませんでしたらう。一刻一刻と風は非道くなつて、浪は段々高くなりました。——そこで私は其晩夜通し小川の地藏樣にお助けを祈りました。……明かりと仰しやるのですか？——え〻、水に明かりはありましたが、餘計はありません。大きいのです、蠟燭のやうに光る。……

『夜明けに、見ると海は非道い色で——濁つた綠色をして居ました。浪は小山のやうでありました。そして風は恐ろしい强さでした。雨と飛沫とで水の上に霧が出來て居て、地平線は見えません。然し見える處に陸があつても、浮いて居ようとするよりほかに、何も出來なかつたでせう。腹が空きました、——非常に空きました。その空腹の苦さが直ぐと堪へられぬ程非道くなりました。その日一日私は、風と雨の下に漂つて、大波と一緒に浮

かんだり沈んだりしました。でも陸は影形も見えません。何處へ行きをるのか分かりませんでした。そんな空では西も東も判かりやしません。

『暗くなつてから風は凪ぎました。が、雨は相變はらず土砂降りて、眞つ黒です。空腹の苦さは通つてしまひました。が、弱つてしまひました――沈むに相違無いと思つた程弱りました。すると私を呼ぶ聲が聞こえました――丁度前の晩に私を呼んだと同じやうに――「こつちへ來い!――こつちへ來い!」と。……すると突然に、福壽丸の者が四人見えました――泳いで居るのではありません、私の横に立つて居るのであります、――寺尾勘吉と、寺尾巳之助と、鷲野乙吉と、それから松四郎といふ男と。皆んな私を怒つた顏して見て居るのであります。そして巳之助といふ男の子が、叱るやうに、大聲で「此處へ私は舵を取りつけねばならぬ。お前、甚之助、お前は何もせずに眠つてばかり居る」といふのであります。すると寺尾勘吉が――これは私が板をやらうと言つた男でありますが――それが或る掛物を兩手に持つて私の上へ身體を屈めて、それを半分展げて「甚よ。此處に私は阿彌陀樣の繪圖を有つて居る。見い。さあ本當にお前は念佛を唱へねばならぬぞ!」と言ひました。口のきき方が奇妙でありました、――恐ろしいと思はせるやうな。私は佛樣のお姿を見て、恐はごは念佛を唱へました、――南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と。と同時

に痛みが、火傷の痛みのやうな痛みが、私の股と腰とを刺しました。見ると私は板から轉び出て海の中へ落ちて居りました。その痛みはカツヲノヱボシがさせたのでありました。……一度もカツヲノヱボシを御覧になつたことが無いのでありますか。ヱボシ、神主さんが冠る、あの恰好した水母であります。カツヲ（鰹）がそれを食ふから、カツヲノヱボシと私共は言つて居ります。そいつが何處かへ出て來ると、漁夫は鰹が澤山に捕れるだと思ひます。體軀（からだ）は硝子のやうに透いて居りますが、下の處に紫色の緣飾のやうなものと、長い紫色の紐があります。こいつが身體へ觸はると、その痛さは非道いもので、長い間とれません。……その痛さでよみがへりました。若しそれに刺されなかつたら、私は二度と眼を覺まさなかつたかも知れません。私は又板の上へ乘りました、そして小川の地藏様と金比羅様とへお祈りしました。それで朝まで目をさまして居ることが出來ました。

『夜明け前に雨が歇んで、空が霽れ始めました。星が少し見えましたから。東雲に又睡くなりました。が、頭を打たれて眼が覺めました。大きな海鳥が私を突つついたのであります。日は雲の後ろに昇つて居りました。浪は早靜かになつて居りました。やがてのこと、小さな鳶色の鳥が私の顔の横を飛びました、――海岸に居る鳥であります（その本當の名は私は知りません）そこで、陸が見えるに相違無いと思ひました。後ろを見ましたら山が

見えました。その恰好が何處の山とも私には判かりません。靑いから――八九里は離れて居るやうに思はれました。私はそれを當てに泳がうと決心しました――岸まで行ける見込みはありませんてしたけれども。又ひもじくなりました――恐ろしくひもじく！

「私は何時間も何時間もその山目當てに泳ぎました。又も眠つてしまひました。が、今度も海鳥が私を突つつきました。一日泳ぎました。夕暮近く、山の樣子から、山に近寄つて來よる事が判かりました。が、岸まで行くには二日かかると思ひました。とても駄目だと殆ど諦めようとして居る時に、不圖船が見えました――大きな帆船であります。私の方指して走つて居るのでありましたが、もつと早く泳ぐことが出來なければ、間はるか離れて、行き過ぎてしまふだらうと思ひました。これを外づしては助かる見込みはもうありません。そこで板は棄ててしまつて、出來るだけ早く泳ぎました。船から二丁許りの處へ行けました。それから大聲出して呼ばはりました。だが甲板には人つ子一人見えません。何とも返事がありません。と思ふ間に私の前を通つて行つてしまひました。日は暮れかかつて居ますし、私は絶望しました。すると突然男が一人甲板へ出て來て、私に「泳がうとするな！からだを疲らすな！――小舟を出してやるぞ」と大聲で言ふのであります。見ると、同時に船の帆を下ろしました。嬉しかつたものでありますから、身體に元氣がまた出て來

たやうてありました、――一所懸命に泳いで行きました。するとその帆船は小船を下ろしました。そして、その小舟が私の方へ來る時に、一人の男が「ほかに誰れも居ないか――お前何か落としたものは無いか」と大聲でききます。私は「板一枚きりで何も無かった」と返事しました。……と一緒に私はぐつたりしてしまひました。その小舟の人達が曳きずり上げるのは判かつて居ましたが、口をきくことも身動きすることも出來ませんで、あたりが眞つ暗になつてしまひました。

「一つ時經つとまたあの聲がきこえました――福壽丸の者どもの聲が。――「甚よ！甚よ！」と。私はぞつとしました。すると誰れかが私の身體をゆすぶつて「おい！おい！そりや夢だよ」と言ひます。見ると私はその帆船の中で、吊り提燈の下で（夜でありましたから）寢て居りました。――そして私の横に、見も知らぬ老人が一人、膝ついて、手に飯茶碗を持つて居ます。「少し食つて見なさい」と大變親切に言ひました。私は起きて坐らうと思ひましたが起きられません。そこでその男は自分で、茶碗から、養つて呉れました。茶碗が空になつた時に、もつと欲しいと言ひました。が、その老人は「今はいけません。――先づ眠（ね）なければいけません」と返事しました。ほかの誰れかに「私が言ふまで、もう

何もやつてはならぬぞ。餘計食はせると、死ぬるから」といふ聲がきこえました。私はまた眠りました、そしてその夜もう二度飯を貰ひました――軟らかく炊いた飯を――一度に小さな茶椀に一パイ。

『翌けの朝私はよほど丈夫な氣持ちになりました。そして飯を持つて來て呉れたその老人が來て私に訊ねました。船の沈沒の話を聞き、私が海の中に居た時間のことを聞いて、非常に私を憫れんで呉れました。その二日二た晩の間に、二十五里以上漂つて居たのだとその男は話しました。「お前さんが棄てた板を探しに行つて拾ひ上げました。乾度お前さんはいつかそれを金比羅樣へ奉納したいのでせう」といふのであります。私は御禮を言ひましたが、燒津の地藏樣の寺へ奉納したいと返事しました。それは私が一番お助けを祈念したのは小川の地藏樣でありましたから。

『その親切な老人はその帆船の船長で、そしてまたその持主でありました。播州の船でありまして、紀州のクキ港指して行きをるのでありました。……クキのキは、オニといふ字で、――クキは九つの鬼といふ意味であります。……船の男に皆親切でありました。私はその船へ上がつた時は、褌一つ締めて居るだけで、眞つ裸であります、そこで皆が私に着るものを呉れました。一人の男が下衣を呉れる、もう一人の男が上衣を呉れる、又一人

の男が帶を呉れました。幾人かが手拭や草履を呉れました。——それからみんなが寄り合つて、六七兩に上るほどの惠み金を私にこしらへて呉れました。

『九鬼へ着きますと——綺麗な小さな處であります、名前は變でありますが——船長は私を上等の旅籠屋へ連れて行きました。そこで二三日休息しますと私は元の通り丈夫になりました。するとその村の長が、その當時の名で言ふと地頭でありますが、それが私を呼びによこして、私の身の上を聞いて、これを書き付けさせました。事の報告書を燒津村の地頭へ送つてやらなければならぬ、それから後で國へ送り還す途を考へよう、と私に言ふのであります。處がその播州の船長は、私の生命を助けたその船長は、自分の船で送り屆けたい、それから又地頭への使者の役目を引き受けたい、と申し出ました。で、二人の間に大分論判がありました。當時は電信もありませんし、郵便もありません。わざわざ使ひの者（ヒキヤク）を、九鬼から燒津へ送るには、少くて五十兩はかかりましたらう。ところが一方にまた、そんな事に特別な法律や慣習が——今頃の法律とは餘程異つた法律があつたものであります。そのうち燒津の船が一艘近くの荒坂へ入つて來ました。そして九鬼の女で、折よく荒坂に居た者が、私が九鬼に居るといふことを燒津の船長に話したのであります。それから燒津の船が九鬼へ來ました。そこで地頭は燒津の船長に託して、——命

令の書面をそれに渡して――私を送り還すことに決心しました。

『全體て、私が燒津へ歸つた時は福壽丸が沈沒してから、一箇月ばかり經つて居りました。港へは夜着きました。直ぐとは家へ歸りませんでした。家の者が恐ろしがつたでありませうから。尤も私共の船が沈沒したといふ確かとした消息は燒津に屆いては居りませんでしたが、船に隨いて居た物を澤山漁船が拾ひ上げて居りました。それにその颶風は非常に突然に來て、海は非道い荒てありましたから、福壽丸は沈沒したのだ、乘つて居た者は皆んな死んだのだ、と皆んな信じて居たのであります。……他の者は誰れ一人その後たよりがありませんでした。……私は其晩或る友達の家へ行きました。そして翌けの朝双親と兄弟とへ言傳をしました。すると皆んな迎へに來て呉れました。……

『毎年一度私は讃岐の金比羅樣へ參詣します。難船に助かつた者は皆んな御禮に參詣します。それから小川の地藏樣のお寺へは每度參詣します。明日私と一緒にお出になれば、その板をお見せ致しませう』

乙吉の達磨

一

子供等の喜んだのは、昨夜ひどく雪が降つたので、日本の詩人の所謂『銀世界』が私共のためにできたからであつた。……實際これ等の詩人の冬を面白く讃めるところに誇張はない、卽ち日本では冬は美しい、——空想的に美しいからである。冬は『自然の死』について陰氣な想像を起す事はない、——自然は大寒の時にも、最も明らかに生きて居るからである、冬は『骸骨の森』の光景を呈して、審美の眼を惱ます事はない、——卽ち森は多く常磐木であるからである。それから雪は、——松の葉に柔かに積つたり、或は竹に暫らくその重さのためにしなやかに撓んだ姿を表はさせたりして、——決して極東の詩人に、屍衣の物凄い想像を暗示する事はない。全く日本の冬の特別の魅力は、——森と庭園の變らない綠色の上に、想像のできない奇怪な形に積る、——この雪でできる。

今朝私の二人の書生、光と新美はなぐさみに雪達磨を造つて子供等を喜ばせてゐた、私もそれを見て面白かつた。雪達磨を造る規則は古い簡單な物である。先づ大きな雪の球、――なるべくは、直徑三尺から四尺の、――を造る、――それが達磨の坐つた體になる。それから、直徑二尺ばかりの少し小さい雪球を造る、それが頭になる、そしてこの小さい方を今一つの上にのせる、――兩方とも落着くやうに、下の方の廻りへ一面に雪をつめ込む。二つのたどんが達磨の眼になる、それから同じ材料のいくつかの不規則な破片で鼻や口を造るに充分である。最後に、その大きな腹に穴をあけて、臍を表はす、そしてその中に蠟燭をともして入れて置く。蠟燭の熱が次第にこの穴を大きくする。……

しかし私は雪達磨と云ふ言葉を說明する事を忘れてゐた。『達磨』は――梵語の『ボドヒドハルマ』の日本譯――菩提達磨の略語である。

達磨は大迦葉から續いた佛教の第二十八代の祖師であつた。梁の朝の第一年〔西暦五二〇年〕佛教の宣教師として支那へ行つた、それから支那であの禪の宗門を開いた、――この宗門の敎は『以心傳心』の敎と云はれて居る、即ち書いたり、話したりする言葉によら

ないて傳へられるのである。南條文雄博士は、その『佛教の十二宗の歷史』に云つて居る、



I. YUKI-DARUMA II.

――『大乘小乘の凡ての教の外に、如何なる言語にもよらないで續いて來た一條の明らかな祕密の教がある。この教によれば、人は自分の心によつて直ちに佛心、或は佛性に達する所謂鍵を見なければならない』

禪の教の傳說は不思議である。佛が靈鷲山て說教をして居る頃、その前に突然大梵天王が現れて佛に黃金色の花を捧げて、同時に法を說く事を願つた。佛はその聖い花を受けて、それを手にしたが、一言も語らなかつた。そこで大衆は佛の沈默を不思議に思つた。獨り尊い迦葉のみ破顏微笑した。そこで佛は尊い迦葉に云つた、――『吾に正法眼藏涅槃妙心あり、今汝に附與す』…

…そこてただ心だけて、その教は迦葉に傳はつた、それから心だけて迦葉は阿難陀に傳へた、それからあと、心だけて祖師から祖師へと傳はつて達磨に及んだ、達磨はその相續者てある第二の支那のその宗門の祖師に傳へた。達磨は日本にも來たと云ふ人がある、しかしこれは殆んど根據がないやうてある。とにかく禪宗は第八世紀前には、日本に來なかつた。

達磨に關する多くの傳說のうちて、最も名高いのは、九年間引續き默想してゐたので、足が脫落したと云ふ話てある。そのために達磨の形は足のないやうに造られる。

たしかに達磨は尊敬の資格を多く有する。しかし極東の美術家やおもちや屋は、彼等が滑稽感に耽る時に、この尊敬の資格が干涉して來る事を許さなかつた、――疑もなく、この滑稽感は足がないと云ふ話からもとは起つたのであつた。數百年間、この達磨の傳統的不幸はをかしい繪やをかしい彫刻の主題となつて居る、そして代々の日本の子供は、達磨のおもちやをもつて面白がつて來た、そのおもちやはどんなに投げ出されてもいつも坐るやうに再び起き上るやうに工夫してある。今も一般のおもちやてあるこの「起き上り小法師」は、もとは同じ道理てできた「不倒翁」と云ふ支那のおもちやから造られた、或は改造されたのてあらう。十四世紀に作られたと知られて居る「饅頭食」と云ふ日本の狂言に、

『起き上り小法師』の事が記して居る。しかしこのおもちやの昔の形は達磨を表はした物とは思はれない。しかし十七世紀からの子供の歌があつて、それは達磨のおもちやは二百年以上も一般に知られて居る事を證明して居る、——

一に二に
ふんだん達磨が
ひるも夜も
赤い頭巾かぶりすんまいた

この小さい歌から、おもちやの形が十七世紀以來餘り變つてゐない事が分るやうだ、達磨はやはり頭巾を冠つて、——一面に、顔だけ除いて——やはり赤く塗つてある。すでに述べた雪達磨と、おもちやの達磨（大概は張子でできて居る）の外に、無數のをかしい色々の達磨がある、殆んど凡ての種類の材料で、型に造られたり、彫刻になつたりして居る、それから大きさも、袋物の金具になる五分程の長さの金屬の達磨から、日本の煙草屋が、店の看板に使ふ二三尺もある大きな木製の達磨まである。……このやうに、面壁九年の聖い傳說を、民間藝術が、不都合にも、嘲つて居る。

二

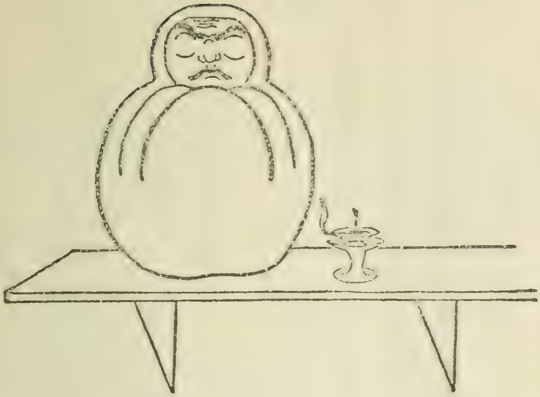
私の庭の雪達磨は、何年か前に、私が東海岸の或漁村て、楽しい一夏を送つた時に發見した甚だ妙な達磨の事を私に想ひ出させる。そこには宿屋がなかつた、しかし或魚屋の主人の乙吉と云ふ男が、私に二階を貸して、不思議な程色々に料理した魚の御馳走をしてくれた。

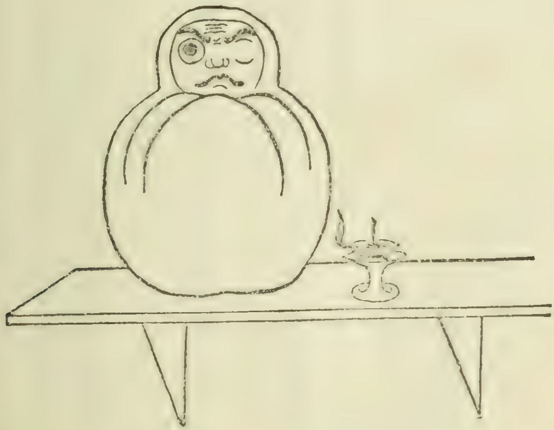
或朝、乙吉は私を店に呼んで大層見事な魴鮄を見せた。……讀者は何か魴鮄に類した物を見た事があるだらうか。それは餘り大きな蝶か蛾に似て居るので、よくよく見なければ、それは魚、——なかがしらの一種の魚て、蟲てはない事が本當には分らない。翼のやうに對になつて並んで居る四つの鰭がある、——上の一對は黑くて、それに空色の鮮かな斑點がある、下の一對は濃紅てある。それから又、蝶のやうに脚があるやうだ、——その細い脚て、早く走り廻る。……

『喰べられますか』私は尋ねた。

『へい』乙吉は答へた、——『これを御馳走にさし上げます』

「どんな質問を受けても、——否定の答を要する質問にても、——乙吉は「へい」と云ふ感歎詞を以てその答を始める、——それが同情と好意の調子を以て云はれるので、聞く





者に直ちに凡て人の世の辛酸を忘れさせる程である」

それから私は店へ歸つて、うろうろしながら色々の物を眺めた。一方には棚が何段もあつて、干物の箱、食用の海藻の包み、草鞋草履の束、酒徳利、ラムネの壜などのせてある。その反對の側のずつと上に、神棚があつた、その神棚の下に、達磨の赤い像のある少し小さい棚のある事に氣がついた。たしかにその像はおもちやではなかつた、その前に供物もあつた。私は達磨が家の神となつて居るのを見ても驚かなかつた、――私は日本の各地で、疱瘡にかかつて居る子供のために、達磨に祈る事を知つてゐたからであつた。しかし、私は乙吉の達磨の特別の樣子に餘程驚いた、それは眼が一つしかなかつたからである、――大きな恐ろしい眼で、その店の薄暗がりの中で、大きな梟の眼のやうに、にらんで居るやうであつた。それは右の眼であつた、そして光澤のある紙で造つてあつた。左の眼の窩は白い空洞であつた。

それて私は乙吉に呼びかけた、――

『乙吉さん、――子供等は達磨樣の左の眼をたたき潰したのですか』

『へい、へい』乙吉は眞魚板へ上等の鰹を取り上げながら、氣の毒相に笑を含んだ「初めから、左の眼はございません」

『こんな風に造つてあつたのですか』私は尋ねた。

『へい』乙吉は答へた――その時、彼の長い庖丁は、銀白の魚の胴を音もさせないで、すーつと通りぬけた、――『こちらでは、盲目の達磨しか造りません。私もあの達磨を買ひました時には、眼はありませんでした。昨年大漁のあとで、――右の眼を造つて上げました』

『しかし、何故兩方の眼を造つてあげなかつたのかね』私は尋ねた、――『たつた一つぢや氣の毒のやうだ』

『へい、へい』手際よく桃色と銀色の肉の一枚一枚をガラスの簾にならべながら、乙吉は答へた、『大層運のよい日が又ございましたら、その時左の眼を入れて上げます』

それから私は村の通りを歩いて、人の家や店をのぞき廻つた、そして私は進歩發達の色々の階段にある外の色々の達磨を發見した、――眼のないのもあり、一つしかないのもあり、二つあるのもあつた。出雲では實際恩惠を施して、その代り御禮を受ける事になつて居るのは布袋、――大きな腹の安樂の神、――である事を私は想ひ出した。禮拜者の方で感謝すべき理由があると思ふとすぐに、布袋の安樂にもたれた像は柔らかな座蒲團の上に置かれる、そして授かる恩惠の加はる毎に、神は一つづつの座蒲團を與へられるのである。

しかし達磨には二つ以上の眼が與へられない事を私は思ひついた、三つては三目小僧と云ふ一種のお化けになる。……達磨に二つの眼と色々の小さな供物が供へられると、その達磨は又眼のない後繼者に席を讓るために片づけられる事が尋ねて見て分つた。眼無し達磨は、眼が欲しさに稼がねばならないから、不思議な事をしてくれると期待されて居る。

日本にはこんな面白い小さい神が澤山ある、——餘り澤山だからそれを說明するには甚だ大きな書物が必要にならう、そして私はこんな不思議な小さい神々を禮拜する程の人々は大概は感心すべき程正直である事をこれまで發見して居る。實際私自身の經驗では、神が質朴な神である程、人は益々正直であると云ふ信仰をいつも殆ど正しいとするのである、——しかし私は讀者に輕卒な歸納をして貰ふ事を欲しない。たとへば正直の最上點は、神の滑稽點に始まるやうだなどと云ふつもりはない。ただこれだけは敢て云ひたい、卽ち甚だ小さい神、おもちやの神を信仰する事は、質朴なる心の人のする事である、心の質朴なる事はこの險惡なる世界に於て、純粹の善に最も接近して居る。

私がこの村を去る前晩に、乙吉は二ヶ月分の御馳走代の勘定書をもつて來た、そしてそ

の勘定は途方もなく安い事が分つた。勿論日本の親切な習慣に随つて、茶代は期待されてゐた、しかしその事實を考慮のうちに入れて見ても、その勘定書は馬鹿馬鹿しく正直な物であつた。私は色々の事を有難く思つて居る心もちを表はすために、私のすべき最少限度は、要求額を倍にする事であつた、そして乙吉の満足は全く自然で、又同時に相應にしかつべらしかつたから、それは美しい見ものであつた。



私は早い急行列車に乘るために翌朝三時半に起きて着物を着換へた、しかしその夢の時刻にも、暖い朝食が階下で私を待つてゐて、乙吉の小さい色の黒い娘が給仕の用意をして居るのを見た。……私が熱い茶の最後の一杯を飲んだ時に、私の眼は思はず神棚の方へ動いた、そこに小さい燈明が未だ燃えてゐた。その時私は達磨の前にも燈明の燃えて居る事に氣がついた、殆ど同時に達磨が私の方を眞直に見て居る事を認めた——二つの眼で。……

譯者註。畫では消逝點、或は合點とも云ふ。並行の二線を正面より見れば、最後は一點となつて消える、それが合點である。信ずる神が段々簡單になつて殆んど神でないやうなのを信ずる人間が一番正直だと歸納されては困ると云ふ意味。

日本の病院に於て

一

……その晩の最終の患者が、——未だ四つにはならない男の兒が、——看護婦や外科醫達に微笑とやさしいちやほやで迎へられたのだが、それには彼は少しも應じない。……彼は恐れ、且つ、怒つて居る——殊に怒つて居る——今夜こんな病院に來たので。誰か無分別な人が、芝居に連れて行くのだと云つて聞かせた、——彼は途中、嬉しさの餘り、腹の痛みも忘れて歌を歌つた、——ところでここは芝居ではない。ここには醫者が居る——人に痛い事をする醫者が居る。……彼はびくびくしないで、裸にされて、診察を受けた、しかし電燈の下の、何だか低い臺の上で、横にならねばならないと云はれ時に、彼は甚だ烈しく『いや——』と叫ぶ。……彼の祖先から遺傳した經驗は、敵らしい者の面前に横になる事は宜しくない事を彼に教へて居る、それから同じ遺傳の智慧によつて、その外科醫の

微笑は欺く目的である事を判じた。……『この臺の上はようございますよ』――すかすやうに若い看護婦は云ふ、――『綺麗な赤いきれを御覧なさい』『いや――』とこの小さい人はくりかへす――こんな風に美的情操に訴へられたのでただ益々警戒するやうになつたのである。……そこで彼等は――外科醫が二人、看護婦が二人、――手をかけて、巧みに彼を抱き上げて、――赤いきれのかかつて居る臺のところへもつて行く。そこで彼は彼の小さい戰の叫びをあげる、――彼に戰士の祖先の血が流れて居る、――そして腕に怪我をして居るにも拘らず、最も勇敢に戰つて、一同を驚かせる。しかし、見よ、一枚の白いぬれたきれが、彼の眼と口にかかる、――彼は叫ぶ事ができない、――それから鼻腔のあたりには妙に氣もちのよい香がする、――そして人の聲や電燈の光は遠く・ずつと遠くへ浮んで行つた、――そして彼は沈んで、沈んで、波のやうな暗がりへ沈んで行く。……小さな手足は力がなくなる、――この痲藥の力に反對しようと胸が戰ふために、しばらく胸が速く上る、それから一切の運動が止まる。……そこできれが除かれる、顏は再び現れる――――怒りと苦痛はそこから悉く消えて居る。そのやうに、死人の眠りを見守つて居る小さい佛達が微笑して居る。……手早く折れた骨の兩端はことごと合された、――繃帯と脱脂綿とギブス、それから又繃帯は熟練な手によつて速かに施された、――顏や小さい手は海綿

て洗はれた。それから未だ知覺のない患者は毛布に包まれて、そこから連れ出された。……入場から退場までの間、十二分半。

始めて見られた物としては一つも平凡な物はない、そしてその出來事の眞に苦痛のない詳細事――その叫びの壓抑、意志の突然の痲痺、それからあとその小さい顔の蒼白なる靜穏――に陰晴な風に想像を動かすやうに、悲劇らしく見えた。……毒叉の一撃は、沈默と微笑の眠りとの全く同じ結果を生じたであらう。過去の數へきれぬ時代に於て、數へきれぬ程度々それと同じ事が行はれたに相違ない、――數へきれぬ程度々、激情に驅られた人が、倒れた人の突然の激情の去つたあとの美を見て、その行爲の永久の結果を認めたに相違ない。……『天の盡るまで目覺めず、睡眠をさまさざるなり』『天の盡るまで』――しかしそのあとは。その以後は――或は。しかし決して同一ではない。……

しかし私はその個性、自我の不意の停止によつて感動よりはむしろ驚愕した、――それによつて現れた神秘のためである。一瞬時に、――或藥品の吸入のために、――聲、運動、意志、思想、凡ての快樂苦痛及び記憶が存在しなくなる。蕾のやうな感覺の全生命、――無數の年代からの或は貴い遺傳を有せる小さい頭腦のかよわい機關、――は正しく死に觸

れられたやうに、窒息して止まつたのである。そしてそこに殘つた物は、どう見ても、ただの形、見せかけの物、――偶像のかすかな無意識の微笑をもつた彫塑的肉體の人形である。……

路傍、或は墓石の上に夢みる小さい石佛の顔は、日本の子供の柔かな魅力を有して居る。それは眠つた子供の顏に似て居る、――そして讀者は、日本の子供の寢顔を見て、清淨な容貌の不思議な美、――眼蓋と唇の線の朧ろにやさしいところ、――を理解したに相違ない。佛師の技術に於て、その神々しい平和な容貌は、眠れる子供を美しくして居るその影のやうな微笑から暗示されたのである。

二

偶像の記憶は、當然偶像がただ象徴するその力を想ひ出させた、そしてやがて私は、神の眼から見れば、人間の一生の全行路は、私が今日目撃した事件と餘程似て居るやうに考へた、――來る、叫ぶ、もがく、それから死の痲藥のために急に人性が消える。(私は宇宙

大の神靈について云つて居るのではない、その神靈から見れば、太陽の燃え出して消滅するまでの間は、夜の螢の光ほど程短かく見えるだらう、私はただ擬人の神を意味するのである）ハーバート・スペンサーに隨へば、小さい蚊の意識は、一秒の一萬分の一から一萬五千分の一までの間の時間を識別する事ができる、蚊と人間の割合程、人間よりも精神的に優れた生類に取つては、一時代もただ一瞬時に見えないだらうか。こんな生類に取つては、人類の存在は、發芽と凋落、――速かにしてたえざる出現と消滅の連續、――冷却して行く行星の表面に固有なる醱酵の單なる現象、――としての外は、苟くも認められる事があるだらうか。勿論、私共が顯微鏡の下で醱酵を研究するやうに、この優れた生類が多少その現象を詳細に研究するとすれば、小兒の笑が直ちに髑髏の笑と變るとは見ないだらう、――しかし、私は想像するに、最初の薔薇色の筋肉の微笑と、最後の骨の不景氣な笑との間に、心理學的にどんな事が起るとしても、それは私共に取つて一秒間に蚊の翼が一萬回もしくは一萬五千回振動するのが識別できないと同じやうに、その優れた生類に取つて識別できないだらう。宇宙の神、或はただ一つの世界の神でも、私共が小さい一滴の腐敗した水の中に動いて居る生命に同情する以上に、私共の情緒に同情ができるかどうかを私は疑ふ。……

しかし、再び土に朽ちて歸る前に、たゞ一瞬時明るいところで泣いて笑ふために、土から出て來るやうに思はれるこの人間は、神の眼から見て何であらう。一億年の間に、何か形のない一點の原始的粘泥から進化して來た形である。しかし、こんな風に進化して來た事を知つてゐても、少しも人生の秘密その物、――その數百萬世紀の間、破壞に反抗して戰つた意識の秘密、――死滅に抵抗しようとして、愈々益々驚くべき複雜なる本質、愈々益々さらに驚くべき複雜なる心意を工夫して造り上げ、――そしてたうとう、最初の一瞬時の期限から、百年の人間の生命が可能になるまで、その生命の期間を延ばす事ができた――その秘密を說明してゐない。意識は謎のうちの謎である。思想は感覺の複合であると說明されて居る。しかし知覺し得べき最も簡單なる感覺も、それ自身複合の複合或は結果である、――或は融合のおどろき、――混淆のひらめきである、――そして生命の神秘は依然として謎のうちの最も不可解な、最も恐ろしい、最も凄まじい物である。

その神秘の恐怖から、私共の祖先はつぎのやうな恐ろしい命令を發して、彼等の世界を救はうとした、――『劍と火の苦痛を受けぬやう、――永久の死の危險を冒かさぬやう、

——汝は考ふる事勿れ』

しかし東洋のもつと古い智慧は宣言した、

『下界の子よ、汝に生を與へし潮について考ふる事を恐るる事勿れ。當が生れ出でて汝が再び融けて歸るべき渾沌を見て、汝は汝の實在は無窮にして久永に一なる事を知れ。

……』

【譯者註　約百記十四章十二節】

あとがき

『靈の日本』"In Ghostly Japan" 中の『香』は譯者が明治三十一年二月に提供した材料に依つて物されたものである。譯者はまた材料を主として『群書類從』の遊戯部に收めてある諸書と社會事彙のカウとから得た。

『佛足石』は譯者が同年九月に提供した材料に依つて物されたものである。佛語の英譯に就いては譯者は今の東洋大學教授島地大等氏の教示を仰いだ。挿繪のうち、傳通院の佛足跡は、譯者自ら鉛筆を用ひて石刷にしたのを縮寫したもの、『諸回向寶鑑』のは、透き寫しにしたものである。傳通院のの、側面に彫つてある經語と記念の文とは、譯文では原英文を逐字譯にせずに、原（もと）のものをそのまゝ掲げることにした。

『小さな詩』は譯者が同三十年三月に提供した一文に依つて物されたものである。原著者は、學生の、殊に大學生の、和歌俳句を多く見たがつてゐたのであつたが、現今とは違つて作者が至つて尠く、譯者は當時は少かつた高等學校の校友會雜誌總てを渉獵しまでしたが、充分の材料を提供することが出來なかつた。文中引用のもので、原歌原句の記憶を遺して居るのが多くあるのは遺憾である。その原作者を判知し得たのには、その雅號を附記して置いた。

『佛教に縁のある日本の諺』は、譯者が同年五月に提供したものである。藤井乙男氏の『諺語大辭典』（四十三年出版）が出てゐたなら、骨も無く蒐集し得たであらうが、完全に俚諺を蒐めた書物が無かつたので、譯者は東京上野との兩圖書館で、諺の載つて居る書物總てを渉獵して、やつとあれだけ蒐め得たのであつた。原書では、諺を羅馬字で掲げ、一々英譯してあるのであるが、その通りに逐字譯にしては日本の讀者には讀みづらからうと思つたので、その羅馬字を、假名で無く、普通の文字で書き改めるだけのことにした。然しその註釋は總て原英文を逐字譯にして置いた。

『横濱にて』は原著者の同地での見聞と冥想とから成つて居ることは言はずもである。

『影』"Shadowings" の中の『蟬』は譯者が明治三十二年六月に提供した文に依つて書かれたものである。註釋した方がよからうと思つたことは、譯文の終に添へて置いた。引用の俳句の原作者の名を悉く添記しようと思つたが、判知しかねるのがあるのは遺憾である。なほ本書の單行本には、この『蟬』に蟬の繪が五枚挿入されてゐて、その繪に就いての說明が文末に掲げられて居るが、本譯書にはその繪を省くことにしたので、說明も從つてまた省略したことを諒知せられたい。

『日本の女の名』（岡田氏譯）は同三十二年五月に譯者が提供した材料に依つて物され

たのである。譯者はまたその材料の主要な部分を、本全集譯者の一人たる、この一文の飜譯者たる岡田哲藏氏の『哲學雜誌』に發表された研究論文から得た。

『日本の古い歌』は譯者が同三十一年十月十二月及び三十二年三月四月に提供した材料に依つて物されたものである。譯者は神樂歌と催馬樂とは全部直譯して提供したのであつた。『地方の歌』は主として博文館發行の『日本歌謠類聚』から採つた。文の初に『一青年詩人』とあるは譯者である。原英文では、引用の歌は發音通り羅馬字で書いて、一々散文譯してあるのが多いが、そのまゝ逐字譯しては日本の讀者には煩しからうから、羅馬字のところだけ普通の文字に書き更めるだけにした。然し註釋は總て逐字譯にして置いた。なほ文末の『鐘卷踊歌』と『お吉清三くどき』とは、原文には散文譯だけ掲げてあるのであるが、これはそれを逐字譯とはせずに――殊にその後者の原歌を知つて居る者は多分譯者だけて、今後原歌を知らうにも知れまいから、――原歌を掲げることにした。

『日本雜録』“A Japanese Miscellany.” 中の『蜻蛉』は譯者が明治三十三年三月に提供した一文に依つて物されたものである。文中『或る日本詩人』とあるもの、『此の一文に引用して居る詩歌全體、並びになほ幾百首の詩歌を自分の爲めに蒐めた友人』とあるものは、共に譯者である。『五十二卷』と書いてあるのは大型裝では無い。或は譯者が見落した

かも知れぬが、類題秋草集、同石川歌集、同鏡池集、同桑の若葉、同採花集、同新英集、同近世和歌集、同月波集、同新竹集、同芳風集、同明治新和歌集、同和歌聯玉集、同鰒玉集、その他に、蜻蛉の歌は一首も載つてゐない。蜻蛉の俳句を多く集め得たのは（原著者が使用しなかつたのが非常に多い）故正岡子規がその『俳句分類』（未刊行）を譯者に貸與して呉れたお蔭であつた。引用句は、他の文のものと同樣に、羅馬字で示してある原句だけ普通の文字に書き更めて、その散文譯を復譯することをしなかつた。そして原英文には作者の名が擧げて無いが、讀者の爲めに、判知し得たものは添へて記して置いた。

『佛教に緣のある動植物の名』は譯者が同三十一年八月に提供したものである。譯者は原著者からその蒐集を依賴された時、實は一時途方に暮れたのであつたが、そんな名をただ漫然と思ひ出さうと力めるよりか、日本語總てを集めたものを蝨つぶしに調べる方が有效だと考へて、その七八兩月を費して、『言海』と山田美妙の『辭書』とを左右に置いて、最初の頁の『あ』から最後の頁の『をゝる』まで、一語一語見て行つて、苟も佛教に緣がありさうだと思つたもの總てを集錄して提供したのであつた。

『日本の子供の歌』は譯者が同三十年十一月と三十三年九月とに提供したものに依つて物されたものである。譯者は主として『日本歌謠類聚』に據つた。引用の歌は『日本の古

い歌』のと同樣に取扱つた。ただ、脚註は、日本の讀者には全然興味も利益もあるまいと思つた三四を除いて、逐字譯にして、『附記』としてその場所場所に添へて置いた。

『海のほとりにて』は原著者が燒津で觀察したものを筆にしたものである。施餓鬼供養を始めるに當つての御陀は原著者は自由譯にして居る。自分はそれを逐字譯にした。が、讀者の參考の爲め、原偈を左に記して置かう。

比丘比丘尼　發身奉持　一器淨食　普施十方
窮盡虛空　周遍法界　微塵刹中　所有國土
一切餓鬼　先亡久滅　山川地主　乃至曠野
諸鬼神等　請來集此　我今悲愍　普施汝食
願汝各各　受我此食　轉將供養　盡虛空界
以佛及聖　一切有情　汝與有情　普皆飽滿
亦願汝身　乘此呪食　離苦解脫　生天受樂
十力淨土　隨意遊往　發菩提心　行菩提道
當來作佛　永莫退轉　前得道者　誓相度脫

又願汝等　晝夜恒常　擁護於我　滿我所願
願施此食　所生功德　普將廻施　法界有情
與諸有情　平等共有　共諸有情　同將此福
盡將廻向　眞如法界　無上菩提　一切智智
願速成佛　勿招餘果　願乘此法　疾得成佛

原著者はその二の終に『之を柳の木、桃の木、若しくは柘榴の木の下へ置いてはならぬといふ神祕的な規則がある』と書いて居るが、『施餓鬼通覽』には『地を掃ひ棚を造る。長さ三尺に過ぐべからず。但桃樹柘榴の外用ふることなかれ。鬼神おそれてこれを食ふことを得ず』とある。原著者の思ひ誤り乎。

『漂流』は事實談である。

大正十五年九月

大谷正信

『知られぬ日本の面影』の第十四章と第十六章とに著者がはやくから日本の女の名の問題に興味を有して居た證跡が見ゆる。その後、一八九九年四月大學にありし頃、同じ問題の研究を思ひ立たれ大谷正信君に材料の蒐集を托されたことはその頃同君に贈られた書簡によつて明である。

明治三十年頃東京の文科大學に一選科生として在學した私は哲學科に居たので、英文科の講義は稀に傍聽するに過ぎず、隨つて著者の講筵に侍したことも至つて少い。然るにその頃元良勇次郎教授の心理學の科に於てした美質に關する一研究が哲學雜誌に載せられたのを、大谷君がその一部を材料として、他の材料と共に著者に提供された爲、『日本の女の名』の一篇を助成するの光榮を有したのであつて、その緣によつて田部君の勸誘を受け飜譯は不得意ながら私も今回同篇と外に『幻想（ファンタジース）』と『回顧（レトロスペクティヴス）』とを擔當して本全集譯述のうちに加はることとなつた。

著者はこの女の研究は皮相に過ぎまいが、西洋の讀者には興味を覺えさするに足らうと云つて居らるる（一九〇〇年二月二十二日大谷君宛書簡）。それで分類なども十分正確と

はいはれぬところもある。なほ名稱の意義などを誤解されたらしく見ゆるところも少く無いので多少の註記をしておいた。

『幻想』の方ははじめの『夜光蟲』が特に美はしい文である。それに次て終の『一對の眼のうち』が美はしい。其他は美文よりは寧ろ研究的論文であるが、それ等を一貫する趣意は著者の進化論の信念に基き、現在の我々の性向や感情や行動は過去の生物の一切の經驗の遺傳的結成であるとの思想が反覆して說明されて居る。尙ほその表現は夢にも及ぶものとして夢に關する三篇を成して居る。

然るに我々はただ祖先の經驗を反覆しつゝあるとすれば、何の自由も無く創造もあり得ぬのであるが、我々の努力によりて、後の世の光明の爲、歡喜の爲、勝利の爲に、效果を擧げ得るとの思想が、『夢書の讀物』の終の個人の體に宿れる諸靈の言に示されて居るのを見れば、そこに自由創造の根柢を見る。同時にかく努力せずして一生を空ふするの恐ろしさを覺え、それと共に著者精進力作の本領を見る如く感ぜらる。

『一對の眼のうち』の中に、その眼を見るときの戰慄……それは『一の潜在、一の力、——宇宙的エーテルほどに測り難き深さのさす影である』といふところに、一卷の名となれる影卽ち Shadowings の語が示されて居る。著者がその書に名づけた意味もまたこの進

化的遺傳の思想より來れるのであらう。

「回顧」も「幻想」も共にその初にマシウ・アァノルドの「未來」（The Future）の詩句が引いてある。この詩は平原の川に源流の清澄はまた見がたきも海近き下流の洋々たる壯大はまた特別なることを歌つたのである。それを愛でた著者の心も察せられる。なほ佛教に興味を有しつゝも殆ど悲觀の跡を見ぬはかゝる未來の偉大を想望された爲ならんと思はる。

岡田哲藏

『靈の日本』は一八九九年（明治三十二年）『影』は一九〇〇年、『日本雜錄』は一九〇一年、何れもボストンのリツツル・ブラウン會社及びロンドンのサムスン・ロウ會社から出版された。リツツル・ブラウンから出版されたヘルンの書物は、『異國情趣と回顧』とこの三册であつた。何れも初版は在米日本畫家の裝釘になつたと見えて綺麗にできたのでヘルンも滿足した。『異國情趣と回顧』をヘルンは「へちまの本」『靈の日本』を「蓮の本」『影』を「梅の本」『日本雜錄』を「櫻の本」と呼んでゐたのは表裝はそれぞれその意匠でできてゐたからであつた。

『靈の日本』はアリス・フオン・ベーレンズ夫人へ、『影』はマツクドーナルド主計監へ、『日本雜錄』はエリザベス・ビスランド・ウエツトモア夫人へ捧呈してある。以前に發表された物は三書を通じて一篇もない。

『靈の日本』のうち、

「斷片」はフエノロサ夫人から聞いた話によつたと聞いて居る。

「振袖」は明曆の大火に關する傳說を夫人から聞いた物。その時起つた風は、今もその

季節にきまつて起る西北の風であつたらうが、ヘルンは「海の風」と云ふ字を好んで使用した。

「占の話」は出雲の易者の事實談。そこに出て居る支那の話は『梅花心易掌中指南』と題する易の書物の始めにある話によつた。ここでもヘルンは陰曆四月十七日、主人公邵康節の午睡の原因を、原文によらないで、極暑のためとして居る。

「悪因縁」この『牡丹燈籠』の話は『夜窓鬼談』によつたらしい。圓朝は話を創作して自ら高座で物語つたのであるから、西洋で云ふ意味で小説家としたのであつた。ヘルンは菊五郎の芝居を見たやうに書いて居るが、實際東京では時間を惜んで芝居を見た事はなかつた。しかし夫人と共に團子坂から新幡随院を車で訪うて、この編の終りに書いたやうな事件を經驗したのであつた。

「吠」牛込區富久町時代に、その家にゐた犬の話に基いて居る。

「因果話」は『百物語』第十四席松林伯圓の話、

「天狗の話」は『十訓抄』にある話によつた。

『影』のうち、

「和解」は『今昔物語』中の「人妻死後成本形會舊夫語」とも、又「亡妻靈値舊夫語」とも題した一篇、

「普賢菩薩の話」は『十訓抄』にある話、

「衝立の女」は『御伽百物語』中、「繪の女人に契る、附たり江戸菱川の事」と題する一篇、

「死骸に乘つた人」は『今昔物語』中の「人妻成惡靈除其害陰陽師語」と題する物、

「辨天の同情」は『御伽百物語』中の「宿世の縁」と題する物、

「鮫人の感謝」は馬琴の『戯聞あんばい餘史』と題する小話集のうちの「鮫人」によつた。

『日本雜錄』のうち、

「約束」は『雨月物語』中の「菊花の約」、

「破約」は出雲の傳説、夫人の語るところ、

「閻魔の廳にて」は『佛教百科全書』中「邪神の事」と題する物、

「果心居士の話」は『夜窓鬼談』の「果心居士」、

「梅津忠兵衛」は『佛教百科全書』中「産神の事」と題する一篇、

「僧興義の話」は『雨月物語』中「夢應の鯉魚」と題する物によつた。

「橋の上」は熊本見聞談の一つ、車夫平七はヘルン家でいつも雇うた實在の人物、話も事實談。

「お大の例」名は變つてあるが、松江にある事實談。改宗の證に位牌を捨てさせる事が行はれたのであつた。ヘルンはこの話をチエムバレン氏への手紙にも書いて居る。

「乙吉の達磨」のうちに、雪達磨をつくつた二人の書生の名が出て居る。一人は名で呼ばれ一人は姓で呼ばれて居るが、これはその時の呼びくせであつた。光は玉木光榮の事、書齋に寢るので、光ちやんと呼ばれてゐた。當時早稻田の學生、今は大阪の會社員。新美の方は、新美資良と云ふ一高の生徒であつたが、後病死した。ここにある童謠は當時富久町の小泉家の向ひに住んで、小泉家へ出入した中村清吉と云ふ車夫が小泉家の若い人々に敎へた物であつた。この人の郷里の歌であつたか、東京の一部に行はれた物であらうか、或はこの人の郷里であつたと云ふ茨城のどこかで行はれた物か、たしかでない。夫人の說に隨へば、原文に出て居る物よりもつぎの歌の方が多く歌はれた。清吉はこれを十の數に句切つて、丁度子供に數を敎へるための歌のやうに歌つたさうである。

ひに、ふに、
ふんだん、達磨に、
ひるも、夜も、
赤い、づきん、
かぶら、せう。

乙吉の名は燒津を材料にした諸篇に出て居る。靜岡縣燒津町、城の腰、山口乙吉と云ふ魚屋で、兼業として店には干物、ラムネ、草鞋などまで列べてゐた。この乙吉は大正十一年一月死去して、今はその長男梅吉の代で、燒津で名高い鰹節問屋となつて居るが、屋號は今も山乙であると聞いて居る。篇末に出て居る乙吉の娘は、その後長く小泉家に仕へて、今では東京の人に嫁して居る。

目なし達磨の信仰はこの地方ばかりでなく、關東地方にも（東京府下にも）、行はれて居る。達磨を盲目にして置くばかりでなく、地藏を縛つたり、天氣の神に擬してつくつた

所謂坊主（照れ照れ坊主）を縛つたりする荒つぽい信仰、恐喝的習慣の多いのは驚くべきである。

「日本の病院に於て」二男の巖君が書生につれられて散歩中、過つて怪我をしたので、ヘルンがつれて番町の木澤病院に赴いた時の話である。この時から木澤院長を信じて、子供の病氣でも、女中の病氣でも、自分の齒痛でも外科專門の木澤院長にかかるやうになつた。最後に心臟病で亡くなつた時も木澤院長にかかつたのであつた。『この人にかかつてなら死んでも遺憾ない』と云つてゐた。

大正十五年十月

田部隆次

第七卷要目索引

Shadowings. 影

1) Dedication 献詞

To Paymaster Mitchell McDonald	ミツチエル・マツクドーナルド
U. S. Navy	主計監（米國海軍）へ
My dear Mitchell,—	マツクドーナルド様
Herein I have made some attempt to satisfy your wish for "a few more queer stories from the Japanese." Please accept the book as another token of the writer's affection.	ここに私は「珍らしい日本の話をもう少し」と云ふ御註文に應ずるやうに試みました。作者の親愛の又一つの記念として、どうぞこの書物を受けて下さい。
Lafcadio Hearn.	ラフカデオ・ヘルン
(Koizumi Yagumo)	（小泉八雲）
Tokyo, Japan. January 1. 1900.	日本・東京・一九〇〇年元旦

2) Contents 本文

Stories from Strange Books	珍らしい書物からの話
1. The Reconciliation	1. 和解
2. A Legend of Fugen-Bosatsu.	2 普賢菩薩の物語

A Japanese Miscellany. 日本雜錄

1) Dedication 獻 詞

To Mrs. Elizabeth Bisland Wetmore. エリザベス・ビスランド・ウエツトモア夫人へ

2) Contents 本 文

Strange Stories 奇 談

1. Of a Promise Kept. 1. 約 束
2. Of a Promise Broken. 2. 破 約
3. Before the Supreme Court. 3. 閻魔の廳にて
4. The Story of Kwashin Koji. 4. 果心居士
5. The Story of Umetsu Chubei. 5. 梅津忠兵衛
6. The Story of Kogi the Priest. 6. 僧興義

Folklore Gleanings 民間傳說拾遺

1. Dragon-Flies. 1. 蜻 蛉
2. Buddhist Names of Plants and Animals. 2. 佛教に緣ある動植物の名
3. Songs of Japanese Children. 3. 日本の子供の歌

Studies Here and There 隨筆ここかしこ

1. On a Bridge. 1. 橋の上
2. The Case of O-Dai 2. お大の例
3. Beside the Sea. 3. 海のほとりにて
4. Drifting. 4. 漂 流
5. Otokichi's Daruma. 5. 乙吉の達磨
6. In a Japanese Hospital 6. 日本の病院に於て

小泉全集第七卷飜譯分擔

靈の日本

大谷正信　香。靈。佛足石。小さな詩。佛教に緣のある日本の諺。總持にて。

田部隆次　斷片。振袖。占の話。惡因緣。吠。暗示。因果話。天狗の話

影

田部隆次　和解。普賢菩薩の物語。衝立の乙女。屍に乘る人。辨天の同情。鮫人の感謝。

岡田哲藏　日本の女の名。夜光蟲。群集の神秘。ゴシック建築の恐怖。夢飛行。夢魔觸。夢書の讀物。一對の眼のうち。

大谷正信　蟬。日本の古い歌。

日本雜錄

田部隆次　約束。破約。閻魔の廳にて。果心居士。梅津忠兵衛。僧興義。橋の上。お大の例。乙吉の達磨。日本の病院に於て

大谷正信　蜻蛉。佛教に緣のある動植物の名。日本の子供の歌。海のほとりにて。漂流。

第一回配本

小泉八雲全集第七卷

第一回豫約菊判背革裝 大正十五年八月配本開始 昭和三年一月配本完了
第二回豫約菊判總布裝 昭和四年六月配本開始 昭和五年十一月配本完了
第三回豫約學生版 昭和五年十月配本開始 昭和七年三月配本完了



最初申込金五十錢（これは最終の會費に充當）
豫約者に限り毎月一圓五十錢

家庭版
昭和十一年十一月二十三日印刷
昭和十一年十一月二十七日發行

著作者 小泉八雲全集刊行會代表 田部隆次

刊行者 東京市麹町區三番町一 長谷川巳之吉

刊行所 東京市麹町區三番町一 第一書房
振替東京六四二二三
電話九段三三二四四

牛込區山吹町一九八
印刷者 萩原芳雄

（家庭版）小泉八雲全集 全十二巻 内容